
己呂武反而 美人説付き

鎌田滋子 （天野なほみ編）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

己呂武反而 美人説附き

【Nコード】

N6566D

【作者名】

鎌田滋子 （天野なほみ編）

【あらすじ】

この国には美人がいなくなったと言われる。「日本の女性は美しい」など、根拠もないキャッチフレーズが行われる一面、その種の文句を唱えない限り日本女性の美を信ずる事ができなくなった、我々の自信のなさには外ならない。テレビをつければ義理にも美しいとは評し難いものが美女で通っている。USAの美のスタンダード、アメリカ人の目を以て眺めるなら、或いはまあ美女なのかもしれない。いわゆる曲顔の持ち主たちであろう。今、代表的な日本美人・鎌田滋子の青春時代 1980年代前半 を振りかえる

事で、女性美の秘密をさぐる（編者記）

第一回

1章『美人説』（改訂編集集中）（前書き）

縦読み不可。縦読み不可。縦読み不可。本書は縦読み不可です！はじめから横読みされる事を前提に、横書きで書かれたものです。投稿を許可した滋子の指示は、横読みで読んでもらうことです。どうぞ縦書きになど変換しないで、そのまま見てやってください。

第一回

1章『美人説』（改訂編集集中）

ご迷惑をおかけします。編者の天野です。

『美人説』は今しばらくお待ちいたたくとして、第三回、滋子の『己呂武反而』へお進みくださいますよう、お願い申し上げます。

なお、本書はPDF版もあります。滋子のルースリーフ及びカード原稿をより忠実に反映しているため、あるいはこの方が見やすいかと思われます。以下がアドレスです。

<http://dl.getdropbox.com/u/976165/shigeko.pdf>

とても簡単です。

1) まずこれ、<http://dl.getdropbox.com/u/976165/shigeko.pdf> をコピーし、

2) 今見ている画面上方に「<http://ウンヌンカンヌン>」と書いてある細い帯がありますから、そこへ貼り付けます。

3) あとはenterを押すだけ、どんなコンピュータ初心者にも

分かるはずです。そういうわたくしもこれ以上ないというほど初心者、携帯電話すらちゃんと使えないへぼです^^

(googleやyahoo等で検索するものではありません。それだと出てこないし、出ても、探さなければならぬぶん、余計な汗をかきます。)

心配はいりません。ウイルスだとかワームだとかいうのは入っていません。大丈夫です、カスペルスキーとノートン両方でもってバイ菌がないことを確かめました。安心してクリックしてください。

ただし、ADOBE READERがないと映りません。もしインストールがまだのようでしたら、下のウンヌンカンヌンをコピーして同じ要領で貼り付けてください。便利な便利なADOBE READERをただでくれます。むろん、わるいサイトではなく、立派なコンピュータ企業が運営するものです。

<http://get.adobe.com/jp/reader>

第二回

1章『美人説』（改訂編集集中）

ご迷惑をおかけします。編者の天野です。

『美人説』は今しばらくお待ちいたたくとして、第三回、滋子の『己呂武反而』へお進みくださいますよう、お願い申し上げます。

なお、本書はPDF版もあります。滋子のルースリーフ及びカード原稿をより忠実に反映しているため、あるいはこの方が見やすいかと思われます。以下がアドレスです。

<http://dl.getdropbox.com/u/976165/shigeko.pdf>

とても簡単です。

1) まずこれ、<http://dl.getdropbox.com/u/976165/shigeko.pdf> をコピーし、

2) 今見ている画面上方に「<http://ウンヌンカンヌン>」と書いてある細い帯がありますから、そこへ貼り付けます。

3) あとはenterを押すだけ、どんなコンピュータ初心者にも

分かるはずです。そういうわたくしもこれ以上ないというほど初心者、携帯電話すらちゃんと使えないへぼです^^

(googleやyahoo等で検索するものではありません。それだと出てこないし、出ても、探さなければならぬぶん、余計な汗をかきます。)

心配はいりません。ウイルスだとかワームだとかいうのは入っていません。大丈夫です、カスペルスキーとノートン両方でもってバイ菌がないことを確かめました。安心してクリックしてください。

ただし、ADOBE READERがないと映りません。もしインストールがまだのようでしたら、下のウンヌンカンヌンをコピーして同じ要領で貼り付けてください。便利な便利なADOBE READERをただでくれます。むろん、わるいサイトではなく、立派なコンピュータ企業が運営するものです。

<http://get.adobe.com/jp/reader>

第三回

2章『己呂武反而』（前書き）

编者注：縦読み不可、縦読み不可、縦読み不可！この章は何が何で
もタテヨミ不可

第三回

2章『己呂武反而』

降出した小雨も生暖な灯ともし頃、息も吐かずに駆上つてきた足と腰に、暫くのあいだ、休息を与えた。雨傘を忘れた帰道の高低差は、元町公園の、長い石段。半分ほど登った所であった。タクシーを待たなかったのは間違だった。

駅のタクシー乗場には、十五人ほどの列が出来ていた。並ぶのは煩しかった。

それに、電車から降りたときに、トロリとした空気を、頬の回、首の回に感じて、季節は春なのだと、今更のように知られた。何ということもなく、その辺を寄道しなくなった。歩くことに決めた。

何年振かしら、石川町で降りたのは。朝は、山手から乗る。帰も、最近では、もっぱら山手駅。学生時代には、石川町から歩いて帰る習慣になっていたのに。今では、山手から、タクシーに乗って帰る。良い按配に、バスが来ていれば、バスにすることもあるけれども。

今日は、電車の中で、ぼーっとしていて、つい、昔の習で、ひとつ手前で下車してしまった。タクシーの列には加らずに、駅前の商店街を、元町の方に歩出した。

すぐに、右に曲った。

向うの角には、郵便局。何処の町内にでもあるような郵便局だけれど、私にとっては目印。左に曲る。

此処から裏通り。

石川町の「駅前商店街」は、大通りと交差して、そのさきからは、「元町商店街」に、名が変わる。「駅前商店街」と「元町商店

街」に、ずーっと平行している通りが、この裏通り。石川町の駅を使っていた時代には、人混を避けて、大抵、此处を歩いたものね。様子は、ちつとも変わらない。

軽トラックが通る。白塗に横文字のバンが通る。ワゴンが通る。近所のお父さんが、自転車を走らせる。籠を提げたお母さんが、八百屋の店先で話込む。一本隔てた商店街では、日々、新に、店店が入れかわり、生れかわるのに、陰になった、この道は、昔と変わらない匂。使古されたゴムチューブの臭。魚を焼く匂。花びらが腐掛けている匂。熱した食用油の臭。線香の匂。色々な匂が懐しい。

大通りを、「本牧通り」といったかな。裏通りづたいに歩いてきて、「本牧通り」を渡るときに、賑な方を見やったら、雑踏する交差点。元町側には、マクドナルドが出来ていた。石川町側には、タワーレコードの看板なんかが見えた。

「本牧通り」を横切ると、私の細道は、元町に入ってゆく。此处からは、「元町商店街」の裏通りになって、元町の街を縦断する。

小さい神社がある。裏通りからも、更にひっこんだ場所にたっている。昔、何年も、毎日毎日、前を通ったけれども、一遍も、立寄ることがなかった境内に、今日は入ってみた。小学生が、六人で、メンコをしている。「厳島神社」というのね。知らなかった。周辺を、暫くのあいだ、散策。坂道があるので、登始めたら全然見覺のない坂は、何処に出るのかも分らない。だいぶ暗くなっている。帰宅の道につくべく引返す。

又、裏通りをゆく。駅から、「厳島神社」まで歩いた距離を、もう一行程歩く。

右に曲る。

じきに、元町公園の森が見えてくる。

ウィンドーショッピングかしら。ぶらぶらあるきかしら。楽しむ群衆の声。彼らと彼女らの靴底に踏まれてゆく路面の響。

何処へ、そう急ぐのか、何を、そう急ぐのか、苛立たしげに

鳴らし鳴らされるクラクションの音。

さっきまで聞いていた、そんな、諸々の音が、急速に遠ざかってゆく。私は、歩く方向を、右に変えてから、まだ数十歩しか来ていないのに。別空間に入ったような静さに包まれる。

左にゆくと、長い石段が現れる。長い石段が、森の中を登っている。元町公園の森の中を。上は山手。外人が、「ザ・ブラフ」と呼んでいる丘。私は、力を蓄えて立止った。

呼吸を調整しているときだった。

ばらばら降ってきた。

前触なく来た。暖い雨が。

勢良く踏出した。

憚る人目もない。大股で、一気に駆上る。

今の今まで、そんな気配もなかったのに。タクシー乗場の行列はこれだったのね。

額に、雨が、汗のようにヌルリ。息が苦しい。このまま登れそうにない。そう思うと、脚に、力が入らない。やっぱり駄目。ちよっと太りすぎかしら。運動不足で、私も、これじゃ英文法。

見上げると、風が起って、頭上の枝枝を搔乱す。目を閉じる。葉伝う雨音しきりに落ちる粒を、顔の面に受ける。遠く、ひとつ、発車音。11番バスのエンジンの唸。この時刻になると、丘の上は、人影も疎。一日賑った山手通りは静まりかえっているに違ない。雙葉の子達が、笑いながら帰っていったのは、だいぶ前らしい。彼女達の、高らかに飴する笑声が聞えない。今、もしも、通りを歩いている人がいるとしたら、傘をさして、食後の散歩をするブラザーとシスターだけ。

広くもない公園は、人家が、すぐ其処まで迫っている。だのに、バスが走りさったあとでは、人事の音が、はたと絶える。風の音が聞える。聞えるのは風だけ。風が、頬を掠める。耳朶を掠める。心を痛くする何かがある。花の匂だ。風に運ばれてきて、人を愁殺する。瑞香の香に、仄な玉蘭。入交じって、春の思を誘う。玉蘭は

恨の色。瑞香は傷む色。妖精らよ、顧みよ。私が行く先々に、天上の香を漂わせてよ。滋子は、深く、深く吸う。そのとき、胸に、新しい力が動出す。ヒュペリオンが、冬籠っていた磐戸を押開いて、再び、恵を降らせば、緑の新芽が、一斉に、脈を打始めるように、私の胸にも、新しい力が動出す。いやしを与えられる。

ぴしゃりと、瞼を、太く、重たく、生暖い滴に打たれる。目を開けると、あたりは、一段と暗くなっている。普段、恋人達がむつがたりする、あちこちのベンチに、人影はない。闇の黒い目が、しげみの中の活動を始めない前に、木木を潜り、雨粒を払い、路を急ぐ。

山手通りに出る。横断して、セント・ジョセフ脇の急坂に差掛る。礼拝堂の十字架に、一瞥を遣って、そして、坂下を見たときに、坊の姿が、目に入った。丁度、坂が、右に折れて、其処からさきは、下が見通せなくなる付近で、電柱に、半ば隠れて蹲り、側溝の中を覗込むようにしている。

「大丈夫？」

近寄って、背中に、手を掛ける。坊は、一度見上げて、頷いて、又、下を向く。私は、ハンカチを出す。髪の毛の雫を払ってやる。

「あなた傘は？」

どうやら、私も、坊も、二人まで、用意もなしに、雨の中を出歩いているようね。

「ね、立ちなさい？少しなら歩けるでしょう？すぐ其処まで。あなた、そんな青い顔をして雨に当たったら肺炎になっちゃうわよ！」

だきかかえて、坂上のエノキテイに連れてゆく。見ると、さつき立濡れた元町公園は、とうに、夜の領分。

道に行く人はいない。車のおりも疎な火曜日の山手通り。店に入る。席に案内される。水が出る。注文を聞きにくる。まだ決らない。こちらで呼ぶから、少し待つてほしいと言う。坊は、下を向いて黙っている。

「だいぶ悪いの？あなたは黙っていていいのよ？私がしゃべるから私は鎌田滋子といって、近くに住んでいるの。あんな所で倒れているのを放っておけやしないでしょ？少し落着くまでじっとしているといいわ？」

この子を、暗い坂で、初て見たときは、短く刈った髪の所為もあって、蒲柳質の男子中学生と間違えそうだった。でも、屋内のあかりに照された顔を見ると、紛もなく、二十歳前後の同性。

栄養不足で、血色が良くない。疲が限になってしまった。無表情なことと言ったら、薄紙を透して見るような顔。干涸びかかった顔。

口の横に、血が滲んでいる。唇の付根が、あかぎれになって、何とも貧相。店まで抱えてくるときは、肩の骨、腰の骨、肘の骨、膝の骨で困った。無暗に、人に食込む。それまでに痩せぎすなことが、彼女の顔に対する、貧相なイメージを、一層強いものにする。

白いシャツに、茶色のセーターを、毛玉だらけにして着ている。色の褪せたジーパン。

そっと、そのときにおろされた物がある。

左手が滑下りた。赤いハンカチを握っていた。

坂で、頭の水滴を払ってやったハンカチを、彼女は、そのときから、ずーっと、左手に握締めていた。握ったままで、テーブルの上から、膝上におろされた。

動作は、私が注目したのと同時に行われた。

私は、先端部が欠損した中指と薬指を見逃さなかった。

「お菓子を取ってあげるわね？美味しいって評判なのよ？コーヒーと紅茶、どっちがいいかしら。」

「紅茶を貰えませんか。」

俯いていた彼女が、かぼそい声を、上目使に絞出す。訛がある。ズーズー弁という訛だろう。

「ええ、此処の紅茶、美味しいわよ？そんなに悪くはないよね。ちょっと疲れたのかしら。おかしな天気だものね、変にあたたくて。あなたお名前は？わたしは鎌田滋子。」

「はい、あのー、清水です、清水由加里です。すみません。少し気分が悪くなったので。どうもすみません、本当に。迷惑をかけまして。」

このまま本降になりそうな勢。窓の外の庭の芝生に落ちる雨の音が聞える。

先客が一组。壁沿に四人いる。三人は、青いブレザーに、赤いネクタイ。もん君の後輩達よ？ブレザーの色が、もん君の時代とは違うけれど。グレーが良かったのに、どうして、あんな色にしちやったのかしら。それから、そう、最近、校門の上に出来た、妙ちきりんな看板。あれを見たら、あなたも驚くわ？きつと。

もう一人、中年の、紅毛赭顔の紳士。口髭を生やして、モーパーサンに、良く似た人が座っている。バスに響く、仰々しい、前世紀の英語で、三人に講義をしている、ソネットを朗誦するに際しての心得だと言って。

講義はすんだらしいわ。三人は、しきりに頷合っている。後

輩達は理解できたようよ？彼らの顔を尻目に、食べものの国籍に沿う発音法にて注文。「すみません！コッ・ムッスイユウとコッ・マダムを二皿ずつ下さい！」モーパッサンさんが、店員に呼掛けたわ？

店員は、私達のテーブルに来る途中だった。私は、少し前に、席を離れて、チョコレートムースと、レモンティーを、ふたつずつ注文しにいった。店員は、私達のテーブルに運んでくる途中だった。モーパッサンさんは、呼止めて注文したのね？店員は、目顔で、了解を知らせた。

店員が、私達のテーブルに来たときに、二十分位したら、タクシーを呼んでくれるように頼んだ。

「由加里ちゃんね？そう呼ぶわね？食べてみて、元気が出るわよ？」

「はい、あのー、わたし、お金が・・・。」

「ええ、気にしないでいいわ？」

家はどの辺かしら。駅の近辺かしら。傘を持たない。お金も持たない。それで、この近所に、用事があるのかしら。散歩ではなさそうね。人目を気にしなくても良い、この時間だから、この空模様だから、山手に入ってくる気になったのかしら。それなら分る。外出着もないのに、何か、止むを得ない理由で、はなやかな場所を通らなければならないとしたら、誰だって、暗くなるのを待つ。

由加里は、前に置かれていったお菓子と睨めっ子。時々、私の顔を盗見て、しゃちこばった姿勢は、全然崩そうともしない。

遠慮を解いてやろう。私から、飲んだり、食べたりして、彼女にも勧める。

到頭、彼女も、ティーカップを取る。

「由加里ちゃんおすまいは？」

「……。」

「今日は大変だったわね？濡れなかった？私も背筋が少し厭な感じ。襟首から入ったのね、今日はマフラーもしないから。由加里ちゃんは大丈夫？寒くない？」

「はい、どうもすみません、今日は。わたし、杉田に住んでいます。」

「そう。今日は用事で？」

「はい。」

「それで、用事はすんだの？それとも、これから？あのね、あとで自動車が来るの。良かったら送ってあげるわよ？」

「もうすみしました。有難うございます。」

「それなら良かったわ？大事な用があるのに、引止めてやしないかと思ったの。お菓子も食べてね？」

モーパッサンさんは、良く通る声。大時代な口調に、つい、耳を傾けてしまう。今度は、音楽の話をして聞かせているようよ？オルフだ、シチエドリンだ、ストラヴィンスキーだと言っている。後輩さん達の声が聞取れない。

東洋人の子なのに、デミアン、デミアンとモーパッサンさんと呼ばれている子がいる。その子の唇が動く。何か、モーパッサンさんに向って言っている。「Bah! あすこでリストは、まるで場

違だ。タッタッタ、タッタッタッタッタ、タッタッタ、ター！
ふん！」と、サドーニツクな笑みを浮かべる。「おお、さてさて、
今や乃ち、我等が面「おもて」に餌「じ」のものを施すべき時は至
ったぞ！」店員に注文していた軽食が来たので、今度は、さも満足
げな笑みに浮かえて、卓上に迎入れている。「時に、フシエー。
その方、今朝の授業中に、ペネロペイアの心内について陳べた説は、
実に警拔なものだった。テレマコスに向けて発しられた、女の言葉
に、その方が与えたような解を、与えるものとは、乃公の思及ば
ぬところだったわい。いや、あれは、至極上出来だった！」褒めら
れたフシエーは、ニキビだらけの顔を真赤に照れて、にやにやして
いる。みんな、一斉に、むしゃむしゃやりだした。

坊は、片手をおろしたなりに、右手だけで、ムースを、時々、
口に運んでいる。

「由加里ちゃん、これから中華街に行ってみない？タクシーで。」

「。。。。」

「今晚は予定があるの？」

「いいえ。」

「ちょうどいいわ？一緒に晩御飯はどう？わたしも一人じゃ行きに
くいから、一緒に行ってくれる人がいると頼もしいわ？ねえ、そう
しましょうよ。」

坊は、後日、この晩のことについて、愉快そうに話した。

坊は、出抜に、チュウカガイと言われて、何のことかも理解
できなかった。海が近いから、カイ殻のことだろうか考えた。タ
クシーで行って食事をするって、私が言うんでしょう？「これから

浜辺に行つて、貝殻を拾つて、焼いて食べよう。」「そう誘われているのかと思つた。「この滋子という女の人は、見掛に寄らず、変つた趣味の持主だ。浜辺ですなどりとは、自分の故郷でも、そんなことは、若い人は、ちつともしようとしないのに。でも、食べられる貝が、都市に近い浜辺で取れるのかしら。食用貝は、漁師が、船を出して取つてくると承知しているけど。一人では心細いと言つたのは、どういう意味だろうか。知っている漁師さんが、取つたばかりの、新鮮な貝を食べさせるから付合え、漁師さんの所に、一人で行くのは心細いからという意味だろうか。」「今思えば、頓珍漢な誤解をしたけれど、そのときには、何と返事したら良いか分らなくて黙つていた。だつて、お姉ちゃんと知合う前の自分ときたら、本当に、何も知らないお馬鹿さんだつた。そのうちには、タクシーが来て、チユウガイの意味が分つた。黙つていたというと、あの晩の自分は、人に通じる言葉が喋れなかつた。何を言われても、ただ、「はい。はい。」とばかりで、ほかには何も言えなかつた。そのことを、お姉ちゃんは、今もからかうけれど、本当は、言えるも言えないもなかつた。お姉ちゃんこそ、何を言っているのか分らなかつた。聞取れなかつたて言つた。あんなに早口で、べらべらと言われても、耳が追付かなかつたつて。それに、自分が聞いて育つた言葉からすると、お姉ちゃんの喋る言葉は、ほとんど外国語だし、うしろでは、外国のおじさんが、本当の外国語を、大きな声で喋っているし、何もかも、初て体験することばかり。あの喫茶店のハイカラな雰囲気。チユウカガイに至つては、それこそ、言葉をなくすほどきらきらした店内で食べた、豪華な料理。支払をするときに、そつと覗いたら、お姉ちゃんは、何万円も払っていた！自分は、あの晩、目の前で、次から次へと展開する光景と、その中に動く人々（お姉ちゃんも、その一人。）の所為でばんやりしてしまつたのです。

最近では、こんなことを、おかしがつて話すようになった由加里。以前は、あれほど陰気で、あれほど疑深い目をした子だつたとは、もん君、誰が、今の彼女を見て信じるかしら。三月二十二日、

春の夜の巡りあわせだった。

第三回

2章『己呂武反而』（後書き）

編者の天野です。

滋子の原稿により忠実なPDF版はこちらから

<http://dl.getdropbox.com/u/976165/shigeko.pdf>

第四回

2章『己呂武反而』（つづき）

3 / 26（土）

デニーズで、遅い昼食を取った。毎月二三度位ずつ、あそこのラムチョップを食べにいく。以前は、好きでもなかったのに、おかしいこと。

午前中は、ずっと、ピアノに向った。天気が良ければ、午後から、鎌倉を歩いてくる心算でいた。そろそろ、梅もおわりだから、長谷寺は厭だけれど、瑞泉寺の庭でも散策して、帰に、あの茶店に立寄って、お菓子を食べたかった。でも、空は曇っているし、夕方からは雨になるというしで、鎌倉はやめにした。

ピアノには飽きてしまって、昼食の時間になったけれど、ちつとも、空腹ではない。食事を作るのも億劫。そんなので、デニーズに行こうと思立った。

行きがてら、おなかを空かしに散歩した。随分、長い散歩になった。外人墓地、港の見える丘公園、山下公園。今日も、人が沢山。行きたいと思う方向に行けないのだから。

途中、見知らぬ男の人に説教されて、それが不愉快だったから、気分を紛らして、長いこと歩いた。桜木町まで行って、そこから、野毛山公園、伊勢佐木、ちょっと、買物をして、石川町と、デニーズに入ったのは、三時に近かった。

コーヒーを、何杯も、何杯もおかわりして、ソロモンの歌を読みました。デニーズを出たのは五時頃かな。結局、雨は降らず、こんなことなら、鎌倉に行けば良かったと、そのときには、そう思っただけで帰ってきた。

途中から、まだ遠くから、テテマ口の鳴声が聞える。無暗に

吠えている。

由加里が来ていたのね。門の外に立って、恐る恐る、中の様子を探ったりして。

例のボロではない。ジーパンと、スニーカーは同じのだけれど、今日のセーターは、タートルネックの赤いので、毛玉は少め。でも、緑色のジャンパーに、野球帽っていうのは、ちよつと、どうかと思う恰好ね。手には、軍手をはめている。かわいそうに。「マイルドセブン」と、大きく入った、ピカピカ光る紙袋を提げて。もう、何度か、ベルを鳴らしたらしい。

私って意地悪だわ？本当にいけないことをしちゃった。あの子だったら、もう一遍ベルを鳴らして、テマロに吠えられながら、爪先立をして、大きくのびをして。心細そうな視線を、玄關脇に送って。留守らしいと見てとったのね、それから、おもむろにしゃがみこんで、袋の中に手を入れて、ゴソゴソさせはじめの。それを見ると、私、どうしてかしら、訳もなく楽しい気分になっちゃって。私、うしろから、そーっと忍寄って、手で、由加里の目を塞いだの。ちよつと、悪戯をしてやりたくて。

笑を押殺して、反応を待っていたのだけれど、失敗を悔いるのに、何秒も掛らなかつたわ？

手が、袋の中で、動くのをやめて、彼女自身が、石の像のように、無生物化っていったら良いかしら。虫とか、トカゲとか、驚いたときに、死んだようになるでしょう？顔の表面は、命が全然感じられないし、脈みたいなものもないし、気の所為かしら、皮膚の温度まで、すーっとさがっていくの。

予測できなかつたわ、あの感触は。肉の感触じゃなかつた。皮膚がとても乾いてるんですもの。弾力もないし、余計に石みたいだった。悪戯の心算が、自分がびっくりして。私、あつと、声をあげたと思うわ？すぐ、手をのけたのだけれど、あの子、動こうとしないんでしょう？本当に恐ろしくなっちゃって。

私、急にかわいそうになって、横にしゃがんで、肩を抱いて

やったの。「驚いた？ごめんなさいね？」って、少し、体を揺したら、そしたら、袋の中で、物を掴んで固まった手が、それに連れて、ゴソゴソと、音をたてるの。

由加里は、目を閉じて、息を凝していた。帽子を払いのけて、私、額に接吻した。この子が、何だか、急に哀になつて。

3 / 27 (日)

今日は、朝から雨です。降りみ降らずみ、寒い一日だった。由加里は来ず。

昨日は、あれから、彼女を、バス停まで送っていくときに、道道、今日、二人ですることの予定を立てて話しました。彼女は、昼から暇になると言つた。顔は、晴やかになつていたし、時々、笑いもした。わだかまりはありそうにも見えなかった。「じゃ、一時に、石川町の駅でね？」と言つて見送りました。

予定では、一時に、石川町ので待合せる。スーパーで買物をして、うちでボルシチを作る。由加里は、ボルシチを知らなかった。だから、一緒に作ってみようと、話が決つたわけ。

彼女も、楽しみですと言つていたのに。買物がすんだら、また、エノキティに寄つて、お茶を飲もうとも決めていました。

朝早く、まだ八時前に、電話をしてきて、急用が出来たので、今日は行かれなくなりましたって。やっぱり、昨日の事が引掛つているのかしら。

電話が鳴ったときには、まだ寝ていました。ゆうべは遅かつたので。

昨日は、デニーズで読んだソロモンの歌が、全然、頭に入らない気がして、それで、由加里を送ってきたあとで読直したのです。それから、書きものをしました。バインダーを閉じたときには、鶏が鳴いていた。

起されてからは、もう眠れなかつた。暫く、レコードを聴いたりしていると、ふと、教会のことが思われました。日曜日は、この

時間に目覚めていることは、最近ないのです。なぜって、土曜日は夜ふかしをして、昼頃まで寝るのが、習慣になっているのよ？

みんなどうしているかしらね。佐智枝は結婚したかしら。それしたら、今はシカゴね、きつと。あなた達、幸にやっている？英子はどうしたかな。結婚したのかな。ケイも、サンタモニカに帰っちゃったわね。私のあとは、別所さんが、ピアノを受持っているのかしら。相良さんたちは、帰国しているはずよ？ミーちゃんと、京助君、英語がペラペラね。チー坊、ごめんね？私、こういうことだったの。有川姉妹の顔の病気、良くなったかな。小巻姉妹と、松原君はどうなっただろう。松原君、気が弱いから。もん君ほどじゃないけれど。それから、土屋姉妹、佐野内さん、今川兄弟、荒井夫妻。小林先生は、相変わらず、「オツケーよ？」なんて言って、みんなを笑わしているのかしら。ね、もん君、ベッキーも、四月からは小学校よ？みんなが、急に恋しくなってきたわ？って、今朝、レコードを聴きながら、教会のことで、後から後から、色々考えました。

一時間もすれば、朝の礼拝にあつまってくる。確、大通を隔てた、教会の筋向うに、喫茶店があった。あそこなら、見つかる心配もない。みんなが、教会に入っていくところが見える。そうだ。今から行ってみよう。みんなの顔を、今から行って、こっそり見てこよう。

って考えて出掛けのだけれど、行ってみると、喫茶店の窓は、意外に小さくて、中から、教会は見えない。席に座ってしまったので、仕方なく、コーヒーを注文したけれど、コーヒーが来る前に、お金だけ払って、外に出た。ほかに、どこか、良い場所を探す心算で。

歩道を歩出して、間もなく、思懸けなく、藍ちゃんが（あれは、確に藍ちゃんだった。）傘もささずに、小走に走ってきて、すぐ脇のセブンイレブンに入ってしまった。私も、そんなことに用心して、傘で、顔を隠して歩いていた。藍ちゃんは、雨に打たれたくないから、行く先に、注意も払わずに突進してくる。私から避けて

やらなければ、あと少しでぶつかりそうだった。避けるのに、傘を、高く持上げたときに、一瞬、目と目があつて、藍ちゃんと分った。藍ちゃんは、足をとめる暇もなく、「すみません。」と吐捨てて、セブンイレブンに駆け込んだけれど。

私に気付いたかしら。足早に立去る私を、店内から見送るようだった。私は、駅まで、ずんずん歩いて、電車に乗った。

私は、こそ泥のような真似をした自分が惨めで、馬鹿らしくて、後味が悪くて遣切れなかった。物凄く耳鳴がするので、目を閉じて、何も考えないようにしていた。そしたら、そのまま眠ってしまった。

はっとして、目を覚めた。誰かに、体を、激しくゆさぶられてだった。列車は、車庫に入るからおりてくださいと車内放送をしている。せきたてられて、プラットホームに下りた目に飛込んできたのは、「八王子」の看板だった。

ずーっと、此处に運ばれるあいだ、気を失ったように眠込んでしまったのね？電車の行先からして逆方向じゃないの。思懸けなく見つかったもので、急な後めたさに襲われて、我を忘れたのかしら。隠れようとしているわけではないのに。今日、家を出たときの心積では、私は、もう、教会の人間ではないから、みんなに見つかりたくはなかった。見つからないように、気を付ける。けれど、もしも、誰かに行会ったら、笑顔で挨拶しよう。たまたま、近所に用事が出来たように言えば良い。ついでに、みんなの近況を尋ねる。それ位の余裕はある心算でいた。あのときの、心のとがめは、何処から来たのだろう。後めたい事はないのに。

3 / 28 (月)

これは、一昨日の出来事。

デニースから帰って、由加里を見付けたときは、詰らないことをしておどかしてしまった。うしろから目隠なんかして、彼女は、私の、無神経な悪戯で凍付いたようになって。今思えば、テテマロ

には吠えられるし、よつぽど肝を潰したのね？

私は、そのあと、気の毒で、気の毒で、短く刈った髪を、何度も撫でた。何度も、額に接吻をした。心から詫びた。私を信用して訪ねてきた子に、何て悪ふざけをしたのだろうと思った。

思当たる節があったから、尚更悔いた。

私は、悪戯をして鬱憤を晴そうとしたのね？

もつとも、由加里ちゃんには、何の関係もない鬱憤だから、やつあたりね？

その日の午後は、散歩の途中で、知らない男に、不愉快なことをされて、お陰で、私、一日を、台なしにさたような気分だった。

3 / 29 (火)

昨日のに続けて。

あの日、それは二十六日の土曜日、週末の山手通は、人で一杯。私は、其処を散歩していた。

十番館のむかいあたり。ちよつと立止つて、外人墓地の鉄柵に、肘をついて、市街の方を、眺めていた。

顔の右半分に、誰かの視線を感じる。暫く前から、じつと見ている。振向くと、さ、どうする、もん君、ちよつとハンサムな男の人が近付いてきて、「お一人ですか」って。

このごろ、ぼーっとして、道を歩いてたりすると、しよつちゆう、こんな事があるの。これは本当の話。私、馬鹿に持てちゃつて。それで、「はい、一人ぼっちです。」って、そう言つてやつた。その人、決りが悪そうに、何か、口の中で、もそもそ言つて、お辞儀をして行ってしまった。それが、ツケてきたのね、白ばくれていたけれど。山下公園で再会しちゃった。

3 / 30 (水)

続。

山下公園のベンチに腰掛けて、ウォークマンを聴いていると

き。彼が、赤い靴の女の子の前を、行ったり来たりしている。カメラを持って、色々な角度から写している。彼も、すぐに気付いた振をして、照笑をしながら寄ってきた。

私は、表情ひとつ変えなかった。彼の接近を見守った。「やー。これはどうも。さきほどは失礼を。」とか、何とか言って、視界を塞ぐように、前に立った。私は、脚を組んで、下を向いた。音量のつまみを回した。脚が、二本、踵を返すのを見た。

これで、彼も諦めたみたい。私は、ウォークマンをしまつて、楽譜を出した。晴れた、暖い日には、公園のベンチに腰掛けて、楽譜を読むと楽しい。バッグに、常に、三四冊入っている。

男のことを忘れてしまったころ、不意に、肩を叩かれた。「すみません。手を貸して頂けますか。」白い歯を、くつきり浮べた笑顔で、コーヒーの入った紙コップを差出す。私が、目をぱちぱちして受取ると、ベンチの端に、背負っているリュックを下して、体に触れんばかりに腰掛けた。

何だか、もん君そっくりの手ね。覚えてる？初て口説いたとき。私、それで、急におかしくなつて。思わず、口許が弛んだの。それを、彼は見逃さなかった。

「ミルクと砂糖入で良かったですか、僕のブラックですけど何なら取替えましょか。」とか言つて、譜面を覗込む。「偉い難しそうな曲ですねー。何ですか、それ。僕、クラシックはメンデルスゾーンしかよう聴かんけど。」

「あー！どういう心算が知りませんが、あまり失礼なことをしないで下さい。これはおかえします。」

思切恐い顔をして突返したけれど、彼は、気にもしないという顔で、コーヒーを、一口啜った。

3 / 3 1 (木)

続。その人は言った。

「そんなに、眉間に、皺を寄せることではないと思いますが

ね。第一、貴方に、怒った顔は似合いませんよ。僕が、貴方を不愉快にさしたのは謝ります。でも、悪気があったのじゃない。ここで偶然、又お見掛したから嬉しかたですよ。そんなときに、わざと知らんぷりして素通したら、それこそ、女性に対する礼儀を忘れているでしょう。貴方のように美しい人が物思わしげに、外人墓地の空を眺めている。あれは、一幅の絵のようだった。貴方に、お連はなかった。僕も一人でした。あそこで、貴方に声を掛けはならない理由はあるでしょうか。いえ、むしろ、掛けて当然です。僕、今日、観光しにきたんです。横浜は初てなんです。知らない土地です。ほんの少し、心細い気がした。旅情とか、旅心とかいうやつかもしれない。そういうときに、貴方をお見掛した。この人も、きつと、侘しさに囚れているんだらう、あの、遠くを見る目えの、何と憂に満ちて、美しいことが。

種々雑多な人々が行交う山手通の週末の賑。子供がギャーギャー言って走回る、楽しそうな家族連。手をつないで歩く、学生風のアベック。人目も憚らず抱擁する外人連。黒ずくめの法衣に、頭巾を被った、キリストの尼さんらは、超然として墓地の門を潜る。でも、貴方の周囲だけは、ほかと違っていた。貴方は、一人、世の中から隔絶したように立っていた。僕には、それは、一幅の、感動的な絵でした。

実を言うと、僕、絵描なんです。いえ、絵描を志していると言った方が本当かもしれん。今年、やっと、大学を卒業して、四月ら、九州の高校で、美術教えるんです。入る前二浪したし、入ってから、アルバイトするのに忙しくて、もう二十六です。だから、横浜は、駅を利用することは、よくありますけど、この辺は初めてなんです。まー、そんなことは、どうでもいいんです。とにかく、僕は、貴方を、外人墓地の所で見て、心を引かれたんです。」

4 / 2 (土)

続けて言った。

「僕の中の絵描は、美しい対象物として見る貴方に引かれました。是非、あのポーズで、写真をとらしてもらいたかったです。それで、声をお掛したんです。

でも、勿論、それだけではありません。それを、下心と呼ぶのなら、下心があつたのも事実です。僕の中の、孤独な男が、いつも寂しげな表情を浮べて眺めている麗人に出会って、異性として見る、その人に引かれたんです。

それが悪いことですか。男が、女に引かれる心は下心ですか。あのかきは、あそこで、すげなくあしらわれた貴方に、再び、ここに出会った。正直言えば、僕も、氣い付かん振して、そのまま行てしまおうか迷いました。僕かて、誇いうか、プライドいうか、そういうもんがあります。勇氣出して話掛けた相手が取付く島もなしでは、自尊心が打砕かれます。でも、貴方の方では、僕に氣付いていたし、そのまま行てしまうことはできませんでした。恥をかく覚悟で、またぞろ、貴方に近付きました。案の定、今度は、口も利いてもらえず、下を向かれた。そのときに思ったのですよ。旅の恥なら、二度かくも、三度かくも同じことだ、こうなったら、道化にでも、ピエロにでもなつたれとね。

僕は、特に醜いわけでも、臭いわけでもないと思うのに、こんなに、誠意を示しているのに、なぜに、この人はこうなのか。しかも、こんなに驕慢な態度を示しながら、それでいて、少しも変わるころのない、寂しげな、何かを求めるような、目の表情は何故か寂しくて、何かを求めている点は、僕も同類なのに。この上は、どうでも、この人と、話がしたい、そして、僕の言動のわけを聞いてもらおうと、そう思ったのです。

とまー、結局、全部聞いてくれたんですから、あとは、コーヒーの一杯位付合ってくれても良さそうなものじゃありませんか。」「言つとおり、決して醜くはない。美男子にも見える。誠意のほどは疑いけれど。

「そちらの言分は、良く理解しました。でも、やっぱり、貴

方は、失礼な方です。おしやることは身勝手で、一方的です。私が、今、こうしている時間は貴重なんです。貴方のお相手になる為の時間ではありません。貴方も、芸術家なら、一人で過す時間の大切さはおわかりになると思います。それから、貴方の被写体になることは、やはりお断りしたでしょう。見ず知らずの方に、写真を撮らせることは、契を交した人も嫌うでしょうから。」

ベンチに、コーヒーを置いて、其処を離れた。歩きながら、思わず赤面した。「誓を交した。」と言うべきだったのが、「契」と言っただけが付いて。先週の土曜日は、それから、ずっと、むしやくしやした。

一昨日、それは三十一日の木曜日の日に、由加里が、前触もなく訪ねてきた。わだかまりはないようなので安心した。東京言葉の家庭教師をしてほしいと言っている。また、明日来る約束。今度こそ、ボルシチを作ろうね。

4 / 3 (日)

朝九時に、由加里がやってきた。朝食を作って待っていた。起きたのは七時半。昨夜は、先週の書きものが終らなくて、床に就いたのは、五時を過ぎていた。書きものを終えると、頭が冴えて眠れなかった。結局、目を開いたまま、由加里の電話が鳴るのを聞いた。

家を出る前に、彼女が電話をくれる約束にしてあった。掛ってきて起床した。それが七時半。

只今9時36分。勿論夜の。つい今し方、20番のバス停まで、坊を見送ってきたところ。

今日は、彼女と、まるまる一日共にした。良い日。満ちたりた日。もん君も喜んでくれる日。とても楽しい日だったけれど、始終緊張していたから、今はほっとしている。

ここは客間。ソファにもたれて、これを書いている。目の前のテーブルに、アール 그레이の入ったポット。それに、

ティーカップと、受皿が、二組あるのは、坊のと、私のと。坊は、半分飲残していった。喜久家の折箱。中から出てきた、ラム酒のお菓子が、一個ずつ、小さな、金のフォークを添えて、二人分取分けである。でも、彼女も、私も、お菓子には、手を付けていない。

なぜかしら、坊つたら、あの子は、いつも、喜久家のお菓子を食わずにしまう。今日は音楽に聴入っていたから。（終楽章では、あの子は、涙を流していた。）この前は、オレンジジュースをひっくりかえしたから。

そうだ。あの「ひっくりかえし事件」のことは、まだ書いてなかった。「事件」だけではない。ほかに、書いてないことが、沢山ある。近いうちに纏めなければ。

とにかく、次にやってくる水曜日は、又、この店のお菓子を買っておこう。今度は、必ず食べさせたいから。お菓子だけじゃない。沢山、美味しい物を教えてやろう。色んな店に行ってみよう。デニースのラムチャップも、あの子と行けば、一人で食べる侘しさが紛れるかな。喜久家といえ、あの子の二階にも、坊を連れていきたい。私には、楽しいことになりそうで嬉しい。

あの子に、栄養を付けてやりたい。十八の子が、あのように細くてはかわいそう。知れば、知るほど可愛い子なのに。服も贈ってやろう。誕生日が来月だと言っていた。

先週の何曜日かな、着ている物のことで、変なお世辞を言ってしまった。いや、この事も、あとで、纏めて書く。

でも、あの子は、坊を傷付けたかもしれない。今日、さりげなく、香水をおくって、あの子は、良い方法だった。夕食がすんでソファに落付く際、何気ないふうに、ちょっと付けてやった。きょうまで、あの子のような臭をして出歩いていたとは、本当に、居たたまれないほどに気の毒。

あー、今日の良い日について書こうと思うのに、頭がはつきりなくて言葉が出てこない。此処まで書いてきて、何が言いたかったのだらう。地離滅裂、自分ながら分らない。休むべきなのね。

きのうから、頭が、活動しどおし。でも、まだ続けられそう。きつと眠れやしないもの。書きたいことは、沢山ある。そうじゃないわ、書かれないことが沈殿している感じ。胸の中に、沢山のことが書かれないといふのに、文字への現れかたが見いだせない。正体はよく分らない。おぼろげ。けつきつく、何が書きたいのかも分らない。ただ胸のちかえがあるばかり。つれていく。つい八王子まで眠ったときの、あの耳鳴。ちつと熱がある。由加里。かわいそうな由加里。リモコンを、今取って、レコードをかけたところ。音を小さく。オイストラフとリヒテルが共演したフランク・ソナタのライブ録音。さっきまで由加里と聴いた曲。一人になって、又聴く。

夕食には、クリームスチューを作った。本当は、ボルシチを約束してあったのだけれど、二人とも、物見遊山で草臥れていたから、ボルシチは、次回の楽しみにして、今日は、スーパーで売っている元を使つて、スチューを作った。そうはいっても、二人で、キッチンに並んで、野菜を洗ったり、切ったり、及、肉を炒めたり、鍋を、火に掛けたりして楽しかった。

夕食を食終ったときには、七時を過ぎていた。それから客間に移ってきた。

デザートには、由加里が買った、喜久家のケーキ。生地に、ラム酒を染込ませて、チョコレートでくるんだお菓子。箱から、二人分出して、私は、紅茶を沸しに、台所に立っていった。

その前に、レコードを掛けた。特に、選んだのではない。採易い右端にあった一枚を掛けただけ。それが、この、フランクのソナタだった。ちょうど今も聞えている第一楽章の、甘美な旋律に、すぐと、由加里は、魅せられた態になった。物に聞惚れている人の、忘我の面持になった。私は、彼女をひとりにして、紅茶の支度しに、キッチンに立った。戻ってきたら、第二楽章を、真剣に聴いていた。楽章の終盤に差掛っていた。じつと、身じろぎせずにいる。結の、嵐のような数小節は、瞬だにしなかった。

「何という曲ですか。」第三楽章に入って、ぼつりときいた。

「ヴァイオリン・ソナタっていうの。素敵で、良い曲でしよう。セザール・フランクという人が作ったの。フランスの作曲家ね？今、半分終わったところ。あと、二楽章あるの。とても良い曲でしょう。私も大好きな曲。」

紅茶を注いで、彼女に手渡した。ステレオのリモコンを取って、「もしも構わなかったら、もう一遍始めて良い？私も、長いこと聴いていないレコードなの。坊と、一緒に聴きたいわ？」

坊は、ただ頷いた。ティーカップを、膝に載せて持ち、見おろす恰好で、初の旋律を、再び聴いた。横から、スタンドの光を浴びて、頬のこけた、中高い顔が恍惚とした。

治水由加里。今日から呼名は坊。山形県庄内出身。歳は十八月が立てば二十歳。辛い十九年だった。このつの年、父親の運転する自動車の事故。父親、及母親を亡くした。彼女は、手に、傷を負った。

酒田に住む親戚に引取られたという。どのような苦勞をし、どれほどの悔しさを忍んで育っただろう。詳しいことは言わない。

この土臭い少女は、横浜に越してくるまで故郷を出たことがなかった。修学旅行にも参加しなかったという。

高校には行かず働始めた。

「食品工場」と、由加里は言う。

今年一月に、「食品工場」を辞めて、以前、中学校で仲良だった、先輩の女の子を頼って、横浜に出てきた。今は、杉田の、その子のアパートに居候させてもらって、近所の工場でアルバイトしている。

坊の望は、早く、しっかりした仕事を見付けて、自分の部屋を借りること。仕事は、当面、今のようでも仕方がない。でも、友達にすまないから、部屋は借りたい。そのお金が欲しい。だから、もっと働かなくてはいけない。今の仕事だって、勿論、もっと良いのがあれば変えたい。

職さがしに不利なのが、言葉の訛、ひいては学問のなさ。面

接を申込み電話を掛ける。話しかたが不得要領だといって、その場で断られる場合もある。面接をしてもらえない。

そのような、酷い会社ばかりではない。ちゃんと、面接はしてくれる。でも、大概は、何処でも、三四人纏めて、同時に面接する。自分の順番になると、いつも、ほかの受験者の注目を浴びる。いつも笑われているようで、消入するようで、本当に辛い。

でも、本当に恐ろしいのは、面接のあと。広い部屋に連れられていかれる。机が、いくつも並べてあって、自分と同じ、面接を終えた者達が、机に、大勢屈込んでいる。鉛筆をガリガリさせて、書きものをしている。自分には目もくれない。

「私が、この会社に入って成遂げたいこと。」

「会社組織の一員になるにあたっての、貴方の心構。」

「現代日本社会における、町工場の役割。」

「私が、社会人として大事に思うこと。」

「日本社会の将来を担う、現代の若者の、あるべき姿。」

そのような題の作文を書かされている。「貴方の席は、何列目の何番です。」と指示されて、席に着く。

既に、答案用紙は配付済。机の上の、正しい位置に置かれた、縦長の、白い長方形が、自分を迎える。「四百字程度に纏めよ。」ずっと座続ける。とても惨めで、何も書けなくて、涙が溢れてくる。

答案を回収しにくる。ほんの、二行か、三行書いた紙を取上げて、「難しかった？でも、頑張つて、もう少し書いてほしかったですね。とにかく、今日はご苦勞様。結果は、後日、電話でね。」と薄笑する。会社によつては、「一般教養試験」という物まで付いていて、そういう物を受けるときの気持は、ただ推量ってほしい。

もしも、自分がお姉さんのようだったら、どんなに良いだろうと言つて、あの子が、「お姉さん」と呼ぶ。

「今から、由加里ちゃん坊よ。」と、スチューを作つているときに、綽名を付けた。きょんとんとして、意味が呑込めない。「坊が、今日から、あなたの綽名よ。そのように付ける理由は、しよ

つちゅう被つていて、現に、今も被っている、その、野球帽に因んでのこと。それに、あなたは、まるで、小さな男の子が、お母さんに待ちぼうけを喰ったように、いつも膨れっ面をしている。坊は、待ちぼうけの坊、野球帽の坊、坊やの坊。だから、あなたは、今から坊よ！」と言ったら、呆氣にとられて、目をまんまるにした。少し涙になったように見えた。そしたら、俯いてもじもじした。首根っ子まで赤くなって、「それじゃー、私は、お姉さん。」と言った。世間知らずではなくて、お姉さんのような「ナウイ」女の人だったらどんなに良いか。外国の本が読めたり、ピアノが弾けたりする人に、心配事があるだろうか。そのような「階級」の人が羨ましい。

けれど、一生、縁のない世界を想像しても、仕方がない。今の、ささやかな願は、「正しい話しかた」を習って、他人に、引目を感じず、求職活動をしたい。自分にとっては、お姉さんに教えることは、本当に、意義のあることで、心から感謝している。

曲が、よっぽど気に入ったらしい。恐ろしく集中して聴いている。二楽章と、三楽章の切目で、少し紅茶を啜った以外には、ずっと、同じ猫背を保って聴入っている。

この子、出てきて、三箇月になると言うのに、都会の花やかさみたいなものは、全然知らない。毎晩通っている、スーパーと、お湯屋への道順。工場街の無機質。知っているのはそれだけ。休日には、アパートで過して、稀にしか出掛けない。

実は、東京も、横浜の町も、よくは知らない。港の見える丘公園、中華街、山下公園。今日見物したのが初め。近いうちに、東京を見にいく約束をして、今から、嬉しそうにしている。

好奇心が強い。例えば、山手資料館を見たときなど。展示ガラスに入った骨董品を、丁寧に見て回る。説明がきまで読もうとする。読んでも分らなければ、私に尋ねてまでして知りたい。そういう調子だから、ちよっと入ってみたけなのに、私は、あの洋館で一時間近くも過すことになった。普通の女の子は、十分に飽きてし

まうものを。「ほかに、面白い所に案内したいから、由加里ちゃん、そろそろ行きましようか。」と促してもしなかったら、見残した物が、沢山あったのだし、いつまで掛ったか知れない。機会さえ与えられるなら、新しい物に触れ、知らないことを学ぼうとする子でも、恐ろしくはにかみやさん。喫茶店で注文するときも、店員が、知らない人だけで縮上る。緊張して、声が出ない。あれじゃ、言うとおり、面接だって、警察の尋問みたいな心持ね。

生立ね、きつと。訛とか、劣等感だけじゃない内気。それだけに、心のうちを知るのは難しい。今日は、沢山楽しい思い出が出来て、心のへだてに、同じ数だけの穴を開けてくれた。物を言わなかった子も、これからは心を開いてほしい。きつとそうしてくれるだろうか、今日のあとは。

もう四月。やっと桜が開いた。

覚えているでしょう？公園の階段を登っていけば、何本か、毎年、沢山花をつける木。ベンチに座って見上げる。

それから見回す。左の方に、高く、肩を越して、マリインタワーの赤い塔が。又見る。正面は、小さな切立で。そう呼ぶにはあまり緩やかで、かわいらしいけれど。こつちもちよつと高台になって、あつちとこつちとに挟まれた谷は、あつちがわの斜面は、いくつもいくつも、子供の祈めく物。白い、小さな十字架が、バースデーケーキの上に並んだ、おもちゃの蠟燭みたいで、不規則に列を、作って、のどかな、日の光を、浴びて、春の日の、お陽様を、浴びて、いつまでも、そうして立って。

その向うは、観光客が、沢山行来する、山手通で、とんがり屋根の、時計台。

私も、由加里も、へとへと。お互に、励まし、励まし、石段を登って。朝から歩いて、草臥れた。やっと登りつめて、息をつく。ほつとして、ベンチに倒込む。花は、まだ数輪。高く、左にマリインタワー。前は、絵の中。花びらを隔てて、すべてが、西日の輝の中で、時計も、自動車も、人間も、みんな、ゼンマイ仕掛だった。「

横浜がコンナ又素敵だつティエーことー今日は知りマスた。」目を眩しそうにして眺めていた。

「あのう、氷川丸つて、書いてあります。」山下公園を歩いているときに、こんなことを言つて、立止つた。何のことが、分らない。「氷川丸つて。」船を、指でさししめして、混乱したように、瞬した。酷く真面目な顔で。

「覗いてみましょうか？」

「あのう、エリザベスつて・・・。」

「いやーね、あれは冗談よ！」と笑う私を、まじまじと見た。みるみる、赤くなつた。まんまと担がれたと、思つたのね、きつと。

話は少し戻るのだけれども、この少し前、二人でマリントワ一の展望台に上つた。由加里は高い所の恐怖で、急に、体を寄せてきた。寄せてきた。由加里の体。由加里の体。ごめんね由加里ちゃん。臭に困つた。悲しい臭。悪い境涯の臭。でも耐えがたい臭。中から涌出て、おなかへ、胸へ、這上つて、べっとり脂が浮いた上をくねくね伝わつていつて、体温まで暖まつた、甘つたるいような、酸っぱいような、ヨーグルトでナメクジを煮たような。本当に悲しかった。私は貴方を憎んでいない。本当にかわゆい。だから悲しいあなた、体をぐいとくつつけた。きちきちにくつつけたでしょう。服の中に溜めていたのを、私、襟の隙間から吹付けられて顔に直接受けた。私の鼻の下で、襟元が大きくあいて、暖い空気がのぼつてきつつむせつつちよつと嘔吐を堪えた位。このときばかりは、御免ね、坊、あなたが厭らしかった。いつか、あなたの額にくちづけして、頭の脂の臭のちよつと強いのに驚いたのだけれど、でもあのよくな臭を宿しているなんてちよつとも考えなかった。でも私はあなたの為を思つて気を揉んだのよ？ほかの人に嗅付けられやしないかしら、これをとがめられたらどんな思がするだろう。でもこの混雑だもの、肩と肩が触合つんだから嗅覚の鋭い人はきつと顰蹙している、早く顔を見られないように、早く此処から下りてしまおうつて、そのようなときだった。やきもきしながら言つた出任、それがエリ

ザベス二世号だった。

あの、眼下に見えている豪華客船が、今朝寄港して、横浜市民の話題にのぼっている、イギリスのエリザベス二世号という豪華客船だ、世界的に有名な船の内部を、横浜市民へのサービスで、今日は、特別に案内してくれるから、私達も、行つて、内部を見学させてもらおうと、まったくたわいないことを言った。

いま振り返ると、出任を言うにも、あの子が信込んでしまう、意地悪な嘘を、わざと言う必要が、あっただろうか。そんな事をし、何が楽しくて、何が目的で。ひょっとして、由加里を嘲る気があったのか。蔑む気があったのか。

「本当にしたの？」

「本当にしました。」

「ごめんね？この船は氷川丸といって、日本の船なの。今は、もう、海に出ないで、ずっと、此処に繋ぎとめて、中を公開しているわ？有名な船なんですって。太平洋の女王って綽名なんだって。さしずめアマテラス似せ号ってところね？」

「本当にしました。」全然反応はなくて、ちよつと膨れっ面になつて言った。

そのあとで、暫く、山下公園を散歩した。途中で、例の像、このあいだ、変な人にお陰で、一日中不愉快にさせられた像をさしめして言った。「歌で知っているでしょう？赤い靴を履いた女の子。」

「本当ですか！」意外な反応だった。ちよつと窘める口調で笑つてはいるけれども、薄目を開いて、わざと疑う目をして見上げる。何だか意外で、そして、とても不憫に思われた。

4 / 4 (月)

仕事を休んだ。あれ以来初で。

朝、酷い悪寒。それで目が覚めた。

39度9分。今、夜十時半。

氷を取替えたり、お粥を持ってきくれたり、ずっと貴方がそばにいる。

4 / 6 (水)

由加里ちゃんごめんね、せっかく心配してお医者さんをお願いしてくれたのに。今度わけを聞かしてあげる。

4 / 7 (木)

40度2分。ちつともさがらない。雨の音。苦しい。死ぬのは厭じゃない。もん君も、あの子も一緒。

4 / 8 (金)

ももを水でひやしてくれた。ありがとう、もん君、ありがとう。いま12時を過ぎたところ。

4 / 10 (日)

今朝から起きられるようになった。今は、嘘のように、体力が感じられる。頭の中は、脳の髄まで覚醒したような爽快さ。そのはずだ。金曜日の晩から、今朝まで、一度も、目が覚めなかった。三十時間ほど眠続けたらしい。

まだ明切らないうちに、鶏の声で目が覚めた。窓をひらくと、テマロが、小屋から飛出してきて、本当に情ない、物欲しそうな顔で見上げた。私が、「テマロ。」と呼掛けると、狂ったように吠出す。早朝から、とても迷惑だから、急いで、家の中に入れて、餌をやった。よっぱどおながが空いていたのね、もん君が、お粥の残を与えていったようだけれど。ねえもん君、あなた、どういうわけでテテにそんなに冷淡なの！それでも名付親なの！そうね、あなたは猫派だものね。猫に頬擦なんかしちゃって、いつか貴方の大事なネコちゃんを追っかけまわしたもんだからまだ怨んでいるんだわ。言っただでしょ、あれは私がけしかけたんだって。貴方はネコちゃん

の可愛がりかたがあんまり馬鹿らしくて見ていられなかったから、私も対抗してこの子を飼うことにしたんだわ。焼餅を焼いたんだわ。目が覚めたら私も酷くおなかが空いちやった。スキム・ミルクとパンを食べながら、これを書いている。テテがそばに来てオスワリをして主人の御機嫌伺。視線を向けるのを待つように首を傾げて見上げています。鼻の頭を嘗める。情ない唸声を上げる。一週間、彼女も心細かったのね。目顔で答えると、甲高い、悲鳴のような声をあげる。5時50分。どんよりした空。心は楽しんでいる。シャロームこんな言葉が湧出る。さあ！これから一週間分の家事。さつき台所を見たら、このあいだのスチューが腐敗しかけていた。パーラーもそのまま。これからやって来るのね、坊が。

一緒に朗読する本を選んでおかなくては。私も、東京言葉には自信がないけれど。訛を矯正するなら、東京人の書いた物が良いのかな。「午後の曳航」なんか面白いかもしれない。「痴人の愛」。んん、でも、内容が内容だから、没かな。もっと別な物、いつそ、童話みたいな物から始めるのが良いかしら。聖書。訳文が少し味気なさすぎるかな、あの新改訳は。えい、片付をしながら考えるとして。早くやってしまおう。ぐずぐずすればうんざりしてくるから。我が愛する者は我にとりては我が胸の間に置きたる没薬の袋の如し、シャローム、彼夜一夜此に臥せり。

4 / 10 (日) 続

今、坊が帰っていった。バス停まで送っていかうと言ったけれど辞退した。私は病みあがりだし、おもては雨降だしして気を使ったのね、あの子は。「そもそも、今日は、見舞に来たので、こんなに長居する心算ではなかった。まして、昼食と夕食を御馳走になったうえにも、レッスンまでしてもらったのは、かえって申し訳なかった。」と詫びていた。

私は、明日、もう一日だけ、仕事を休もう。本当は、行こうと思えば行けるのだから、一種のズル休をするのだけれど、五日間

休むのも、六日間休むのも同じこと。今日は、もう、これで早寝をして、明日は一日、腰を据えて書いてみよう。書きたいことが書ける気がする。彼夜一夜此に臥さん。

第四回

2章『己呂武反而』(つづき)(後書き)

編者の天野です。

滋子の原稿により忠実なPDF版はこちらから

<http://dl.getdropbox.com/u/976165/shigeko.pdf>

第五回

2章『己呂武反而』（つづき）（前書き）

この第2章『己呂武反而』の割り方についてひとこと。ほとんどの記事は直前の記事に続けて同じルースリーフ紙に書きつがれていきます（たとえば3/27の記事は3/26の記事から一行あけてあるだけ）。ところが、3/26や4/11の記事などは、次のルースリーフ紙に紙を改めて、新しく書き起こす形になっています。後者のような場合、その記事から次の書き起こしまでを、本サイトでは一回分とします。そういうわけで、第三回（第二十回）は長短様々です。

第五回

2章『己呂武反而』（つづき）

4 / 11（月）

My Raymond,

私、my Raymond'sは、でも、もう、貴方が欲しいとは言いません。なぜなら、以前になかったほどに、今、貴方が近く感じられますから。貴方は、やはり、私に、変らない愛を誓ったのですね。私には、とうから分っているのです。貴方の心が、痛いほど分るのです。貴方は、神様を証人にたてて、印を押したので。何人にも変更できない、契約の印を押したのです！貴方も知っていたのでしょうか？私が、それを望んでいたことを。みんなに知ってほしかったことを。あの涙は、感激の涙、あの声は、歓喜の声だったことを。なぜって、貴方は、私を、ひたすらに愛したのですもの。どのような報をも厭わず、ひたすらに、私を愛したのです。私は確信します。私達は許されています。貴方も、私も。神様は、行為の真剣さに、動かされなさいました。契約の深刻さに免じて許して下さったのです。その証拠に、神様は、ひとつのsignを、私たちのところに遣して下さったではありませんか。そうです。貴方も、きつと、そのように考えていることでしょう。あの、由加里という子です。どうして、あの子を、signと見るのか、それは、貴方も、私も説明できませんね。直観的に、そう思うまでです。でも、その直観の正しさに疑のないことは、貴方も、私も、知っています。さて、由加里の家庭教師になってから、早くも半月、どのような経緯でそうなったのか、まだ纏めていませんでした。報告を兼ねて、これからの物をしたためます。

初て、由加里が訪ねてきたのは三月二十六日でした。前にも、

これは、少しだけ書いた事ですね。私は、門の前で悪戯をして、彼女を驚かしました。あのあとで、何度も、何度も詫びて、請うように、家に引張入れました。

礼を言うための来訪でした。「このあいだの晩は、本当に有難うございました。今日は、その挨拶で参りました。」と、中に入るなり、客間の入口に立つて言いました。出会った晩のことを言っているのです。

私達は、ソファーに掛けました。お互に遠慮して、中々打解けません。

野球帽を、目深に被り、手には、軍手。私は、彼女に、膝を向けて話掛ける。けれども、彼女は、猫背になって、前方を見つめています。手さげの紙袋、これは、ビニールの覆があつて、照明を受けると、ピカピカ光ります。ビニール特有の、頭の痛くなる臭がします。彼女は、それを、膝の前に立てて、両手で、その紐を、しっかりと握っています。ソファーに、浅く腰掛けて、とても窮屈そうに、お膝を揃えた座りかたです。

石川町から歩いてきたと言います。「元町を通ってきた。このあいだ教えてもらった住所を目指して来たのだけれども、坂道が入組んでいるので、方向が分らなくなった。あちこち歩回った。あっちへ登り、こっちへ下り、到頭迷子になった。（私滋子に、）電話を掛けようと思った。でも、公衆電話が何処にもない。倉庫が、沢山見える所に出てしまった。其処は、もう、山手の風景ではない。公衆電話があつた。（ところが、あいにくと、私は外出中だったから、）いくら鳴らしても出ない。途方に暮れて、又歩いていると、おまわりさんが、交番に立っていて、彼が、地図を書いてくれた。お陰で、此処を、やっと探当てられた。」このようなことを、一人言のように言います。ずーっと呟続けるのです。空「くう」を見つめたまま、私の視線を避けるように。

私は、努めて愛想良くしました。ありったけの同情を、顔に表して、横から覗込むように、膝詰に、時々、二の腕とか、肩に、

そつと、手を触れなどして、相槌を打ちました。でも駄目です。芝居染みたことです。彼女は、無意味な悪戯をされたことが不信なのです。下手に繕えば繕うだけ、心をとざしてゆきます。こめかみに黒子がある。体に触れられるたびに、頬に、弱い痙攣が走る。

私は私で、少し虫の居所が悪かった。彼女の態度がではありません。不満でなかったと言えば嘘です。一生懸命に仲なおりしようと努力しているのに、一向つれないふうなのですもの。でも、この日は、もともと、厭な気分をどうもできずにいたのですから。（山下公園の、コーヒーの事については、全部書きました。）けれども、いくら何でも、由加里は、やっぱり、少し酷過ぎる、いえ、度が過ぎるように思えました。

「先日の晩は有難うございました。今日は、その挨拶で来ました。」と、最初の「お礼」こそ、面と向ってしましたけれど、まるで棒読でした。顔は青ざめて、表情がないのです。探るような目が、野球帽の下から覗いていました。

今、私と、膝をくつつけて、迷子の体験談を呟終えた横顔は、固く拒んでいます。ぞつとするほど白くて、彼女の頬は、どのような詮索をも、干渉をも拒むかのようです。

改めて注意したことがあります。彼女独特の癖です。ほかに誰もしないような瞬をします。うつとりと眠たげで、そのくせ、とても意志的に、瞼をあげさげするかのような、ゆっくりした瞬です。全然、人を不快にはしません。（よく、アメリカの人などが、軽蔑とか、非難とかの気持を籠めて、わざとする瞬がありますけれど、それとは違う。）変に心地好くて、見ている私も眠くなるようです。今にして思えば、彼女は、いつも、この瞬をするのでした。

由加里は冷淡でした。でも、私は、かわゆく思いました。きつと、瞬がかわゆくさせるのでしょうか。瞬の「快さ」が、横顔の冷淡さから来る「不快さ」を相殺するのでしょうか。

彼女は、長いこと、口を噤んでいました。見るとおり、美人ではありません。今のジョシダイサーに多い型でもないし、アイド

ルでもないし、ゲーノージンでもありません。鼻の高い、目のぱちりした、明るく、チャーミングな顔とは違います。でも、地味な顔は、陰がなくて穏やかです。ここはというところのない、ちよつと見れば、貧相なようで、古風な顔立は、かえって、起伏がゆるやかで、優しく、淡い、品の良さが感じられます。感じさせる素質はあるでしょう。でも、その素質をいかそうと思ったら、もつと太らなければ駄目です。脂肪をつけて、顔は、円く、血が通った色でなければ。今のようでは、いかにも貧相です。

帽子の縁の、すぐ下の、右のこめかみに、ふたつ、黒子が見えます。初は、帽子に隠れていたけれど、皮膚から盛上らない、平な、なめらかな黒子です。ひとつは、ペンの先ほど。ひとつは、くつきりと、マジックマーカーで付けた位の。ふたつは、つかず、離れず、良い工合に並んでいます。白い肌に、鮮かな黒が印象的です。私は、黙って、瞬を見ていました。閉じて、ひとつ。開いて、ふた一つ。閉じて、みつつ。開いて、よ一つ。周期が、何だか同調しなくなる瞬です。ふと、あることを思出したような顔をしました。前かがみになって、ある物を、手さげの中から取出しました。

「あのう、つまらない物ですけど・・・どうぞ・・・」
両手に、喜久家の、小さな菓子箱を捧げています、例の、探る目をして。

「しなくて良かったのに、こんなことを。かえって悪かったわね、お金まで使わせちゃって・・・でもとっても嬉しいわ？ありがとう、由加里ちゃん。とっても嬉しいわ！あけてみていい？」

「本当につまらない物ですけど・・・すみません。」

「そんなことはない！」いつつばかりのお菓子が、隙間なく収めて、全部違っているの、この子なりの選びかたをしたのです。箱を提げて、長いこと歩回ったのに、全然崩れていない。迷子になっても、揺さないよう、慎重に運んで。彼女は、私の顔を、目庇の下から見らしい。やっぱりかわゆくなって、「せつかくだから、一緒にいただきますよね？今、紅茶をいれますから。それとも、

「コーヒーがいい？」と言いました。

由加里は辞退して、「そろそろ失礼しなければいけないのです。」と言います。勿論、本心ではない。引止めてほしい。滋子という人が、良い人か、悪い人か、もう分っている。だから、訪ねてきた。でも、心まで許して良い人か。んん、許せる人だ。それも分っている。前の晩の親切に偽はなかった。間違なく、心を開いても良い人だ。絶対に、そのような人であってほしい。本当は、早く、そのようにしたい。その心算で来たのだから。でも、切掛が。もうちょっと、滋子には普通にしてほしい。前と同じようにしてくれたら、上手に、塀を跳越えてこれるそうなのに、今日は、何だか変で、間合が取れない。本人は、別に、何とも思っていない悪戯を、酷く気にして、機嫌を取りたくて、つい、大袈裟に振舞っている。「探る目」は、間合を計っている。なぜ、そっぽばかり向いているかというと、照隠に決っている。まともに、顔を向けたら、また抱付きそうな勢だから、そらしている。抱付かれるのが厭なのではないかもしれないけれど、そのようなことをする人を知らないから、警戒しているでしょう。「まだいいでしょう？本当に、ゆっくりしていつてね、せつかく来てくれたんだから。紅茶がいい？それともコーヒー？喉が乾いたでしょう、沢山歩いたから。そうだ、緑茶の良いのがあるの。待つてね、いま支度をするから。」

ママが、一保堂のお茶を送ってきたので、ちょうど良い機会だから、玉露を飲ませてみようと思いました。玉露を飲んだことがないに違ない。お菓子のあとは、濃茶をたてるのも面白い。彼女が、どんな顔をするか、私も、ちょっと浮立ちました。

「今、お湯を沸しているんだけど、お湯をさますのに少し時間がかかるの。そのあいだ、ほかの物で我慢してほしいんだけど、何がいい？オレンジジュース？アップルジュース？グレープジュース？牛乳もあつたわね・・・何か、欲しい物がないかしら。」

「それじゃ、お水を、すみません、一杯頂きたいんですけれど。」

「ええ。じゃ、お水と、あと、ほかに、何か持ってきてあげるわね？」

客間に、水とオレンジジュースを、お盆に載せて持っていきました。

何分かして、台所で、茶道具を出しているところでした。彼女が駆込んできたのです。「雑巾を貸して下さい。」と言います。目をまんまるにして、涙が滲んでいます。

「すみません。こぼしました。あの。私、こぼしました・・・。」

「そう。じゃ、そのままにしておてちょうだい。いま行くから。」

「あの。私、どうすれば良いでしょうか。馬鹿をしました。許して下さい。」

「大丈夫よ、由加里ちゃん！何でもないわ、気にしないで？」
行ってみると、テーブルと絨毯の上に、沢山、ティッシュ・ペーパーを撒いて、ぐっしょりとなっています。喜久家の箱も、底から、側面からふやけてしまつて。オレンジ・ジュースをひっくりかえたのです。

彼女は、帽子と軍手を、ソファアに放りだして、布巾を、私の手から奪つて、絨毯を拭始めました。ベソをかいて拭いているのがいじらしくて、拭く手を抑えて言いました。「由加里ちゃん、この絨毯ね、水を弾くから、そんなにしなくても平気。気にしないでつたら。」

「でも、私、お菓子を台なしにしちゃって・・・。」

「そんなことはないわ？箱にかかっただけよ。ね、由加里ちゃん、手を洗つてらっしゃい。あとは、私がするから。」彼女のふたつの手を、私の手の中に包みました。

冷たく湿つて、繊細なことといったら、まるで子供の手のようです。彼女は、片方の手の中に、片方の三の指以下をまるめこんで、右手で、左手を庇いました。それ全部を、更に外から、私が持

ちました。彼女は、初、引込めようとしたらしくありました。その力を感じました。けれども、結局、そのまま預けてくれました。私が、胸元近く持上げると、微かに震えていました。彼女の目は、私の目を見ていました。子供の視線が、母親の視線を求めるように、大きく見開いていました。

私は、一緒に立上って、洗面室まで連れてゆきました。ノブを回して半びらきにし、あかりをつけ、彼女の手は、まだ、私の左手の中になりましたけれど、放して、背中を押して、扉の中に入れました。

私は、テーブルを綺麗にして、又、キッチンで、お茶の支度にかかりました。水を流す音と、扉の音が聞えて、彼女が、客間に行く足音がしました。彼女は、やがて、キッチンに入ってきました。又もや野球帽と、軍手と、そして紙袋を提げた姿です。

「あら、どうして？ 今、お茶の準備が出来るのに。ゆっくりしていつて？」

「有難うございます。もう、帰らなければならない時間なんです。」

「そう、残念だわ？・・・ねえ由加里ちゃん、また来てくれる？」

「はい。」

「本当よ？ 本当に来てくれなくちゃ厭よ？」

「はい、有難うございます。」

「近いうち。約束よ？」

「又お邪魔して良いでしょうか。」

「良いどこじゃないわ？ 私、本当に待っているのよ？ 良い？」

「はい。」

「近いうちに、きつとよ？ 私、待ちぼうけは厭よ？」

「・・・。」

「由加里ちゃん、本当はね、私、あなたにお友達になってもraithたくて、それでお願するのよ？ 私、友達がいらないから、由加里

ちゃんと仲良くなりたいの。良い？構わない？」

「本当ですか。」

「嘘を言うもんですか。私、お友達がいらないの。とても寂しいの。」

「・・・。」

「由加里ちゃんがなってくれる？お友達になってくれる？」

「はい。」

「本当に？しょっちゅう来てくれる？」

「はい。」

「ありがとう、由加里ちゃん。嬉しいわ？じゃ、楽しみに待っているわね？」

「・・・。」

「今日からお友達ね？」

彼女は赤くなっていました。目は、すぐにも泣出しそうでもとも潤んでいました。薄い上唇が、小さく震えました。微笑をこらえるようでした。

山手から帰るといので、小学校の停留所まで送っていきました。「今度からは、電話をくれれば、バス停まで、迎に出るから是非そうしてほしい。」と言いました。念のために、小学校から、家まで、地図に書いて渡しました。次はいつと尋ねました。「又、近いうちにお邪魔します。」と言います。照れて、目を合わそうとしないのです。

「夕方からなら、私、いつだって暇なんだから、由加里ちゃんの好きなときに来てほしい。もしも、由加里ちゃんさえ構わないなら、明日も待っている。」と言いました。彼女は「はい。」と言います。あれこれ言ううちに、翌日、石川町で待合せようと約束しました。

バスが止って、彼女が、踏段に、足を掛けたときに、「握手。」と言って手を差出しましたけれど、彼女は、手を、軽く添えただけでした。私が、強く握返したら、力はいれずに預けましたけれど、

どうしても目を合そうとしません。私は、明日も楽しみにしていると言いました。このとき、6時半過だったと思います。

バスが走去って、失敗に気が付きました。あのケーキを持たせてやれば良かったのにと。翌日は日曜日でした。二十七日です。彼女は来ませんでした。私は、藍ちゃんに見つかって、目が覚めたら八王子だったことも書きましたね。次は、三十一日のことを書きます。この日は木曜日です。由加里の、二度目の訪があった日のことです。

それは夜の七時頃でした。六時過に電話がありました。今、山手駅にいますのすけれど、これから伺っても宜しいかと。「ではバス停で待っているから。」と、私は言いましたけれど、「道を覚えたので大丈夫です。地図も書いてもらったし、一人で来られると言って、電話を切りました。

電話が掛つてきたときは、レコードを聴終えたところでした。今、もう一度聴いてみます。これを書きながら、同じレコードを掛けます。

ソファアを立つて、今掛けたところ。ハープが聞えてF、ホルン、ピッツィカート、口短調、そして、今、バイオリン。大胆なテーマ。だいぶ古い録音です、メニユーヒンとドラティが入れたそうです。あなたと一緒に買ってきたレコードです。オカダヤの何階だったかしら。オカダヤに寄って見つけた輸入盤を、あなたは、「これは凄いいぞ！」と言って、大はしゃぎして買ったレコードなのに、それから、一度も掛けてもみないで、あなたは、そのままほったらかした。けれど、去年の九月だから覚えていらっしゃる？横浜で、パエイリヤを食べさせてくれるって約束をして、出掛けていたら、新聞を見せて、”Look at this! YEHU D I M E N U H I N . 僕たちのコンチエルトを弾きに、東京に来るよ。これは、何があつても聴逃せないね。Just let me make this call. I'll be real quick!”とか何とか言つて、公衆電話に飛込んだら、それか

ら、延々と、二十分位かかって、やっと、梶本に申込んで、ごめんごめんって、ボックスから走って出てきて、隣合った良い席を取るのに手間取った、ソーリー滋子。」と言って、左の頬にキスしてくれた。

手許に切符が一枚。二枚あったうちの一枚です。あとの一枚は、大森のお家に忘れてきたようです。緑色で、大きく、YEHU DI MENUHINと入った、Special Concertと銘打った切符です。緑字の左上に、日本語で、「田崎真珠メニコインコンサート」となっている。これも、何の切符か覚えていませんね。部分部分、茶色にそまっています、私の色に。一階の席だとは読取れます。でも、何列の何番かは分らなくなってしまうました。「82」と、小さく書いて、その横に、大きな字で「1/26」、そして、又、小さく「(金)」「7:」。「きつと、「11/26」「(金)」「7:00」と書いてあったでしょう。茶色に滲んで、読めないのです。緑色と茶色が、何だか、奇妙な取りあわせです。一方、メニューヒンなら、あの晩、ベートーベンを弾いて帰ったそうよ？私も、バルトックより、ベートーベンの方が好きなのです。もう一回、最後に、貴方と聴きたかった。“例のコンサートには行けそうもないな。Turns out I've got my own leg to break. Pit y to miss hearing Menuhin.だからって、チケットを無駄にすることはないよ。万里子か友美を誘って行くんだね。”でも、もう、二度と聴くことはないでしょうけれど。スペイン料理のお店に入ったら、いきなり、おじさんに、「おい、レイ、遅れるときは電話くれよー。ひやひやしたよー。」って怒られたのも懐しい。そうだ。一度、由加里を連れていこうかしら。おじさんの方では、一々、去年の私の記憶なんか保っていないわね、きつと。堂々としていけば良い。そう思ったら楽しみな。本当にそうだ、もん君と食べたパエイリヤを食べに行こう！ああ、何だか眠くなってきた。9:12分です。二楽章が聴いていてと

でも眠くなりました。とても良い心地です。又続けます。

4 / 1 5 (金)

M y R a y m o n d

この前は、変な終りかたをしました。読返してみて、よく分りませんね。

三月の三十一日の日、木曜日のことを書いているのでしたね。由加里が、二度目に訪ねてきた日です。夜の七時頃です。由加里から、電話が掛つてきたときは、バルツクのレコードを聴終えたところでした。曲が終つても、ソファーに、頭を凭れて、暫くそうしていました。週末でもないのに、レコードを聴きなど、滅多にしません。オーケストラは尚更です。がんがんひゆるるん騒々しいのだから。だのに、ふと、掛けてみる氣になつた。そろそろ、今にも、桜が咲きそうで、何だか、そぞろに不安で、曲の感じが、あんなふうだから、レコードのことを思出したのです。魑魅魍魎の、化物じみた音楽が聴きたくなつた。あなたが期待したとおり、「凄い！」演奏だつた。皮肉ではなくてよ？本当に、第一音から、二人の巨匠が名演奏なので、私は、三四十分、目を瞑つて、ソファーに凭れていました。

由加里の電話で目を開けました。「夕飯がすんでない。」ということなので、「それなら、私もまだだから、うちで、何か食べましょう。」と言って切りした。スパゲティーはいかがと尋ねたらそれで構わないと言うので、お湯を沸かして、ソースを拵えて待っていますと、ベルが鳴りました。

4 / 1 6 (土)

M y R a y m o n d

昨日書いていた続です。

ベルが鳴つて、出ると、野球帽を被つた由加里が立っていました。スーパールの袋を持っていて、チーズとか、ハムとか、ピクル

スの小瓶とか、又、わざわざ、氣を利かせて、買ってきたのです。無駄なお金を使わせて、電話で、はっきり言っておけば良かったと後悔しました。彼女が、とても健気で、抱締めてやりたかった。

ジャンパーと帽子を客間で脱いで、手を洗うと、すぐ、食堂に連れて行って、スパゲティーが出来るまで、グレープジュースを飲んでいてもらいました。わざわざ買ってきてくれたのだからと、ハムも、チーズも、ピクルスもお数にして、お互に向いあつて食べました。由加里は、やっぱり、スパゲティーを食慣れないらしくて、フォークの使いかたが変でしたけれど、何も気が付かない振をして、「沢山食べてね」と言つて勧めました。考えてみると、此処で、誰かと食事をするのは、お正月に、パパとママが来て以来。二晩だけ泊つていった。以前に書いたことがあるでしょう？「京都に帰ろう、京都に帰ろう。」と何度も言われて。由加里は、私の、フォークの使いかたを、ちらちら見て、自分も真似しました。でも、左手は、テーブルから下していました。

由加里は、少しだけ、身の上話をしました。山形の庄内という所で生れたとか、先輩のアパートに居候をして、工場で働いていたりとか。私も、どんな仕事をしているとか、両親が京都に居るとか、そんな話をしました。でも、どうして此処で暮しているのかなど、肝心なことはいませんでした。隠す心算はありませんし、嘘もつきませんけれど。でも、由加里も、それを不思議に思っていることは、顔を見れば分ります。食事がすんで、由加里に尋ねたら、コーヒーが良いと言つので、コーヒーを飲みながら、少し、彼女も、初よりは話易そうに見えたので、「由加里ちゃん、これを飲んだら、ゲームしましょうか。」と言いましたら、「はい。あのー・・・。」と言つて、顔が赤くなって、何か言にくそうに、もじもじして、私に対して、上目を使うので、「んん、忙しいんなら良いの。明日早いんでしょう？また今度にしましょうね。」と言いましたけれど、まだ、様子がおかしいので、「それとも、何か・・・。」と、何を言おうか迷っていると、「あのー、私の話しかた、変でしょうか。」

と言います。初、どういう意味が分らなかったのも、私も何と答えて良いか迷いましたけれど、段々聞いてみると、訛を気に言うのでした。私は、そんなことを、何とも思いませんでしたけれど、彼女は、いたく気に病んでいるのです。

確、病気になる前にも書きましたように、彼女は、訛を気にするところから、気おくれがして、ろくに、挨拶ひとつできない自分を情なく思つて、私に相談したくて、実は、今日は、それで伺つたのだと言います。そして、又、顔を真赤にして、お金は払いますから、正しい話しかたを教えてもらえないでしょうか、お話のなさりかたをうかがつて、お言葉のお綺麗さに感心致しました、どうぞ私にもお教頂けないでしょうかと、耳まで赤くなって、涙ぐみながら絞出すのを聞いて、ますます、この子が愛しくなりました。私は喜んで教えてあげるけれど、そんなことは、教えたり、教つたりするものじゃないと思うわ、こうして、一緒にいれば、自然と身につくものよ、それより、私からお願するわ、このあいだも言ったことだけれど、私、友達がいらないから、由加里ちゃんが来てくれて、話相手になつてくれたら、本当に嬉しい、だって、こうして、誰かにご飯を食べるの、お正月以来よ？だから、いつでも、好きなときに来て頂戴。私、いつでも待っているから。んん、言いかたが変ね、由加里ちゃんとは、もう、お友達なんだから。他人行儀はいけないわね。話しかたレッスン、いつから始めようか。」と言いましたら、「あのー、今度の日曜日は・・・。」と、まだ遠慮するので、「ね、由加里ちゃん、今度の日曜日、暇かしら。」と尋ねましたら、「はい。」と言うので、「由加里ちゃん、今度の日曜日にデートしない？鎌倉か、東京か、何処かに行きましようか。」と言いました。

けつきよく、横浜を見ることにしました。彼女は、まだ、山下公園にも行つかがなかったのです。そして、その日は、とても良い日でした。雲ひとつなくて、会話も弾み、お互の話もできたし、あなたのことも、ちよつと話しましたら、酷く真剣になつて聞いていました。だって、あの子にばかり、気の毒な話がさせられない

いもの。良いデートをして、帰はエノキティに寄って、うちでスチューを作って、本当に良い日でした。

実は、明日も、朝から来る約束なのです。明日といって、もう2：44ですから、6時間ありませんね。眠れるかどうか分りませんけれど、今日は、もう、そろそろ寝ます。今日、パパが来ました。愛しています。貴方のことよ？

My Raymond's

Shigeko

4/17(日)

My Raymond

今日は、朝の八時過から、由加里が来ました。大雨で外には出られませんでした。おまけに肌寒くて。昨日は、雨でしたけれど暖かったので、又、体の調子が変わになりはしないかと心配です。もん君、また看病してね？

今6：04。少しだけ疲れました。由加里は、三十分位前に帰りました。一緒に、朝食と、午後のお茶と、夕飯を食べました。昨日も、雨で、買物に行けなかったので、ボルシチは、又々お預になりました。喜久家もお預です。昨日は、今日ほど降っていませんので、買物位、出掛けようと思えば出掛けられたのですけれど、病気が治ったばかりだし、あなたにも、又心配させたくないし、大人しくしていました。そしたら、二時頃に、突然、パパがやってきて、ホテルの方に用事があったんで寄ってみた、どうや、元気かといっって訪ねてきたので、結局、出掛けなくて良かったのです。

津軽の雨は、平野に降れや。酒田の雨は、集めてどっと、最上川。これ、何だと思えますか。由加里のために作った早口言葉です。このあいだから練習させているのです。それは、先週の日曜日、十日のことです。その日が第一回目のレッスン、今日は第二回目で

した。第一回目は、彼女が、私の病みあがりには遠慮して、三四十分でおしまいになりましたけれど、今日は、一日やりました。創世記の前半で、アブラムが、ファラオに嘘をつくところまで、ゆっくり朗読しました。あなたは、「へー、あんなのを？」と言うでしょうね、特に、新改訳がきらいだから。でも良いのです。舌を噛みそうな名前が、沢山沢山出てくるので、今は、それで読んでいます。その方が練習になるでしょう？全部振仮名がしてあるし、つかえずに読める。彼女は、母音がおかしいので、難しい名前を、沢山言わせて、正しい音が出せるようにしたいだけなので、内容は、別に、何でも良いと思ったのです。ところが、どうでしょう、途中で、「これ、本当のことですか。」と尋ねるのです。神、その形の如くに人を作り、これを、男と女に作り給へりの所です。目を皿のようにして尋ねるのです。始めるときに、「この本は、聖書といって、神様の御言葉よ？」と言って渡したので、本当にしたのですね。それで、「本当と信じる人には本当。私のように。」と言いましたら、「じゃ、本当なんですネ。」と言って、また読始めましたけれど、おやつときも、夕食ときも、ずっと床しそにするので、ヨセフやモーセやヨシヤなどのことから始めて、サムソンとか、サウル、ダビデ、ソロモンのこととか、ヨブ、ヨナなどの話をして、それから、救主のこと聞かせるあいだにも、「それも、全部、聖書に書いてあることですか。」と、何度も尋ねます。「ね、その聖書坊に上げるから、うちで読んでみる？」と言いましたら、彼女はとても嬉しそうでした。

それで、今日は、聖書に明暮れました。帰に、送っていいこうと言いましたが、一人で大丈夫ですと言って聞入れません。ドアを閉めてしまつて、傘を差して、すたすたと行つてしまいました。「お姉さん。」とは、まだ、あれきり言いません。「坊、坊。」としきりに呼掛けるのですけれど、ばつが悪くて、言いにくいのです。次のレッスンは土曜日です。今度こそ、必ず、ボルシチの材料を買つておいて、それから、キクヤも。あさもよしキクヤのネオ

ンともすらむ山手は雨とけぶりくれつつ、なーんて。けぶるなんてあるかしら。今宵の雨は、静かに降れや。

My Raymond's

Shigeko

4/21(木)

私のあなた

おもては雨の音です。今夜のような夜は眠れない。あなたのことを考えます。頭を、心を、私のあなたで一杯にします。あなたの滋子が、私の伶門で輾転反側なのに、滋子の君子様は如何。もしや、安らかにお眠ではありますまいね。明けても暮れても、あなたの私を思ってくれてかしら。

馬鹿だ、私。分っていることだもの。でも、愚痴をこぼす位、良いでしょう！あなたの滋子は、いつも一人なのです。眠れないのです。寂しいからだと思っていました。でも、そうじゃない。私は寂しくなんかありません。常に、あなたを感じています。だって、そのためだったのですもの。

三時半です。今夜も、このまま眠れないのでしょうか。辛いけれど、明日行けば、又、二日は休めます。

昨日、事務所の人に、交際を申込まれました。上手に断るのは難しいのよ？明日も、顔を合せるのだし。勿論、眠れないのは、その所為ではありませんけれど。これは前からです。私は子供のときから、眠れなくなる癖があるのです。でも、あなたに会えなくなつて、癖が、とても酷くなりました。けれど、これも愚痴ですね。下に行つて、レコードでも聴きます。Tu pure, o principe. あなたも眠らないでね。私と居るのですよ。私は、あなたを愛しているのです。あなたは平気で、女に、こんなことを言わせるのですね。でも、もう、二度と、貴方よりほかの人は愛せ

ないのです。滋子は、貴方を愛しています。

あなたの私

4 / 2 3 (土)

もん君

今日は、とても面白い事を書きます。でも、もう遅いから、途中までになると思いますけれど。今は11:49です。明日の八時に、朝のですけど、由加里が来ます。実は、今日も一緒でした。ある面白い事を、彼女と、一緒に体験たのです。

今日は、お昼から、彼女が来て、昼食を食べてからレッスンをしたのですけれど、その部分は省略です。すぐ、面白い話題に移るわね？

夕方、彼女と、ゲーテ座の前を通掛ったら、看板が出ています。マローのDoctor Faustusを上演するっていうんだけど、どこの出物だと思う？

もん君の後輩たち！” A Saint Joseph’s Presentation of Chris・・・” ってなっているんでしょう？見ないわけにはいかないわね。六時半開幕っていうんだけど、まだ一時間半位時間があつて（まだ五時前だったから。）、私達は、丁度、夕食前の散歩だったから、時間までに、夕飯をすませることにして、ロシータで食事をしました。それから、ゲーテ座で観劇。

4 / 2 4 (日)

もん君

昨日の続を書くわね？

といっても、今日の事でもあります。どうしてかということ、今日も見てきたのです。昨日今日と、二日間の興行だったのです。今日のはゲーテ座ではなくて、セント・ジョセフの講堂でした

けれども。とにかく、まずは、劇の説明をするわね？

もん君、マールウのファウストは読みましたか。何とも言っ
てなかったわね。私、記憶がない。あなたは、本ファウストの方の、
まったくファウスト気遣だから、いつも朗読を聞かしてくれたけれ
ど、わざわざ、その為に、ドイツ語を習った位だから、マールウの
も読んでいるわね、きっと、あなたのことから。私は、U・S・
A・時代に課題リーディングで出たので、読みましたけれど、よく
覚えてないのです。ただ、言うほどの作品ではなく、どちらかとい
うと、お粗末な出来栄の、詰らない作品だなと思ったのを覚えてい
ます。でも、それは、台本だけ読んだので、本当の価値が分らなか
ったのかもしれないけれど。

でも、昨日今日と見てみて、やっぱり詰らないと思いました。
それも、学生の演技だからと言えば、それまでですけど、どう逆
立したって、ゲーテの迫力には適いません。だって、つくりが不完
全なのはゲーテも同じなのに、それでも、あれほど凄い感動がある
のは、やっぱり、もん君の言うとおりなのです。ゲーテの凄さなの
です。鷗外なんかで読んでいる私には、よくは分りませんけれど。
でも、あなたは、それが分って絶賛したんですね。こんな凄い文章
はふたつとないって。結局、一万二千行、全部暗唱できたのかしら。
いつもいつも口ずさんでいたわね。これは命の言葉だって。

後輩たちも、マールーに手こずったのね、きっと。大幅に変
更していました。私も、はつきり覚えていないけれど、確、ファウ
ストが悪戯して、誰かを、馬の頭だか、鹿の頭だかするところがあ
ったと思うけれど、それから、特に、法王をからかうところは、セ
ント・ジョセフの演劇部でできるわけがないわね。カットしたかわ
りに、色々と、面白い工夫をしていました。

おかしかったのは、ヘレナとのあいだに、オイフオリオンが
生れて跳回るのです。原作には、そんなところはなかったと思いま
す。だから、そこは、全部無言劇でした。音楽に火の鳥を使って。
昨日の、ゲーテ座での演出では、オイフオリオンが、何遍も何遍も

飛んで跳上るうちに、ずでんどう、尻餅をついて倒れました。でも、観客には、意味が分らなくて、失敗したのだと思つて、どつと大笑が起りました。”An uneducated lot!”ですか？一人だけ、由加里の横に座つて見ていた、口髭をはやした外国の紳士だけは、呆れた顔をして見回していました、低い声で”Blasphemy.”などと言つて。その人以外に、転倒の意味は理解できなかったようです。しかも、オイフォリオン役がバイロンそっくりな顔立で、色の白い、男の子のくせに、とても可愛い子なので私は微笑んでしまいました。でも、今日のセント・ジョセフでの演出は、昨日に懲りて、転ばないようにしていました。袖に飛込んで退場するのです。それでは意味がありませんね？ひよつとして、ゲーテ座にゲーテを掛けたのかしら。まさか、それはないわね、いくら何でも。

面白かつたのは、幕間に、メフィストワルツを弾いているのです。誰か、舞台裏で、グランドピアノを弾いているのです。面白い演出でしたけれど、少し的はずれな感じでした。劇の雰囲気合いませんでした。後半のオクターブは音を外しすぎたし、これも、懲りたのでしょうか、ゲーテ座では生演奏でしたけれど、今日は、アシケナージのレコードを掛けていました。音楽の使いかたは、感心しませんでした。ファウストが、最後の時を迎える場面で、春の祭典を使ったのは、オイフォリオンに火の鳥と同じで、変でした。ヘレナとファウストの無言劇がありましたけれど、シヨソンの詩曲は、中々合っていました。随所に、カルミナ・ブラーナが流れましました。The Seven Deadly Sins が登場するところで、カルミナ・ブラーナの曲は面白くありました。そうそう、うちにもあるドラティ盤だったのが、すぐ分りました。

それから、今日、こっそり、セント・ジョセフの校舎の中とか、校庭とかを見て回りました。本当は、そんなことはしてはいけないのですけれど。もん君が、学生生活を送った場所だと思うと、矢も楯もたまらなく懐しくなつて、劇が終ると、講堂から憧出て、食

堂を通つて、教室の中を覗いたり、実験室の中を覗いたり、チャペルを覗いたり、教室とか実験室は鍵が掛つていて、ドアのガラス越しに覗込むしかありませんでしたけれど、チャペルは、扉を押すと開いたので、中に入つて、暫く、腰掛に掛けて、磔刑になつた主を見上げていましたら、悲しくはないのに、涙が溢れて、どうしてもお祈をしなくてはいられない氣になつて、祭壇の前に行つて跪きました。そのように、神様の前に、自分を投出すのは久しぶりでした。実は、今ではお祈もしないのです。段に、額をつけて、ただそうしていました。言葉はありません。何とお祈して良いか分らないのです。でも、そうしていると、とても安らかな、良い氣持になるのですけれど、涙は、どんどん出てきて、長いこと、声を押殺してしましたら、肩に、誰かが、手を置いたので、私は、我慢していた声を抑切れなくなつて、声をあげて泣いてしまいました。今思えば、驚かなかつたのが不思議な位ですけれど、そのときは、ちつとも驚きませんでした。多分、川福教会にいるように錯覚したのでしょう。

”Child, child.”　と言う声で、見上げましたら、

”Bless you, my child. Let's pray, shall we?”と仰つて、それはガーバー神父でした。神父は、私のことを覚えていて下さつたかどうか、分りませんが、全然驚いた顔もなさらずに、本当に、本当に慈悲深い笑みを浮べてお見つめになるので、愈抑切れなくなつて、しゃくりあげてよよと、思わず、お手にくちづけをしましたら、

”Come, come, dear child.”　と仰つて、髪の毛を撫でて下さつてから、

“どれ、私も跪こうかな。一緒に祈つてあげよう。”と仰つて、主の祈を唱えられましたけれど、

”Give us this day our daily bread.”　の行に差掛ると、少し間を置かれて、

”Give to this world man the flesh and the blood.”

と、確、そうお言換になりました。本当にお立派な方です。あなたが敬愛する理由が、良く分ります。顔を思出されるのが恥かしい氣

がしましたので、日本語で話して、英語が分らない振をしましたのに、真心をこめて接して下さいました。勝手に入ってきてすみませんでしたと謝りましたら、意味がわかりになるらしくて、いやいや、よくあることだよ、夕方、一人で入ってきてお祈をしている人はよくいる、この遅い時間は初てだがね、劇を見た帰かなと、ここにこして仰って下さいました。

それで、今日は、去年のビンゴ祭以来、初て、セント・ジヨセフの中に入りました。たしか日曜日だったわね、貴方と行ったのは。もう、門の所の桜が咲いていて。去年は、桜が早かった。今年のビンゴ祭は、由加里と、もっと早く知合っていれば良かったのですけれど、行く人がいなかったたので、前を通過ぎただけで、中には入りませんでした。桜もまだでした。今日入れて良かった！教室は全部、鍵が掛っていましたけれど、一階の音楽室だけは開いていたので、中に入って、机に座って、もん君も、此処で、歌を歌ったり、笛を吹いたりしたのねと感慨に耽りました。黒のアップライトがあったので、消音ペダルを踏んで、喜の島を弾いたり、詩人の恋を弾いたりして悪戯しているうちに、メフィストワルツを弾出したので、おかしくなつてやめましたけれど、そういえば、ペダルを踏みっぱなしにしてきちゃいました！それから、廊下とか、階段をうろつろしていて、チャペルに入ったのです。

劇は、それほど良くはありませんでしたけれど、由加里は、酷く深刻そうな顔をして見ていました。これは昨日のことです。一々、私が、耳許で解説するのを、額に皺を寄せて聞きます。私は、それで、昨日は、あまり集中して見られなかったたので、今日も見にいったのです。今日は、由加里が、友達と、午後から、アパートを探すとかで、午前中だけレッスンして、午後は、私一人で過しました。朝から天気も良く、とても暖だったたので、山手公園に行つて、サマ―ハウスがあるのですけれども（知っているかしら。）、丁度、誰もいなかったたので、中に入つて、聖書の朗読をしました。びっくりしたのですけれど、由加里は、一週間のうちに、全部読んでしまつ

たと言つのです。先週の日曜日に、口語訳聖書を上げたら、昨日来て、黙示録まで読みましたと言います。でも、分らない所が、沢山あったけれど、福音書は良く分つたそうです。だから、今朝は、マタイ伝を朗読しました。公園に行く途中で、八重桜が満開で、すぐ下に、八重山吹が、沢山、花をつけているのですけれど、いくらか桜が散つて掛つて、由加里は立止つて、うつとりしているので、暫く、二人で見えていましたら、由加里が、突然しゃがんで、野球帽に山吹をかざして、「花をめしませ。」と言つて笑つたので、私も、声をあげて笑いましたけれど、又、彼女を抱締めたくなつたのを我慢しました。

4 / 27 (水)

もん君

今日、到頭、仕事を辞めました。このあいだも、ちよつと言つたでしょう？交際を求められたつて。断られた腹癒に、色々と厭がらせをするのです。あらぬ噂まで言触らして、どうして知つたのでしょうか、あなたのことまで、事務所の人に、皆言触らして、ある事ない事言つているのです。所長は、彼の言う事を鵝呑にして、私を呼んで、あなたのことを尋ねるのです。それが、とても酷いことで、事実ではないのだけれど、所長は、もう、辞めさせる氣でいるし、今更弁解するのも悔しいから、個人的なことを答える必要はありませんとつっぱねたら、彼女は激昂して、「あなたの、個人的な不始末が、事務所の名折になるのよ！」と言つので、私は、黙つて退室して、机を片付けて、辞表を書いて出してきました。彼女は、腕組をして、横を向いていました。

でも、彼女とは、もともと反が合わなかったのだから、これで、不眠症のままで仕事に行く苦しみからも開放されるので、かえつてせいせいしました。これで、一日中、もん君のことだけ考えて暮せます。

4 / 28 (木)

今日、溜っている新聞を見ていたら、ホロヴィッツが、日本に来るそうです。絶対に、彼だけは聴くことができないと諦めていました。U・S・A・にいたところに、カーネギー・ホールなどで、何回かリサイタルをおこなって、特に、オーマンディとの共演は、大変な前評判で、私も、聴きにいきたかったですけれど、いつも切符が手に入りませんでした。あなたも聴きたがっていたわね。これで、私の勝が、ひとつ増えるわけです。今日、申込んだら、初日は駄目でしたけれど、二日目は、丁度、キャンセルが出て、二枚並んで取れました。由加里を連れてゆきます。六月の中旬です。木曜日なので、仕事を早めに切上げてもらわなければいけませんけれど、今から分っていれば、大丈夫でしょう。彼女も、音楽が好きで、おまけに、耳が、とても良いのです。よく、一緒に、レコードを聴くのですけれど、一週間もたって、メロディーを鼻歌にしていることが、よくあります。それが、ぴったり、キーまで合っていて、今まで、音楽など聴いたこともない子が、考えてみれば不思議なことです。彼女のおきにいりは、フランクのソナタで、冒頭のヴァイオリンを、しよっちゅう歌っています。「凄いわね、坊。一度聴いただけで覚えちゃったの?」と言いましたら、赤くなって、「いえ、二度聴きました。」と言って、それきり歌わないので、「今の曲、どれ位覚えているの?」と尋ねましたら、「一生懸命聴きましたから、大体覚えましたが、正しく歌えるか分りません。頭の中でなら聞えるんですけれども。」と、事もなげに言いますので、「それは凄いことなのよ? 坊。お姉ちゃんなんか、とても真似できないことだわ? あなた、才能があるのよ?」と言いましても、煽っているのだと思って、「からかわないで下さい。」と言ってもじじします。それからというもの、どんどん、レコードを聴かせるようにしましたけれど、彼女の言うとおり、一度聴いたものは、大体、頭に残るらしくて、例えば、最初、私が、前に聴いたラヴェルの四重奏を、鼻歌で歌って聴かせて、「坊、このあとは?」ときけば、ほぼ、

そのとおりに歌えるのです。あのように、曲りくねった節でも、ちゃんと、一度で入るらしいのです。偶に、意地悪をして、キーを違えて歌うと、変な顔をして、歌わずにいます。標準語のレッスンと並行して、音楽も、少し教えてみようかと思っています。とにかく、ホロヴィッツは楽しみです。直前になって、来るのをやめたということがないようしてほしいものです。去年、ロンドンでおこなったリサイタルが、日本でも放送されたいのですけれど、私は知りませんでした。

4 / 29 (金)

隠していても仕方ありませんから、言ってしまういます。厭な人が、今日訪ねてきました。私を、事務所にいられなくした張本人です。どうして、そのような、破廉恥な真似ができるのか、理解できない。丁度、散歩に出掛けようとしていたときに、テテが吠えるので、窓から見たら、彼が、門の外に立って、様子を探っているのが分ります。良い按配に、テテを放しておいたので、彼は、恐をなして、門を開けようとしません。ちよつと見回して、ベルを見付けたので、鳴すと、テテが、彼女は、彼女で、胡散臭い人間だと見てとつて、愈吠えて、門に、前足を掛けて挑掛るので、彼は、おどおどして、足踏をしているので、私は、思わず笑ってしまいました。「テテ、でかしたわよ！」と声に出して言いました。何度かベルを鳴して、立去りましたけれど、泥棒が逃げるように、きよるきよるしながら、帰つてゆきました。ところがです。今日は、一時に、石川町で、坊と待ちあわせなので、テテを散歩させがてら、港の見える丘公園の方に歩いてゆくと、又、テテが吠えるので、見れば、彼が、行く手に立って、じーっと見ているのです。私は、無視して、ずんずん、彼の立っているそばを通過しました。テテが吠えるので、全部は聞取れませんでしたけれど、居留守は酷いじゃないですかとか何とか言つて、ちよつと付いて来そうにするのに対して、テテも心得ていてくれて、ちよつとでも寄ろうものならと、齒を剥いて睨

むので、立竦んだまま見送るらしくありました。本当に、彼のよう
な人が信じられない。でも、それきり付いてこないの、港の見え
る丘公園に入って、テテに抱付いて、「テテ、ありがとう！」と、
礼を言いましたら、彼女も、大はしゃぎして、顔中嘗回すので、あ
とで、水飲場で、顔を洗うことになりました。それから、フランス
山を下って、元町に入りましたけれど、物凄い人混なので、舶来屋
のある通を通って、石川町まで行きました。いつも、テテの散歩は暗
くなってからで、この時間に散歩するのが嬉しくて、先へ先へと引
張っていきますのが、途中から草臥れました。おまけに、今日はと
ても暑くて、長袖では汗ばむ位で、風があつただけが救でした。
坊は、表口で待っていて（東西南北、何口だか分かりません。）、私
達は、一旦、裏口に着いてから、気が付いて、表に回るのは、人が
多くて、骨が折れました。分りませんか？ちよつと、言いかたが変
ですね。言直します。坊は、石川町駅の表口で待っていました。と
ころが、私達は、細い通を通ってきたので、裏口に着いてしまいま
した。だから、当然、坊は見当りません。そのときに、気が付きま
した。私達（私とテテです。）がいるのは裏口で、坊は、きつと、
表口で待っている。駅の中を、テテを連れて歩くわけにはいかない
ので、もと来た道を、少し引返して、表通に出て、其処から、表口
に回りました。表通、これを、石川町商店街というのだそうですけ
れど、其処は、大勢の人で賑っていて、テテを連れて通るのは一苦
労でした。これで分ったでしょう？分つてもらうのに、もう一汗で
す！テテは、今では、坊が大好きで、会うと、いつも飛付くので、
今日も、気遣のように、尻尾を振って、飛付きましたのが、立上る
と、坊と、それほど変らない、大きな犬がはしゃいでいるのに、ほ
かの人達は、少しばかり眉を顰めたかもしれません。私達三人は、
テテを中にして、商店街を歩出してすぐに、脇の、さつき、私とテ
テとが来た道に入って、そのまま、スーパーに行きました。ボルシ
チの材料を買うためです。前に書いたかしら。次はボルシチを作る
うね、次は必ず作るうねと、何遍も何遍も約束しながら、その度に

お流になつて、確、この前は、ゲーテ座の芝居見物で、その日は、材料まで買つてあつたのに、結局作らないでしまいました。今日こそは、何が何でもという心算で、坊に、買物を付合せて、それから喜久家に寄つて、坊の好きなラムボールを買う。ラムボールというのと知りました。ゲーテ座の日にも買つてあつたので、それは、お八に食べて、坊も、やつと、喜久家のお菓子が食べられたのでした。それが、先週の土曜日です。それから、沢山のことがあつたので、そして、いつも不眠症なので、たった一週間とは思えません。正確には、まだ一週間も経っていないのですね。私達三人は、買物をすますと、一旦、荷物を置きに、家に戻りました。そしたらどうでしょう。玄関のドアに、封筒が挟んであります。私は、又思出して、厭な気分になりましたけれど、坊がいるので、何でもないふうになつて、封筒を抜取つて、買物袋の中に入れました。「私、これを冷蔵庫に入れてくるから、坊、テテをお願いします。」と言つて、材料を冷蔵庫にしまつて、封筒は、開けずに、そのまま、屑籠に入れました。だから、何が書いてあつたのかも知りません。本当よ？でも、その人、そもそも、事務所で、何と言つてきたか、どんな言葉で、私に言寄つてきたか、私が、それを言わないものだから、心配なんですよ。そのうちに言いますよ！もん君には、何も隠しません。私、もん君を愛していますから。もん君しか愛せんから、なーんて坊も、もう、テテは扱慣れていて、「テテマロ！駄目！Wait！おハンド。」などと言つてからかうようになりましたが、やはり、顔を嘗回されるのには、まだ閉口するらしくあります。出てみると、もう、テテを繋終えていました。気が付いてみると、彼女は、今日、軍手をはめていません。今日は暑過ぎて、かえつて目立ってしまうでしょう。私の前では、もう、普段から、素手で通していますけれど、外出するときには、やはり、いつも軍手をしていました。私は、なるべく、視線を向けないようにしていますものの、食事のときとか、朗読のときとか、向いあつて座つたときに、たまたま、目が、その方に行ったりしますと、彼女は、指を丸めこんで、拳を作りま

す。それが癖のようです、かわいそうに。この続は、また、明日書きます。今度、坊が、泊りにきます。あいらう、ゆう。A i s i t e i m a s u . A n a t a n o S h i g e k o .

4 / 3 0 (土)

昨日のお話を続けるわね？これは、昨日29日の出来事です。テテは、一人だけおいてけぼりにされて、非常に不満でした。ずーっと遠くまで、やる瀬ないような悲鳴が聞えてきましたけれど、今日の山手通は、彼女を連れて歩けませんし、エノキテイの入口に繋ぐわけにもいきません。夕方、もう一度、散歩に連れていくからと約束して、彼女は留守番です。それで、坊と私は、聖書を持って、山手公園に行きました。中に、サマーハウスがあるのですが、以前、その中に腰掛けて朗読をしたことがあります。前に言いましたね、この事は。丁度、先週の日曜日のことでした。坊は、其処が、とても気に入って、今日も行ってみようかと言いましたら、「はい。そうしましょう。」と、うきうきした声を出して微笑みますので、彼女は、内心、そう言っただけで済んだのです。さいわい、公園は、沢山の親子連でしたけれど、今日も、サマーハウスはあいていたので、坊と私と、誰に気兼ねもなく、朗読を楽しみました。今日は、マタイ伝の続を読んで、それから、ちょっと趣向を変えて、詩篇をいくつか、旧訳で読みました。第一の「悪しき者のはかりごとに歩まず、つみびとの道に立たず、嘲る者の座に座らぬ者はさいはひなり。」から始めて、全部ではなく、飛び飛びに、第二十三の「主は、我が牧者なり、我、乏しき事あらじ、我が、世にあらん限は、必ず、恵と憐みと、我に傍来たらん。」まで。坊は、全然分らないと言いながらも、飽きもせずに、面白そうに続けます。仮名遣に慣れないらしくて、中学で教らなかったのでしょうか、少し読むと支え、又、少し読むと支えしましたけれど、厭になる様子は見えませんでした。句読がはつきりしないので、一層読みにくいようでした。でも、それが、坊の好奇心を掻立てます。とにかく、好奇心が強いのです。

何でも知りたがりです。「私って馬鹿です。何も知らないんですから。」と言つてにこにこ笑いますが、ちつとも、卑屈な笑ではありません。心からかわゆるのです。そこで、教えてあげると、それはそれは、目をまん丸にして聞入ります。「私は、今から勉強すれば一人前になれますか。」と、真顔で聞きます。「お願いします。何でも良いから教えて下さい。私、一生懸命にやります。」と言いますから、仮名遣のことから、ダビデの一生の出来事まで、何でも話して聞かせましたけれども、彼女は、もう、神様を疑わないようです。信じきっています。「愚かなる者ぞ、心のうちに、神なしと言へる、彼らは腐れたり、彼らは、憎むべき事を作せり、善を行ふ者なし。」といふくだりは、説明がなくても分るところなので、何遍も何遍も読んで、我と我が身に言聞かせるようでした。山手公園で、一時間半ばかり過ぎて、それから、又、山手通を、反対方向にたどつて、セント・ジョセフの前まで来たときに、「先週の劇、此処の生徒さん達が演じていたのよ？ちよつと覗いてみましょうか。」と言つて、ブラフ・クリニク脇の小路に入つてゆきましたが、今日は休日だと思つていましたら、もん君の学校は授業日なんです。中庭には、制服を着た生徒さんが行つたり来たりしています。三時頃だったでしょうか。金網ごしに見ていました。「この学校、全部英語で授業するの。セント・ジョセフ・カレッジといって、男子校よ？隣が女子校。トロイのヘレンは、隣の生徒さんかもしれないわね。物凄く、頭が良いのよ？お姉ちゃんの好きな人、此処の卒業生なの。」と、坊に、また少し、あなたのことを言いました。彼女は、何も言わずに見上げていたので、「坊は、好きな人がいるの？」と聞きましたら、突然のことに、目をぱちぱちして、少し、赤く照れたようでしたのが、「いえ、いません。」と言つて、目庇の下に隠れました。金網の向うを見ると、メフィストフェスを演じていた生徒が、白い建物に入つてゆきました。彼は、赤い髪の毛をした、白人の子なので、すぐに分りました。ガーバー神父の姿を求めて暫く見回していましたら、私達のいるところに、八人か十人の生

徒がかたまりになって、石段を登ってきます。中に、ファウスト役の子がいて、色の浅黒い、インドふうの顔をした子です。外人の子にしては小柄で、私より、少し低いのですけれど、変な目で、じろじろ見ながら近付いてきて、顔を覗込むようにするので、目礼をして、視線を避けましたら、二人位うしろから、オイフオリオンが現れて、又、じろじろ見ます。日本人でしょうか、中国人でしょうか、舞台で見るよりも、もっと色白で、小柄で、背丈は坊とあまり変わらないのに、顔だけは、アジア製バイロンなので、思わず微笑んでお辞儀をしましたら、真赤になって、目をそらしました。それを見ていた坊も、おかしかつたらしくて、含笑を漏しましたので、一団が遠ざかるのを見送って、「由加里ちゃん、今の人なんかどう？中々シャイで、ハンサムじゃない。由加里ちゃんを見て赤くなっていたわよ？」と言いましたら、彼女も真赤になって、激しく首を振りながら、「いえ、違います、違います。滋子お姉さんを見て赤くなつたんです。私、見ていました。滋子お姉さんがお辞儀したら、あの人が、急に赤くなつたんです。」と言って涙ぐんでいます。そういう彼女が、無性に可愛くて、もっとからかってやりたい気持ちを抑えかねて、「そうかしら。でもどう？由加里ちゃん、好きな人がいないなら、口を利いてあげてもいいわよ。『これから、うちにいらつしやらないこと？三人で、ボルシチとキクヤのラムボールは如何？』って。私、ほかの人は好きじゃないけれど、あの人ならオーケー。清潔そうだし、賢そうだし、坊の恋人になつてくれたら嬉しいわ？」と言いましたら、「知りません。からかわないで下さい。あの人が、舞台上で転んだ人です。みつともなかったです。」としどろもどろになるので、一層おかしくなつてしまい、「良く覚えているのね、由加里ちゃん。じゃ、私を睨んでいった人、彼は、何の役だったかしら、覚えている？」と問いましたら、「はい、ホースタス博士です。二十四年間迷ったあとで、悪魔に連れていかれました。」と答えたのには、この子の頭の良さに、又々感心しました。それから、エノキティに寄って、坊も、すっかり好物になつたチヨコレー

ト・ムース、もん君が大好きなお菓子を食べながら、坊のアパートさがしがうまくいっていないことと、まだ、中々、良い仕事にありつけない悩みの相談にのってあげました。私は、初め、この子の話を聞いたときから考えていた事でもあったので、「良かったら、うちに引越してこない？」と言ってみました。「うちなら、部屋が余っているんだし、私一人でいるのは寂しくてしょうがない。由加里ちゃんが出来てくれたら、こんなに嬉しいことはない。由加里ちゃんもお家賃の心配をしなくてすむし良いと思うのだけれど。」彼女は、何と返事して良いか、「はい。でも。」ばかり繰返します。突然、そのようなことを言われたので、無理ありません。遠慮もあるのでしょうか。でも、内心、嬉しいことなので、少し、強引に勧めてくれた方が、うんと言易いと考えて、「では、一度、ために、この連休に泊りにきてみたら。」ということになりました。彼女は、明日曜日から、四連泊でやってきます。あ、そうです。それで、昨日、ようやく、ボルシチを作りました。もん君と、二人で作って以来でした。

5 / 1 (日)

坊が、夕方から来て、泊っています。明日、三溪園に行きます。

5 / 2 (月)

今晚も、坊は泊っています。さつき、部屋を開けて覗いたら、すやすや寝息を立てていました。膝を立てて、おかしな恰好で寝ている顔は、子供のようです。今日は、三溪園に行く予定でしたが、出掛けようとしていたら、雨が降ってきました。又、すぐにやんで晴間が見えたので、どうしようかと迷ったすえに、結局、三溪園行は明日のことにして、テテを連れて、いつもの公園に行きました。サマーハウスが置いていたのは仕合なことでした、あとで、又、二度ばらばらきたので。詩篇は、随分進みましたよ？「我が魂はも

だして、ただ、神を待つ。我が救は、神より出づ。神こそ、我が譬、我が救なれ。神よ、願はくは、我を救給へ、大水流来りて、我が魂にまで及べり、ああ、視よや、視よやと言ふ者の、恥を負ひて、うしろに退かんことを。」マタイ伝も、これは、飛ばさずに、全部読んでいます。「すべて、労する者、重荷を負ふ者、我に来れ。我、汝らを休ません。我は、柔和にして、心ひくければ、我が軛を負ひて、我に学べ。さらば、魂に、休を得ん。我が軛は易く、我が荷はかるければなり。」このごろでは、まだ、旧訳は二回目なのに、仮名遣にも慣れてきて、あまり引掛らずに読めるようになってきました。発音は、まだ、中々、道は遠いようです。

5 / 3 (火)

今日は、三溪園に行ってきました。もう、人が沢山！でも、閉まる時間が近付いてくると、急に少なくなつて、しまいには、私と坊がいる、丘のもとには誰もいなくなりました。白いあやめが咲いています。私は、あの匂が、本当に好きで、坊にも嗅がせると、「うっとりする、良い匂です。」と言って、鼻を、花の中に入れて息を吸込んでいました。すると、どうでしょう。あたりが静になりましたら、ほととぎすが、けたたましく啼出しました。何ともいちはやき一羽です。姿は見えませんが、すぐ近くで啼いています。何と文学的な瞬間でしょう。あやめはあやめでも、あやめ違でしょうけれど。でも、これだけでも、来た甲斐がありました。私は、パパに連れられて、船岡山に登ったときのことを思出しました。ある夕方、それは夏休中だったと思います。昔、小学生のときに、夕御飯の前に、パパと一緒に、船岡山に登って、東屋に腰掛けて、綾尻取をして遊んでいました。パパの発明だと思っています。綾取と尻取を同時にする遊です。突然、ほととぎすが、大きな声で啼出しました。あまり大きな声で、私はびっくりしました。それに、ほととぎすの声を聞くのは初めてだったので、パパに言われるまで、何の鳥なのか分りませんでした。丁度、今日、坊と、三溪園で聞いたのと同じよ

うに、すぐ近くで啼いているのですけれど、全然、姿が見えませんが、いくら探してもいません。パパも一緒になって探しましたけれども、到頭見つかりませんでした。その日以来、今日、再び聞くまで、あの声を忘れていました。山手には飛んでこないようです。聞いた覚えがありません。坊は、すぐに、「あ、ほととぎす。」と言って、あたりを見回しました。そして、暫く、二人で探しました。でも、やつぱり駄目です。キヨツキヨ、キヨキヨキヨキヨ、キヨツキヨ、キヨキヨキヨキヨ。絶間なく、飽きもせずに啼いているのに。ほととぎすさがしは諦めて、また、花に顔を当てて、匂を、胸一杯吸込みました。坊は、花を持つ手を気にするのも忘れて、目を閉じて嗅いでいます。「お姉ちゃんね、この匂を嗅ぐと、これから、良い季節になるんだなって、何だか浮き浮きしてくる。これから夏なんだなって、そんな匂じゃない?」と言いましたら、彼女も笑って、「本当に、心が浮立つ匂です。」と言います。「春の匂も好きだけれど、何だか悲しくなる。梅のかおりは別ね。白梅は楽しい匂だけれど、でも、桜の匂なんか、本当に切ない。山桜なんかは、とても良い匂だから、いつも、こんなふうに、花びらを、鼻に当てるんだけれど、そのたびに切なくなつて。坊は、何の花の匂が好き?」と尋ねましたら、暫く考えて、「そうですね、春は、沈丁花が好きです。秋は、ギン木犀が、良いかおりだと思います。」と言います。私は、初、彼女の訛の所為だと思って、「キン木犀?」と言いましたら、「いえ、ギン木犀です。金木犀とは違う木です。」と、彼女が言いますので、段々聞きましたら、かおりは、金木犀に似ているといえは似ているけれど、違うといえは、紅梅と白梅ほど違うと言います。花は橙色ではなくて、白いのだそうで、だから、金ではなくて銀木犀なのだそうです。葉の形も、少し違うと言います。もん君、知っていましたか? 私は、そのような花があることを、露知りませんでした。坊は、小学校に、その木があったので知っているけれど、ほかでは、あまり見掛けたことがないそうです。私は、「じゃ、秋が楽しみだわ? 教えて頂戴、銀木犀を。」と言って、二人は、又、白い

あやめの匂を嗅いで、長いあいだそうしていました。やがて閉園時間になったので、其処を離れましたけれど、一度啼出したほとぎすは、ずーっと、何かに取憑かれたように啼通して、私達が、門を出ても、まだ聞えていました。

夕飯は、スペイン料理のお店に行こうと、横浜に出たのですが、けれど、閉っていました。坊は、やつぱり、あの様に騒がしい所が慣れないので、私のうしろに隠れるようにして歩きます。手を繋ごうと、何気なく、手を取ったら、それが彼女の左手でした。でも抵抗しませんでした。そのまま預けましたので、私も強く握って、人混を掻分けました。バス乗場まで、普段と変らない声で、「この駅、最近よ？こんなに綺麗になったの。前はごたごたしていて、汚くて、あまり来たい所じゃなかったわ？何を食べようか。坊は、何が食べたい？」というように、いつもの会話をしながら行きました。でも、一度繋いだら、放す汐がなくて、バスに乗るまでそうしていました。

けっきょく、元町のデニーズに行きました。二人とも、ラムチャップを食べて帰ってきました。それから、二人で、テテの散歩に。今、二時過、あの子は眠っています。私は思っています。

5 / 4 (水)

去年の、この月、私が、ピアノを弾けば、あなたは歌ってくれた。五月よき五月、花はほころぶ、こころの花も、そつとほころび。五月ああ五月、鳥がほころぶ、人はしのびね、きみを口説きて。

船岡山といって、もん君、知っているかしら。京都の家の近くにある、小さな丘のことをいうのです。昔の京都は、羅生門が南、船岡山が北のはずれだったのですよ？さすがのもん君も、そういうことは知らないでしょう。一度、京都を見せてあげたかった。パパは、京都に帰ると、毎日のように、船岡に登りにゆくのです。登るといっても、全然、大した登ではないのです、小さな丘ですから。パパは、船岡から眺める東山ほどの眺は、日本中にないと言って、

特に、其処からの比叡山はすばらしいと、私にも、よく見せてくれたのです。私も、大人になってから、パパの言うとおりだと感じるようになりました。京都に帰ると、必ず登りにゆきます。比叡山から如意岳へ掛けての、弧を描いたような稜線は、何処にもない優美さです。見おるせば、大徳寺の金毛閣は、松の梢に朱色も鮮か。もう少し登って、丘のてっぺんまで行く。足下に、西陣の家並がひろがっている。京都市の西の半分が見渡せます。パパは、「京見石」と、勝手に名前を付けた石の上に私を載せて、あそこが何、あそこが何と、指さして教えてくれたものです。今は懐しい！ずーっと向うの、羅生門のあったあたりに、東寺の塔が、小さく小さく見えます。右の方の、比較的近い所に、こんもりした丘が、一二三と、愛嬌良く並んでいるのは、双が丘。うち一番高い、一の丘、それと向いあうように、仁和寺の仁王門と塔。優しい姿で迎えてくれます。

パパに対抗して、中学二年生の夏に、「古今の里」と命名した風景です。昼さがりなどに、京見石に立って、伸上って、東の方を見ると、清水寺が、西日を反射して、赤く輝いているのが、はつきり見えます。その、船岡に東屋があって、其処で、私は、パパと、綾尻取をしているときに、ほととぎすを聴いたのですよ。五月の京都は美しい。京都に、美しくない季節はありませんけれど、私は、特に、若葉のころが好きです。なぜ、あなたと、手を繋いで、船岡山の若葉の下を潜らなかつたのでしょうか。どうか、坊には見せてあげたい。

今日、一緒に、ホロヴィッツのレコードを、何枚か聴きました。六十年代のスタジオ録音と、カーネギー・ホールで、十二年振におこなったリサイタルのレコードなどです。昨日、坊に、例の話をしたら、是非行きたいと言うので（時間の都合が付かないと言っても、こればかりは、首に、縄を付けても連れていきますが！）、どのような物を聴きに行こうとしているのか、説明かたがた、レコードを聴きました。午後は、これに費しました。私も、ホロヴィッツのレコードは久しぶりでした。あなたとも、聴きませんでしたね。一枚も聴いていません。あなたは、あまり、ピアノに関心がなくて、

正真正銘のワグナー気遣だし、私は、その反対で、そういう、が
んがんひゆるるんする物は聴かないしで、考えてみると、私達、音
楽の趣味が、全然違っていますね。もん君、さすがに、愛の死は、
うまく弾けていたわよ？でも、何だか、あまり口にしたくない曲名
ね。連弾も、もつとしたかった。白と黒、懐しいわね。貴方も、良
い曲だって練習してくれた。初の章で飽きちゃったけれど。プーラ
ンクは、頭から馬鹿にして掛けて。でも、あなたが、とっても下手
な声で、一生懸命歌ってくれるのを聴くのが一番楽しかった。よく
聴いてみると、皆が言うだけあって、ホロヴィッツという人は、偉
いピアニストだと思いました。私は、エミール・ギレリスに惚込ん
でいますので、ベートーベンは勿論ですけれども、ショパンの口短
調ソナタでも、英雄ポロネーズだって、彼以上はないと惚込んで
（どこの、お馬鹿な評論家先生でしょう、彼のショパンが垢抜けな
いとか、田舎臭いとか言ったのは。）、このごろは、彼の真似なん
かしているものですから、ホロヴィッツと聞くと、少し馬鹿にして
いました。今日、坊とじっくり聴いて、聴きかたが、少し変わって、
何となく分ってきたような気がしました。今度、オカダヤに行つて、
輸入盤があつたら、彼の、若いときの録音を聴いてみたくなりまし
た。そのときは、坊と待合せて、今度は、是非、パエイリヤのお店
が営業していてほしい。あ、そう、それから、ホロヴィッツのコン
サートのときは、二日か三日、ホテルに泊つて、東京見物をする約
束をしました。偉そうなことを言っているくせに、私も、実は、良
く知らないのです。新宿御苑にも行ったことがないのです。瑞雲棚
引く千代田城とやらは、車の中から、二重橋を、ちらりと見たばか
りです。東京駅は、いつも、上野に行く途中で、いくつか手前で止
るプラットホームの事でしかありません。降りたこともありません。
ホロヴィッツと同じで、東京と聞くと、やっぱり、少し、いえ、と
ても馬鹿にしていました。相変らず”haughty and n
aughty”ですね。naughty などころは、相手がい
ないので、このごろ、発揮する機会がありませんけれど、でも、坊

は、ちょっと迷惑しているかもしれませんが！デイズニールランドが開園したというので、行く約束です。その前に、明日は鎌倉です。大変です！もう三時です！

5 / 5 (木)

去年の今月、私が弾いて、あなたが歌った。

五月。好き五月、

花はほころぶ。

こころの花も、

そつとほころび。

五月、ああ五月。

鳥がほころぶ。

人はしのび音、

きみをくどきて、

83 / 5 / 5、私は弾いて、私が歌う。心の中で、貴方の声で歌うのです。正しく歌っているとも、間違つて歌っているとも分りません。ドイツ語を教えて頂けば良かった。読みかただけでも。由加里なら、二度、貴方が歌えば、耳に残ったかもしれない。私は、貴方の訳を追って弾くだけです。

あなた！私は、どんなに、あなたを愛していることでしょう！日が経つに連れて、私の恋は激しくなる一方なのです。なのに、ああ、私は、どんなに、貴方を苦しめたことでしょう！私が悪かった。私は、思慮のたりない女です。みつともない女です。許して下さいね。あなたは真実な人、誠実な人、私には勿体ない人です。今更のように思知って、私は、本当に馬鹿でした。今こそ、貴方の痛が分りました。それを、貴方という、誠実な人は、その、とても言いにくい事を、口にして下さった。貴方に、そのような思をさせた

私は、ああ、何という、箸にも棒にもかからない、馬鹿な、浅ましい、下品な女、恥ずかしい女。

5/9(月)

Watashino Raymond

由加里が引越してきます。一緒に暮すことにしました。これは、色々な意味で良いことなのです。これは、今日決った話です。荷物も少ないので、簡単にすみそうです。15日の日曜日の予定です。

第五回

2章『己呂武反而』（つづき）（後書き）

編者の天野です。

滋子の原稿により忠実なPDF版はこちらから

<http://dl.getdropbox.com/u/976165/shigeko.pdf>

第六回

2章『己呂武反而』(つづき)(前書き)

編者注・この回5月23日の記事からミセケチにした文字があらわれます。処理の仕方は第1章の末尾参照のこと。

第六回

2章『己呂武反而』（つづき）

5 / 12（木）

私は、由加里を通して、伶門と同じ痛を味った。私が、以前、彼に与えたのと、恐らく同じ痛を。

その日は、二日続けて暑かった。丁度、先週の木曜日。水曜日が暑くて、木曜日が暑かった。水曜日は、由加里は、まだ長袖だった。港の見える丘公園に行つて、テテマロを相手にしていると、汗ばむらしかつた。木曜日は、襟なしの半袖を着ていた。テテマロには留守番をしてもらつて、朝から、鎌倉に出掛けた。

初ての鎌倉なので嬉しそうだった。寺巡をするというので、それは、聖書の教に背かないのかと、鎌倉行を決めた当初は、ちょっと引掛るらしかった。私は、寺巡といつても、礼拝しにゆくのではなく、観光で行くのだから、特に問題はないと思うと言って安心させた。彼女も、それきり気にしなかった。あとで書くけれど、当日は、かえつて、悪ふざけする余裕があつた位。このごろでは、キリストを、世を救う御方だと信じている。聖書を与えたら、一週間で卒読した。それ以来、新約聖書は、何度か読返したと言って、「イエスの、あの言葉は、何何の福音書の、どの辺にあつた。」とかいうことまで言えるようになってる。

北鎌倉から始めた。円覚寺では、早速、臨済宗とは何か、五山とは、順位はどうやって決めるのかなどと聞かれて困つた。分るはずがない。いつもそうで、機嫌が良いと、何でも聞きたがる。答えてやると、感心したように頷く。細長い石段を登つてゆくと、大鐘が吊つてある。その横の茶屋に掛けて、二人して、寺の縁起を書いた栞を読んだけれど、由加里の疑問に答えてはくれなかった。境

内に、川端の千羽鶴に出てくる茶室があると書いてあった。栞を読んだときには、別に、気にも留めなかった。あとで、堀ごしに、茶室を見付けたときにも、何の変哲もない席に見えたので、そのまま通りすぎただけけれど、考えてみれば、あれで、以後のすべてが動始めた。丁度、千羽鶴の世界が、風呂敷だとか古茶碗だとかで動出すように。川端など読んでいなければ良かった。

東慶寺、浄智寺、明月院と見ていったが、けんちん汁を食べさせてくれる店があったので、其処で、昼食を取った。由加里は、水月観音が気に入って、食事中も、しきりに褒めた。例によって、「水月観音は、観音様とは別なんでしょうか。」と聞く。これからどうしようと言って、まだ、建長寺が残っていたけれど、そろそろお寺ばかり見るのも飽きてきたし、ハイキングすることに決めた。大仏の方へ抜けられる、簡単なハイキング・コースがありますよと、お店の人が教えてくれたので。

由加里は、今日に限らず、いつも運動靴だけれど、ゴールドン・ウィークのあいだは、私も、彼女に倣って、何処に行くにも、運動靴を穿いた。伶門と、去年、箱根のすすきを見にいったときに背負っていた、お揃のリュックサックが、それ以来、クロゼットで眠っていたのを、伶門のは、彼女にやってしまったて、二人ながら、運動靴にリュックサック、ハイキングするには、絶好な身軽さだった。途中で、銭洗弁天の標識が出ていたのはとばして、ハイキングを続けていると、木の間から、下の方に、大仏の頭が見えた。そのときに、柏手を打つ音が聞えた。何と想ったか、頭を垂れて拝んでいる。「アーメン、アーメン。」と言って、野球帽の陰になった目が笑っている。「馬鹿ね、坊。よしなさい?」と言いながら、ふと豊饒の海の、二冊目だったか、三冊目だったかの、ある場面を思出した。シャムの王子が跪拝するのも此処からではないかと。「転生があるかしら。」もつてのほかの考。でも、その言葉が心を過った。由加里が生れかわり?有得ない。そのような事があるはずがない。すぐに打消した。そして、忘れてしまった。しかし、やはり、何か

の sign だったのか。

高德院。大仏を見に入った。大勢の人だったので、木立の中を歩いているときに、由加里が、ある碑を見付けた。寄って見ると KAMAKURA YAMIHOTOKE NAREDO SHAKAMUNI WABINAN NI OWASUNATSUKODACHI KANA。ああ、これが、問題の歌碑なのだと気付いたのだけれど、「山の音」を思出したついでに、さっき、「豊饒の海」を思出した事を思出して、由加里の顔を眺めた。由加里の黒子も二つ。確に、こめかみに付いている。のどくびにはない。

海岸に行つて、海を、暫く眺めた。もう、サーファーで賑っている。由加里は、その言葉を知らない。「庄内でも、海岸に行くと、板に乗る人がいました。」と言つて、あの人達はサーファーというのだと教えると、「ファー」の音が難しいものだから、「さあふわ？さあふわですか。」「彼女が言つたそうになってしまふ。」「さあ見てご覧、あの人達、ふわふわうかんでいるでしょう？。」と言つたが、目を細めて「又始まりましたね。」「板だけ持つてうろろろする人をオカサーファーというのだと知つたときは、おかしいおかしいと言つて笑つた。奈良の大仏の話になつて、近いうちに、由加里に、暇が出来たら、京都に連れていつてあげる、奈良の大仏も見にいきましょうと言つた。彼女は、中学校の修学旅行に参加しなかつた。京都を見たことがない。小学六年生の旅行で、松島には行つた。それ以外には旅行したことがないのだと言ふ。

喉が乾いてきたので、その辺で、お茶でも飲もうと、バス通に引返して、ぶらぶら歩いてた。通から奥まった所に神社がある行つてみると、鳥居の横が、川端の住んだ家であつた。「坊は、川端康成つて知つていない？。」と言つと、「知つています。伊豆の踊子とか雪国とか。中学生のときに読みました。」と俄に、顔を輝かした。「此処、川端康成の家よ。」「標識が出ていないので、彼女は知るはずもなかつたけれど、私は、以前に、何かの写真で見たことがあつた。神社の脇にあることも覚えていた。何より、ずっと奥まっ

た所の門に、表札が掲げてある。そう教えられると、興味をそそられて、伸上って、母屋と覺しい建物に、目をやった。道路から隔った位置にあるので、私の目の高さからでも見通せない。「坊は、伊豆の踊子と雪国と、どっちが好き？」の問に、背伸するのを諦めた由加里は振返って、「断然、伊豆の踊子です。雪国は、話が、良く分りませんでした。お姉さんは、どっちが良いと思いますか。」「私も、伊豆の踊子が好きだと言った。鳥居の下を通って、境内に入り、石段の下で、二人とも、リュックサックを下して、水筒の水を飲みながら、文学的立話をした。今まで、本の話などしたことがなかった。読んでいないものと思っていた。ところが、聞いてみると、そうではない。川端は、伊豆の踊子と雪国のほかに、みずうみを読んだと言う。中学一年生の夏に、立続に読んでいった。伊豆の踊子が、一番面白いと思った。雪国とみずうみは、良く分らなかった。だから、川端はそれきり読まないけれど、小説を読むことは好きなので、芥川とか太宰とかのものも読んだ。本当は、日本の小説よりも、外国の小説を好んで読む。バルザックの名を口にするではないか。ゴリオと谷間の百合。谷間の百合は本当に素敵だったと。ディケンズの大いなる遺産も感動した。ゲーテのウェルテル。そういう物を、六年生のときから、先生の影響で読出して、中学に上ってから、面白そうな物は、何でも、手あたり次第に読んだ。デュマでも、ユゴーでも、オーステンでも、シェークスピアでも、マンでも、カフカでも。ロシアの作家は特に好きで、戦争と平和のような、長いものを、じっくり、時間を掛けて読む。私は、まったく呆れてしまった。無知で、無教養な少女だと思込んでいたのに。道理で、一週間で、聖書を読んでもくるはず。それにしても、一週間とは早い。あんなに分りにくい、変な訳を。しかも、大体は分ったと言う。翻訳文に慣れているのだ。聖書は、歴史的な背景を知らなければ理解できない部分がある。それは当りまえ。でも、一緒に朗読すれば、旧訳だって、ちゃんと理解するし、それなら、マローの劇を見て分るのも不思議はない。」「どうして、今まで言わなかったの。劇を見た

ときも、私は、解説しながら、何度も、シェークスピアの名を言ったのに、そのときは、シェークスピアを知っている気振も見せなかったではないか、そうと知っていたら、一緒に朗読するにも、聖書のほかに、もつと、色々な選択があったし、第一、あんな、振仮名だらけの文章をばかばかしく思わなかったか。坊が文学少女と知っていたら、文学少女同士、それだけ、会話の幅が広がるものを、坊は、ほかに、何を隠しているのか言いなさい？」と、腰に手を当てて、詰寄ってみせた。すると、両手を、激しく振って、「そんな、言うことではありません。お姉さんは凄いです。ピアニストみたいだったり、アメリカで暮したり。私なんか、高校にも行かないし、なんにも知らないし、本当に馬鹿です。英語だって、劇の言葉、全然分りませんでした。」本心から言うのだ。「何を言うの！坊は、とっても賢いわ？お姉ちゃんよりか、ずっと才能があんのよ？ただ、機会がなかっただけじゃないの。本当よ？これ。嘘じゃないのよ？坊は、レコードを聴いて、すぐ覚えちゃうでしょう？あんなこと、普通、誰にもできないのよ？生れつきの才能。だから、お姉ちゃんね、本当を言うと、坊に、音楽を教えてみようと思ってたところなの。それとも、白状しなさい！本当は、小さいときから、楽器を習っているんでしょう。」「いえ！楽器だなんて、とんでもない。音楽は、学校で聴いただけです、ベートーベンとか、ブラームスとか、モーツァルトとか。」つい、調子に乗って、聞かなくても良いことを聞いてしまったと気が付いて、赤面するのを見ると、言葉が出なくなった。「じゃ、次回から音楽レッスンよ！モーツァルトから始めましょ。」目深に被った野球帽の鍔に手を掛けて、ちよつと直してやる心算だったけれど、いつそのこと取って、何度か、蒸れた頭を、額から撫上げた。「暑いでしょう、脱いじやいなさい！」額の汗を袖で拭いてやった。飲んでいた水筒を、リュックサックに戻して、帽子も、一緒に仕舞うと、坊は、又、ちよつと背負直す恰好をした。「暑いから、置いていきましょ？」と、自分のを、石段の最下段に凭掛けながら、彼女に言った。彼女は素直に従って、青いリュック

クがふたつ、濃いのと薄いのが、段の下に並んだ。薄いのが私の
で、濃いのが彼女の。これで、すべての条件が整ってしまった。

「山の音」も「千羽鶴」も、あの屋根の下で書かれたのかし
ら。長い石段を登りながら、ふと考えた。

こんな所まで入ってくる観光客はなく、静かな神域に、山を
背に、白いあやめが咲いている。七八本ある。木の葉へ落ちる夜露
を聞くうちに、ふと、山の音が聞えたり、音がやんだりした山とい
うのも、この山だろうか。由加里が、目の前で中腰になった。顔を、
白い花にもっていった。私は、少し離れて、左に立って見ていた。
彼女は、今日は、昨日と違って、半袖を着ている。白の半袖で、と
ても薄着である。大きく開いた胸元は、片方の乳房が見えている。
木漏日が、おちよこ一杯分の、右の乳房を明るくした。猫背に屈ん
だので、カップが乳房から、丁度、ブラジャーが浮上ったように、
肌から離れてしまった。私のいる位置にいる者なら、見ようと思わ
なくても、目に入る。

すぐそばに寄って、真上から見おろすと、左右ともあらわにな
って、右房よりも、左房の方が、ひとまわり大きい。左乳嘴の外
側の付根が、黒子というには大きすぎる、黒い痣になって、まばら
な、ほそい毛が生えている。胸の皮膚が真白で、しかも、指先位の
大きさしかない乳嘴なので、痣が、なお異様に見える。

何もかも判然とした。今日は、初から、そうなるようになって
いたのだ。千羽鶴に出てくる、気味の悪い女、確、お茶の師匠だ
った。名前を何といったか。とつくに忘れた。今、手元に、本がな
いから、臆げな記憶を頼に、これを書くしかないけれど。何年も前
のこと、その文章を読んだときは、遠い将来の、今日の、この事に
連関しているとは、誰が予見するだろう。豊饒の海にしたってそう。
由紀夫が自決したと聞いて、それまでは、全然、興味のなかった、
彼の作品を読んでいったうちのひとつが、切腹しながら、赫奕と、
日輪をのぼせる、あの一冊だった。仮面の告白に比べて、ずっと劣
る出来だった。読返しもしないし、どんなことが書いてあったかも

忘れてしまったのに、なぜかしら、シヤムの王子が、大仏を拝むところだけは覚えていた。黒子の事は忘れようもない。その黒子だった。由加里が屈んで、胸をはだけたときに、近寄って、上から覗いた。もしや、黒子が付いていなくと、咄嗟の行為だった。のどくびには見えないけれど、普段は、服に隠れていて、ひよつとして、もつと下の方に、真黒な黒子が、ふたつありはしないか、あつたらどうしよう、やつぱり嬉しいと、刹那に思つて近寄つた。あらぬ位置に、似ても似付かない、醜い痣。発見したくはなかつた。でも、発見してしまつた以上は、今となつては、発見して、むしろ良かったと思つている。彼女の為には勿論だけれど、彼女をかわゆく思う自分の為にも。けれども、そのときから、その日以来、彼の痛が自分のものになっている。

由加里は目を瞑つて、鼻をひくひくさせている。一心に、あやめを嗅いで、この、悲しい恥を晒しているとは気付かない。「とても良い匂です。三溪園のよりも濃い匂です。」と言つて見上げる。おい。濃いにおい。「あなたにも、濃いにおいがある。それを知っているの？」と、心の中で問掛けた。

彼女は、独特なおいをもっている。殊に、風呂に入らず、不潔にしているときは酷くなるらしい。毎日、体を洗う習慣がない仕方がない。それとなく聞いたことなのだけれど、アパートには、お風呂がないので、週に、二回、お風呂屋さんに行く。訪ねてくる週末は、大分、日数が開くらしくて、頭からは、決して、脂の臭をさせている。しかし、彼女の体臭は、ずっと不快な、体の奥から湧出る臭。いつもは、それほど気にならない。しかし、このゴールドン・ウィーク、又、強くなりだしていた。

彼女が気の毒で、密に、策を練つた。バスタブに湯を張つて、前もつて、石鹸を溶して泡立てておく。彼女に説明して、「これは、お姉ちゃんの、お風呂の入りかたで、気が休まって、良く眠れるから、坊もやってみなさい。初、湯船に、汗が出るまで漬る。必ず、汗が出るまで漬ること。汗をかいてきたら、漬つたままで、たわし

で、ごしごし垢をこすって、体を洗う。暑くなってきたら、水をたしてぬるくする。全部洗終わったら、又、暫く漬る。おしまいに、栓を抜いて、シャワーを捻って、お湯を出し、頭をシャンプーで洗う。お湯は使切だから、中で、体を洗うのが正しい入りかた。これを全部、ゆつくり、四十分位掛けて入浴すると、良い気分になるから。」と言って、泊りにきたゴールデン・ウィークは、日曜日から水曜日までの毎晩、風呂に入らせた。でも、長い習慣から来る臭は、簡単には消えない。風呂あがりは良くて、一晩寝たあとで、朝、部屋に入っていると、胸の悪くなるような空気が籠っている。慌てて、「由加里ちゃん、窓を開けましょうか。」と言うと、「いえ、大丈夫です。」と、その意味が分らず、顔を洗いにゆくにも、部屋のドアを開けはなしにする。

由加里が不憫でならない。あの臭を、私が知っているだけなら良い。でも、ほかの人に知られたら。アパートの友達が知らないはずがあるうか。恐らく、顰蹙している。仕事場でも、彼女と、体が触れる位に接近すれば、お風呂屋さんに行かなかった日は、誰でも、必ず気が付く臭だ。だから、以前も、香水を贈ったことがあるのに、使っている様子もないのはどうしてだろう。自分で気付いていないのは仕方がないとしても、今まで注意してくれる人さえいなかったのだ。何ということだろう！十八才の子が、あんな臭をさせて、周囲の白眼視にあって、毎日を送っているとは。

私は、心を決めた。顔を、あやめから離して、それでもまだ、乳房は覗かせたままで、「三溪園のあやめよりも、濃い匂です。」と言って微笑んでいる、この子は、私が引取ろう。山手のあの家で、このまま、一緒に暮そう。彼女を見おろしながら、境内の片隅で、そう決めた。急に居たたまらなくなった。腕から引張上げた。ぎゅーっと抱締めた。彼女は、腕をだらりと垂したままに、黙って、鼻を、私の胸に埋めた。丁度、口の高さに、額の生際があるので、口付が、ひとりでに、其処に行く。いつかの、門前のとくと同じく、石のように硬直してはいるけれど、違っているのは、今日の硬直が、

恐怖ではなく、照から来ていること。どう反応して良いか分からない。だから、腕は、力なく垂下って、体を、まるごと預けた。

「坊、お姉ちゃんと、一緒に暮そう。もう、アパート探なんかやめちゃいなさい。今使っている部屋を、そのまま、坊の部屋にすれば良いでしょう？山手に来て、お姉ちゃんの妹になるう。」見おろすと、目を、大きく開いて、子供が、大人の思惑を見透す鋭さで、目の中を覗込んでくる。善意で言い、心からかわゆく思っていると確認したようだった。ひとつ頷いてみせたので、「ね、そうしよう。うちに来なさい。お姉ちゃんの妹になるのよ！」と言って、又抱締めたので、やっと、腕を回してきて、頬を、胸に擦付けた。

「坊は、お姉ちゃんが好き？」口許にある、額の生際が動いて、胸には、頬の摩擦を感じた。「お姉ちゃんが好きなの？」又、生際の上下運動と、頬が、胸に摩擦する感触。「お姉ちゃんが好きなら、そう言って頂戴。お姉ちゃんは、坊が大好き。」

「好きです。」

「どの位好き？」

「大好きです。」

「お姉ちゃんの妹になりたい？」答はなくて、又々、例の生際とほつぺた。「お姉ちゃんの妹になりたいんなら、そう言わなくちゃ駄目。」

「なります。」

「本当になる？」

「はい。」

「いやいやなるの？」

「いえ。」と言って、ほつぺたが、おびただしく摩擦した。

「なりたいからなるの？」

「はい。」

「じゃ、そう言って頂戴。」

「お姉さんの妹になりたいのでなります。」

「どの位になりたい？お姉ちゃんは、とっても、お姉ちゃんに

なりたい。」

「とてもなりたいです。」

「とてもなりたいけれど、いやいや、そう言っている。」

「いえ。」と言って見上げた。不満そうな顔をした。

「お姉ちゃんにキスする？」

「いえ、あの。」

「馬鹿ね！ここ、ほっぺたによ。」それでもためらっている
ので、わざと、音を立てるように、右、左と、頬に接吻した。「じ
や、坊の番。」と言って、右の頬を出した。やがて、びつくりする
ほど、大きな音のする接吻をした。頬に口付する音ではなく、自分
で、自分の唇を、強く吸過ぎた。「いやいやキスするの？」

「少し。」と、顔色を見ながら言う。その顔が、何だか、テ
マロが哀願するときの顔に似ていて、おかしくなつて、吹出した。
それから、生際に、何発も見舞つた。「こういうのは慣よ！お姉ち
やんの妹になつたら、これから、毎日、キスの雨だから、坊も、早
く慣れることよ！それから、お姉さんは厭よ？私、由加里のお姉ち
やんになるの。お姉さんになるんじゃないの。お姉ちゃんて呼んで
頂戴、今。」

「お姉ちゃん。」

「そう！言つてみれば何でもないでしょう？もう一度。」

「お姉ちゃん。」

「もう一度。」

「お姉ちゃん。」と言う顔が、初は真赤だったのが、段々涙
ぐんできたので、少し厳過ぎる洗礼だったと悟つて、又、頭を抱え
こんだのまでは良かったけれど、わけもなく、私まで泣出してしま
つた。一遍泣出したら、どんどん込上げてきて、何分かして、正気
付いたときには、由加里の膝に屈込んで、彼女のジーンズを濡して
いた。健気にも、背中を摩つてくれていた。

長い石段を、手を繋いでおりた。ふたつの青いリュックが、
濃く薄く並んでいた。

5 / 13 (金)

そのとき、三時が過ぎていた。予定では、午前中は、北鎌倉を見て、午後は、八幡宮から杉本寺、報国寺を回って、釈迦堂口切通に行く。其処から、沢山歩くのを覚悟で覚園寺、最後に瑞泉寺の計画でいたのだけれど、一日では、とても無理な行程だった。坊が見るものは、すべて見ようとするものだから、入った寺、入った寺で足止される形になって、考えていたよりも、大幅に、時間を費す。それは、それなりに楽しいことだから、不平を言うのではないけれど。密には、瑞泉寺で締括りたかった。それが正直な気持。それを楽しみにして来たのだから。夕食も、小町通の何処かでする心積だった。そして、そのまま、アパートまで送届ける。でも、予定は変更しなければならぬ。

石段を下りて、リュックサックを背負うと、タクシーを拾って、鎌倉駅に向った。一旦、横浜に戻る。そして、馬車道で買物をする。由加里の服を買う。ブラジャーも、サイズの合った物を着けさせる。買物は、鎌倉でもできないことはないけれど、慣れない店は落着かないし、そのあとは、家に戻って、お風呂に入れないならぬ。お風呂屋さん！あの子は、どんなふうにもてあつかうのだろう！言いようもなく憂鬱になる。

鎌倉駅。私は、切符売場で、切符を買っていた。横で、由加里がしゃがんで、靴紐を結直始めた。販売機に入れたお金のことは忘れて、すぐさま、胸元の見おろせる位置に立った。探す心算で覗くと、定かではないけれど、心なしか、黒っぽい陰が見えるような気がする。神社のときと違って、カップが浮上ってはいない。背負っているリュックサックの肩紐の為に、おさえつけられるのかもしれない。でも、その分だけ、肩紐が、シャツの縁を撓めて、前に絞出すので、胸元はより大きく、ぱっくりと開いている。これでは、ちよつとしたことで見えてしまう。見える瞬間もありはしないかと靴紐を結ぶあいだ、隙間を注視した。右足から、左足に、体勢を入

替えるときは、全神経を集中して見た。どうにか、乳嘴は隠れていたので安心した。

ななめうしろに、ふと、気配を感じたので振向くと、大学生風の男と目が会った。明らかに狼狽した。そして赤面した。私は、きつと、物凄い顔をしたと思う。お金を入れっぱなしにしていると注意してくれるのだった。丁度結終った由加里の手を引張上げて、販売機の前に連れていった。由加里も、ただならぬものを感じて、横から、じろじろ、顔を見上げるらしかった。彼女の方を見ないように、路線図を見上げ、目を凝して、料金を調べる振をし、販売機のボタンを押違えないように集中する振をした。

大学生はどうしただろう。その辺に立っていて、見ているのではないか。さっきは、坊の胸元を盗見ていたに違ない。二十秒間か三十秒間、ななめうしろから、ずっと見ていた。ひよつとして、彼の位置からは、アレが見えたのではないか。自分は、細心の注意をして見ていた。見えそうで見えなかった。もしも、少しだけ、視点を変えたとしたら見えただろうか。でも、確に、カップが覆っていた。自分は、それを、一番見易い所から見おろしていた。ななめうしろから見えたはずはない。しかも、自分よりも、背が低かったから、彼の目の高さでは、角度的に覗きにくいはず。それとも、私を見ていたのか。坊の服の中を、変な目付で覗込んでいる私を。両方だろう、きつと。どんなふうにいるだろう、私を。今も、その辺に立って見ているのではないか。何気なく見回した。居ないのに安堵した。

私は、彼女の左手を、右手に握ったまま、左手ひとつで、販売機のおこなっていた。釣銭を左ポケットに押込む。優しくしなければ。声を掛けたい。言葉が出ない。「はい、切符。」と言って渡すときは、作笑が、かえって不審を抱かせた。探るような目で見る。にこりもしない。手を引いて、改札口を通り、階段を下りて、階段を上って、プラットフォームに立った。東京、横浜に帰る人で、もう混始めている。まだ三時二十分。これが五時、六時に

なれば、ラッシュアワー並になるのだらう。来た電車は、横須賀や逗子から乗った客で、席は満杯になって、客の多くが立っている。半分降りるとしても、乗るのは、その何倍もだから、とても座れない。この子を、あの中に押込めたくない。理由を考えるでもなく思った。空っぽのグリーン車が、前を過つていった。「早く。」と、彼女の手を引張って、グリーン車を追った。あとで、席に着いてから思返した。この子は、脇を剃っていない。腕を上げると、ふと、黒く見えたりする。袖もまずい。吊革に掴まらせなくなかったのだ。これから、何をしようとするのか、あまり伝えてなかった。

「一旦、山手に帰ろう、わけは、あとで分るから。」と、さつき、タクシーの中で言っただけで。もっと説明するべきなのに。言葉が出ない。由加里も、下を向いてしまった。手は、まだ繋いでいる。彼女の左手を、右手で握っている。網棚に、リュックサックを上げるときに、ちよつとのあいだけ放して、座るときに、又繋いだ。私は窓側で、彼女は、左手を預けて、廊下側で、下を向いている。失敗した。彼女を、窓側に座らせれば良かった。窓の外に、目を向けたのに。この配置で、会話がなければ窮屈だらう。私は良いとして、彼女はそうに決っている。だから、下を向いてしまった。でも、初のうちこそ、彼女の内心を思いやる余裕はあった。やがて、私は、私の物思に、耽始めた。物思と呼ぶには、溝川のように汚くて、濁っているけれども。

この子は、アレを隠す気はないのか。なぜ警戒しないのだらう。ずっと嚴重にして良かりそうなのに。今まで、何人の人に覗かれたらうか。靴紐を結ぶたびに、見られる危険はあったはず。さつきは、リュックサックを背負っていたから見えなかったものの。でも、私だって、今日になって、初て知ったのだ。昨日まで、長袖のブラウスだから。そうだ。この薄着をしない限、多分大丈夫なのだ。それは、神社の石段をおりながらも考えたことではないか。長袖を着るときでも、襟を、ちゃんとボタンで留める。半袖の場合は、今みたいなシャツは絶対禁物。それ位のこと、この子は気が付かな

いのかしら。警戒していないからだ。覗かれているとは、夢にも思っていない。それにしても、この半袖を着たのは何回目だろう。先週も、今日と同じ位暑い日が、確、何日か続けて、今日位暑い日があった。すると、先週も、これを着たのだろう。そして、人前で屈んだり、しゃがんだりしたのだろう。あの、黒い盛りあがりに、何本も生えた、ほそい毛まで見られたのだろう。何という！

この子は、そこまで恥じていないのかしら。銭湯に通うとは、何事だろう。何という神経だろう。それとも、銭湯など嘘か。いや、アパートに風呂がないのなら、銭湯に行くしかない。第一、嘘をついて何になる。やっぱり、銭湯に通うのだろう。みんなに見せのか。週に二回、好奇の目に晒されるのか。みんな、どんな目で見るのだろう。アレを見られずにすまず方法があるだろうか。でも、同性に見られるだけなら、まだ我慢できる。番台には、男が座るのではないだろうか。まさか。この子だって、そのような湯屋には行かないだろうけれど。

では、私が、すぐ前に立っているのを知りながら、なぜ、あのように無防備でいられたのか。私だけなら良いとして、あのように混雑している所で。大学生の男にまですみされる所で。屈めば覗かれそうなこと位分るではないか。やっぱり、恥じていないのかしら。見られるものなら見えてしまえという気なのか。そのようなことはない。見えてしまえなどと思うはずが。

最近、左手を隠さない。以前は、軍手を嵌めていたのに、暖くなつてからはしなくなった。隠す為ではなくて、寒いから、手袋がわりにはめていたのだろうか。確に、初のうちは、隠す努力をしていた。私の目に触れないように工夫していた。テーブルについて向いあったときには、拳を握ったり、膝の上に落したり。仲良くなつてからは、それがなくなった。そもそも、遠慮のいる人の目からは隠すが、そうでない人には隠す必要を感じない。そういう考だったのかしら、指の欠損は。痣も、同じように考えているのだろうか。湯屋に集るような人なら見られても構わないと。湯屋で、左手

を隠す理由はない。だから、痣を隠す理由もない。そう考えるのだ。考と言えるほど明確なものですらないかもしれない。

無思慮な服装をした上に、あの、危っかしい屈みかたをするのも、羞恥心を、初から持たなからなのだ。覗かれると思いなどしない。よしんば見えたとして、通りすがりの人間ばかりだ。私になら隠すだろうか。温泉に行こうと誘ったら、どんな顔をするだろうか。

だからといって、見えて良いはずはない。絶対に見えてはいけない。この子は、ただ無邪気なだけなのか。何も知らない。かわいそうに、アレが、何を意味するのかも知らずにいるのだ。まだ子供なのだ。それこそ、ただ、おかしな所に付いている、大きな黒子位に思つて。湯屋でブラジャーを外すときの彼女を取巻く目、目、目、奇異の目、戦慄する目、恐怖の目、嘲る目、そういう目の中にいるとも知らずに外す。無理もない。導いてくれる者がいなかった。誰が、何の智慧を与えてくれたらう。今だに未発達な乳房なのに、まして、中学生の彼女は、乳房と言えるものももっていなかった。だから、おかしな所に、大きな黒子が付いているように思つて氣に病まなかった。少し膨んできたときも、そのもつ意味を悟らせてくれる者がいなかった。親は死んでしまった。親戚には疎んじられた。高校には行けなかった。どんな場合にも、他人に見せるものではないと諭す者がいなかった。だから、強いて隠すこともしない。合わないブラジャーを着けていられる。胸がはだけでも平気だ。十八才のフェミニニティーを、初から持たないのだ。これには、かなり有力な根拠が。彼女のにおい。もしも、フェミニニティーに目を開かせてくれる者がいたなら、必ず、臭のことも忠告したに違いないから。

落ちつこう。段々、私は落ちついてきた。汚い何かが拭去られて、心が澄んできた。私が、目を開かせてやる。私が導いてやれば良い。だから、神社で、同居を言つて、姉妹の契を交したのだ。あのときは、何もかも、瞬時に悟つて、同居が、一番の方法と分つ

た。分ったというより、そういう気がした。それで、「妹になりなさい。」という言葉が出てきた。これで、何もかも、筋が通る。初からそうなるようになっていた。

見ると、由加里は眠っている。頭を垂れて、手は預けたまま。首の回のシャツが、しどけなげに下って開いている。額と額を隣合せて覗込むと、やっぱり、カップが浮上っている。奥に、豆粒位の赤みが見える。その、小さな先端だけがカップに触れて、乳嘴のこっち半分が見えている。垂れた頭が邪魔して、よほど覗きにくくはある。これなら、今みたいに、頭から寄って、無理に覗こうとしなければ見えない。でも、普段から浮いてしまう証拠でもある。この子に合うサイズがあるかしら。何を着けても、結局浮いてしまわないか。神社と駅では、ブラジャーには注意を払わなかったけれど、こうして見ると、今着けているのだって、随分小さなカップではある。乳房自体がないのだから、何を着けても、ちよつと猫背になっただけでも紐が弛んで浮くだろう。いっそ、本当に、子供が着けるようなのを着けさせるのが一番安心だ。でも、まさか、そんなのを買与えて、これを着けなさいと言えるものか。やっぱり、大本の所で隠すしかない。喉頸まで、しっかりと、ボタンで留められるブラウスを着るしか。反対側から額を寄せれば、アレが見えるだろう。座った位置で、今は、右だけが見えて、左房の様子は分らないけれども、多分、反対側からなら見えるだろう。カップの縁だけは、左のも見える。それが、もう、其処から浮いたようになっている。でも、左は、少し膨みがあったから、カップに包まれるだろう。アレは、乳嘴の外側だ。今、右のも、内側しか見えない。反対側から覗いても、左乳嘴の内側は見えても、外側の付根は見えないはず。毛は見えるだろう。あんなに細長い毛が、何本も何本も、全部隠れるのは難しい。将来、好きな人が出来たときには、この子はどうするのだろう。毛抜で抜くのだろうか、一本一本、ちか子みたいに。そうだ、栗本ちか子。あの不気味な女を、何処から思付いたのだろう、川端は。菊治の父親。何を考えて、あのよう。どう

して書けたのか。実際に、そのような女を知っていたのだろうか。実際に、その女は、ひょっとして、自身が齧ったのか。彼は千羽鶴を読んだろうか。読んだとは思えない。日本の作家は、頭から馬鹿にしていた。「じめじめしていて、ちまちましていて、何かというと拘泥ばかりしている。読んでみると、まったく、本人の言うところだ。拘泥魔でない限、わざわざ書く値打のない、わざわざ読む値打など、尚更ない、取るにたらないことだけ集めて本にしてある。西洋の小説を模倣したいのに、模倣すらできていない出来損だ。何のことはない、トルストイを、百分の一に縮小したのが日本の小説だから、僕は、そんな物に付合っている暇は一分もない。それにもかかわらず、文庫本という物をポケットに入れて歩くと重宝だよ。ティッシュ一箱よりもつからね、紙質に、若干の問題はあるけれど。」などと。でも、仮に読んでいたら、自分のことを考えることがあったかしら。ない！どう考えても場合が違う。一連の事柄は、あの子に連関しているのだ。由加里は、由加里で、抜く必要はない、毛なんか。そんな、かわいそうなことがさせられるものか。お姉ちゃんが見付けてあげる。そんな必要のない相手を。誠実で、清潔で、知性があつて、物が分つていて、坊の良さが分り、坊のフェミニンティイを引出してくれる。あんなに可愛い顔をしているのに。見れば見るほど、つくづく可愛い顔をしている。

額を寄せているので、生暖い空気が、開いた胸からのぼってくる。汗をかいいた皮膚の匂と、石鹸の匂がまざっているけれど、甘い匂がするだけ。四日も、連続で、全身、石鹸に漬らせた甲斐はあった。朝方、少し、部屋に籠っていた。でも、それも、最初の朝ほど酷くはなかった。今、これだけ近付いても、まったくしない。開いている胸元を、手で押戻すと、シャツは、その形を保つ。又、堪らなくいとおしくなつて、眠っている子を抱締めた。開きかけた目にかわるがわる接吻した。優しく口を付けた。もしも、U・S・Aの人が見ていたら誤解したかもしれない。それから、頬に強く押しつけて、「着くわよ！」と言った。

横浜駅の階段も、手を繋いで下りたり登ったりした。京浜東北線に乗換える。本当は、大船で乗換えるはずだった。大船から京浜東北線に乗換えて、関内まで行く。最短の行きかただ。それが、何も考えずに、鎌倉で、グリーン車に乗ったものだから、大船で乗換えることは、つい忘れてしまい、横浜まで行くのだと思違をして、横浜で降りてから気が付いた。大船駅を使慣れていない上に、横浜は、毎日の通勤で乗換えていた駅だから、何の疑もなく横浜まで来てしまった。習慣は恐ろしい。もっとおかしいこと。グリーン車に只乗した。これは、買物しているときに気が付いたことなのだけだ。国鉄さん、ごめんなさい。でも、私も、車掌さんが料金を徴収しに来なかったものだからうっかりしていた。誤魔化す心算はなかったのです。すみませんでした、J・N・R・さん。

5 / 14 (土)

ベティ・クレアズで坊の下着を買う。横浜で、横須賀線の電車を降りるまでは、その考だった。京浜東北線のプラットフォームまで上って、気が変わった。というよりも、当りまえの事実、又々気付いた。この日は、衝撃続で、よっぽどぼんやりしていたに違ない。買物は横浜でしょう。ベティ・クレアズに行ったら、坊に合う物などありはしない。

坊に、服を買与える口実は、鎌倉駅に行タクシーの中で考えた。もうすぐ誕生日だ。といっても二十七日だから、三週間も先のことなので、無理にも「もうすぐ誕生日だから。」と言っているのである。それから、この方が主なのだけれど、今日は、姉妹になった、大切な日だから、お揃いの下着を買って、これから、ずっと、同じ物を身に着けていようと言う。それを姉妹である証にしよう。

まずは、デパートから始めた。半袖の、襟に、デザインを施した物はいくらかあった。注文に合う物が、全然見つからない。求めるのは、デザインよりも、きゃしゃな坊の首から下を隠してくれる物。屈んでも、首の所で、しっかり閉じている物。ブラウス類は、

首回がゆつたりしすぎて、普通に着た状態でも、鎖骨が出てしまう。今着ている物よりは、ずっと良いかもしれないけれども、それでは駄目だ。ティーシャツ、ポロシャツでも、まだ心もとない。特別な贈物にもならない。散々探した拳句に、ジョイナスで見付けた詰襟ので、ブラウスというか、シャツというか、あまり見掛けないデザインのを、坊に合いそうなので、試してみたら、ぴったりだった。ボタンを、全部留めれば、喉頸まで来る。一番上のを外しても、鎖骨は隠れる。二時間探して、収穫は、それだけ。在庫品が、ほかに三枚あったので、四枚とも全部買った。うち、二枚が薄紫で、一枚が水色で、一枚が白。試しぎした薄紫のを、そのまま着て帰ることにして、もと着ていた物は、袋に入れてもらって、私が持った。あとは、あるとすればワイシャツ類だけれど、襟がVの字になったのは駄目だから、学生が着るような物しか残らない。

結局、その四枚を見付けて安心したら、草臥れたので、もう、探す気力がなかった。坊は、服を買ってもらったことを、当然ためらった。納得させるのに、主な方の口実を使った。姉妹になった記念に何か買ってあげたいのだと。下着のことは言出せなかった。最初に考付いたときには、筋が通っていて、妙案のように思われたけれど、我ながら、同じ下着を着けることが姉妹の証だとは、不自然な理屈に思えてきた。一緒に暮して、徐々に感化すれば、自分から気にするようになる。急に、下着を買おうと言って、変に思われるかもしれない。今日は、応急処置として、元栓を閉めておく。今着ている物なら、絶対に見られない。かわりに、お揃いの運動靴を買った。彼女のは古くなっていた。でも、お揃いの下着への布石の意味が大きかった。

イベリアに寄ったら、やっぱり休だったので、元町に戻って、この前と同じラムチャップを食べた。タクシーで帰宅。汗をかいたでしょうと、風呂の支度。坊が帰っていったのは九時半。それが先週の木曜日のこと。それから、九日間、私は悶々として暮している。坊は、その後、八日の日曜日にも来た。明日引越してくる。

5 / 16 (月)

神様、刺が、私の肉体にささっています。願わくは、これを去らせて下さい。一週間も十日も、このようには暮せません。由加里を愛するゆえに、すっかり竄れてしまいました。伶門の刺が、今こそ、自分の刺として感じられます。でも、すべてが、そうなるようになっていたと思われてなりません。せめて、安らかな眠だけでも与えて下さい。このようでは、とても辛くありますから。

坊が、昨日引越してきた。憎むべき物を着ていた。今、仕事に行っている。

今月の五日、それは、鎌倉に行った日、その宿命の日、坊は、新しい服を着て帰った。運動靴も、新しい物を穿いて帰った。古い運動靴は、リュックサックに入れた。手には、手提袋を持った。中には、三枚の、新しい服が入っていた。リュックサックには、私が使っているのと同じ、ローラメイの小瓶も入れた。「この前のは気に入らなかった？ちよっと、子供っぽかったかもしれないわね。これは、お姉ちゃんと同じ。姉妹同士、同じが良いわね。」と言って、真赤に照れている彼女の、風呂あがりのみみたぶに付けてやった。着てきた服は、洗濯しておくからと言って取上げた。私が、ジヨイナスから、袋に入れて、持って帰ってきた、あの、白い、ぺらぺらした物。洗濯せずに処分した。彼女には、乾燥機を使わなかったので、干したときに、風に飛ばされてなくなったと言った。初から返す気はなかった。捨てる前に、自分で着てみた。鏡台の前に立つて、手鏡を持ち、体を、前に倒したり、屈んだり、色々な角度から、どう見えるか調べた。まったく、正気の沙汰ではない。でも、そうすることで、そのときに、初で、自分が、いかに思慮のない女であつたかを知らされた。私という女は自信過剰で、意識こそしていなかった(？)けれど、浅ましい心の奥では、見せびらかす意図があつたのだろうか。それは、これから、時間を掛けて悔いれば良い。当面の問題は坊だ。あの、ぺらぺらなのを、何度着たのだろ

う。まだ、ほかに、何枚持っているのだろう。あれでは、人前で屈んだ回数だけ、秘密を知られた恐がある。サイズだて、彼女のサイズではないではないか。私でさえ、危くて着られない。それを、昨日、又着てきた。今度は黄色いの。あれで、タクシーに、荷物を運んだりしたのだ！ポーチを上つてくるときから、案の定、大開に開いていた。私にお辞儀をして挨拶をしたときも。「今日からお世話になります。」と言いつつ、一瞬、乳房を現した。テマロとじゃれているときも。私は、不機嫌を、顔に出すまいと苦心した。どうして取上げるか考えなければ。先週の日曜日、それは鎌倉の三日後、その日は、素直に、新しい服を着ていたし、香水も付けてきた。私を喜ばす心算もあつたのだろうけれど。処分した、白いぺらぺらのかわりになる物を、先週の土曜日、元町中探歩いて、喉頸まであるティーシャツを見付けた。色々な柄のを十一枚、一番小さいサイズをあるだけ買った。それを、その次の日、先週の日曜日、坊が来たときに、「白いシャツをなくしてしまった。そのお詫に。」と言って渡した。サイズが合うかどうか、着てみてと言ったら、さすがに私の前では着替えない。二階に上つて、暫くして下りてきたら、すばらしく可愛い。横浜で買ったのよりも、ずっと似合う。喉の所で、丁度良く窄んでいるし、彼女の、華奢な体にぴちつとしているけれど、厚手の生地なので、肌が透けたり、ブラジャーが浮彫になったりしない。全然厭らしくない。中学生の女の子のようで、小さな胸が、一層可愛らしく見える。苦勞して探した甲斐があつたと思つた。十一枚もあれば、ひと夏過せる。私は嬉しくなつて、何度も褒めて抱締めた。それなのに、昨日、わざわざ、ぺらぺらした黄色いのを着てきた。「どうして、あのシャツを着ないの？あれきらい？」と努めて機嫌良く聞いた。勿体ないから着ないと言うのだ！憂鬱で仕方なかった。一昨日は夏のような暑さだった。私でさえ、長袖でいるのは暑く感じられた。汗かきの坊のことだから、きつと、黄色いのか、でなければ、同じような、ぺらぺらした物を着たに決っている。その恰好で仕事にも行つたのだ。悪くすると、仕事場の人達

に、秘密を知られているかもしれない。そうなれば、もう、自然と噂になっていくだろう。

先週は、我ながら浅ましい一週間だった。コソ泥のような、スパイのような真似をして。西橋アロエ。坊の工場だ。求職者を装って電話を掛けた。「従業員数を教えてください。」随分怪しまれた。なぜそのようなことを聞くのかと。従業員二十七名。男性十九人。女性八人。胡散臭そうな声で答えた。明日の十時に、履歴書を持って伺います、宜しくお願いしますと言って電話を切った。平気で嘘が付けたものだ。すっぱかされたことを怒っているに違いない。嘘がばれたかもしれない。通いそうな風呂屋に電話。「そちらは、昔風の、脱衣場を見おろす番台がありますか。」言いながら、顔から火が出る思だった。向うは笑いながら答える。「大丈夫ですよ、うちは、そんな旧式ではありませんから安心して御利用下さいと。番台ありと答える所もある。でも、女の人が座る。中には、店の主人と覚しい人が出て、ええ、番台がありますよと答えるので、女の人 が座りますかと聞くと、私が座りますと居直った声で言う。風呂屋のことも、工場のことも、安心ができない。昼間は、出掛けていって、工場の周辺を偵察。仕事だと分っていても、坊に見つか りはしないかしらとはらはら。アパートは何処だろう。「ヒカリ荘」と言っていた。人に聞いても分らない。工場だけが杉田で、アパートは、別の駅なのかもしれない。それにしても、ぺらぺらした物を、何とも思わずに着る位だから、男が、番台から見おろしていたって、何とも思わないだろうか。まして、女の前なら、平気で脱くかしら。一週間、そわそわしどおしだった。でも、先週は、強いて、自分に言聞かせて、信じようと努めた。安全な服は与えてある。坊にしたって、まさか、わざわざ、旧式の風呂屋には行かないだろうと。それが、昨日、奇麗に裏切られた。服装に関する限は。工場で働く男は、もう知っていると思う方がよい。十九人。どのように思っているだろう。どんな、あざけりの笑を浮かべていだろう。夕方になると、あつまって、酒の肴にするのだろうか。「おい、あの娘、

あの、愛らしい顔で、あの痣だ。毛が茫々なのを見たか。」仕事中は、用事にかこつけて覗くのだらう。荷を持上げさせたり、わざと落した物を拾わせたり。仕事を教える振をして、うしろに回り、頭ごしに覗込む。日に何度となく。気が向いたら、仕事を教えにゆく人とは、そういうものだ。坊の横顔に、額を寄せて、右上から、左下を覗く。何十センチの至近距離から、私が見たよりも克明に。あの、細長い毛の数まで。右と左の大きさが違うことも面白がるのだらう。「それから、お前、あの臭を嗅いだか。ひとつ、我々で目覚めさせてやろうではないか。この中の誰かが。くじびきで決めるとしようや。当たった者が、栄あるおこし役というわけだ。」「さ、お前だ。あたりだぞ。お前が行ってこい。」「御勘弁願います。辞退致したく存じます。」「駄目だ、若い者が。さ、きゅーっと引掛けて、これから行ってこい。」労働者の会話とは、そういうものだ。「ちよつと、あの子何なの、あの臭は。」「不潔にしているからよ！」「分りそうなもののねー。それに、見た？あの痣。あんな物を見せて歩いて、よく平気でいられるわね！よっぽど何かしているわ？あの子。」女の口とは、そういうものだ。今日は、締まった長袖シャツを着ていつて、かえって残念がられているだらうか。「何だ。今日は、あれが拝めないぞ。付いてないな。」これから、夏になったら、坊の服装で、十九人が一喜一憂するだらう。作業服、そうだ、作業着に着替えるのだらう。すると、まだ安全か。でも、油断はできない。普通のVネックなら、見える危険が十分にある、今日だって。迂闊だった。やっぱり下着から嚴重にしなければ意味がない。

5 / 17 (火)

今は、二時を過ぎたところ、午後の。坊は、隣の部屋で眠っている。熱を出した。私の所為だ。昨日、長いこと、雨に打たせた。工合が悪くなつて、三時に早引したと言う。私は私で出掛けていて、五時半に戻った。タクシーで帰ってきたら、坊が、ポーチに立って

待っていた。忘れて、鍵を渡してなかった。一時間以上待ったに違いない。激しく吹く風が、土砂降に降る雨を、ポーチの中まで吹入れて、ずぶぬれになっていた。傘をさしてはいたけれど役に立たない雨と風だった。

すぐに、湯船に、熱い湯を張って、風呂に入れて、体を、よく拭かせて、そのまま、ベッドに入らせた。それから、まだ起上らない。食事は、部屋まで運んでいる。引越や何やの疲もあつたのだろう。時々、咳音が聞える。本当を言うと、私も、少しぞくぞくする。同じウィルスかもしれない。気を、強く持つ。私は大丈夫。このあいだ患ったばかりだから、抵抗力が強いはず。

あの子は、お湯を張るあいだ、何かぼーっとしていた。体を濡らしたままで、そばに立って見ている。半分ほど溜ったときに、「体を、よく温めるのよ！」と言置いて出てきた。入浴していると、洗面所に入っていた。下着の着替とパジャマを置きに。服も下着も、案の定、雨を吸っている。ノックして、「パジャマと下着の着替、置いといたわよ？濡れた物は持っていくわね？」と声を掛けたら、どぎまぎする様子だった。「そのままにしておいて下さい、自分でやりますから。」と言う。「馬鹿ね！自分でやるって、あなたは上ったら、まっすぐベッドいきよ！体は洗わないで、あたまたまっただらすぐに出ていらっしやい。ドライヤーでよく乾かすのよ？」そうしたことを、ドアごしに怒鳴って出てきた。でも、ドアは開けなかった。開けようか開けまいか迷ったのだけれど。絶好の機会だから、この、同居の、早い時期に、坊の裸を、おおっぴらに見てしまう。私は、痣を目のあたりにしながら、顔色ひとつ変えない。その私の様子を、坊に見せる。そうすれば、痣を、今後、坊と私で共有できる。色々なアドバイスを与えられる。でも、私の声で、もう慌てるらしいので、ドアを開けずにしまった。

熱を出したのは気の毒に思うけれど、ずぶぬれなって帰ってきたのは、やっぱり、そうなるようになっていたのだ。私は、丁度、彼女の下着を買ってきたところだったのだから！あの店に、彼女に

合う物はないだろうけれど、手始めに、ベティ・クレアズから当ってみよう。駄目で元々という気で行ったら飛んでもない。U・S・Aで、アーリー・ティーンズ用に売出したのを、日本でも始めたらしくて、色々なから選べた。子供用ではあっても、見た目には、全然子供っぽくない。こういう文化は、まだまだ、U・S・Aに及ばない。自分が十代のときに着けたのは、本当に子供っぽくて厭だったけれど、これは、比物にならないほど洒落ている。子供用というよりも、小さな大人用だ。でも、カップだけはしっかり、余さず覆うように出来ていて、さすがは、バプティスト系の会社、南部御用達だけはある。ブラジャー、パンツ、パジャマ、買いに出てきた物は全部揃えられた。シャツを探したときみたいに、あっちこっち、しかも、雨の中を探す覚悟で出てきたので、全然たやすく用がすんでしまうと気が晴れて、大雨にかかわらず、何だか陽気になった。勝レツ庵というお店に入って、トンカツを食べた。嵐の中を、トンカツ屋さんに駆込んできて、油まみれの豚肉を、一人で、カウンタ―に向って、がっがつ食べる女が珍しかったのだろう、店員も、サラリーマンふうの客も、じろじろ見た。でも、考えてみると、ゆうべから、何も食べていなかったのだ。なぜかしら、食べながら、笑が込上げてきて、一度おかしくなると、もう、堪らなくおかしくて、それで、又、じろじろ見られたけれど、笑を堪えるためにも、食事に集中した。

関内から、タクシーで帰ってくる車内で、改めて、すべてがなるようになっていると感じた。鎌倉の帰に、横浜駅で降りたときは、何も考えないうちは、ベティ・クレアズに、足が向いていたのに、なまじ、立止って考えたものだから、下着も買わず、工場で役に立ったか立たないかも分らないブラウスを購入して終ってしまった。初に、心に浮んだとおりに、ベティ・クレアズに行っていれば、心配は、そこですんだはずなのに。一週間も悶拔かなくてすんだのに。最初に考えた口実を使って、このブラジャーを与えていれば、その分だけ、見られる危険を減らすことができたのだ。これなら、

たとえ、ぺらぺらのシャツを着て屈んでも、恐らく、見えることはないだろう。そう予測した安全性は、今や、確認済の安全性になった。昨夜、寝息を立てているときに、メンソレータムを塗ってやると、そっと、パジャマの胸を開けたら、ブラジャーを着けて眠っている。マネキン人形で確めたとおりで、胸に張付いて、膨みを、全部覆隠している。二の指と三の指を、ために、カップの下に滑込ませたけれど、隙間がないので、中々持上らない。寝ている子には息苦しく見えるほど、ぴったりくっついていて。ちよっとかわいそうな仕打だけれど、私も、もう良い加減に、余計な心配から開放されたくて、胸を開いたままで、体を起させた。薬を塗ってあげるからと。彼女は朦朧として、背を凭せかけて、又前後不覚になった。顔を顰めて、酷く辛そうな表情だけれども、それほど熱が高いのではない。頭を右に傾げて、猫背になった。丁度、グリーン車の中のうたた寝のように。違は、あのときは、頭を、前に垂れていた。でも、猫背のなりかたは同じ。薬を塗りながら、カップの縁に目を凝した。やはり大丈夫。仰向よりは、隙間が、ほんの少し出来る。でも、奥まで見ることは不可能。グリーン車では、乳首が覗いていた。念のために、スタンドを向けて、光が、隙間に忍込むようにして、又調べた。一二センチで行きどまり。これなら安心。思切屈まつたら、どうか分らないけれど、熱を出して眠っている子に、そこまでさせるのは気が引ける。今調べているのは、薬を塗るついでだから、理由が立つけれど。でも、多分、この張付きかたなら大丈夫だ。幅広の紐が、肩に、しっかり張付いて、指で動かしても動かない。水着のように吸付くので、簡単に弛むとは思えない。あとは、起上ってきたら、いつか屈むだろうから、そのときに確めれば良い。

買ってきたばかりの下着を使う機会が、すぐに訪れて、さすがに驚かされた。どういう口実を設けて着けさせるかは、良い案が、まだ浮んでいなかったのに、おのずからそうなった。もしも、坊が、湯を張るあいだに、二階から、自分の着替を持って降りてきたとしたら、あのようにうまくは運ばなかった。ところが、彼女は、ぼー

つと見ていた。もしも、あの大雨の中を、ベティ・クレアズに行つてみる気が起きなかつたら、私の心配は長引いていた。もしも、勝烈庵に入らずに、まっすぐ帰ってきていたら、坊よりも先に帰宅して、彼女をずぶぬれにすることはなかつただろう。風呂に入れなどせず、そのまま、ベッドに入らせるところだった。すべてが、なるようになつてゐる。これで、何の心配もなく送出せる。坊は、六枚の素敵なブラジャーに守られて安心だ。作業着に着替えるとしても、仕事を教えながら覗くとしても、重い荷物を持上げさせるとしても、もう、二度と、見ることはできない。

5 / 18 (水)

今は午後五時。由加里は、今日も休んでいる。咳とくしゃみと、夜は熱。典型的な風邪だ。私は、意志で踏止つた。

隣では、フランクのソナタが聞えている。坊が、ラジカセを聴いている。

今朝は、六時頃に目が覚めた。何か、ことごとくという物音がしている。隣で、坊が、カバンのジッパーを開けたり閉めたり、鏡台の引出を押入れて、こつんといわせたり、あつちこつち歩回ったり。大きな音を立てないように、気を使っているのが分る。まさかと思つて、飛起きて、坊のドアをノックしにいった。もう、着替終つて、机に向つて、メモ用紙に走書しているところだった。机の上には、アパートから持ってきたらしい、掌に載る位の、黒いトランジスタ・ラジオが、最小音に絞つて、えのさんの声を流している。メモは私宛だった。アルバイトに行つてくると。私は思切怖い顔をしてみせた。立上つてきたところを抱寄せて、額に唇を当てたら、明らかに熱っぽい。今日は、何処へも行かないのだと言含めて、すぐにパジャマに着替直すように命じた。今、暖い物を持つてきてあげるからと。ちよつと、きつく言過ぎたと思つた。堪らなく可愛くなつて、唇に、軽くキスした。私達のファースト・キスということだ。念のために、変な誤解をしちゃ駄目よ、私には好きな人がいるんだ

からと言って、キッチンに下りていった。スキムミルクに、ココアとマーマレード・ジャムを入れたのを、二人分持って、坊の部屋に上っていったときには、もう、ベッドに入ってしまったて、ラジオを、枕のそばに置いて聞いていた。お姉ちゃんの部屋で飲もう、ラジオも持っていらつしやいと言って、おはようさんを聞きながら、坊と私とで、ベッドに、二人並んで入って飲んだ。私も、以前は、毎朝、えのさんの声を聞いていたので懐しかったけれど、今朝は、懐しい声も上の空だった。物事は、なるべきようになったので、結局は良かったのだけれども。

坊が、ベッドに、半身を入れて、横に座ったときは、途端に憂鬱になった。信じられない思だった。左に座った彼女の胸が見えている。ブラジャーを着けていないのではない。着けている。ただ、ベティ・クレアズの物ではない、何処ぞで、自分が見付けてきたのを着けている。一枚は、雨の日に、私が預っている。返す気はない。何とか言って、又処分すれば良い。当然、坊も、ブラジャーの五六枚は持っているだろう。でも、なぜ、私のを外してしまったのだろう。寝汗をかいたからかもしれない。メンソレータムが臭うのだろうか。何にもせよ、今着けているのを着けて、工場に行く心算だった。それとも、これから、又寝るから、草臥れても良い安物に着けかえたのか。それとも、この方が緩くて寝易いからか。すると、この子は、普段から、寝るときにもブラジャーをするのだろうか。メンソレータムを塗ってやったときは、着けた工合が調べられて嬉しかった反面、窮屈そうで、少しおかしくもあった。田舎の女の子はそうするのかと思った。私は、着けていないものと考えて、メンソレータムを塗りにいった。バスルームのドアを開けなかったのは、やはり間違だったと思われた。今度こそ、痣を見る心算で、部屋に入っていた。目を覚さないように、胸を開けて、塗終えたら、揺起す。確に見たのだと観念させる。それを、今、此処でせよということなのだろうか。バスルームのドアを開けなかった過を、今正せと。パジャマは、自分のを着ないで、ベティ・クレアズの物を着ている

のに。このあいだみたいに、勿体ないから着ないということはない。なぜブラジャーは。やはり汗臭くなったからか。ほかの五枚も、あのときに、一緒に渡すべきだった。パンツもブラジャーもパジャマも一緒にして、坊の引越祝と言つて、全部纏めて渡す手もあったのだ。お粥を作ったり、薬を買いにいったりで、そこまでは頭が回らなかった。坊は、あと何枚、こういうのを持ってきたのだろうか。あの一枚は取上げるとしても、五枚も六枚も隠しもっていて、優先的に、その方を着けられては適わない。

スキムミルクが、まだ、半分飲残してあるマッグを取上げて、テーブルに置き、ラジオを消した。一昨日と、昨日とシャンプーしないので、少し脂臭くなった、黒子のある、右のこめかみに接吻して、肩に、腕を回した。「風邪が治ったら、美容院に行こうか。」と、髪の毛に、指を通した。「今日は、坊、此处で寝なさい。昼まで寝よう。お姉ちゃん、ずっと寝不足で疲れている。坊が寝かして頂戴。」と言った。ベッドに潜つて、頭を枕に並べた。私は、意を決した。この子のためだと。彼女の方に向直るように、左へ、上体を起した。右手を、痣のある所に滑込ませようと、パジャマの襟に這わせたときに、彼女の手に行当った。左手だ。それを、毛布の下から引出した。抵抗はしなかったけれど、上気したような、潤んだ目で見ていた。私は、坊の手先を見つめた。指は、微かな動をした。拳に握るか握るまいかためらっていた。私は、捉えた物の処置に迷った。胸に置かせるには、体の向が違う。それに、私はジャージーだし、下着も着けたままだ。私は、どうしても、それを、美しい行為にしたかった。本当の意味で、痣を共有するための、無上のおこないにしたかった。今、手を放したら引込めてしまうだろう。私は、毛布の中で、ゴソゴソと下着を取る。引込めた手を、もう一度手繰寄せて、ジャージーを搔潜らせ、胸の上に置く。それは、あまりにも美しくない、無様な行為だ。そのあいだに、あらぬ想像をして強張ってしまうかもしれない。今のしなやかさが失われては、美しく終らせることはできない。私は、そう諦めて、しなやかになってい

る指を、彼女自身の唇にのせて、更に、その上に、自分の唇を重ねた。指をのけて、思切くちづけをし、そして、中指と薬指を、軽く唇に挟んだ。坊は、唇を吸われるときから、目を開いて、不思議そうに見ていた。私は、再び、頭を、枕に沈めた。もう、手を放していた。毛布を上げて、「坊、お姉ちゃんの上にいらっしゃい。」と言ったら、素直に、私の上でうつぶせになった。生際は、遙か下にあつて、頬を、胸に、完全に埋めた。「どう、お姉ちゃんのおっぱい大きいでしょう。」「とても大きいです。」「坊は、大きなおっぱいが羨ましい?」「羨ましいです。」「じゃ、坊は、おっぱいが大きくなりたい?」「なりたいです。」「そうねえ、坊はちっちゃいものねえ。男の子みたいだねえ。私、おかしくなっちゃった。」「彼女の頭をなでつつ、言葉を考えた。「でも大丈夫よ!又、大きな時期があるから。」「良いんです、私は。」「今まで、好きな人がいないの?」「いません。」「どうして?坊みたいな子を、男の子が放っておかないでしょう。」「放っておいてくれます、滋子お姉ちゃんと違って。おっぱいが男みたいなお陰です。」「馬鹿ね、冗談よ!すねちゃったの?」「すねました。男の人に放ってけぼりの坊ですから、滋子お姉ちゃんと違って。」「じゃ、坊は、今まで、好きな人に見せたことがないの?」「滋子お姉ちゃんは見えるんですか。」「見せるはずがないでしょう!女のお乳は、誰にも見せちゃいけないのよ?どんなことがあつても。それほど大切なものよ!」「でも、滋子お姉ちゃん好きな人があるんじゃないんですか。その人には見せないんですか。」「結婚すれば見せるでしょう、誰だつて。でも、彼、死んじゃったの。」「死んだんですか。」「そう、去年。」「好きな人が死んだんですか。」「結婚するはずだった。でも、死んじゃったから、お姉ちゃんは、誰にも、おっぱいを見せる必要がないの。」「なぜ死んだんですか。」「病氣よ。」「結婚するはずだったのにですか。」「そう。」「愛していたんですか。」「無論よ。とても愛していたわ。今も愛している。」「信じられません、そんな。死んだなんて。全然、そんなふうに見えま

せん。」「今も愛しているからよ。私は、彼の物だつて分っているから。だから、ほかの男の人とは、できるだけ口を利かないし、おっぱいなんか、絶対に見られない。坊も、そういう人にしか見せちゃ駄目よ！女の命よ、おっぱいは。」「坊は引込まれて、私の顔のあたりまで這上つてきて、頭を擡げて聞入った。酷く深刻そうな顔が、とりわけ可愛いので、また、軽く、唇に接吻した。」「坊は、そういう人がいないの？おっぱいを見られても良いような。」「いません。」「でも、お風呂屋さんでは見られるんでしょう？」「お風呂屋さんは、みんな裸です。」「そうじゃなくて、番台のおじさんに見られるんでしょう？」「番台なんかありません。そんな所に行きません。」「さすが、お姉ちゃんの妹だ。今まで、そういうお風呂屋さんに行つたことがない？」「ありません。絶対に厭です。番台なんかあつたら帰ってきます。」「そう！女の子はそうでなくちゃ駄目よ！日本は、アメリカとかヨーロッパに比べたら、まだまだ野蛮な風習が残っているから、そういうお風呂屋さんが、沢山あるけれど、そんな所に行く女は野蛮人ね！フランスの小説に、そんなお風呂屋さんが出てくるかしら、女が着替えるところを、番台に坐つて、じつと見おろしている。坊はアンナ・カレーニナを読んだ？」「読みました、去年。」「じゃ、キティが、ヴロンスキーに裏切られて、お医者さんの診察を受けるところを覚えている？」「よく覚えています。」「お医者さんにだつて見せたくないのよ？本当は。番台のおじさんなんかに見られたら、ヴオルガに身投するわよ？キティなら、きつと。」「そうですね！」「でも、坊になら見せても良いかな。お姉ちゃんのおっぱい、見せてあげましょうか。私は、坊のおっぱいを見るの。」「結構です！滋子お姉ちゃんのおっぱいが大きいのは分りました。」「そう！女の人にだつて見せちゃ駄目！そんなことをするのは野蛮人よ。でも、坊は、お風呂屋さんなんかに行っている。」「それは仕方ありません。服を着て、お風呂には入れません。」「そうね、でも、タオルか何かで隠して入るんでしょう？」「タオルは使えません。」「じゃ、どうぞ見て下さいって入

つていくの？」「そんなことはしません。ちゃんと隠して入ります。混んでいる時間には行かないし。」「坊は偉いな。やっぱり、お姉ちゃんの妹だ。お姉ちゃんの真似をしない？」「レイディーになるのよ。」「レイディーになれますか。」「なれるわよ。もう、半分なっているわ？」「此処で暮していれば、半年後には、一人前のレイディーよ。坊なら、三箇月、いや二箇月かもしれない。頭は良いし、耳だつて良いし、顔が綺麗だし。そのうち、門の前は、坊恋しさに拳銃自殺した男の死体の山よ。街衢死屍累累。今の、分った？」「はい、全部、滋子お姉ちゃんのお陰です。お姉ちゃんの言うとおりにします。」「そうね、もう、お風呂屋さんなんかには行かないことね。お姉ちゃんは、一度も、行ったことがない。そうだ。それから、坊は、よく、胸の開いたシャツを着ているわね。あれは良くないわ？」「下品よ。女の子が、胸元をひらひらさせちゃ駄目。人の目を引くでしょう？」「皆さん、どうぞ、私のおっぱいを見て下さいって言うて、いるようなものよ。」「すみませんでした。自分では気が付かなくて。」「そうね、人に言うてもらわないと分らないものね。でも、もう、沢山、ほかに、素敵なのを持っているでしょう？」「それに、もうすぐお誕生日だから、もっと素敵なのをプレゼントしてあげなくちゃ。だから、あんなの捨てちゃいなさい、日曜日に着ていた黄色いのだとか。」「そうします。でも、もう、十分買ってもらいましたから、あとは結構です。」「そんなことはない。交換しましょう？」「坊の、ひらひらした服は、全部、お姉ちゃんが貰うの。坊に上げるのと物々交換。坊は、お姉ちゃんを愛している？」「愛しています。」「じゃ、キスして頂戴。」「暫く見おろして、ちゃんと口にした。赤く照れたりしなかった。」「今のようなキスは、お姉ちゃん以外の人としちゃ駄目よ！」「レズビアンって知っている？」「知りません。」「本当は、口にしたくもない、物凄く下品な言葉。番台以上よ？」「坊は覚えなくて良い。忘れちゃいなさい？」「何ですか。」「ホモは？」「知っている？」「知っています。男の人が男の子を。『ベニスに死す』のアッシェンバッハなんか。」「坊、凄い。よく、あ

んな難しい本を読んでいる。お姉ちゃん、ついに言っちゃった。ホ
何とかって、今、初て口にしたのよ？レ何とかと同じ位汚い言葉ね
？坊は、両方忘れちゃいなさい？」「レ何とかって、女の人のこと
ですか。」「そう、世の中には、そういう、狂っている女の人もい
るの。そういう人達もキスするでしょう？だから、坊は、お姉ちゃ
ん以外としちゃいけない。言っておきますけれど、私は、レ何とか
でも、ホ何とかでもないわよ！」「分っています。滋子お姉ちゃん
は、私を妹のように可愛がってくれます。だから、私もお姉ちゃん
のように愛します。」「ようにじゃないわ。坊は、本当の妹だし、
私は、本当のお姉ちゃんよ。だから、キスして良いの。抱締めても
良いの。坊になら、おっぱいだって見せられるわよ！でも、あとは、
坊が、本当に好きになった、将来の旦那さんだけよ。彼だけにキス
して良いの。彼だけに抱締められても良いの。」「滋子お姉ちゃん
もそうだったんですか。」「そう。彼には、うんとキスもされたし、
抱締められもしたわ？でも、もう、誰にもさせない。彼、物凄い焼
餅焼だから。実は、私も、物凄い焼餅焼。だからぴったりの。私、
一人っ子だから、妹のことでも、物凄い焼餅焼よ？坊、大丈夫？下
手をしたら、坊を食べちゃうわよ？それ位、坊に首つ丈なのよ？そ
れで構わない？」「宜しくお願いします。」「大丈夫。必ず、素敵な
ボーイフレンドを見付けてあげるから。お姉ちゃんに任せなさい。」「
ボーイフレンドは結構です。お姉ちゃんだけで十分です。」「駄
目よ。ボーイフレンドと、上手に交際ができて一人前よ。好きな人
が出来てご覧なさい、きつと、自分でびつくりするような、良いこ
とがあるのよ！」「何ですか。」「出来てからのお楽しみ。でも、
今まで、一人も、男の子の友達がいなかったの？」「放ってけ坊で
す。」「見ていらっしやい、今に、よりどり由加里だから。このパ
ジャマ、どう？気に入ってくれた？」「有難うございます、こんな
に良い物を。着心地が良くて、本当に有難うございます。」「良か
った。下着はどう？サイズは合った？」「勿体なくて、まだ着けて
いません。とても高そうな品物で。」「上よ。ブラジャー。」「寝

込むときに着ける物ではありません。傷めてしまいますから。自分の安いので十分です。」「でも、青リボンの、着けて寝ていたでしよう？きつくなかった？」「どうして知っているんですか。」「だって、洗面所に置いたじゃない。あれを着けて寝たんじゃないの？」「はい、でも、勿体ないと思って、朝、自分のに着替えました。」「馬鹿ね、勿体ない勿体ないって。使うためにあるんでしよう？ほかにあるのよ？全部、リボンの色が違っていろ。取敢えず六枚買ってみただけれど、合うようだったら、又買ってきてあげる。だから、どんどん使っちゃいなさい？どうだった？着けてみて。きつくはなかった？」「今まで着けていたのとは随分違いました。出掛けるときに着けます。寝るときに着けるのは、やっぱり勿体ないので。」「馬鹿ね、寝るときにブラジャーをする人が何処にいるの。寝るときは外すものよ。心臓に悪いわよ？」「滋子お姉ちゃんは取らないんですか。」「馬鹿ね、お姉ちゃんと坊では違うでしょう。坊は、これから大きくなるんでしょう？お姉ちゃんみたいに、おっぱいの大きい人が取って寝たら大変よ。それこそ、十年後には、誰にも見せられなくなっちゃう。じゃ、パンツも試していないの？」「はい。出掛けるときに。」「じゃ、さつき、工場に行こうとしたときは？」「作業すると、油で汚れたりするので、安いのを着けていきます。」「駄目よ。大体、安い下着なんか着けるものじゃないわ？レイディーが。捨てちゃいなさい？そんなの。かわりは、いくらでもあるんだから、お姉ちゃんのを着けなさい？汚れたら、いつでも新しいのを買ってきてあげるから。そんなに高い物じゃないのよ？あの下着ね、お姉ちゃんと同じ物なの。姉妹になった記念に同じ下着を着けようと思って、大雨の日、買いにいったのよ？お陰で、坊は、雨の中で待坊けだったけれど。でも、あの下着のために、坊も熱を出す羽目になったんだから、高い代償を払っているのよ？だから、どんどん使いなさい？今までのなんか捨てちゃって。物々交換しましょう、下着も。気に入らないなら別だけれど。正直に言うってほしいの。別のを探してきてあげる。」「いえ、気に入らない

なんて、飛んでもないことです。ただ勿体なかったものですから。」
「じゃ、物々交換しましょうね？油に汚れるって、じゃ、作業着を着て仕事するの？」「はい。普段着では、すぐ駄目になりますから。」
「じゃ、作業着を持っていらっしゃい。洗濯してあげるから。」
「有難うございます。」

あまりしつこく質問すのも、変に思われそうなので、話題を、ホロヴィッツのリサイタルに変えた。そして、二時間ばかり、昼まで、坊と一緒に寝た。坊は、風邪を移すといけないと気にしだしたけれど、坊の風邪なら引いても構わないと言って（どうせ、移る心配はなかったのだけれど。）、横で眠らせた。ブラジャーを取りなさいとも、今着けているのかとも聞かなかった。

私は、眠ることができて、気分も良かった。カーテンの隙間から日が差込んで、外は、良い天気には違いない。立って、窓を開けると、テマロが飛出してきた。例の哀っぽい顔で見上げる。土曜日から、ずっと、散歩に連れていってもらわないのだ。前足を、木の幹に掛けて、気が違ったように引掻始める。早く出掛けましようと言っているのだ。地面に、穴ぼこを掘る要領で、木を引掻く。このところ、やたらに引掻くし、ひとつ箇所ばかりやるので、其処の皮が、段々剥けてきた。ひととおり引掻終えると、又、窓の下に来て見上げる。「テマロ。」と声には出さずに、口だけ動かして呼掛けたら、悲鳴のような鳴声を出したので、怖い顔をした。首を振って合図したら、途端に大人しくなって、オスワリの姿勢。鼻の頭を嘗める。中々、テマロも賢くて、可愛い子だ。

悲鳴で目を覚めたのだろうか。それとも、急に明るくなったからだろうか、坊が、体を起していた。額に唇を付けると、熱はないようだ。鼻声は、昨日と変らないけれど。又、ベッドに入った。そして、毛布を上げると、今度は、自分から乗ってきてしがみついた。中々、舐込が良くて可愛い子だ。こうして、今日は、半日、坊を抱いて暮した。一時に、軽い食事をしに、一階に降りていった。坊は、もう、寝られないと言うので、パジャマを脱いでしまった。

それから、部屋で読書するらしかった。私は、シャワーから出ると、テテマロの散歩にいった。そのあいだに、フランクのソナタを、カセットに録音しておいた。帰ってきて、もう片面に、ドビュッシーの四重奏。それを渡しに、部屋に上ってゆくと、安楽椅子に掛けてカラマーゾフの文庫本を手にしている。先週から読んでいるのだ言う。それで、もう、法廷の所まで行っている。再読だとは言うのだけれど。聖書を知らずに読むのと、聖書を知ってから読むのでは、全然違うと。以前、私も読んだ米川正夫訳だった。あまり肩の張る物を読んだりして、又熱を出すわよとからかったら、もう、熱は引きましたと、鼻声で言った。段々、鼻が詰るらしい。まだ、入浴は無理。明日も休だ。さっき宣告してきた。そのかわり、好きな時間まで起きていなさいと。夕食も、九時と遅かった。昼食が遅かったし、食欲も出ない。食べる気になるまで、ことごと、チキン・スーブを煮込んだ。家中、チキン・スーブの匂で充満している。

もう、何度、フランクを聴返すのだろう。最初に感動した曲というので、特に好きなのだ。今は十時五十分。少なくとも三度目だ。ドビュッシーも、何度か聞えていたし、夕食を挟んだから、勘定ができなくなってしまった。そういえば、坊の臭が、最近、全然しない。風呂にも入らないのに。今朝、こっそり出掛けようとしていた。工場に行く心算だったのだ。坊が支度する物音で目が覚めた。まさかと飛起きて、部屋に行ってみた。五分遅れていたら、出掛けていただろう。私は、思切叱付けた。そのあとで、彼女を、自分のベッドに連れてゆき、服装などや、今日までのことで、色々と言聞かせただけで、彼女の部屋に入ったとき、何も感じなかった。一昨日のメンソレータムが、それとは分らない程度に残っているけれども、あとは、坊の肌の、甘い、良い匂だけ。ゴールデン・ウィークのあいだは、朝、部屋に入ってゆくと臭ったものだった。

三時頃に、テテマロを散歩させて、元町まで下りていったついでに、タカハシに寄ったら、山の音のサイデンスティックがかった。面白そうなので読んでみることにした。千羽鶴を探してみた

けれどなかった。訳は出ているというので、取寄せてもらっている。散歩から帰ってきたながら考えたことがある。坊と、千羽鶴を、一緒に読む。そこから、話をもっていく。このあいだも、川端邸を見たばかりだし、あれは、鎌倉を舞台にしているし、円覚寺の栞にまで出ていたして、朗読に使うのは不自然ではない。

坊は、今日、私の胸に抱かれながら、下着のことでは納得しづらいので、物事は、一往、なるべきように運んでいるようだけれど、本当は、私は、一度、咄嗟の判断で、手を、彼女の左乳嘴に伸ばしかけた。手を、緩いブラジャーの中に入れて、痣に触れようとした。彼女を裸にして、痣を共にする。まだ、その時ではないのだろう。

しかし、共有できたとしても、そのあとで、どうするか。手術して、どうかなるものだろうか。赤い輪の中に、完全に掛っているのだ。乳暈と一体になっているのに、痣だけ取除くことができるだろうか。よしできるとしても、醜い傷が残らないはずが。期待もできないのに、医者に見せるとしたら、見せるだけ悔しい。すると彼女を裸にしたところで、ただ共有するだけのこと。アドバイスを与える上で、都合が良いことはある。でも、彼女は賢い。何かに仮託して、間接的に言えば、我が身に照らして解釈できない子ではない。例えば、千羽鶴の、痣のある、例の、気味の悪い女。女の痣のことで、私が言う言葉を、ちゃんと受止めないはずがない。彼女は恥じている。それは間違ない。風呂屋のことを、今朝、それとなく尋ねたら、番台のあるお風呂屋さんになんか行きませんと言っていた。ほかの客に、体を隠すとも言った。裸を見られたくないとする意志は強い。入浴中にも、私の声を聞いただけで、あれほど慌てたではないか。無頓着でもなければ、間拔でもない。変な服を着たのは自分では気が付かなかった所為だ。今日、説教されて、ちゃんと納得したではないか。

酷い夢を見た。坊が侵されている。苦悶の表情。シャツを引裂かれ、ブラジャーをもぎとられる。男は挑みかかる。若い男。誰だか分らない。でも、菊滋のような気がしてならない。坊は、決して、目を開けない。体を波打たせて、苦しうに息をする。菊滋は、痣のある乳首を力一杯吸始める。次は右を吸う。物凄く苛立っている。うしろのポケットから、毛抜を取出す。何という！坊は、痣を、手で庇う。目を決して開こうとはしない。男は、手を払いのけに掛る。坊は必死に抵抗する。男が、何か耳打する。坊は、観念したように、手をのける。顔が無表情になって、腕と体を、まっすぐに伸ばし、寝たままでキツツケをしたようになる。男は、左に座り、毛を、一本一本抜いてゆく。一本抜いては、坊の二の腕に張付け、又、一本抜いては又張付ける。最後の一本を抜終わると、腕に張付いた毛は、凄い数になった。どうして、これだけのものが、痣に生えていたのだろうと不思議になる。男は、一本ずつ、腕から取って、口の中に入れてゆく。残らず入れてしまうと、それを、もぐもぐ噛んで食べてしまった。又、坊の上にのり、左の乳首を吸う。溢れるほど、お乳が出ている。男は、飲切れなくて咽ぶ。見ると、男は、赤ん坊で、坊に抱かれている。坊は立ってあやしている。赤ん坊が口を離す。左の胸に痣はない。珊瑚色の、綺麗な、大きな乳首から、翡翠のような、緑色に濁ったお乳が垂れている。

こんな夢は書きたくなかった。でも、今までにも、何度か見たような気がする。見た覚があるのではない。ただ、そのような気がするのだ。前にも見たような気がしながら見ていた。夢のデジャ・ヴィユというような。だから、忘れないうちに書いた。

5 / 20 (金)

坊が、最後の出勤をしている。今日で、工場を辞める。昨日、二人で話して決めた。此処で暮せば、生活費は掛らない。もっと良い仕事に就くまで、趣味教養を高めることに、時間を使えば良い。次の就職活動は、私が手伝って、何か、坊に相応しい仕事を見付け

てあげる。十九人の男も、さぞ拍子拔だろう。今日は暑いから、ひらひらしたシャツでおでましかと期待していたら、万全のブラウスの下には、万全のブラジャーを着けて重装備が上にも、今日が、もう、これで最後なのだ。八人の女も驚くだろうな。今日の坊が付けている香水は、日本では手に入らない。彼女らは嗅いだことのない匂。横浜でも、あのかおりが付けられる人は、それほどいないはず。(坊を除けば七人の女が、私ってお馬鹿さん。)

5 / 2 1 (土)

昨日で、坊は、アルバイトを辞めた。これからは、いつも二人だ。今日は、七時に、朝食を、一緒に食べた。それから、坊は、二階の部屋に上った。私は、十一時頃までピアノ。キーシュを作っているところに、坊が下りてきて手伝った。午後から、テテマロを連れて山手公園。四時に戻る。今、坊は、晩のお数買いに、スーパーにいつてくれている。デザートは、久しぶりに、喜久家の予定。朝もよし、目覚もよくて、喜久家よし。

5 / 2 2 (日) 晴

五月、ああ好き五月。二人暮は楽しい。生活にリズムがある。めりはりが付く。今まで、とかくだらしなかった、私の毎日。夜が眠れず、昼はぼーっとして、それでも、仕事をしていたころは、無理にも規則的にしないわけにはいかなかったけれど、辞めてからは、まったく目茶苦茶。眠くなったときに、ベッドに入って、それで、一二時間で目が覚める。週末は、辞める前から、昼夜入替っていた。そんな生活にさようなら！

坊と、スケジュールを決めた。

六時半 起床。

七時 朝食。そのあと、十一時半まで別行動Ⅱ別行動a。

十一時半 昼食を、二人で準備して食べる。そのあと、三時まで別行動Ⅱ別行動b。

三時 Tea . そのあと、二人で過すⅡ二人の時間a。

六時半 夕食を、二人で準備して食べる。そのあと、二人で過すⅡ二人の時間b。

十時半 就床。

原則、このようにしてみた。でも、リジッドなものではないなるべく、これに近付けてやっていこうというのである。こういうスケジュール生活を、又しようものとは思わなかった。エッセルマン夫妻、グレース、ドーナ。U・S・A・が懐しい、私のふるさとバースティン。

月曜日から、土曜日は、原則、このようにして、日曜日は、なるべく出掛ける。明日発効のスケジュールだ。どうなることやらとにかく、やってみましょう！

自転車を買った。天気の良い日は、二人でサイクリング。坊が、図書館に行ったり、買物に行ったりするために。部屋で読書するのも良いけれど、別行動aは、時間がたつぷりあるから、坊には、なるべく外出するように勧めた。私は、家事をしたり、ピアノを弾いたりする。二人の時間aは、できるなら、テマ口を連れて公園に行き、詩を朗読しても良いし、何でも良いからお喋をしたい。港の見える丘公園、山下公園、山手公園。元町公園もあった。ちょっと遠いけれど、野毛山にだって行って帰ってこられないことはない。二人の時間bは、音楽を聴いても良いし、英語を教えてみようとも考えている。何もしないで、ただ抱いていたって良い。何て可愛い子だろう！今日は、うしろから抱っこした。あの子が、ソファに、足を抱えて座る。丁度、赤い靴の女の子のように。それを、私が、うしろから、手を回す。大変だ、もう寝なければ、一日目から寝坊では、坊に顔が立たない。

5 / 2 3 (月) 曇

今は、丁度、別行動aの時間、八時半。坊は、テテマ口を連れて出掛けた。気ままに歩いて、この辺の地理を究めるのだと言う。スカートを穿くと、まったく、あどけない少女だ。昨日、元町で買った。初ての麦藁帽子には戸惑っていた。

私は、又、ピアノを怠けそうだ。本当は、こんな物を書いてある時間ではないのだ。今朝は、ちゃんと六時半に起床した。坊の部屋に行ってみると、もう着替えていて、窓から庭を見おろしていた。テテマ口に、何か合図しているらしかった。おはようと言って、腕を広げたら、自分から飛込んできて、待受けるように見上げた。もう、口にされるのに慣れてしまった。ちゃんと、目を瞑る癖も付いた。これなら、ボーイフレンドが出来ても、うまくゆくだろう。彼女は、熟睡できるらしい。かえって、私の方が、不眠が治らなくて困ってしまう。ゆうべは、少し眠れたけれど。でも、相変わらず、私の頭は泳いでいるところだ。

さつき、お小遣を上げると言ったら、いいえ、飛んでもないと、初は拒否した。服を買ってもらう、レッスンしてもらう、此処に居候させてもらう、それでも、十分心苦しいのに、その上お小遣までと、びっくりした顔をして手を振った。少しなら、貯金があるそうだ。暫く押問答、結局、受取らせただけ。週に五千円と決めて、じゃ、それ以上のかかりは、坊が、自分の貯金から出さないということ。お姉ちゃんは大丈夫、坊がレイディーになって、新しい仕事に就いたら返してもらうからとも。

5 / 2 3 (月)

私のもん君

もう知っているでしょうけれど、坊と私は、同居を始めました。痣のことも知っていますね。私は、あの痣を、自分の身に受けて、あの子を、幸福に導いてやる心算です。そうなるようになって

いたのですね。へへ見ていてください。わっ部屋に隠れて、こっそり、自分で、毛を抜くような、そのような、傷ましい事を、あの子に、決してさせはしません。まして、男になんか抜かせるものですか。私が抜いてやります。あの子に、そういう必要が出来たら。いつかは分りませんけれど、一年後か、二年後か。その必要が出来たようなら、この上もなく美しく、しなやかな瞬間を捉えて、私は、あの子の痣に接吻し、あの子にも、私の胸に接吻させる。そして、痛くしないように、上手に抜いてやります。毛さえなければ、あのようなお乳があっても良いのです。男の人は、どう見るか分りませんけれど、女の私には、痣も、ある種の魅力になると感じられます。ただし、毛さえなければ。ですから、手術を受けることはありません。医者にも連れてゆきません。そのように決めました。毛のなくなった、綺麗な痣を見る男性は、一人いれば良いのです。その一人も、勿論、私が見定めます。乳房に接吻しあう以上は、その一人を加えた私達四人は、兄弟姉妹になるのですよ。接吻のときには、私は、痣がなめらかであることを確かめます。私以外には、それのできる者はいないので。左の乳首を口に含んでみなければなりません。もん君なら分ってくれますね、世界中の人は理解できなくても。あの子は賢いから心配ありません。乳房に接吻しあえば、いえ、そこまでも行く前に、理解するでしょう。初だけ強張るかもしれませんが。もしかしたら、その必要が出来る前でも、その瞬間さえ捉えられれば、毛を抜いてやろうと考えています。厭な夢を見たのです。それも知っているでしょう？とにかく、あの夢のようなことにさせないためには、なるべく早く早く処置した方が良いかもしれません。考えてみれば、早過ぎていけないことはありませんものね。それから、何です、言わでものことと思いますが、念の為に。何しろ、私は、あなたに劣らない、実は、恪気の深い女なのですから。あなた、あの子に惹かれたりしたら承知しませんよ。あなたは、私だけ見ていれば良いのです。知っていますか、悔しいから、遂に、一遍も口に出さなかったけれど。私が、誰かに似ていて、その誰か

に似ているものだから、私に一目惚したのだと、いつか言ってくれましたね。その誰かが、あなたの初恋の人だと、冗談めかして言った。私は、あのとき、そうだったの、と興味なさそうに見せてしまったけれど、本当は、どんなにショックだったか。帰って、ママの胸の中で泣いたのですよ。可愛いと思ってください。私は、happy で proud なことといったら、自分でも持余すほどですから、ママにさえ、わけは言わなかったし、まして、あなたに對しては、その誰か様が、一体、いずれのどなた様なのか、問質せるはずのものでもありませんでした。誰なの！

5 / 2 4 (火) 曇

別行動 a、八時十五分。庭に出て書く。由加里、テマロと外出。最近、鍵盤に触れず。弾きかたさえ忘れそう。でも、規則的な生活はしている。まだましか。以前の、夜中に、雨の音を聞きながら、鉛のように重たい頭で書いていた夜を思えば。今朝は、鶏の声とともに目覚めた。ぐっすり眠れた。本当に久しぶり。

一昨日は暑かった。坊が、自分から、古い服を持って下りてきた。アパートから持ってきた、私を苦しめたシャツや何かだ。このうちのどれがいけませんかと言って聞きにきた。四枚あるが、全部、同じように問題外なので、今度の誕生日に、ワンピースをプレゼントするから物々交換ねと言って没収した。その前に、一番ひらした白いのを着せて、庭に出てみた。丁度、真上に、太陽があつて、胸元を調べるには好都合だった。テマロを放して、坊と遊ばせながら、ずっと観察したが、気がかりだったことも解消した。何度も、猫背になって胸をはだけた。オレンジ・リボンのベティ・クレアズ製を着けていた。どんな姿勢をとっても緩むことがないと分つて、これで、すっかり安心した。あの、忌わしい夢を見てから、又、不安が募ってきていたところだったので。やっぱり、坊のことでは、世話を焼かずにはいられない。誰かに見られたかもしれないと思うと、坊を、不憫に思う反面はありながら、私自身悔しくもあ

り、見せた坊を、憎く思う気持さえ湧いてくる。冗談ではなく、私は、手が付けられないほど嫉妬深いようだ。だのに、彼に対して、どんな思をさせたことだろう。まったく、人のことが言えた義理ではない。

もうひとつ安心したこと。坊が、自分で気にしだした。テテマロに、顔を嘗められているときなど、ふと、胸が開いていると気付いて、手でおさえていた。どうせ、もう、二度と、あのような物は着せないから同じだけれど。

そのあとで、三時過に、テテマロを連れて、タカハシかたがた石川町まで散歩した。書忘れたけれど、（確、まだ書いていなかったと思う。）山の音を読んでしまつて、手持無沙汰なので、タカハシに催促しにいった。本は、まだ来ていなかった。そのかわり、シバタで面白いレコードを見付けた。真赤なジャケット入の、比較的最近のホロヴィッツで、シューマンのフモレスケ。さては、これだったかと納得。最近、日本中のコンサート・ホールで、このオブスキュアな曲を弾出したのは変だと思っていた。どうせなら、アレグロも復活してほしい。裏にはメフィストワルツ。帰ってきて、夕食後に、聴いていたら、坊は、すぐに分った。ひと月も前に、一度聴いただけ、しかも、解釈が極度に違うのに。コードがまるで別なことまで言当てる。すごいすごいと褒めたけれど、本人は何でもないうようにしていた。そのようなことよりも、坊にとって驚天動地だったのは、そのあとで渡された、銀色のチケットだった。六月十六日のリサイタルで、キャンセルが出て、漸く手に入った、隣あわせになったうちの一枚。ゼロの数を見て硬直した。曰く、誘われたときは、是非行きますとは答えたけれど、まさか、五万円だとは、夢にも思わなかった。ゲーテ座で観た劇が千円だったので、ピアノを聴きにゆくのなら二三千円と考えていた。でも、私払いますと。

私のもん君

ゆうべ、坊が、あなたのことを尋ねるものですから、うんと

惚気ておきましたよ。初は、私が、ただ強がつて、悲しみをあらわさないようにしている。坊は、私の言葉を、そのように受取っていました。でも、あの子は、賢い子ですから、段々分つてきました。私が、単に、昔の自慢話をしているのではなくて、今現に、私ともにある恋人の、夫の惚気を言っているらしいと気付いて、しまいには、ニヤニヤして聞いていました。

心穏やかに聞いてください。あの子を恨んではいけませんよ。坊が聞きます、「じゃ、滋子お姉ちゃんは、新しい恋人を作らないんですか。素敵な人に結婚を申込まれたらどうするんですか、郷ひろみのような男の人に。」そこで言いました、「郷ひろみなんか、全然タイプじゃない。第一、良い大人が、大勢の人の前で、ポップを歌ったり、ホップを跳ねたりするのはみつともない。私は、品性のない人はお断だし、知性のない人はもつとお断だ。自分を、男前だと思っている男ほどお馬鹿さんはいないから、そういう人とは口も利かない。私のもん君は、百八十度違っている。写真を見せてあげようか。」と言いましたら、あの子も好奇心をあらわにして、是非見たいと言うので、アルバムを持ってきてやりました。信じられないという顔をしていましたよ。この人ですかと、一度聞いたきり、無言で捲っていました。「どう、お姉ちゃんの趣味は。」と尋ねましたら、挨拶に困っていました。そのくせ、見るところは、ちゃんと見ています。ひと言、「頭の良さそうな人ですね。」と。中々如才ない子ですとも。「分つたでしょう。坊も、郷ひろみだとか西郷輝彦だとかはやめておくことね。見掛なんか、隆盛でも平八郎でも良いの。頭の中身よ。男は、口が下手で、ぶつきらばうで、身なりなんか無愛想な位が本当よ。パーマメントなんか掛けにいくようじや落第ね。風采だつて、ひろみちゃんやら輝彦くんやらより、南州先生とか元帥閣下とかの方が、ずっと上だと思わない。心から尊敬できる人を、お姉ちゃんが選んであげるから、そんなのに引掛らないで、気長に待っていなさい。」などのようなことから始めて、人と人には、生死を越えた結付があるように、生死を超越する恋があ

る。そういう恋に、顔なんか全然関係がないというところまで行きましたら、あの子も、まったくそのとおりと納得した様子で。坊にも、もん君のような人がどうでしょうか。

5/28(土)曇

別行動b、一時四十五分、我が部屋。坊は、隣で読書か。

昨日、坊の、十九回目の誕生日。午後から、与に、元町で買物。プレゼントは水色のワンピースと、ピンクの波模様の入った靴。五時、キクヤの二階に行つて、祝の食事。アパートの友達を誘つて、七時頃からパーティーはと提案したが、金曜は、残業を命じられているので出席辞退とのこと。

そのキクヤでのこと。

二階に上るや否や、坊が、慌てたように、私のうしろに隠れて、顔を赤くした。「来ています、来ています。」と小声で言う。みつつのグループが食事をしている中に、一番奥の方に、十人位の団体が陣取っている。セント・ジョセフの制服。学生が七八人と、先生と見られる紳士が二人。学生の方は、先月、ゲーテ座で見た顔ばかり。フォースタス博士に出ていた、演劇部の子たちで、例の、可愛いバイロン君もいれば、こわいフォースタス博士もまじっている。先生のうちの一人は、髪の毛の抜落ちた、六十見当の紳士。初めて見る顔だけれど、もう一人の方は、劇場で、坊の隣に掛けていた、口髭を生やした紳士。坊は、前に出ようとせず、私の袖を捉えて、「助けて下さい。お願です、助けて下さい。」と懇願した。私はぴいんときていたので、「由加里ちゃん綺麗よ？何をどう助けるの？」と惚けて、店の人に、「すみません、奥の席が良いんですが。」と言ったので、すぐ隣のテーブルに案内された。坊は、ちょこちょこついてきながら、着席のときに、ひらりと身をかわして、私が目指した椅子を横取して腰掛けてしまった。目論見に反して、私が団体と向きあい、坊は背を向ける席配置になった。上ってきたはじめは、バイロン君は、私達に注意せずに、隣席のメフィストフェレス

と話込んでいたが、この寸劇で気をそらされたのだろう、ちよつと私を見た。彼は、ただ、何となく目を向けただけなのに、私が、目を見て会釈したので、このあいだのことを思出すらしかった。目を丸くして、見る見る赤くなつた。

5/29(日)雨

別行動b、二時、自室。坊は、下で、レコードを聴いている。上野の博物館に行く予定が、天気が悪いので取りやめ。

昨日の続。即、一昨日二十七日、キクヤの坊。いざ、坊や、いかにとかせん、あわれあわれ。

坊は、テーブルに蹲るように小さくなって、災難が、早く、頭の上を通りすぎてくれるのを待つ態で、私をも見上げようとしな

い。
バイロン君は、度々、私に、横目を使つた。私も、そういうときに、彼の目を捉えようと、彼を見た。目と目が会つと、その都度に、微笑みかけたので、彼は、尚氣になつて、ちらちら見た。

かわいそくに、背中を丸め、首根っ子まで、赤く染っている坊にも注意しだした。でも、バイロン君に、その意味が分るものか。私は、もう少し楽しんでいたかったので残念だったけれど、坊にとっては神様のお助、私達のテーブルに、ウェーターが、メニューを持ってくると入違に、一団は、間もなく、どやどやと立つていった。

最後に、私は、バイロン君に、深々とお辞儀したので、向うがわの何人かの見咎めるところとなつた。口髭の紳士が、低い声で、
"Do you know the young lady, George?" と言つた。ジョージ? 吹出してしまった。"A lady's boy, are you eh, George?" と、のつばのメフィストフェレスに小突かれつつ退場した。
あなかしましや、喜久家の二階。

5 / 3 0 (月) 未明

悪夢は本当だったの？坊。私の坊。なぜ、勝手なことをしたの？お姉ちゃんの胸は張裂けそうだ。あんなに言ったのに。あんなに約束したのに。何の必要があつて。だって、もう、あなたは治っていたんでしょ？お願。お姉ちゃんを苦しめないで。坊の恥は、坊一人のものじゃないの。きっと、あなた、シャツを脱がされたんでしょ？リボンの付いた、お姉ちゃんが、あなたを守らせる為に着けさせた下着の、そのリボンを見せたんでしょ。あなたは、自分から、背中を手を回して、自分から外してしまつたんでしょ？お姉ちゃんの、折角の苦心も水の泡だったの？あなたは、けろりとしていた。何も感じないの？番台があつたら帰つてくると言わなかった？お医者さんなら良いの。平気なの、あなたは。番台のおじさんと、どう違ふと言うの？お医者さんなら、あなたを見て、何も思わないと言うの。ほかの人はどうでも、あなただけは外しちゃいけないのに。あなたは、リボンを見せても駄目なの！服を着ていなくちゃいけないの。だのに、あなたは、シャツも下着も取るようにさせられて、どうせ、何もかも見られてしまつたのでしょ？醜い、醜い毛の一本一本まで数えられた。百二十六本も。真黒な、黒く光る、細長い毛が百二十六本。あなたは、目を瞑つて、黙つて、一本一本抜かれていた、夢では。病院では？聴診器を当てられたときに毛先の束を、手首で撫でられたんでしょ？もつとひどいことをされた。お節介にも、お為ごかしにも、「心配な物をお持ちですな。ついでに診ておあげましょう。」と、じかに、指先で押され、摩られ、摘まれ、引張られた。何本かは抜落ちて、向うの手に残った。恥をかきながら、黙つて、無表情に、体を、ぴーんと伸して、されるがままに。どうして、そんなことをしたの？お姉ちゃんが、これほど守ろうとしているのに。私は、そんなこととは、露ほども知らなくて、馬鹿みたいに、すっかり安心して、一週間を送った。あなたのバースデー・プレゼントを選びながら、本当に満足だった。あなたを、私が守っている。あなたのお乳を守っている、リボンの付いた、

少しの隙間もない、防護の帯は、私の身がわり。それほど大事に、大事に、お姉ちゃんは、坊を秘し隠している。坊の、まだ見ぬ人の為に。あなたは、その彼の心をもずたずたにするのよ？坊、もしかして、あなた、あの夢に顕れたような事を、もうされたの？初は抵抗しながら、しまいには、無言で犯されていた。そのうちに、又、いつか、お姉ちゃんが、安心しきっているときに、けろりと、何でもないような顔をして、私の心に、爆弾を落して眠れないようにする気なの？ステンレス製の、あの、鈍く光る毛抜で。一本一本引抜かれて。透通る、白い腕に、一本、又、一本と張付けられ。毛の根元に、血が滲んでいる、無理に引抜くから。それを、全部、口に入れてしまう。二の腕が、薄赤く、血で汚れている。それを、口に入れないがら、一本ずつ、数えていかれて。百二十六本。どうして、そのような事をされて、平気でいられるの？坊は女なのよ？綺麗なのよ？お姉ちゃん、あなたを守るために、今までに、随分みつともないことをしてきた。もうへとへとよ。あなたを抱いてお説教したときにだって、精神的に参ってしまった。どれほど、エネルギーを絞ったと思うの。ああ、お茶が欲しい。濃いお茶が欲しい！もう、絶対に、絶対に、見せちゃ駄目！お姉ちゃんだけに見せて良いの。未だの彼だけに見せて良いの。お姉ちゃんも、できるだけ早く見てあげる。坊も、命掛で守らなきゃ駄目！

5 / 3 0 (月) 曇

許した。問詰めるまい。診察がどんなだったかを知ったところで、何も変りはしない。あの子にも常識はあるのだ。羞恥心は、ちゃんと備っている。信じてやるべきだ。

午後四時二十分。仮病を使って、一日、室内で暮している。
もうやめ。

出ていって、抱締めて、思切くちづけをしてこよう。朝から心配して、何度もノックしにくる。二度も、食事を運んでくれた。何処にも出掛けないで、気を使って、音楽だって掛けない。

馬鹿馬鹿しくなっちゃった。隣へ行つて、あの御ちよぼ口に、思切熱烈なキッスをして驚かしてやるんだ。待つてなさい、本物のキッスの仕方を教えてやるわ。せいぜい、ジョージに応用することね。

5 / 3 1 (火) 曇 別行動 a

ちよつと坊、お姉ちゃんをからかわないで。安心させるんなら、早く、そう言つて頂戴。もう、あの子、本当に厭。でも、愛している。吞込んでやりたい位だわ。女医さんなんだつて、まったく男の人に見られるのは厭だから、わざわざ、鶴見の病院まで行くんだつて。「四十才位の、優しい人ですし、全部脱がなくても良いんです。恥ずかしくないですよ。前のボタンを外すだけです。滋子お姉ちゃんも、診てもらつたら。」などと。お姉ちゃんのことじゃないの、坊のことよ！道理で、変だと思つた。あの日は、朝から暑いのに、長袖を着ていったのは、その為ね。てつきり、最後の日だから、上司に挨拶するので長袖にするのか、でなければ、病みあがりの用心かと思つた。何であるにもせよ、これから、そういう所に行くときは、前もつて言つて頂戴。余計な心配をするでしょう。でも、あの子、自分で気にして、ちゃんと、女医さんまで探して用心するのね。それなら大丈夫だ。そういえば、あの子、私に、下着姿を見られたことも知らないのだわ。寝ぼけていて、全然覺がない。あの、怪訝そうな様子からだ、私に見られるのだつて、きつと厭だろう。メンソレータムが分らなかつたのかしら。ばれていたら大変なところだつた。だのに、なぜ、あんな、ひらひらしたシャツが着られるの！本当に。理解に苦しむ。そればかりか、あんな、緩い下着を着けて。馬鹿ね、本当に。頭隠して尻隠さずでしょう。今まで見られなかつたかしら。鎌倉駅では、あの人、きつと覗いていたんだわ、あの慌てぶりは。工場。そうだ、作業着。どんなのだろう。持つて帰ってきたかしら。もっと早く出会つていたかつた。過去が悔しい私が、全部教えて、守つてあげたのに。そうではないか。ないんだ

わね。何を言っているのかしら、私。もん君、過去が悔しい。でも、せめて、未来の彼は、余計な心配をしなくてもすむ。ジョージ君だつて！これからは、もう、絶対に、変な恰好はさせないんだから。お姉ちゃんがさせない。

わたしの伶門

伶門、わたしの伶門、しげ子のもんくん、しげ子は、貴方のしげ子はどんなに貴方を思つてゐることであらう。由加里を愛するやうになつていまさらならず貴方のおほきさいみじさいい貴方のすぐれてたふとい心が知られました高貴な精神あなたの思ひものになれたしげ子はどんなにしあはせであらう、しげ子は馬鹿な女です貴方にふさはしくないでせうか。でもしげ子には貴方が必要です貴方では駄目なのです、わたしはひとめぼれしました、貴方が音楽室に入つてきたとき、貴方を見上げたとき、わたしの運命は定まりましたしげ子は貴方のものになりました。わたしは馬鹿なくせに高慢ちきで負けずぎらひでほんたうに手がつけれないほどでわたしが貴方のものになつたからには貴方もわたしを思つてくれなければ厭でした絶対に厭でした白状します、わたしは、しげ子といふ浅ましい女は、もう貴方が自由が丘にこないやうになつたと先生に聞かされてとはうにくれてしまひました、それで松原先生の名簿を、いけないこととは知りながら盗みみて貴方の住所をこっそり調べて大森までいつてお家のまへで貴方が出てくるのを物陰に隠れて待つてゐた、さういふことがあつたのです。まさか小林先生のお兄さまのお宅と誰がかんがへるであらう。そして追悼式の晩にふたたびあなたを見たときわたしの心の中はただおしはかつてください。ママはわたしがかひわづらひをしてゐると知つてゐました。あまり苦しいので打ちあけたのです、だつて御はんもたべられなくてすつかりやせてしまつたのです。ママはわるい病氣にかかつたのだとお医者に連れていくといふのですよ、ママは、あんた一体いくつになつたと思つてゐるの、いい加減になさい、一目惚だなんて、良い大人のする

ことですか馬鹿馬鹿しい、良いお相手ならいくらでもあるでせうと言つて呆れましたでもわたしはわたしといふ手のつけられないをんなはそれでは駄目なのですいいあひてなんか貴方のほかに一人もゐないのです貴方でなければ駄目なのです。わたしは自惚れてゐますから貴方もきつと私にひとめぼれしたに違ないと思ひました、貴方が入つてきたときのあわてかたで分りました、隣に来てどすんと乱暴に腰をおろしたので分りました、急に話しかけてきました、こゑがてうしはづれで話は突拍子もなくてそして、かははをかくてをかくて見てゐられませんでした、真赤で涙さへうかべて口がふるへてゐました今にも泣きだしさうでした。わたしはきつと一目惚だと思ひました、そしてわたしもさうでした、わたしは高慢ちきで自尊心のかたまりなので決してそんなふうに見えませんでしたけれどわたしの心はそのとき決つてしまひましただから貴方のほかに絶対にゐない。自惚れてはゐてもやつぱり間違つてゐなかつたでせう？それなのに貴方はもう来ない、松原先生はやめたのだといひます。高慢ちきなわたしが電信柱に隠れてお家の窓を見上げたのは一度や二度ではないのですよ、貴方が、しげ子を見てやまひづいてしまつたんだと告白してくれたときわたしの馬鹿な自惚屋はどんなに誇らしく嬉しかつたこととせう。わたしをかはゆいと思つてください。わたしはかはゆいのですよ、ばかのまけぎらひのわがままの（大の）やきもちやきのスポイルドブラットですけれど非常にかはゆいのです自信があります、それも自惚だなんて言はないでくださいな、かはゆくするのはただ貴方のためにさうするのですからだから貴方もわたしを思つてくれなくては困ります、貴方を悲しませたのはわたしがばかだつたせゐです、だつてわたしはなにも知らないお馬鹿さんなんですものもしげ子は貴方のかはゆいしげ子は、いつだつて貴方のかはゆいしげ子でなかつたことはありません。

貴方の

6 / 6 (月) 雨

別行動 a。坊も在宅。坊は、この時間、天気が悪くなければ、出掛けるのを常とする。薄化粧をして出掛ける。ある朝、「お姉ちゃんの口紅を試してみる?」と言ったら、素直に付けたので、さすがに女の子の思ったけれど、それからは、言われなくても、口紅はするようになった。自転車をこいで、図書館に行ったり、博物館に行ったり、テマロを連れて、山手をうろついたり。坊が出掛けているあいだに、私は、ピアノを思切鳴らす。密に思っているのだけれど、あのように頻繁に出掛けるのは、何か、口で言っているのとは、別な用事があるらしい。特に、元町公園、エノキテイ、ブラフ・クリニツクの、あの辺に、坊は重大な関心があるのだろう。お陰で、練習量が、急に増えて、ピアノの腕が上った。

坊の誕生日、キクヤの二階、あのあとでどうなったか。

「来ています、お願です、助けて下さい。」と慌てたかと思うと、背を向けて、テーブルにつつぶしている。真赤になっている。演劇部の皆が下りていったあとも、まだ、同じ姿勢を続けているので、「行っちゃったわよ。今日は、シャンパンでお祝しなきゃ。」と言ったら、恨めしそうな目付でひと言、「ひどいです。」「何がよ。」「全部、滋子お姉ちゃんのせいです。」「行っちゃったのが?」「そうじゃありません。」「何が食べたい?」「あの人よく見るんです。」「よく見にいくってことでしょうか? 学校に。」「違います。」「お姉ちゃんは見にいこうつ、挨拶もしちゃったし。お姉ちゃん、ああいう人がタイプだから。」「分りません。」「何がよ。」「お姉ちゃんの言うことです。」「見にいくってこと?」「そうじゃありません。」「坊は、あの人のどこが良いの?」「知りません。」「全部が良いってことね? 恋は盲目、春はあけぼの、坊の春は今、遅く来にけりキクヤに來けり君聞かずやこれ。」「何を言っているんですか。」「知らない。」「お姉ちゃんは、いつもそうです。」「人の恋の邪魔をしてくれるなっってこと?」「恋じゃ

ありません。」「愛。」と言ったら、「ははっ！」と頓狂な笑声。
「いつ見たの?」「昨日も見ました。テテと一緒に。」「昨日の朝?」「元町公園を散歩させていたら、走って、学校の中に入っていました。」「ジョージ君っていうらしいわよ?日本語が分れば良いんだけど、日本人じゃないよね。いつから思っているの?ジョージ君のこと。」「思っています。お姉ちゃんが、変なことを言うからです。」「お姉ちゃんのせいで好きになったの。だったらお姉ちゃんの手柄ね。坊、あの人にしなさい。お姉ちゃんが手伝ってあげる。」「滋子お姉ちゃんが、そんなことばかり言うからです。私は何も言ってません。」「坊も賢くなった、惚れたのを人のせいにして。いつから惚れたの?」「何か、お姉ちゃんは無理やりです。」「無理やりの恋か。しょっちゅう考えているんでしょう?よく見掛けるようになったのはいつから?」「覚えていません。劇のあとです。お姉ちゃんのお家に行く途中だったり、帰るときだったり。お姉ちゃんのせいです。変なことを言うから。」「坊の言いかたは逆様よ。お姉ちゃんは、坊の考えていることが分ったから言っただけじゃない。間違っていた?」「でも、お姉ちゃんがあんなことを言わなかったら、何でもなかったんです。」「お姉ちゃんが、変なことを言っただけだから、気になって仕方がないでしょう。見掛けの度に知らんぷりするんでしょう。でも、見たくて仕方がないから、テテを連れて散歩に行く。どうじゃ、まだシラを切るか。もはや言逃れぬところと観念致せ。」「お、恐入りました。」「ん、お姉ちゃんにも情はあるぞ。」「というようなことから、段々聞いてみると、はじまりは、私が、いつか、セント・ジョセフの裏で、坊をからかったことに遡る。そのときは、何とも思わなかった。と、本人は言う。ところが、何日かのち、私の所に来るときに、元町公園の石段を登ってきたら、彼が、中程に立っていた。足元を、あちらこちら見回して、何か、角砂糖のような、白いかたまりを拾っていた。坊は、丁度、足元に、ひとかけ落ちていたので、拾って手渡した。向うはびっくりして、拾ってくれたことには、礼を言っただけで、

実は、これは毒物だから、手を洗わなければいけません。」と言われた。坊は、「大丈夫です。帰ったら洗いますから。」と言って離れようとするのに、「いえ、二人で洗いましょう。」と、上の水飲場まで引張っていかれた。そして、「しっかり洗って下さい。」と洗うのを見ていた。ポケット・ティッシュを出して、「拾ってくれて有難う。これを使ってください。」と言置いて、何処かに行ってしまった。それ以来、坊はときめいてしまったというわけなのだろう。

別行動b。坊、隣室。最近始めた英語を勉強中。

さて、坊の恋の行衛は。

坊の、受けた印象では、まったく日本人だと言う。外人の訛はなかった。着ている物も、普通の人と変らない。そう、週末の夕方のことだと、坊は言っていた。だから、制服姿ではなかったのだ。

いくつかの推理。多分日本人だから、「ジョージ」は坪田譲治のような名前。週末の夕方、あそこにいたということは、家も山手。それとも、友達の所にでも行く途中だったか。でも、毒物を持つて？何の毒物だろう。実験にでも使うのか。キクヤでは、多分、坊を見て気付いていなかった。ろくに見てもいないし、恰好が違過ぎて。毒を拾ったのが四月の末あたりのことだとすると、あのころの坊は、野球帽にジーンズ、ごわごわしたセーター、今思うと、おかしい恰好だった。マイルドセブンの手提袋なんか持歩いて。誕生日の日は、本当に女の子らしくて、可愛くて、水色のワンピースだったし、頭は、美容院に行ったばかりで、私が見ても、見違えるほど。手を洗うのを見ていたのなら、怪我也、すぐに分っただろう。坊も気にしていたところ、そつと、ポケット・ティッシュを渡して立去った、それで、ほろりと来たのかな。中々出来るな、バイロン卿。レイモン卿とは雲泥。したがいかならん、あはれなるかなばう！卿はまだ学生なのだ。今度卒業としても、十八才。それは良いけれど、大学は、きつとアメリカかヨーロッパ。卒業でないなら、十

六か十七。坊を気に掛けてくれるだろうか。あの顔だ、セント・モーズや雙葉の子達も放っておくわけがない。これは難しいぞ。助太刀するか。

昨日、東京見物をした。明後日、晴れたらデイズニールランドに行く。

6/12(日)雨

別行動a。今日は、坊も、部屋で勉強だし、私も、ピアノはよして、溜っている事を、思付くままに書いていこう。

まずは、いずれも様最大の関心事、坊の恋は。ひと言で、進展なし。でも、口に出しては言わないけれど、本人は思詰めている。相変らず、朝食後に、テテを連れて出掛ける。というより、私が、「テテの散歩をお願いね。」と言って、月曜から金曜は、毎日出掛けさせる。何処に行くのか、確なことは分らないけれど、きつと、元町公園をうろろするのだろうか。三十分位したら戻って、再び、自転車を出掛けることもあるし、部屋に上って読書することもある。

最近では、ラジオの英語番組を、よく聴いているようだ。天気の良い日は、別行動の時間でも、二人一緒に庭に出て、読書することがある。先週の金曜日だったかしら、木曜日だったかしら、椅子を並べて、本を読んだ。坊は、図書館で見つけてきた、高橋健二訳のフアウトストを読んでいた。読比べてごらんと、義孝訳を持ってきてやったら、そっちが気に入ったと言って、今も借りているから、まだ読んでいるのだろう。坊が部屋にいるときは、なるべく、ピアノを鳴さないようにして、出掛けているあいだけ弾いていた。坊は気が付いて、「あの、もしかして、私のことを考えてくれて弾かないのでしたら、私は、全然気になりません。お姉ちゃんのピアノを聴きながら勉強するのは楽しいので、もっと弾いて下さい。」と言ってから、断ってから練習することにした。ジョージのことを聞いて以来、坊には、テテの散歩を、日に二度させている。二度目は二時四十五分から。セント・ジョセフの下校時間が二時五十五分だと

分ったので。だもので、お茶の時間が三時半になった。かわいそうに、最近、見掛けないと言う。初恋ではないだろうけれど、かなり悄気ている。私に打明けた所為で、一層、思が募出したのかもしれない。

先週の日曜日に、坊を連れて、東京を見てきた。やっぱり面白くない。町全体が青空工場で、殺風景なことといったら例えようがない。外国の観光客が沢山なのはびっくりした。何を見にくるのだろう。文化がなくて、ある物といえば、西洋の模倣で、風情がないことでは、世界屈指の都市なのに。東京駅の煉瓦と、二重橋を見て、二人とも運動靴だったので、皇居を一周した。桜田門も見た。半蔵門も見た。あとは、見る物なし。神田のおそば屋さんに行った。あの界限は、ちよつと、家並が面白かった。それから佃島に行った。風景が、一番面白かったのは佃島だった。草臥れたので、浅草には行かなかった。上野の博物館は、又いつか、別の日に行くことにした。

水曜日にはデイズニールランドに行った。週末を避けて、わざと、週の真中を選んで行ったのに、それはそれは大変な混雑だった。そうだ、それから、東京タワーにもサンシャイン・ビルにも登りにいかなかった。（これは、日曜日の話。）坊は、高い所が苦手なので。東京タワーは皇居前から眺めただけ。エッフェル塔には及ばないと思う。お濠に舟を浮べたらセーヌの気分が出るかしら。それから、暫く忘れていたが、この日、帰ってきて、坊が、又、ちよつと臭うようだった。汗をかいだ所為かもしれない。さいわい、電車の中では、私も気が付くほどではなかった。家に帰ってきて、抱締めて接吻したときに、初て分った。最近、抱締めるときの癖で、私は、坊の首筋に、口を当てる癖が付いてしまった。そのときに気が付いて、あとで、バスタブに、湯を張って、石鹸を入れた。次の日には、もう臭わなかった。

別行動b。今日は一日雨だろう。テテマ口もさぞ不満、昨日

は、野毛山まで、長い散歩だったのに。

デイズニールランドは、L・A.のと変わらないのでびっくりだった。てつきり、ドリームランドのような所に、名前だけデイズニールランドと付けた位のことで考えていた。真中の、白い山がなかったり、全体の見取図が、少し違っていたりするようだったけれど、大きさは、日本の方が大きいかもしれない。坊も、とても喜んでくれたので良かった。「こういう、楽しい所は、生れて初めてです。」と。入園ゲートで”Welcome to this happy place.”と放送が流れて、おかしいと思ったけれど、坊にとっては、正にそれだったのだ。私も、とても楽しかった。L・A.のと同じ、舟に乗って旅する呼物があったのに驚いた。坊は、舟から見えるレストランにいるのが人形だと思って、「良く出来ています、凄いです。」と言うので、私も相槌を打った。あとで、そのレストランで食事をした。「滋子お姉ちゃん、いつも、私を、田舎の子供扱にしてからかいます。」と言って恨んだりした。でも、そういういながら、実は、もう、ほとんど訛がないのだ。引越してきて朝から、晩まで、一緒に暮すようになって、面白いように、坊の言葉は標準語に近付いてきた。私の推測だけれど、きっと、今まで、標準語を話す話相手がいなかったのだ。アパートの友達と同郷で、工場では、一日、黙々と作業するのだとすれば、話す訓練の場がない。人の話を聞くことは聞いていただろうから、あとは、ただ、話す訓練だけが出来ていなかったのだ。朗読のときに、言葉の抑揚が、まだ、少し変だったりするけれど、ズーズー弁特有の響はない。聖書の朗読はやめて、今は、ファウストを朗読している。以前も、一度書いたことだけれど、坊は、最近、ファウストに興味を持っていて、一生懸命読んでいる。理由は明らかである。熟読した文章を読んで聞かせてもらう。色々な役を読分けるから、抑揚の練習になると思う。「マーローのフォースタス博士は読んだの？」と聞いたら、図書館にないそう。でも、ちゃっかり探してはいたのだ。いじらしい。有隣堂に行けば、ペンギン版があるかもしれない。明

日にも、ベティ・クレアズに行つて、坊の靴下を探して、ついでに寄つてみよう。

6 / 13 (月) 雨

雨の日は、そう思うせいか、坊に、元気がないように見えて仕方がない。最近、ジョージ君を見掛けないのだと言う。私が、お節介なことをしたばかりに、けちが付いたのかしら。そろそろ卒業式のころ。もう卒業しちゃったのかしら。ちよつと、もん君、何をしているの、貴方も手伝つて頂戴！貴方の後輩の事でしょう。坊とジョージがデートできるようにするのよ。あの子、自分で思っている以上に好きなんだわ。

もん君、私も大胆になつたものね！今、セント・ジョセフに電話したところ。スクール・オフィスという所に繋つて、恐る恐る、「すみません、そちらの演劇部にジョージさんという方はいらつしやいますか。」と聞いた、そしたら、「演劇部のことは、こちらでは分かりかねますが、名字は何という生徒ですか。」と言います。「名字は分らないのですけれど、四月の劇で、オイフオリオン役で出ていらつしやつた方です。」と言つたら、調べてくれた。ヒロキ・キタノという学生だと言う。ジョージさんと仰るのではないのかと聞返したら、演劇部に、ジョージ・ノロという生徒はいるけれども、天使役で出ていたはずだと。私は分らなくなつてしまった。ジョージ・ノロは第十学年で、ヒロキ・キタノは第十一学年だと教えてくれた。それ以上は、私もどきどきして聞けなかった。いずれにしても、卒業していなくなつてしまふ心配はない。学校は、これから夏休に入ると言つていたから、坊にはかわいそうだけれど、九月になるのを待つのみだ。家が山手だしたら、何処かで見掛けることがあるかもしれないけれど。妙なことを聞いていた。テレビ局の方ですかと。ヒロキ・キタノかジョージ・ノロが、テレビ局と、関係を持つているのだろうか。バイロン卿はゲーノージンなのかし

ら。がっかりだな。それとも、演劇部が、テレビ局と、何かのつながりを持っているのかしら。そう、テレビといえば、昨日、ホロヴィッツのリサイタルを放送したということだ。パパが、今朝電話を掛けてきて、テレビでやっていたから、ビデオに取っておいたと。昨日のテレビ欄を見たら、確にそうだ。テレビがないと、こういうときは損をする。でも演奏が酷い出来だったと。去年も、ロンドン公演を、筑紫哲也と中村紘子の案内で放送したというのに、それも見なかった。音楽どころではなかったけれど。結局、もん君と一緒に行ったコンサートは、シヨスタコーヴィチの一回ね。考えてみれば、私も、あれ以来、コンサートに行っていない。去年の二月だから、一年四箇月振かな。メニューヒンは、貴方が楽しみにしていたのに。ベートーベンの協奏曲は、二度と聴くまいと思っていたのだけれど、坊が、この前掛けていたので聴いちゃった。レコードを、片隅に寄せておいたのが、かえっていけなかった。しかも、とても気に入っちゃって、カセットにも取っていた。出掛けるときなんかウォークマンで聴くらしくて、ラジカセでは鳴らさないけれど。

坊は、このごろ、一生懸命、英語を勉強している。バイロン君のことがあるからとばかりではないようだ。もともと、勉強が大好きで、そのうえ、翻訳小説を沢山読むので、特に、英語には興味があるらしい。中学で習ったあとは、ずっとほったらかしてあったということだけれど、簡単な文なら、少し、ヒントを与えれば読めるし書ける。ナオミと違って、Sally looking for broomstick. She will fly into Tokyo Disneyland with Yoshiko. とは書かない。そういえば、ナオミの英語に泣かされたのもジョージだった！夕食後は、Conversation Book One を使って楽しく英会話が、でなければ、一緒に、音楽を聴いたり、何でもない話をして過す。そういうときも、なるべく英語を使うようにする。”Do you love your big sister, Beau?” ”Very much,

Annie.” How very much?” This very much.” と言つて抱付いてくるのが、寝る前の挨拶になつた。存分に抱締めたあとは、くちづけして、鼻と鼻をこすりあう。癖で、唇を離す前に、少しだけ、舌の先を出して、坊の唇に触れていたのが、坊も、それが、普通の仕方のように思違をして、舌を突出したので、このあいだなんか、舌と舌がぶつかつてびつくりした。私のすることなら、恥ずかしがつたりすることなく、何でも、素直に受入れる。何て可愛い！舌の先に、別の舌先を感じたときは、さすがにはつとして、目を開けたけれど、坊は、かえつて、いつものように目を閉じていた。私の方が、少し赤くなるような気がしたので、見られなくて良かった。でも癪だつたから、”Don't you try that again on any one, do you understand? except on your sister of course and, perhaps, on Lord Byron?” と言つた。賢い子なので、見る見る赤くなつた。でも、それから、舌と舌で、小鳥の嘴のように、ちょこんとつつきあうのが、挨拶の締括になつた。ただ、抑切れないときは、全部、挨拶の最初から繰返す場合なきにしもあらず。坊が可愛くて可愛くて、今も書きながら、涙が出てくる。何とか、バイロンとデートをさせてやりたい。かわいそうに、十九になつて、まだ一度も、そういう、女の子らしい経験がないなんてことがあつて良いはずがない。本当に可愛い顔をしているのに。このひと月で、三キロ増えた。その分だけ、ブラジャーも小さくなつたかもしれない。目標あと四キロ。161センチの50キロ、さしものバイロンも振向かないはずが。バイロンめ、待つていなさい、きつと振向かすから。もん君も何とかしなさい！貴方の妹でもあるのよ。

標準語のレッスンは、以前ほどはしていない。例えば、今日は、このあとで、お茶を飲んだら、一時間か、二人の気分次第で二時間位まで朗読をする心算。でも、ひよつとしたら、テテマ口と遊

ぶかもしれない。ライフ・ゲームをするかもしれない。いつも気分次第だ、夕食までの時間は。それで良いと思っている。私と会話しているだけでも、抑揚の付けかたは覚えられるはずだ。もっとも、そういう私だって、標準語に、それほど自信があるわけではないけれど。とにかく、私ができる位には、坊も、すぐにできるようになると思う。何といつても、耳が良い。英語の覚えかただって、とても早い。"vacation" "every day" "says" "said" "watched" 補講で見ていた子達でも正しく言えなかった語を、坊は、二度聞けば、確実に覚えてゆく。いつも復習しているから早い。それもあるかもしれない。部屋では、いつも勉強しているから、外に出てきたとき位は、息抜いたって構わない。朗読には、聖書はやめた。初は、坊は、文章というものを読んだことがないと決めて掛っていた。だから、聖書を使ったのだけれど、一週間で読んだと言うので感心していたら、実は、物凄い読書家だった。外国の小説が大好きで、特に、ロシアの物を好むようだ。アンナ・カレーニナとか、戦争と平和とか、長い物を、じっくり、丁寧に読んでいる。このあいだは、夜遅くまで、カラマゾフ兄弟を読んでいた。「滋子お姉ちゃんは読みましたか。」と聞くので、読んだことがあると言ったら、すぐに、何か、内容のことで質問してきた。どういう質問だったか、今は思出せないけれども、登場人物の視点と作者の視点が混同されているのではないかというような、とにかく、ちゃんと読まないと出て来ない質問なので、私は答えられなかった。高校にも行かずに、すぐに働きに出なければならなかったのに、そんなふうに、色々なことに、興味を持って努力している坊が、本当に健気で、いじらしくて、涙が溢れてきた。一度なんか、「何でも教えてください。私、一生懸命に覚えます。」と言った。書いていて、又、涙が出てくる。私は、あの子が可愛くて仕方がない。本当に食べてしまいたい位だ。今日も、ずっと部屋にいて、きつと、さつきまで、英語を勉強していたに違ない。今、ラジカセを小さい音量で聴いている。目が疲れたのだろう。ドビュ

ツシーの、五本の指のための練習曲、ベロフ。最近、よく聴いている。今は2時30分、少ししたらお茶の時間だ。今日は玉露にするかな。今朝、生理痛が酷いと言って辛そうな顔をしていた。量も多くて、折角、この前買ってもらった、新しいパンツを汚してしまっただというので悄気ていた。ちつとも悄気ることなんかないのに。今まで、生理の日に使っていたのは捨てさせたのだから。アパートから持ってきたのは、生理の日用もそうでないのも、全部古くて、綺麗なのが一枚もなくて、こんなのを後生大事に使っていたのかと思うと、本当にかわいそうで堪らないから、坊を呼んで、「良い？これ、全部もやしちゃうわよ？レイディーが、こんなのを着けるものじゃないわ？新しいのなら、今度、又、買いにいきましょう？お姉ちゃんも買替時だから。」と言って、裏でもやしてしまった。生理不順になることはないと言うから安心だ。私の方が心配。今は、おむね順調だけれど、狂出したら目茶苦茶。便秘が酷い。もう、どれだけ出ていないか覚えていない。食欲もあまりない。また二キロ減っていた。睡眠は取れているのにな。

6 / 16 (木) 雨

只今8:45。十時に出掛ける。夜8時から、ホロヴィッツのリサイタル。ついでだから、午後は、上野の博物館を見て、何処かで、夕食を取ってから、NHKホールに行く心算。それにしても、8時スタートとは非常識な時間。時間をどうして殺すか、それが問題だ。リサイタルは、あまり期待していない。第一回目は、とにかく聴けたものではなかったと言う。プログラムも、彼が弾くにしては、あまりぱつとしない。ラフマニノフもスクリャビンもスカルラッティも入っていない。謝肉祭とエチュード位かな、聴きたいのは、でも、彼のスタインウェイの音を聞けるのは、それだけでも価値がある。坊には、今世紀最高のピアニストが、日本で、たった二回だけ開く演奏会だから、歴史的な出来事の目撃者になりにくくのと期待を持たせている。何事も楽しまなければ。

この雨では、今日は、法隆寺の展示もないだろう。本館は良い物が出ていてくれれば良いけれど。折角だから、坊に見せてやりたい。秋冬図、松林図、八橋の硯箱、普賢菩薩絵図、平治物語絵巻、仁清月梅の色絵壺、花下遊楽図、あれは京都だったかしら、とにかく、面白い物が出ていてほしい。そうだ、ミイラがあった。あれはきっと面白いだろう。坊は見たことがないわね？エジプトのミイラ。動物園、パンダは、まだいるのかしら。歌舞伎座は、何かやっているのかな。一幕でも見られれば、随分、時間が殺せるのだけれど。

中々うちが催してくれない、待っているんだけれどな。仕事を辞めてから、余計酷くなっちゃった。憂鬱だな、五日分も六日分も詰込んだままで、一日、あっちへ行ったり、こっちへ行ったりするのは。おならは出るのにな。こういうときに限って、電車の中でしたくなったりするから、こういう日に出掛けるのは本当に厭。坊は、毎日出るようで羨ましい。メフィストワルツでも弾いてやるかな。

驚きましたの驚きませんのって、びっくりびっくりびっくり。バイロン卿がいらしていた、コンサートに。三人仲良くなりました。食事までしました。可愛い！何てシャイな坊や。やっぱり、すべてなるようになってる。おめでとう、坊！と思ったら、久しぶりのこの感覚、and now to the pooping closet！ 12:46 A.M.

第六回

2章『己呂武反而』(つづき)(後書き)

編者の天野です。

滋子の原稿により忠実なPDF版はこちらから

<http://dl.getdropbox.com/u/976165/shigeko.pdf>

第七回

2章『己呂武反而』（つづき）

6 / 17（金）

コンサートは聴けたものではなかった。聴いていなかった。それどころではなかった。

ちよつと、興奮して言過ぎたかな。

訂正。初は聴いていたけれど、途中から聴いていなかった。エチュード25・7を弾いているときに、誰かの腕時計がピーピー鳴出して、ずっと鳴りやまない。あたりを見回した。右のななめうしろの方、席数にして二十か二十五位の所に、同じように、きよろきよろと、周囲を気にしている色白の男の子に目がとまった。ダブルらしい、グレーのブレザーに、アイヴィー調の、赤いタイとめかしこんで、髪の毛は、将来禿げること請合の、柔かい縮毛が、こめかみのところで跳返り、眉、鼻、顎の、尖ってきりりと引締った王侯風な横顔は、George Gordon その人、バイロン卿に紛うかたなし。演奏会も終盤だったので良かった。最初から発見していたら、気になって、何も聴いていなかったに違ない。ベートーベンも謝肉祭も、下手な素人を聴いた方がましだった。でも、折角だから、一生懸命聴いていた。バイロン卿が来ていると知ってから、まったく上の空だった。どうやって、彼に挨拶し、どんな話をし、いや、そもそも、彼は一人だろうか。誰か、同伴者はいるのだろうか。両隣は、どうやらそうではないようだけれど、何処か離れた席にいるのかもしれない。色々な場合が考えられる。連がいない場合。連がいて、それが肉親の場合。それが男友達の場合。それがガールフレンドの場合！最後の場合は挨拶せずに、見なかったことにしようか。もしも一人なら。家が山手なら、一緒に帰ることだっ

てできる。そうなったら、何とか一緒に食事をするところまで持つてゆきたい。などなど、私のコンピューターは、あらゆる場合を想定し、計算した。計算に忙しかった。だから、蝶ネクタイにカッターアウエー姿の巨匠が、最後に弾いた英雄ポロネーズなんか、ぼんやりとしが聴いていなかった。ああ、やっているな、変な解釈だな、オクターヴを、あんなふうに、勝手に下げたり、修飾的に付けたしたり、幻想ポロネーズも、さっきのエチュードも聴いていられなかったけれども、最後の曲でも、相変らずやっているな、今の、左手のBフラットは、はったりを超越して愛嬌だな、もしも、可愛いドレスに着飾ったガールフレンドが、うしろの客席から現れて、彼と手を繋ぎ、それを、坊が目撃するとしたら、愛の夢も、幻想と分つて、家に帰ったら、赤いジャケットのホロヴィッツで、お口なおしのコンソレーションDフラットだな、エチュードの3番は、お姉ちゃん弾いて聞かすのかな、修飾なしに。

ところが、彼は一人だった。

巨匠が、アンコールはやらない意味で、鍵盤の蓋を閉じてしまい、袖に退くと、聴衆は、席を立始めた。彼は、まだ座って、プログラムが何かを読んでいるようだった。坊は、生れて初めのコンサートに感激して、巨匠が、もう一度現れるのを待つて、袖に目をやつて、拍手を続けていた。バイロン卿は、どう見ても、連がいるとは思えない。けれど、もしも、何処か離れた席に・・・えい、まよ、もう、ひとりでに、足が、彼の席に向つていた。「今晚は。」と声を掛けたら、彼が見上げた。目を皿のようにして、ひと言、「あー、どうも。」「今日は、お一人でいらつしやったの?」「えー、まー。」「お隣、よろしいかしら。」と言つて、隣の席に掛けた。「私、鎌田滋子と申します。先日は失礼を致しました、キクヤの二階で。覚えていらつしやるかしら。」「はー、どーも。」と言つて赤面。「しよっちゅうお見掛するので、つい。お気を悪くなさらなかった?」「いいえ!」とびっくりしたように打消した。「私、貴方のこと、しよっちゅうお見掛しているんですよ?学校の裏なんか

で。「はー。」益々赤くなりながら、そのくせ、目はそらさない。「劇も見にいったのよ?」「え?」「フォースタス博士、とっても良かったわ?」「ええ?」と絶句して、表情は描写不可能。でも、目はそらさない。坊の方を振返ったら、信じられなそうな顔で涙ぐんでいる。こつちに来なさいと手招した。小さく、首を振って、目で懇願した。「貴方、お名前は、何て仰んの?」「北野です。」「下のお名前は?」「ひろおきです。」「私、鎌田滋子です。」「言いながら手を差出した。彼は当惑する様子だった。握るべきか、握らざるべきか、それが問題だ。恐る恐る握った。分厚い、良い手をしている。「今夜は、これからどちらへ?」「帰ります。」「どちらへ。」「寮です。山手です。」「私達も山手なのよ?宜しかったら一緒に帰らない?」坊は、すぐそばの通路に立っていて、其処から先は入ってこようとしない。彼女も真赤。水色のワンピースが何とも可愛い。私が、「私達」と言ったので、彼は、坊の存在を知った。驚くらしくもなかった。水飲場の子だとは気付いていない。でも、真赤なのを見て、何か感じただろう。「お連がいらっしゃるの?」「いえ。」「じゃ、是非。」「立って、通路に出た所で、二人は対面した。「こちら、清水由加里さん。私のルームメート。こちら、北野ひろおきさん。ほら、よくお見掛する。」「途端に、二人ながら、傍痛いほど照れた。私まで赤くなるようだった。

坊が引張るので、ごめんなさいと待ってもらって、一旦、化粧室に入って作戦会議。「お姉ちゃん、助けて。私、一人で帰る。」「馬鹿ね、何を言っているの。もう、二度と、こんなチャンスはないわよ?とぼとぼしてちゃ駄目でしょ、しっかりしなさい。」「どうしよう、ねえ、お姉ちゃん、どうしよう。」「ビッグ・シスターに任せておきなさい?坊も、馬鹿みたいに赤くなってないで、喋るようにするのよ!変に思うでしょう?」「出てみると、彼は、ぴんと背筋を伸ばして、宙を見ていた。

続は、次回のお楽しみ。今日も、これから、可愛い坊やと、三人でデート。これからエノキティへ。楽しいな。11:32

6 / 18 (土) 曇 10 : 51 P . M .

面白いほどの巡合せ。本当に、坊は、彼と結ばれるのかもしれない。何だか、そのような気がする。どこから始めようか。書くことが有過ぎて迷ってしまう。

まず、彼の出身。伏見。名前は喜多野拾遺。本当は「しゅうい」なのに、気に入らないから、「ひろおき」と読ませているのだと言う。かなり変っていて可愛い。今十七才、九月に十八だそうだが、ベリック・ホールで寮生活をして、週末は帰っている。今週から、夏休に入った。本当なら、すぐにも帰るはずなのに、ホロヴィッツのコンサートがあつて、何日か居残っていた。更に、私達の相手になってくれる為に、昨日帰る予定を、一日延ばして、今日の夕方、京都に帰っていった。私と坊とで、新横浜まで見送に行った。月末に、又出てくる。友達と約束があるらしい。

坊がNHKホールで、泣きださんばかり、あれほど動揺したのは、話を聞いてみれば無理もなかった。坊は、ずっと、何も言わなかったけれど、キクヤのあとでも、一度、彼を見た。私が、「最近、見る？」と聞いても、嘘をついて、見ません見ませんと言っていたけれど、実は、一度見掛けた。彼は、女の子と一緒にいた。見るからに可愛いハーフの子だった。彼と、ハーフの子と、それから、もう一組、男の子と女の子が、四人で元町を歩いていた。この目撃事件のことは、昨日になって、エノキティに行こうとしているときに、「お姉ちゃん、やつぱり、私、行かない。」と言って打明けた。「そんな弱気でどうするの！ガールフレンドかどうかも分らないじゃない。」と引張っていった。私が正しかった。恐らくバロン君は嘘をついていない。あとで、ロシータで食事をしたけれど、出抜に、「ひろおき君、このあいだ、女の子と元町を歩いていたでしょう。私見ちゃった。」とぶつけてみた。咄嗟に、坊は、窓の方を向いて、墓地の上空を眺めて泣きだしそうな顔になった。でも、良い工合に、彼と隣あわせに座っていたので、彼に見られずに

すんだ。彼にも、そのような余裕はなかったけれど。どきまぎするのに忙しくて。ビッグ・シスターは、そこまで計算した上で、質問を放ったのである。案の定、ガールフレンドでも何でもなかった。卿の激しい弁明によれば、彼女はpromの相手で、今まで二回しか会ったことがなくて、promの当日に初て紹介されて、セント・モーズの人で、それまでは会ったこともなくて、だから話をしたこともなくて、promの相手がいないから友達に頼んだら紹介された人だけで、本当にその日に初て会った人で、元町を歩いていたのはpromに来てくれたお礼に食事に誘っただけで、しかも友達と一緒に四人だったしで、その後一度も会っていないくて、電話も掛けていない。「由加里ちゃん、デザートは何にしましょうか。」うぶな卿も、何か様子がおかしいと感じなかったはずは。それにしても、シニアーでもないのに、promとは何事だろう。生意気なということとは、もん君！あなたもprom！しまった、今まで考えてもみなかった。ちよつと、答えるのよ。夢でも何でも良いから出ていらつしゃい。初恋の方ってpromのお相手？激しく弁明して頂戴。

6 / 20 (月) 雨

希望が見えてきたとあって、坊も、好きですと言うようになった。私に対して、気持を隠さない。「ひろおき君を、どう思う。」と尋ねたら、照れながらも、「素敵な人です。でも良すぎる。」「何が。」「全部。」「それはまた。」「誤解です。そうじゃなくて、私には良すぎます。二枚目過ぎます。」「坊が贅沢よ。」「お姉ちゃんと言いました。男は顔じゃないって。」「そうよ。二枚目だろうが我慢なさいよ。」「顔だけじゃありません。ひろおきさんは上流階級です。」「笑っちゃう。考えかたが1883年よ。本人よ。ひろおき君本人を、どう思うの。」「素敵な人です。」「お姉ちゃんが正しかったでしょう？坊、ひろおき君が好きでしょう。」「好きです。」「好きで好きで仕方がないでしょう。苦しいんでしょう。」

う。「はい。」「お姉ちゃんが付いているから、大船に乗った心算でいなさい？きつと、ひろおき君と、二人きりでデートさせてあげる。苦しいときは、お姉ちゃんに抱付いてごらん。お姉ちゃんもママにそうした。坊は、二人きりでデートしたいでしょう。」「できない。お姉ちゃんが付いてきて。」「それも1883年よ。彼にキスされたいでしょう。」「ははっ！」「坊は、誰かとキスしたことがある？」「あります。」「あるの、そんなの。お姉ちゃん以外とよ？」「ありませんでした。」「ひろおき君もないわよ？お姉ちゃんの直感。きつとない。楽しみだな。ファーストキス同志ね。」「ははっ！」「坊がお姉さんなんだから、坊からしちやいなさい。ひろおき君からは、きつとしてこないわよ？」

ジョージというのは綽名だった。物理を教える先生で、演劇部の顧問が、そう呼始めた。理由は私と同じだった。面白そうな先生。キクヤで見た、口髭の紳士がその人で、凄い教養人と言う。何でも、部員の一人一人に、文学的な綽名を付けているそうだ。古今東西、重要な書物で、読んでいない物を挙げるのは難しく、"Do you know this book, sir?" とでも尋ねようものなら、心外千万という面持で"Well of course I know the book. How uneducated do you think I am? I read it when I was twelve." と返ってくる。母国語がロシア語のくせに、英語も、フランス語も、ドイツ語も、同じようにできるといふ、前世紀の貴族が化けて出てきたような人だ。何とかスキーという、偉く難しい名前だったけれど、伶門が、ファウストを習った先生というのは、あの先生ではないかしら。あるときなど、歌右衛門の隅田川がすばらしいという話から、能の話題になって、「お前は、関寺小町のテキストを、どう思うね」と尋ねられ、返答に困った。「なんだ、京都人のくせに、三老女のことも語れないのか。情ないやつだ。」と叱られた。作曲もすれば、ピアノの腕も大したもので、このあいだ、ちよつとスカルボを

弾いて聴かせたとやら。私も会ってみたいな、そういう人なら。なぜかしら、一介の教師でいることに満足している。綽名が、ジョージになったのは、舞台上で尻餅をついた晩からだ。それまではナルキッソスで、更に前はデミアンだった。ゲーテ座で転んだのは、まったくの事故で、私は、演出だと思ったのだけれど、そうではなかった。確に、二日目の、セント・ジョセフのときは、袖に飛込んで退場した。私は、それを、演出の急変更と解釈した。前日は、皆が、どつと笑ったので、それで変えたのだと。そういえば、あの先生、坊の隣に座っていたけれど、何か、低い声で、呪の言葉を呟いていたのは、観客に対してではなくて、ひろおき君に対してだったのか。

聞けば、ゲーテ座の舞台裏で、メフィストワルツを弾いていたのもひろおき君だった。幕間に、あの曲を流すのは、ひろおき君の提案で、顧問に言ったら、「では、お前が弾け。」と言って、楽譜を渡された。ところが、尻餅をついたときに、右腕を捻挫したので、弾くには弾いたけれど、ろくに腕が動かせなかった。だから、二日目はレコードを掛けたのだと言う。転んだ晩、先生に、「何をやっているのだ。あの場面で転ぶやつがあるか。今より、お前はジョージ・ゴードンだ、左様に心得よ。」と言渡されたけれど、なぜ、自分がジョージ・ゴードンになったのか、さっぱり分らない。あまりジョージ、ジョージと呼ぶものだから、このあいだ、「先生、なぜ、僕がジョージなんですか。」と聞いた。すると、サドーニツクな笑みを浮べて、"Your education has been sadly neglected!"と、にべもない挨拶だった。気の毒なので、私も、ひろおき君には、何も言っていない。本人は、又、そのうちには、新しい綽名が付くだろうと言っている。さすがに坊だ。あの転倒を、直観的に、失敗と見抜いて、いつか、「オイフオーリオンはみつともなかった。」と言っていた。私は、観客の中で、ただ一人、演出の意味が分つたと天狗になっていたのに。

昨日、昼過に、ひろおき君を、家に招いた。NHKホールで話掛けたときは、非常にシャイに見えた。実際にシャイなのだけでなく、ピアノのこととか、ホロヴィッツのこととか、色々話すうちに打解けていった。彼は、大のホロヴィッツ・ファン。出ているレコードで持っていないものはないと言う。私が、「ホロヴィッツなら、アンダンテ・スピアナートと華麗な大ポロネーズが好きだ、それから、展覧会の絵とか、ハンガリアン・ラプソディーの二番とか、皇帝コンチェルトなども圧倒的だ。」と、最近聴いたレコードを褒めたら、ひろおき君は大喜して、「同感です。四十代のころの彼は人間離れています。結婚行進曲の変奏曲は、どう思いますか。」と尋ねられた。そういうものがあるのだろうか。My musical education has been sadly neglected. 私が、京都の人間と知って、一層、親近感を抱いてくれるようだ。お茶を飲んでから、二人でマ・メール・ロワを連弾した。坊はソファアに掛けて聴いた。それほどうまくはないけれど、音楽が大好きで、そのことになる、シャイなところは消えてしまう。プーランクのコンチェルトを、少しやってみたけれど、これは合わなかった。私が、アップライトを弾いた。ひろおき君は、連弾に慣れていない。サイト・リーディングも得意ではない。今度来たら、白と黒をやるうと約束をして、楽譜を持っていた。

二度目のお茶を飲んでいるときに、部屋があいているから、今度出てきたら、是非、泊りにいらっしやい、そして、朝から晩まで連弾しようと言ったら、急に取澄ましたようになった。「お姉さん二人と、同じ屋根の下じゃ、お母様がご心配なさるかしら。」といじめたら、「いえ、僕は、姉が三人もいますから平気です。実は、友人の所に宿泊する予定なんですよ。」「一晩位良いじゃないいらっしやいよ。」「でも御迷惑でしょうから。」「由加里ちゃん、良いでしょう？それとも迷惑かしら。」「と、固唾を飲んで成行を見守っていた彼女に問掛けると、小さく「いいえ。」と言って下を向いた。このときも、二人並んで座り、私は、ひろおき君と向いあつ

ていたので、彼は、坊の方を振向かなかった。「堅苦しく考えないで、アメリカンにいきましようよ。一日だけルームメートになるの。ひろおき君さえ良かったら、一週間でも二週間でもウェルカムよ？勿論、お皿洗係をやってもらうことになるけれど。」「右腕の捻挫が、まだ治らないので、皿洗はできないと思います。」「じゃ、三日間しか泊めてあげられないけれど、それで良い？それとも、お友達を連れてきて良いわよ？お皿を洗ってもらうの。」「いいえ。」「そう、ひろおき君一人になっちゃうのね。いつにする？」「友達の所に行く前でも構いませんか、30日の日で。」「歯ブラシだのタオルだのは持ってこなくて結構よ？パジャマだけは持ってきてね？うち、男物はないから。お母様には、私がお電話しましょうか。ピアノの合宿だって。」「いえ、お袋は、僕がいなくて清々すると言っていますから。僕が、何処で、何をしようかと、彼女は口出しません。」そのあとで、夕方になって、新横浜駅でのこと、初に坊と、次に、私と握手して、顔を赤くして、ずつと下から、ひたすらに見上げて、「由加里さん並に滋子さんと知合えて、僕は光栄です。荒っぽい男仲間と騒ぐのと違って、非常に有意義な時間を過すことができました。これから、帰れば、馬鹿な姉どもの相手をつとめさせられるんです。二週間後、又お目に掛れる日を楽しみにしています。どうか、僕を、一人の弟のように扱って下さい。」うふ。うふふふ。本当にタイプ。抱締めたくなっちゃった。全然、男の子みたいじゃなくて、野蛮じゃなくて、品があつて、気取つていて、澄ましている、女の子みたいで、ぶきつちよで、ぶつきらぼうぶつていて、伶門そっくり。顔はそうでもないけれど。

6/21(火) 大変な雨で目が覚める 4:55 A.M.

あと、何があつたかしら。色々あつて、何から書いて良いやら。

そう、シュウ君の、本当に素敵なところ。坊と私のあいだでは、ひろおき君はシュウ君になった。コンサートが終つて、NHK

ホールの出口で、私のうしろに隠れて赤くなっている坊を突出して、
「由加里さんのこと、覚えていらっしゃるかしら。元町公園の水飲場で、手を洗わせて下さったでしょう。」と言ったら、「ああ。」と気が付いて、すぐ、手に目をやった。坊は、左手を、右手で隠した。その、又、動を見ていたシユウ君の、悲しいような、優しい表情が忘れられない。帰の電車では、シユウ君を中にして、三人並んで掛けた。私は、彼に、積極的に質問するのだけれど、彼は、消極的にしか答えない。「いつから夏休なの?」「今週の火曜からです。そのかわり、彼は、坊に話掛けた。「あのときと、着ていらっしゃる物が違うんで、全然分りませんでした。おすまいは、あの近くですか。」「はい。滋子さんと一緒です。」「暫く沈黙。「あのとき、拾ってくれて助りました。あとで、おなかが痛くなりませんでしたか。」「はい、大丈夫でした。」「長い沈黙。「ご趣味はありますか。」「特に。」「嘘をおっしゃい。由加里さんは、音楽も好きだし、読書もするわよ?最近、英語の勉強も熱心ね、なぜか。」「シユウ君は、手を見た申訳なさに、一生懸命話掛けているのだ。元町のデニーズで、食事をしたけれど、其処で、意を決したように、「由加里さん、手の怪我はどうされたんですか。」「と聞いた。いつ聞こうか、今が良いか、もつとあとにするか、でも、今晚中に聞いてあげなければいけない、何遍も、何遍も口に出そうとして、出切れずにいた。到頭、震える声で尋ねた。「僕なんか、小さいときに、空手ごっこで、瓦を割って、此処、何針も縫いました。」「と、袖をまくって見せた。確に、縫痕が、盛上ったよう。「このあいだも引繰返って、同じ所を捻挫したんですよ。」「と言って、ジョージ・ゴードンいわれの *bruisse* を摩った。何て誠実で優しい子でしょう。あれで、私、愛しちゃった。二人だけだったら、そして、シユウ君が女の子だったら、私、きつと抱締めて、あっちこっち接吻していた。涙を堪えるのに骨が折れた。絶対に、あの子を弟にするんだ。頑張る、私。(もん君+滋子+シユウ君+坊)Ⅱ1。

坊が起出している。毎朝、えのさんを聞く。ああ、可愛いな、

坊は。何て可愛い子でしょう。色が白くて。髪が真黒で。目がくりくりして。鼻がなだらかで。すぐ赤くなつて。胸がぺちゃんこで。最近、太つてきて、ちよつと膨んできたようにも。ほつぺたも。何か、理由があるのかな。うふ。可愛い。どれ位膨ますのかな。そのうちに食べてしまふかもしれない。早くデートさせてやりたいな、可愛いシュウ君と。二人は手を繋ぎます。シュウ君は、左手にキスします。それから、あの、バイロンの顔で、愛を囁きます。坊の、可愛い可愛い口にキスします。二人ともファースト・キスです。二人は真赤です。うふふ。何を食べましょうか、今朝は。まずは、苦いお茶で目を覚ましましょう。

6 / 24 (金) 雨

ゆうべ、又、しつこい人が訪ねてきた。何度目なのかも、もう数えてない。いつもは、封筒を、門に挟んで帰る。居留守を使うから。封筒は、すべて、開封されず、生ごみと一緒にになるか、この前は、坊と私の下着とともに、灯油を掛けられ、焼かれる憂き目を見た。昨日は、あかりがついているものだから、中々諦めなかった。でも、いくら待っても、誰も、応対に出ないし、テマロには吠えられるし、結局、帰っていった。何処かで待伏していたかもしれない。坊も私も出掛けなかったから、待伏損だつたらうけれど。そう、辞めたあとで、しつこく電話を掛けてくるので、電話番号を変えたのだっけ。彼は、坊が同居しているのを知っていて、坊を、何度かはつかまえようとしたらしい。坊は自転車だつたり、テマロを連れていたりで、うまく振切つた。テマロは、初から、直感的に、彼を嫌つて、彼を見ると唸る。女の子に似合わぬ獰猛さで唸る。昨日も、それで、漸く退散。rrRuff.

そうだ。シュウ君が持っていた毒物。あな恐ろしや、ヒ素だった。演劇部仲間の、一人、とんでもない先輩がいて、その彼は、例の、サドーニツクな笑みを浮べる何とかスキー先生に憎まれて、何かにつけ袖にされるので、来る役来る役が端役兼プロンプターと

いう損な役まわりばかりさせられた拳句が、ユライア・ヒープの名まで贈られた。こっちは、確、何たらキス君とか言っていたつけ。どうせ、六月になれば、そのナンタラーキス君は卒業だから、ナンタラスキー先生とも今生の別といえはいうようなものの、思えば、随分と俺も苦杯を嘗めさせられたものだ、ついては、告別の辞に代えて、一服盛って進ぜたい。青酸カリでは、苦味が利きすぎて本当になっちゃおうし、トリカブトでは、薄口にすぎて返杯の快味に乏しい。ヒ素位が、丁度頃合だろうというので、夜深く、セント・ジョセフの実験室に忍入って、大きなかたまりを窃みだした。懷に掻きいだいて走持去り、居に帰るや、室を閉切って、薄暗いランプの陰、サターニツクな笑みを浮べて、妖しく白く輝く塊を、胡麻の擂鉢に掛けていた。得意な料理の腕をいかして、ビーフ・シチューの隠味にというのである。そこに、シュウ君が来合せた。ナンタラーキス君は、自分の考付いた皮肉な接待プランが面白くてたまらない、肝を潰して聞くシュウ君に、ぬけぬけと語った。それを、又、先輩の目を掠めて奪返してきたのが、坊が拾うのを手伝った、白いかけらだった。翌日、ドクターなにがしという、化学の先生が、物凄い形相で、実験室中をひっくりかえしていた。One man's meat stew is a maid's love potion.うふ。

シュウ君は、このような工合に、興が乗ってくると、よく喋るし、話も面白い。坊なんか、耳にすること耳にすることが珍しいものだから、つい、身を乗出して聞入ってしまう。偶然、シュウ君と、目が合ったりすると、俯いて、ただ、同席者の礼儀で耳を傾けるのだと繕っているけれど。ナンタラーキス君は、初、シュウ君を恨んだ。今では感謝していると言う。シュウ君が、ナンタラーキス君に言った、然ればで御座る、貴兄は異国びとであられる故、万一、事の次第露顕せば、ビザ手形御取上の上、国外追放も免れぬ所と相成ろう、特製牛鍋の一件、我等両名が間、些なる秘め事と致すべきか、方々御他言無用、下世話に申すおん墓場迄の御覚悟を、と。忠

言に及んだ甲斐あつて、ナンタラーキス君も、いつとき邪神に魅入られた我が身を深く愧じ、卒業した今は、正教師の門を叩き、明暮懺悔に専心する日々。求法の生活に入ったとかや。Ouf.

マールウを上演するに当つて、部員同志、エリザベス朝言葉で会話する訓練を積んだので、変な癖が付いて、今も抜切らない。どうしても、遣取が時代劇になるのだと言う。本当かどうか。坊も、つい吹出さずにはいらなかった、澄ましていなければならないのも忘れて。でも、演劇部のみんなは、エリザベス朝に凝つてしまつて、来年は、ジュリアス・シーザーをやるのだと意気込んでいる。そしたら、シユウ君、また忠言に及ぶんでしょね、きつと、こんなふうに。うふふ、愉快な学校だこと。Therefore, good brother, be prepared to hear: Men at some time are servants of their words. The fault, dear brother, is not in your gods, but in your tongue that you ground sesame. And not only seeds. The arsenic, too.

6/27(月)曇

一昨日、パパとママが、又、不意にやつてきた。いつも、電話もなしにやつてくる。晴間を利用して、テテマロの散歩に、坊と出て帰ってきたら、パパは、パーラーで、パイプを燻らして、迷惑なことだった。ママはキッチンで動回っていた。坊のことは、手紙で、およそ知らせてあつたし、電話での挨拶はすんでいたけれど、対面は初てだった。パパもママも、当然、坊が、ひと目で気に入った。パパの迫力に押されて、最初は呆氣にとられていたけれど、結局、パパに懐かない人はいないから、坊も、すぐに笑わされていた。私が、あまり、うしろから抱付いたり、くちづけしたりするので、ママは、由加里ちゃん、迷惑でしょう、この子、図体ばかり大きい

甘えん坊で、年下の女の子を見ると、ぬいぐるみと勘違する癖があるのよと言って呆れ、パパは、久しぶりだ、私も、滋子様にキスして頂きましょうかと言って、髭だらけの頬を出したので、パパの胸に飛込んだら、溜りに溜っていた涙が溢れてきて、声をだして泣いてしまった。ガーバー神父に、背中を撫でてもらった日から二箇月間も溜っていた涙だった。思えば、伶門がいなくなつてから、息がとまるほど抱締めてくれる人がいなくて、でも、パパにしてもうるのは、顔を見ると、やっぱりかわいそうで、自分から遠慮していた坊が見ているのも忘れて、おいおい泣いた。坊は、定めし、不思議な光景を目のあたりにしたことだろう。でも、分つてほしい、私は、両親が、誰よりも大好きなのである。私は、溺愛されて育つた。この事を、誰にも隠す必要はないのである！

パパもママも、同じように愛している。生んでもらつて、おむつを取替えてもらつて、小さいときからお風呂に入れてもらつて、どうして、初経があつたからといって、パパをきらいにならなければならぬのか、どうして、パパと、腕を組んで歩いたり、お風呂に入ったり、一緒に寝たりするのが変態ボリーなのか、全然分らない。永久歯に生替つたときに、両親がきらいにならなかつたように、初経後もきらいにはならなかつた。それを非難する人こそ野蛮人で、無品性で、きつと、心に、厭なものがあるのだ。私は、ママが大好き、由加里が大好き、それと同じように、パパが大好きなのだ。でも、学校では、白い眼で視られた。自分は、何とも思っていないことだから、「ゆうべ、パパの背中を流していたらね、」と言ったら、友達が、「ええ？」と、非難の声をあげた。そのあとからは、いつの間にか噂になつていて、「ねえ、本当？」と聞いてくる子が、沢山いた。私は、何も恥ずかしくはない。いつもありのままに言つたうちのお風呂は広いから、私が入っているときに、お父さんが入ってくることもあるし、お母さんが入ってくることもある。反対に、私から入っていくことだつてある。一緒になつたときは、背中を流合う。親子なんだから、何をこだわる必要があるのと。でも、中に

はこんなことを言う子もいた。「お父さんに触られるのも厭なのに、一緒にベッドで寝る位なら、そのまま、眠から覚めない方がましよ。お風呂に入るなんて、死んだってできない。十六にもなって、お父さんとお風呂だなんて、あなた変態じゃない、けがらわしい。」それ以来、ポリーの綽名がついた。今だに、何の意味なのかも分らない。どうせ、テレビ漫画のタイトルか何かだろう。知りたくもない。テレビのない家庭に育って良かった。「ねえ、ポリー、ゆうべは、お父さんとおねんね、お母さんとおねんね？」私は、そういう子を無視するようにした。先生まで、ポリーさんと呼ぶ先生がいた。みんなは面白半分だったけれど、私にとっては、消せない記憶だ。ポリーと言われるのは好きではなかった。パパとママまであざわらわれているようで。でも、私は、学校なんかより、家族とか、教会の方が、ずっと大事だった。人を、変な名前と呼ぶ学校を、下品で価値のない所と見限っていた。だから、家では、何も変えなかった。変えでもすることか、前よりも、一層甘えるようになった。二人は、どんなことがあっても、私を愛してくれる。学校で、何があるうと家に帰れば、厭なことは忘れて、パパとママと、教会の子達と、ゲームをしたり、本を読んだり、お風呂に入ったり、ピアノを弾いたり、同じベッドで寝るのをなぐさめとした。

小学五年生のときだった。パパは、それまでは、滋子は可愛いな、本当に可愛い、ほかの、どの子と比べても、一番可愛い顔をしている、心が優しい、正直だ、滋子は良い子だと言って喜んでくれたのが、胸が膨みはじめると、パパは、お湯に漬りながら、優しいような、悲しいような目で見るようになった。それが、私は大好きだった。そのときから、パパは、別の言葉で褒めた。滋子は美人だ、すばらしい美人だ、ほかの、どの子と比べても、一番綺麗だ、滋子は優しい子だ、滋子は正直な子だ、滋子は良い子だと、一緒に漬りながら、ふた言目には、そんなことを言っ、私を、良い気分にした。ママはそうでもないけれど、パパは、どんなときにでも褒めることしかない。きっと、本当に、私を世界一だと信じて疑

わないのだろう。私も、パパの言うことを、そのまま信じた。私は美人で、優しくて、正直で、良い女の子になったと。高慢にもなったかもしれないけれど。性教育も、学校で習うより先に、お風呂で、パパの膝上で、すっかり習ってしまった。パパは、それを、美しい思出のひとつにしてくれた。なぜ、私の胸が膨んできたのか、私がこれから、どんなに綺麗になってゆくのか。近いうちには、下から血が出るようになるけれど、何にも心配することはない、痛いかもしれないけれど、悩むことは全然ないよ、滋坊が生れてきた日から、パパは、それを、ずっと心待にしているんだから、その日はお祝いよう。体の変化は、ひとつひとつが、滋坊を、美人にしていくんだから、喜びなさいと。パパのちんちんを、ちよつと触ってごらんと言って、滋子は、一番初、パパの此処から出てきた。だから、此処は、ちつとも汚い所ではない。パパの此処がなかったら、滋子だって存在しなかった。だから、おしっこは、少しも汚い物ではない。うんちだって汚くなんかない。汚い汚いというのは嘘について、皆を騙しているだけだ。騙して考えないようにしている。滋子には、本当のことしか教えない。滋子は賢い。自分の頭で考えるのだ。滋子は、此処から出てきて、それから、ママのおなかの中に入った。十箇月間、朝も昼も夜も大切に大切にされて、ママの中から出てきた。滋子が出てきたときの、わしの気持が分るか、なあ、滋子。滋子は、パパとママの、何よりの宝物だ。滋子の為になら何だってできる、滋子の為に生きていっても良い位だ。分るか、なあ、滋子と言ってうしろから抱っこして、涙を流しながら、背中一面に髭のちくちくする口でくちづけした。鏡に向って脚を開かせて、しっかりと見えるようにして、中に指を入れるようにさせて、将来、滋子の旦那さんは、滋子を抱締めて、ちんちんを使って、此処に、赤ん坊の種を植えてくれる、滋子の旦那さんだけがしてくれる、最高に尊い行為だ、何しろ、おなかに、滋子の分身を作ってくれるのだ。十箇月したら、赤ん坊は、又、此処から出てくるのだ。だから楽しみにしていなさい。そして、滋子は、旦那さんに沢山抱締めて

もらって、沢山赤ん坊を産むことだ。滋子は賢いから、男の人が、此処に、ちんちんを入れることが、どういうことかは分ったな。自分の頭で考えれば分るな。ちよつとも厭らしくはない。ちよつとも恥ずかしいことではない。でも、厭らしい厭らしいと、変なふうに言つて笑う人がいるかもしれない。おしつことうんちが汚い汚いと言う人だっているかもしれないなど、ありのままに、分易く教えてくれた。その美しい一回ですんでしまった。そのあとで、学校で、同じことを、何遍も何遍も、酷く分りにくく教えた。先生は、絵を使って、難しい言いかたをして、皆にひやかされながら、照れたり、ニヤニヤしたりしたけれど、子供心に、何て変な教えかただろうと思った。気の所為かしら、性教育を受ける度に、皆は、自分の体が悩の種になってゆくように見えた。きつと、下品で馬鹿らしい教えかたが災するのだ。私は、絶対に誤魔化さない先生についたから、全然悩まなかつた。学校では、オナニ、オナニと言つて、ひとり空想して、自分の体を弄ぶ癖がついている子もいれば、ボーイフレンドと、現に活動している子が何人もいて、しよつちゅう、ひそひそ話をしていた。そうなるのも、下品な性教育を施したからに違ない。そして、そういう子が、一番、私を変態ポリーと言つてからかつた。私には、オナニ祥子さん、オナニ登志子さん達こそ、変態者に思えてならないのに。

パパの言ったことが正しかった。学年が上つても、大人になつても、パパに植付けられた自分が、パパをきらいにならなければならぬ理由は、ついに見当らなかつた。プールの季節になれば、腕の下に、黒子があつて、自分でするのは危いからと、剃刀を当ててくれたけれど、それも、自然に生えている物を、本当は、必要だから生えているのに、剃つてしまうのは間違っている、でも、皆がそうするのだから、滋坊一人が、ここが黒かつたら、変な目で見られる、しかし、滋坊は、そのままにした方が、ずっと綺麗だと言うので、水着にならないときはそのままにした。言われてみると、自分の目にも、ずっと綺麗だった。今は持余すほどだけれど、手を

加えない。坊も、そのままにほったらかしているのは良いけれど、鎌倉に行った日は、腕を上げる度に見えてかわいそうなので、グリーン車に乗せた。それからは、坊に着せる物は、襟だけではなく、袖もしまる物を選んでいく。そうすれば、わざわざ、坊の体に、不自然な細工をしなくてもすむ。性教育にしても、これにしても、どんなに、世の中が間違だらけで、パパが正しいか、疑うべくもなかった。剃刀を滑らせながら、こんなに綺麗に生揃ったものを、なんでわざわざ、勿体ないと言いつつ、それでも、いつも、滋坊は美人になるぞ、今から楽しみだ、自分の目に狂はないと言った。言われる度に、自分でも、綺麗になってゆく気がして嬉しかった。体型の変化を、パパは、目敏く見付けて、その都度に、ママと喜んでくれた。滋子は、子沢山の体付になってきた、名前どおりや、早くお嬢さんを見付けて、学生結婚でも、何でも良いから、沢山、孫を生んでくれと。ママと、箱根の温泉に入りにつけば、ママは、いつも、私の裸を褒めた。うしろから抱っこして、耳許に、そっと、小さな声で、滋子ちゃんの裸は、誰よりも綺麗だ、胸だって、ママよりも大きくなりそうだ、滋子ちゃんはパパとママと宝だ、滋子ちゃんもこんなにも綺麗なものを授ったんだから、決して、自分を安っぽくしちゃ駄目よ、滋子ちゃんを、こうする資格がある人は、滋子ちゃんを選ぶ、将来の旦那さんだけよ。その人には、うんと可愛がってもらって、沢山、子供を生ましてもらいなさい。パパはあんなことを言っているが、慎重に選ばなくては駄目だ。心が大きくて、パパみたいに、滋子ちゃんのことなら何でも分かっていてくれる人を選ぶの。そういう人以外に、近付けては駄目よ。滋子ちゃんは頭が良いから、滋子ちゃんの体を目的にして近付いてくる人は、すぐ見分けられるはずねと。理解してもらえと思う。私の自尊心とか、過剰なまでの自信は、こういうところで育まれたのだ。でも、私は、いつも、そうして、私を良い気分になさせてくれる両親が、何よりも大事だった。アメリカから帰ってきて、久しぶりに、パパの背中を流しに入っていったら、いつになく照れて、何や、滋坊でも、目の遣

場に困るなど言って、目を背けた。でも、そんなのは最初だけで、滋坊は芸術だ、誰その油絵より、滋坊の方がずっと綺麗だ、こうなってくると、旦那さんだけに一人占さすのが勿体なくなってくる、ゴヤにでもルノアールにでも見せてやりたかったわ、ほんまにと、いつも、仕事から帰ってくると、背中を流してあげるのを楽しみにしていたパパなのに。お嫁に行く前に良く見せてくれと言って、いつも、悲しそうな目で見つめ、美人や美人や、滋坊はほんまもんの美人やと言って、ママと一緒にになって喜んで、息がとまるほど抱締めたものなのに、かわいそう。

分ってほしい。私と両親の関係はそういうものだった。私は、両親と同じものなのだ。両親の体内から出てきたのだ。母親を嫌ったり、父親を疎んじたりすることなんか考えられない。どうして、私が変態ポリーであるものか。天に唾するのと同じではないか。同じ屋根の下に暮して、同じ風呂には入るな、同じベッドには寝るなと言う方が不自然ではないか。夜は、ママと寝ることもあれば、ママとベッドを交換して、パパに抱いてもらって寝ることもあるのは子供のころからの習慣だ。学校でからかわれようが、変えなどするものか。大きくなっても、ずっと続いた。気が苛立っているときとか、不安なときとか、何となく満されないときとか、ママに抱かれるよりも、パパに抱締められる方が効果的だった。風邪で熱を出したときには、いつも、メンソレータムを塗ってくれるのはパパだった。見も知らぬ医者になんか、体を見せるのはお断だから、健康診断はいつも狡休して、そのために、又問題になったりもしたけれど、パパなら、ちつとも恥ずかしくはなかった。私のことを、何でも知っていてくれた。そうだからといって、ママよりも、パパを愛したのではなくて、ただ、パパは、熊のように毛むくじやで、大きくて、布袋腹なのが頼もしくて、そのくせ、私が知っている誰よりも優しい、心の綺麗な、本物の紳士なので、落着かないようなときには、パパに甘える癖が付いていただけなのだ。ママも大好きで、パパにしてもらわないときは、ママに剃刀を当ててもらうし、おかえ

しに、私が、背中も流してあげれば、頭だつて洗つてあげる。私は、そういうときには、うしろから抱付いて、自分を育ててくれたおっぱいの重みを、両の掌に感じ、ママ愛している、大好きと言って、背中に頬擦するのが、無上の喜だった。

学校で苛められた、苦い経験から、教会では、知られないようにしていたけれど、パパは、ああいう、大きな人だから隠したりなどしない。又、知らないところで噂になっていた。U・S・から帰つてくると、男の人は、しきりに、交際を求めてきて、そのくせ、必ず、最後には、「あの事」を持出す。滋子さん、お父さんから離れて下さい、僕は、考えるとやりきれないなどと。ママとの関係は問題にしないで。パパも気にしないで、淋しいことだけれど、風呂に入るのだけは、もうやめにしようかと言ったりした。でも、私は、あんな人より、パパに愛してもらいたい。私は、パパが、誰よりも大好きと言って、かえつて、毎日一緒に入るようになった。

「滋子は美人だ。滋子は優しい、良い娘になった。」と言つてもらう方が、誰に、何を言われるよりも自信になった。みんなみんな、私とデートする人は、パパとの関係を、良く思わなかった。私は、それならそれでも別に構わない。でも、伶門だけは別だった。彼は、私が一目惚したのだから。彼に嫌われたくない。何が何でも分つてもらう。いずれ知れることだから、自分から言った。すると、彼は、もう、誰かに聞かされていた。全然気にしないと云った。パパと、むしろ、どんどん仲良くしてほしい、パパにならちつとも嫉妬しない、僕は、その話を微笑ましく聞いた、いかにも滋子らしくて良いではないか、外出するときは、もつと腕を組んで歩いて、人目など気にせずキスしたら良い、滋子を愛することは、滋子のお父さんとお母さんを愛することだよ。彼はそういう人だった。やっぱり、私が選んだ人、私が一目惚に惚込んで、私をぞつこんにさせた人。伶門とは、そういう人なのである。

パパも大喜して、小さな彼を、家に連れていったら大変、抱締める、キスする、断つても断つても、食べさせる飲ませる。決つ

てどんちやかさわぎ。面倒臭いことは良いから、早く結婚してしまえ、早く、孫の顔を見せてくれる、初孫は男の子にしてくれよ、男の子だったら、滋坊みたいに、手に抱いて、自分で風呂に入れてやりたいからななどと。伶門君、近頃、滋子以上の娘は、中々いるものじゃないぞ、氣立の良い、出来た娘だ、親の口から言うんだから間違ない、それに、此処だけの話、凄い美人だ、浮気をする気なんか全然失せてしまう、この私が保証する、体を鍛えておき給えよ、滋子は、そんじょそこいらの女とは勝手が違うからな、そんな痩せっぽちで大丈夫かね、君、何しろ、このグラマーだ、英文法じゃないぞ、ええ別嬪だと言うておると、お馬鹿さんで磊落なことを言うて、私を赤くさせた。パパがかわいそう。ママがかわいそう。でも、私は幸なのだ。後から後から涙が出てきて、おいおい泣いた。パパは顔中にキスして、相変らず、滋坊は美人だ、そろそろ、パパのところへお嫁に來なさいと慰めてくれた。お姉ちゃんの顔を見にいこうかと、あとで、坊と一緒に、洗面所の鏡を前にしたときは、こんな顔を、ガーバー神父にも見せたのかと、悔しさ半分、おかしさ半分の泣笑をした。そして、坊が窒息するほど坊を抱締めて、顔中にキスした。小さな声で、「お姉ちゃん、ヤニ臭いよ。」

6 / 28 (火) 曇りみ晴れみ

土曜日のこと。

ママは、鯖寿司と、わざわざ、雲母漬を買ってきてくれた。

残念、坊は、じんましんが出るので、鯖が食べられない。急遽、鰻屋さんに電話を掛けたけれど、来るまで、湯葉のお吸物と、茄子ばかり、ぼりぼり食べて、あとは、チーズとかハムとかサラダで凌いでいた。

両親は、坊を氣に入って、パパなんかは、酔つてくると、いつもの、お馬鹿な冗談を大声で連発して、家中に、笑顔を飜させた。坊は、パパと並ぶと、本当に子供みたいで、いつもより、一層可愛らしく見えた。こんなことなら、鰻寿司にするんだった、今度はそ

れにしよう、由加里ちゃん、鰻は大丈夫かいと聞いたが、丁度、前にハムが出ていたので、坊は勘違した。御飯にハムをのせるんですかと尋ねたときは、大笑をして、そうだよ、中華街に行つてハムを買つてこよう、早速、今晚やつてみようと言つた。坊は、鰻を知らなかった。鰻に似た魚だと教えると、坊は、パパを恨んで、滋子お姉ちゃんとそっくりなんですねと言つた。そうそう、滋子の顔は私似だ、母さん似じゃない、私は、こう見えてのとおり、ハンサム・ガイ、ハンサム・ガイといつて、ハマのメリケン・レイディーに、始終追つかけまわされたんだぜ、こちらにおわすミス・ノブコ嬢に見初められてハートまでかつさらわれたときは憎まれたもんじゃん、
「ノブタコに生捕られたハンサム・ガイは、とんだ食わせものだったじゃん。」つてね、どうだ、分るか、わはは、由加里ちゃん、どうだ今のは、滋子、え、久しぶりにさばさばした、わはは！と、そんな鰻のぼりの調子なので、残の三人はウィンクしあつていううちに、蒲焼が来た。由加里ちゃん、うちに遊びにきなさい、厭いほど鰻を食わしてあげる、なるべく早い方が良い、由加里ちゃん、いつ来るか、いや、滋子、このまま一遍歸つてきたらどうか、由加里ちゃんを連れて明日一緒に帰ろうという展開になつた。相変らず、言うことが藪から棒で愛しちゃう。何て良いパパでしょう。何て素敵な人。伶門と良い勝負ね。娘でなかったら、どっちを選ぶかしら。ママは幸だ、そんなハンサム・ガイを生捕にして。それにしても、ノブタは、パパも酷いわね！どうしよう、又泣けてきちゃつた。パパ、愛している！ママ、愛している！由加里、愛している！もん君、一番愛している！忘れてた、シュウ君、貴方も愛しちゃつた、愛している！五人で十分。私は満足、幸。ほかは要らない。へへ森田協太郎、もう来ないで頂戴。ゝゝ

それで、京都に行く話はどうなつたか。「テテマロがいるでしょう、それに、来週は大切なお客さんが来るから帰れない。」と。夕方、まださつき食べたばかりなのに、聘珍楼に行こうと言出しで、勿論パパが。タクシーを呼んだ。さすがに、ハムは買つて歸ら

なかったけれど。

宵山には、必ず、由加里ちゃんを連れてきなさいと言って、日曜日の昼過の新幹線で帰っていった。投票には行くんだと言って、忙しく引上げていった。坊も私も、政治には興味ゼロだから、そんなものには行かない。坊には通知が来たかしら。住所変更させないと。

6 / 3 0 (木) 晴 1 0 a . m .

さあ、いよいよ今日ですよ。今日、可愛い可愛いシュウ君が来ますよ。坊は、朝から落着かなくて大変です。何しろ、今晚、当宿におとまりですの、おほほほ。私も落着きません。パパ以外で泊る男性は初てなんですもの。そわそわ、そわそわ。どうしまししょうでも、シュウ君は男性というより、坊やと言った方が良いわね。こんな物を書いている場合じゃありません。さつき京都から電話がありました。もう、新幹線に乗って、こっちに向っているのです。どうしまししょう、どうしまししょう。1時半には着きますよ、きつと。

私、どんな顔で迎えれば良いかしら。きつと赤面しちゃうそう。坊とシュウ君が見合うところなんか、見ていられない。どうしまししょう。私も惚れているのかしら、きつと、多少。大丈夫よ！でもほんのちよつと惚れちゃったかな。もん君の千分の一位。でも、それ位じゃないと、私の大切な大切な坊とデートなんかさせられないでししょう？もつと惚れたかな。百分の一位かな。だって、あんまり可愛くて、小さくて、色が白くて、優しくて、ジェントルマンぶっていて、そのくせ、まるでプリンチペ様みたいに澄ましていて、とにかくタイプなんだもの、仕方がないでしょ？焼いている？焼け、焼け。どうして最近出てこないのよ。目がシュウ君の方に向いちゃうぞ。出てきなさい。ゆうべなんか寂しくて、ベッドに入って泣いたんだぞ。もん君のことを考えて、もん君だと思って、枕を抱いて寝たんだぞ。様みる。何してんのさ。私を放っておく気か、君は。今日は思切って抱締めちゃうかしら、シュウ君。このあいだなんか、本

当に、ぐつと堪えて、握手でとめたけれど、堰が切れたら、何をするか分らない。きつと、彼が窒息する位抱締めて、額に何発もお見舞するわね、きつと。私って、そういうところがある。いじらしいなとか、可愛いなとか、健気だとか、感激すると、もう、いつの間にか頬擦しているんだもの。そんな気にさせる男の子、シユウ君だけ。私、よつぽど惚れているな。どうしよう、どうしよう。もつと惚れちゃいそうだな。今日はきつと赤くなっちゃうな。私、愛しているからな。でも、大丈夫。伶門の愛しかたとは違うもの。ちよつとだけ同じかな。おおい、焼いてるか。早いとこ止めた方が良さぞ。私、止らなくなっちゃうぞ。ひよつとしたら、キスしちゃうぞ。様みる。どうする、伶門君。君が悪いぞ。ここに凄い美人がいるんだぞ。中々いないぞ、こんな美人は。君の為にみんな断ってんだぞ。知っておろう、わらわがグラマーを。英文法じゃないぞ、ええ別嬪だと言つておる。でも、君はそういうことには興味がないか。英文法の方が。そうだったな、情ないやつだ。君みたいな男は初めてだ。たぞ、英文法でない方に興味を示さなかったのは。でも、そこが好き。愛しちゃった。だから出てこーい。出てきやれ。抱いてたべ、抱いてたべ、ついでに食べて、体に入れて、ずうつと出すな。ひとつになつてたべ。わらわはひとつになりたい。抱いてたべ。抱いてたべ。食べてくれると言ふに。ひとつになつてくれる。入れて、出してくれるな。なぜ出した。恨むぞえ。なぜ食べぬ。持つていつてはくれぬ。わらわは馬鹿を見たぞ。わらわばかりではない。パパもママも。良いか、泣いているのよ？私はこちらを書きながら泣いているのよ？ねえ、もん君。紙が涙で濡れているのよ？見ている？こんな可愛い女がほかにいるの？答えなさいってば。どうして黙っているのよ。私をこんなに泣かせて、美人が又台なしでしょう？もん君、私を愛しているのよ、何を言っているんだろ、馬鹿だわ、私愛しているに決っているわ！愛している、愛している。私ももん君を愛している。一番愛している。誰よりも愛していると言ふのと同じ義なり。貴方もそろそろ出てきなさい。面と向つて言つて頂戴。そ

したら、私のハートは又貴方にかつさらわれて、私は貴方の生捕よ？大丈夫、落着いてきた。もん君はいつも私の上にいるものね。大丈夫。でも、さっきは危かったぞ？もう少しで、大声を出して泣くところだったぞ？私の大声なきを聞いたことがないだろう。何しろあのパパ譲だからな。家が引繰返るぞ？坊が驚くだろうぜ、へへ。おい、聞いているか、伶門君。滋子という女は一筋縄ではいかないぞ。しっかり手綱を締めて掛れよ。むふふふ。持てかたが半端でないことは知っておろう。何しろこの顔だ、この裸だ、ま、そんなよそこいらの女とは勝手が違う。君はそう思わぬかな、え、むふふ。子供だつて五人や六人は軽くいけるぞ、この腰を見なさい、え、赤ん坊生産機だ、え、むふふ。怖気付いたな、お主、その瘦せっぱちでは勝負にならぬと見て逃出したか、え、だがな、探そうと思えば、かわりはいくらでもいるぞ、え、中には、二枚目もいたぞ。森田、おつと、あいつは良いや、あいつはどうしたつて願下だ。おれは持てるんだぞ、分っているだろう、おい、君。バイロン卿にして、ちょっとお辞儀をすればあのとおりだ。ちと、今日はからかつてやろうかな。いや、からかっているんじゃない。あの子のことを考えると、私変になっちゃう。タイプなのね、自分で思っているよ。目があつたときから何か普通ではなかった。どうしよう、どうしよう、もうすぐ来ちゃう。きつと赤くなるな。ばれたらどうしよう。逃げちゃうかな、逃げるな、きつと。こんな大きなお姉さんがおつかぶさつてきたら逃げちゃうな。私が小さくなれないかな。何でこんなにでつくなつちやつたんだろう。パパのせいね。ママも大きいし。無念。遺伝だから言つても仕方がないか。でも、私はOK・よ、おちびのバイロン君、いらっしやい。駄目駄目、おちびだなんて。そんなの関係ない。とにかく素敵。彼は気にするかな、こんなにでつかくて、年上で、いくらええ別嬪だつて彼には通じないだろうな、あんなに澄ましちゃっているから。彼も英文法の方だな、きつと。だから惚れちゃうんだ、私。もうええ別嬪でもないか。でも顔だつて坊に負けていないぞ。駄目か、でかすぎらーな、いくら

なんでも。あいつ何センチだ。65もないな。何とか伸びないかな。もう止ったかな。身長なんか関係ないんだけどな、私は。でも、目方だつて大分勝っているぞ、これは。こんなに摘めちゃーな。仕方がねーや、赤ん坊生産機なんだ、こつちゃ。じゃ、駄目だ。あのちびめ、窒息するな、きつと。でもいとおしいな、抱締めたいな、キスしちゃいたいな、どうしようかな。どうしようかなつて、あんた、何考えてんのよ、あの子は坊の物でしょう！駄目駄目、絶対に駄目。でも好き。どうしよう。本当に惚れちゃった。本当に愛している。彼じゃなきゃ駄目。ざまあ見る。悔しかったら出てこい。お前が悪いぞ、え、もん蔵、もん助、このぼん助。何をしているんだ、だから言わないこつちゃん、惚れちゃったじゃないか。どうしてくれるんだ。おれはまだ24だぞ。一生後家を通すのか。おい。どうしてくれるんだ、まったく。赤ちゃん、貴方の赤ちゃん、私の赤ちゃん、欲しい。産ませて。ああ、どうしよう、又涙が出ちゃいそう。おい、何とか言え。ざまあ見る。私が窒息する位抱いて、キスしろ。できぬと申すか、や、これ、ぼん助、種籾をよこせ。それも出来ぬと申すか。では仕方がない、ひろおき様に乗りかえるとするか。彼の赤ちゃんも可愛いだろうな。彼がまだ赤ん坊だ。可愛い。欲しいのかな、彼が。どうしよう。本物になつてしまふぞ、これは下手をしたら。もう十分の一位かな、もつとかな。とにかく、私はあの坊やが好きで好きで仕方がないのである。相当なもんだな、これは。どうすべーよ、ほんどうぬ。おらは惚れちゃっただ、惚れちゃっただよ！好きだよおお！喜多野拾遺。喜多野拾遺。素敵。優しい子。優しい子。何て優しい子。可愛い子。食べちゃいたい。どうしよう。これは恋煩じゃないか。何のことはない。正真正銘の恋煩である。おい、ぼん助、聞いておるかあ、コイワズライをしているのだぞ、お前の滋子、可愛い可愛い滋子がコイワズライだぞ。それで良いのか。何とかしろ。お前のとくと同じになつちやつたぞお、もう知らないぞお。どうしよう。もう来ちゃう。どうしよう。でも好き。もん君。ああ、パパと行っていれば良かった。いや、

違うな。正直になれ。彼が来るから行かなかったんだ。何で、私って痩せつぱちにはかり煩っちゃうのかな。でも、可愛いんだもの。品があるんだもの。十分の一じゃないぞ、これは、100%になっちゃってるぞ。ほら、だからなっちゃうた。もう私は彼のものになっちゃいました。Done. 完了。こんなことを書いてちゃって良いのかしら。私のこと、どう思っているかな。相当以上に厚かましい、変なお姉さんだと思っていやしないかしら。品のないことを言っちゃったな。下品なお姉さんだなんて。本当はそうではないのに全部お前のせいだぞ、ぼん助。どうしよう。又無理やり自分のものにしちゃうのかな。厭だな。坊はどうするの。駄目駄目、坊も愛している。坊は妹だ。彼とは兄弟のようにするんだ。展開がおかしいヒギンズは置いてけぼりを食うんだ。でも厭だな、もう置いてけぼりは。厭だ厭だ。私は彼が欲しい。鎌田拾遺。もん君、何とかしてどうするの、私。実現不可能よ、第一。彼はまだ十七じゃない。まだ子供よ。そうだ、そうだ、まだ子供じゃないか。でも、抱締めた。キスしたい。愛している。私のものにしたい。どうしても彼じやなきゃ駄目。ああ、あれは一目惚だったんだわ。何て私は馬鹿なんでしょう。ずっと坊をだしに使っていたなんて。そんな馬鹿な。そんなことはない。どうして坊をだしになんか。私は坊を愛している。でも、一目惚だった。彼が赤面するのを見て、私は彼のものになっちゃったんだわ。どうしよう。来たらどうしよう。もん君。坊にばれそう。もう知っているのかもしれない。知っているんだ！きつとそうだ。だから、あんなに遠慮するんだ。かわいそうに。あんなに赤面したり、否定したり。あれは、私の心を見抜いて、気兼ねていたんだ。そんなことが分らないなんて！今は彼女も惚れている自分でもはつきりそう言っている。私がそうさせたんだわ。馬鹿。馬鹿よ、まったく。どうしてそんなことを。ああ、もう分らない。でも、はつきりしている。私は彼が好き。息苦しいほど好き。それが今分るなんて。Come to me, little George, my beloved. Well done, M

ephristo! A lady's boy, eh? She
's been dancing to your tune a
long. どうしよう、どうしよう。本当に来る。でも愛
してもらえるかな。愛してもらいたい。ばれたらどうしよう。ひろ
おき、私のものになって。

7/1(金) 2:05 a.m.

ひろおき。私のひろおき。私の拾遺。拾遺の滋子。喜多野拾
遺。愛している。好きなのではない。愛している。何度か、貴方と
心が通じあう気がした。私を思ってくれるの? どうしてこんなふう
になってしまったのかしら。苦しい。この恋は叶わない。叶うはず
がない。私じゃ、貴方が惨めなもの。私は汚い。汚れている。貴方
は清らか。でも、私は欲しい。貴方が欲しい。抱締めたい。顔中、
頭中、首中キスして、私のものにしたい。なつて。私を抱いて。細
い白い腕で抱締めて。お互に窒息しましょう。抱かれない。抱いて、
抱いて、抱いて。抱締めたい。キスしたい。ひとつになりたい。い
とおしい。いとおおしい。愛している。どうすれば良いの? どう
にもならない。この恋は叶わない。でも欲しい。どうしても欲しい
貴方が欲しい。泣きそう。息ができない。頭が変になりそう。もう
狂っている。助けて。でもこのままでいい。このままがいい。狂っ
ていたい。でも苦しい。苦しい。いとおしい。喜多野拾遺。喜多野
拾遺。鎌田拾遺。私が喜多野滋子になる。パパも許してくれる。し
て。喜多野滋子にして。何でもします。下働でも良い。抱かれない。
愛してほしい。貴方じゃなきゃ厭。貴方に抱かれない。通じて、こ
の思。貴方に抱かれない。赤ちゃん。欲しい。赤ちゃんを産ませて
貴方の赤ちゃん。それだけで良い。あとは要らない。要らない。
貴方も欲しい。ああ。そんな。でもそれじゃパパが惨め。でも今以
上に惨めなんてない。どうしてこの私が赤ちゃんを生めないの? そ
んな。生きていたくない。惨め。赤ちゃん、赤ちゃん、赤ちゃん、
欲しい。赤ちゃん欲しい! 恐ろしい。怖い。赤ちゃんがいらないなん

て。死にたい。死にたくない。厭だ。赤ちゃんも産まないのに。神様産ませて。赤ん坊を産ませて下さい。厭です。絶対に厭です！赤ん坊。お願い。私の赤ん坊。こんな目にあうなんて。私が。地獄です。どうしてあのとき。罰だ。神様の罰だ。でも産もうと思えば産める。自信がある。プライドが許さない。できない。でもひろおきなら。そうだ。彼なら分つてくれる。彼ならかわいそうに思つて哀んでくれる。必ず。純粹に哀んでくれる。純粹な目。彼しかいない。でも彼は知らない。言う。言う。白んできたら。私が部屋に行く。そして貴方の顔を見て、目を見て、口を見て言う。キスさせて。キスさせて。キスキスキス。そのとき、誰も何も言わない。貴方も私も。そして私は貴方を私のものにする。キスで。できるか。できない。己に克てない。この恋は叶わない。種だけ頂戴。種だけ植えて。あとは要らない。大切にします。厭。そんなけだものみたいな。でも赤ちゃん。赤ちゃん、赤ちゃん、赤ちゃん。彼でなくても。厭！絶対に厭。けがらわしい。それこそけだものだ。私はひろおきの赤ちゃんでなければ産まない。彼の赤ちゃんが欲しい。彼が欲しい。赤ちゃんも要らない。彼だけでいい。抱かせて。貴方を抱かせて。抱きたい。私の赤ちゃんを産ませて。欲しい。欲しい。貴方が欲しい。貴方の赤ちゃんが欲しい。私の赤ちゃん。思よ通じよ。喜多野拾遺に、私のこの思、通じよ。隣に眠る拾遺の思になれ。寒々とした部屋に眠る拾遺の思になれ。鎌田滋子は夢魔にだつてなる。なっている。呪わしい体。でも愛させて。思が通じて私を抱くようにさせて。私に種を植えるようにさせて。私のものにして。私も彼のものになる。ならせて！でなければ生きていられない。私は役立たずの肉の塊。醜い醜い肉の塊。けがらわしい。けがしてしまった。死んだ方がましだ。生きている価値がない。私は彼に愛されなければ価値がない。彼の赤ん坊を産まなければ価値がない。由加里。かわいそうな由加里、可愛い由加里、私の由加里、大事な大事な由加里。あなたをどうしたら良いの？お姉ちゃんを恨まないで。厭。憎んじや厭恨んじや駄目。三人で暮せれば。そんな夢みたいなきができたら。

あなたはひろおきと結婚して、お姉ちゃんを産むの。あなたも産みなさい。坊になら焼餅を焼かない。坊もお姉ちゃんもひろおきの赤ちゃんを産むの。二人の赤ちゃんをひとつにして育てて結婚は坊に譲る、坊が奥さんになりなさい。お姉ちゃんは女房役。それが一番。そんなことができたなら！坊、どうしよう。お姉ちゃん、あなたに罪を作っちゃった。ごめんね。許して。こんなことになるなんて。お姉ちゃん思ってもみなかった。でも、ひろおきはあなたを恋している。ひろおきは優しい人、情深い人。あなたを見る目で分る。悔しい。でも坊なら我慢する。彼はあなたを恋しているのよ！照れて、よそよそしくしているけれど。私とばかり喋るけれど。心はあなたにあるのよ！辛い。朝が来ないで。でも愛されたい。愛したい。私も愛されたい。私をだしにしないで、ねえひろおき君。厭だ。泣きたい。私はふられちゃうのね。いい気味だ。様みろだ。今まで散々ふってきああがつて。思知れ。厭！ふられたくない。厭だ。彼は私のものでなくては厭だ。キスさせて。貴方にキスさえてきたら。起きているのね。眠れないのね。分る。私の思が跳返ってくる。貴方の夢に入って行かない。貴方は由加里のことを考えて、恋に苦しんでいるんだわ！悲しい。泣きたい。由加里も起きている。分る。眠っていない。貴方を思っで起きている。そして、私に気兼ねして、やる瀬なくて、やる瀬なくて、枕を濡している。苦しみました、今夜は。三人で。苦しみぬくのよ、眠らないで。今夜は誰も誰も。

第七回

2章『己呂武反而』（つづき）（後書き）

編者の天野です。

滋子の原稿により忠実なPDF版はこちらから

<http://dl.getdropbox.com/u/976165/shigeko.pdf>

第八回

2章『己呂武反而』（つづき）（前書き）

編者注：以下に示す下書きのときは、原本の体裁を検索画面に反映させるのが最も困難なところ。波括弧の使い方は今までと同様だが、何せここではそれとは別に挿入句が用いられている。山括弧＜＜の中に入れることにしよう。但し、挿入句の中に更に二次的な挿入句がある場合、初めの一次的な大挿入を二重の山括弧《》であらわし、その中へ二次挿入＞＜を入れるものとする

第八回

2章『己呂武反而』（つづき）

ハヒロオキ ヲ ひろおき君

昨日はハハとまりにハハ来てくれてありがとう。ハハ寝苦しくなかつた？ハハ>眠れなかつたんじゃない？<実はハハ私ハハ>わたし<も。いやだつたでしょう？ハハお姉さん二人とハハ>お姉さん一人、おばん一人と<ひとつ屋根の下で寝るなんて。何事も経験よ！僕ハハちゃんハハも知らない女の人に付いて行っちゃ駄目よ？可愛い坊やをかどわかす悪い女>の人<が沢山いますからね。ないんて。>怒つた？<ひろおき君、ハハ私ハハ>わたし<のこと、変なおばんだと思つているんでしょう。何て品のない困つたおばんだらうつて。そんなふうに思わないで？<ハハ頂戴、ハハお願い。ハハ本当ハハ>ほんとう<は、こう見えて、けっこう優しくて上品なお姉さんハハなのよ！ハハ>なんですよ！<That's right、こう見えてのとおり、>まだ<お姉さんなのです、ハハまだ、ハハわたしは。《としを言っちゃおうかな！。ハハ貴方ハハ>ひろおき君<だからハハ言つてもハハ>教えてあげても<いいかな。でも、当ててみて？いいえ、I am no longer a teenager、needfully said、ハハ貴方のハハ>ひろおき君の<むつつ上です。おばんですね、もう、きつと、貴方から見れば。だから、ハハもう少しハハ行儀よく>しているつもりなのに、<ハハしなければいけないのに。ハハ《ハハそれがハハ>どうしてでしょう、>貴方の前、いえ、<ひろおき君の前だとハハわたしのいけないものハハ《悪い>ところ<ハハものハハばかり》がハハ出てハハ>あらわれて<しまうの。そうだからといつて、わたしハハまでハハをハハいけない女とハハ>悪く<思わな

いくださいね。これに懲りずにまた遊びにきて下さい。>どうぞ、どうぞ、<また近いうちに。>今度までに上品なお姉さんに戻って見せます。<

ひろおき君、>ありがとう<。有難う。昨日は。<きのは。<。優しくしてくれて。連弾のとき。に背中に手を回してくれた。の<ことです。ああいうことはよくあるの。だから心配しないで？。そうです！こんなにでーっかい図体をしていても、じつは、弱い乙女なのです、なーんて。へもう、私、連弾は貴方としかできませんね。ああして起してもらわなかったら、そのまま気を失うことだってあるのよ？実は。へへ本当にうれしかった。だから、助りました。<貴方のへの手の優しさ。>お心遣いを、わたし、へへずーっと。>決して<忘れません。

ひろおき君、>あのね、<ひとつお願いがあるの。これはわたしからするお願い。由加里ちゃんは何も知らないこと。由加里ちゃんと、一回だけデートしてやって頂けないかしら。迷惑に思わないでね？。へへそれから、決して、>決して、<こんな押しつけがましいお願をするために泊ってもらったんじゃないのよ？それは、絶対そうじゃない。わたしは心からひろおき君とへへ仲良く。友人に<なりたかった。音楽の話をしたり、連弾したり、レコードを聴いたり、それから、毒物精製に凝ったりする愉快なお友達の話を聞かせてもらったり、貴方とならへへ本当に楽しいへへことが。思い出が。沢山へへできそう。>つくれそう<。本当に、本当に、わたしそう思っている。<。へのよ？。だから、これから、しよっちゅう遊びにきてくださいね。《由加里ちゃんとへへ滋子お姉さん。>しげ子<がお待ちしております。》

それで、デートのことなんだけれど、へへぜひぜひ承諾して頂けないかしら。話せば長くなるけれど、由加里ちゃんは本当にいじらしくて、あんなに素直で良い子なのに、生立が幸ではなかった。あの子、修学旅行に行ったこともなければ、男の子と話をし

たこともないの。あんなに可愛いのに、十九才になつて、男の人とデートをしたハハ、手をつないだハハこともないのよ？ハハそして、ここだけの話だけれど、ひろおき君に恋しちゃっているらしいの！どうか助けて。ハハ素敵な夢を見せてやって頂けないかしら。＜一回でいいから、ハハ手をつないでハハ＞一緒に＜歩いてやってほしいの。

それからね、あの子、ハハ貴方が好きなんだけれど自分からは言出せない。分るでしょう？ハハ＞とても内気なの。分るでしょう？＜だから、貴方から誘つてやって？どこまでも勝手なお願でしょう？でも、貴方だから、わたし、＞わたし＜貴方を＞心から＜尊敬しているから＞。だから＜お願ハハするのハハ＞してもいいと思つたの。ハハおばんハハ＞ハハしげ子ハハおばん＜の図々しい要望を聞入れて＞やって＜ハハ下さらないハハ？そして、貴方ハハの方からハハ＞も何でも＞仰つてね＜ハハ言つてくださいハハ。わたし、どんなことでも聞くわ？＞ほんとう＜ハハ本当ハハよ？

この一件、我等両名が間、些なる秘め事と致しましょうね！いっぺん会つてくださる？由加里ちゃんのいない所で＞、できたら段取を決めておきたいから。ハハお電話ください。ハハ＞電話をくだハハさるわねハハさいね。＜待っています。

Yours >ever<

第八回

2章『己呂武反而』(つづき)(後書き)

編者の天野です。

滋子の原稿により忠実なPDF版はこちらから

<http://dl.getdropbox.com/u/976165/shigeko.pdf>

第九回

2章『己呂武反而』（つづき）

7/2（金） 0:30

行ってしまった。私の人。いつ会えるの？いつ電話をくれるの？待てない。死にそう。会ってくれるかしら。会ってくれなかったら。早く電話をちょうだい！お願い！私、苦しくて死にそう。私嫌われるわ、きつと。見られた顔じゃない。ぶす！吹出物まで搾えてあの綺麗な顔、彼の美しい顔に、美しい目に、見せられない。ぶす！ぶす！ぶすぶすぶすぶす！どうしてこんなときに限って。こんな惨めな思をするなんて。恋のときめきなんか微塵もない。恋じゃない。生地獄よ。そうよ、この恋は地獄だわ。叶わないと分っている。でも、覚めたくない！彼が欲しい！どうしても欲しい！伶門ではなかった。ママが正しかった。私は大馬鹿者だ。こういう感覚を知らずに一目惚だなんて。本当にポリーちゃんだ。よく言ったものね、ポリーちゃん、おねんねポリー。何も知らないで。十七才の子で知るなんて。恥ずかしい。穢らわしい。彼にも坊にも顔向できない。何度赤面したことか。彼の顔がまっすぐ見られなかった。厭らしい。こんな私を知ったら、彼はどう思うだろう。私じゃない。体が勝手になことを、私に断なく、勝手に。馬鹿な馬鹿な器官。穢らわしい。でも、彼が欲しい。欲しい。欲しがっている証拠なんだ。どうにならない。どうしても彼のことを考えてしまう。考えるだけで穢れる。恥ずかしい。私じゃない。でも、これが現実なんだ。ポリーちゃんが知らないだけなんだ。この年になって、ずっと年下の彼に対してなんて。私こそ一番穢れている。隣に座るだけで変になる馬鹿。頭じゃないんだわ。心じゃないんだわ。体なんだ。胎が彼の赤ちゃんを欲しがっているんだわ。何が赤ちゃんよ。何が胎よ。とぼけない

でよ！生殖器が、私の生殖の器官が、彼の器官を欲しがっているのよ。それが事実よ。何が悪いの？それで良いんだわ。器官が、彼のそれに種を植えてもらいたいよ。赤ん坊の種じゃない。だから良いのよ。頭で考えるとおりに、心で思うとおりに、器官が器官を迎入れる準備をしているだけよ。私は、鎌田滋子は、喜多野拾遺の赤ちゃんが欲しい。種が欲しい。器官はそのとおりに、彼の種を植えてもらおうと反応しているだけよ。自然の生理現象よ。月経と同じよ。でも厭だ。頭で分つていてもやっぱり穢らわしい。彼に対して恥ずかしい。目が見られない。あの澄んだ目。彼が芸術の話をしているのに、彼はともにも心を高めようと高尚な話をしているのに、私は上品ぶった顔で、いかも聞いている振をして。厭だ。そんなことは許せない！いっそんな所なんか切取ってなくなってしまうていい。厭だ。切取りたくない。彼に植えてほしい。抱いてほしい。彼に抱いてほしい！私は狂ってしまった。十七才の彼に対してこんな穢らわしい思を抱くなんて。でも植えてほしい。気が違うほど抱合いたい。ひとつになりたい。赤ちゃん、彼の赤ちゃんを身籠りたい。貴方の赤ちゃんを身籠らせて！どうにもならない。この思だけはどうにもならない。狂おしいほど、息苦しいほど辛い思だけれど、消えてほしくない。思に支配されたい。息苦しいほどいとおしい！私は狂っている。狂ってしまった。何が上品なお姉さんだ。何がか弱い乙女だ。淫売！淫売よ。最低だ。穢れている。でも、どうにもならない。もう、どうしたくもない。淫売でも売女でも良い。彼が欲しい。喜多野拾遺が欲しい。毛茫茫でまっくらで胎から下りてきた血液が滲んで気味悪くてぬらぬらとお尻の穴に垂込んで厭らしく固く脹みだしておしっことうんちと血とあと何の臭だか分らない厭な臭のまじった臭のする臭い臭い臭い所に、彼の種を植えてもらいたい。胸が悪くなる。お茶が飲みたい。苦いお茶で口の中を清めたい。でも良い。清めなて良い。穢れていても今すぐ植えてほしい。いますぐますぐ。生ゴミのゴミ溜のようになった所に、今すぐにでも植えてもらいたい。赤ちゃんにならなくても良い。ただ気が

違うほど抱締合えれば、それで満足だ。これが偽らない、正直な気持だ。今すぐ、彼に、それがしてもらえれば、あとは、何がどうなつたっていい。我慢する。肉を食干切られる痛位は我慢する。でも、彼の根つこと激しい抱擁だけは我慢できないいい！どうしよう。どうしよう、私、狂っている。こんな女だと知って、あの子が逃げないわけがない。何もかも祥子が正しかった。でも、わたしは祥子とは違う。祥子がすることなんか、絶対しない。書きたくもない。穢らわしい。私はしない。でも抱いてもらいたい。彼が欲しい。狂いそう！私、しちやいそうだ。したくない。でも知らないうちにしちゃうのかもしれない。何も聞かなければ良かった。祥子が私の手を取ってさせそうだ。厭だ。あんなことは知りたくなかった。あんなに軽蔑していた行為なのに。でも、体が勝手にしてしまったらどうしよう。勝手にすべすべするように、寝ているあいだにしまつたら。今晚寝ているあいだに、勝手にしていたら。して辛くなるのだつたら、楽になるのだつたら、わたし、いつの間にか祥子や登志子やヨシ江と同じ仲間になってもいい。何もかも彼女達の言っていたとおりになっている。でも、万が一にも、そんなことをしたら、私、もう彼の顔が見られない。絶対に見られない。でも何もせずにいると気が狂いそう！黙って何もせずになんかいられない。昔の体を返して！厭だ厭だ、醜い肉の塊。綺麗な清々しい体に返りたい。こんなけがらわしいものは要らない。でも彼だけは欲しい。欲しい。抱いて。赤ちゃんが欲しい。私の赤ちゃんを抱かして。神様私はどうなるのですか。何が欲しいのかも分りません！何か欲しい。私は醜くなった。今日電話があつたらどうしよう。会えない。顔が見られない。溝水に汚れた体では彼に会えない。臭い生殖器では会えない。吹出物の顔を見せたくない。恋しい。恋しい。一目惚なんかじゃない。そんなポリーの遊じゃない。汚い汚い臭い穢れた呪わしい罪だ。罪だ罪だ罪だ。私は穢れた淫売だ。どうにもならない。助けて。恋しい。いとおいしい。いとのおおおいしい。死ぬほど。愛している。私を救って。貴方の清らかな目で救って。好き好き、

貴方の為に死にたい。苦しい。もっと狂わせて。もっとすべらせて。欲しい。気が違うほど発狂するほど抱合って抱締合って接吻しあつて貴方の根っこを奥まで奥まで一番奥まで突入れて其処にしっかりと根付かせて貴方と私は永久にひとつになつて貴方の種を私の中に植付けて赤ちゃんになつて貴方の赤ちゃんを身籠らせて。産まして。赤ちゃんが欲しい！ほしい、ほしい、やっぱり欲しい。私を道具に使つて、でも愛して、ひろおき君一度でいいから私と抱合つてくれたらあとは私どうなつてもいい！愛して、私を愛して。貴方が欲しいの。ほかは何もいらない。ぜんぶ捨てます。でんわちょうだい！はやく！！！！

7 / 3 0 : 20

どうして電話をくれないの？今日一日私がどんな思で暮したか分る？もう頭は死んじやつたわ。何も考えられない。でも貴方の事は考えちゃう！！！！どうにかして！泣きたい。でも泣けない。隣に坊がいる。大声で泣きわめきたい。頭を壁に叩きつけて割つてしまいたい。私は鬼だ、化物だ。ただ貴方が欲しい。どうしても！でんわちょうだい。電話を。電話をならして。電話をください！さもなければ私死にそうです。もう何日も寝てないのよ。おねがい。助けて。明日も坊と顔を合せて普通にしているなんて、もうとてもできない。疲れた。朝が来ないで。星が沈まないで。時間が止つて。ずっと夜のままでいて。

7 / 6

私嫌われたんだわ。逃げらたんだ。絶対そうだ。あんな手紙を書いて、馬鹿だ。諦めよう。早く諦めた方が良い。しつかりしろ！でも好き！！！！どうしても諦められない！死にたい。死体になりたい。私の死体を抱いて。坊にも嫌われた。無視された。看病しにも来てくれない。死にたい。

「へへ様みるだ。私は化物だ。けがれたおばけだ。過ぎし日は、さばかり清纯なりけるクリスチャン花嫁候補ナンバーワンの乙女も、今やあわれ、ただの急性御何中毒患者に過ぎないのでありまーす。様あみる。ミス鎌田は近頃大層御何が上手になられたそうね。あら、どういたしまして、まだまだですの。御立派ですわあ、すっかり囚われの身になりながら、かえって境遇を楽しんでいらっしやる。まあ、かえってどころではありませんのよ、憚りながら。もう私、御何なしでは生きて行かれませんの。一日のうちで一番楽しい時間、心から慰められる時間。音楽なんか比じゃないわ、おばさまも音楽なんかよして御何遊ばせ、ほほほほ。最近じゃ私、由加里さんが御留守のときとか、御風呂を召していらっしやるときとか、ちよつと時間を計って束の間の夢見をするようになって、ほほほ。それから一番いいのが夜。深夜。しーんと物音ひとつしない中で致しますの。それはそれは何物にも代えられない快感があつて、私のぼせちやうわ。それで熱まで出しちゃつて。だって、隣の部屋には世の中のことを何も知らない子供がやすやすや眠っているんでしょう、おほほほ。私、もう、日に二度も三度も、何時間もしどおしで。先晩など、しつかれてぐっすり眠ってしまいましたわ。目覚めたときの爽快さといったら。おほほほ。おほほほだとよつ、あの尼。呆れけーったもんじゃねーか、えー？いきなり分厚いタオルなんかー取出してからに、何をするつてーと、寢床ん中いもぐりこんで敷いてあん。タオルなしじゃーあとの始末が大変なんだとよつ！すげーらしいぜ、出かたが。いやー、鼻がよ。なげーこと詰らしていたんだな、あら風邪ー引いて熱を取ろうつてーのにかむんだからな。うんうん唸りっぱなしじゃーねーか。へー、見上げたもんだねつ。患つてーる方が余計垂れると来てらー。毎度毎度半合ばかりはあるようだぜ、計ったこたーねーけどもよーつ。タオルを敷かねーつてーと、終ったあとのシーツが気味悪くて寝られねーつてあん、勝手なことばかり言つてあがらー、ほんとに。手の付けられねー女だぜ、あらー。馬

鹿だなー、おめーも。あれは手でじかにするんだよー。てめーの手でもっててめーの腐った所を搔回すんだい。てめーで垂れた鼻にのばせちまって余計垂れるってんだから、垂れながしのポジティブイードバックってやつだ、せわーねーや、まったく。なああにをいってあがんだい、したこともねーくせにしああがつて、この印の字野郎のぽん勘野郎め。悔しかったら糞種を出してみろってんだい。へ、ざまあみろい。見ろって、私を見てどう？さすがは赤ちゃん生産機でしょ？瞼に彼の輝くような綺麗な顔を思描くだけで、ひとりでに保育器がせりあがつて取出口が開いて、知らず知らず上下左右の揺籠運動が始って、手が醜い醜い肉の上、知っているでしょ？そんな所を這いずりまわって、声が出て。何処からあんな声が出るのかしら、この生産機は。さっきなんか坊に聞かれやしないか、ひやひやしちゃった。雨の音で随分助ったわ？自分でも驚くような声が出るんですもの。大した機械でしょ？これ。極印付き。処女運用の段階よ？果物で言えば今が熟れごろ、いかが？ちよつと熟れすぎて割れちゃってるかな。ま、そこんこは大目に見てね。祥子、貴方、偉いわ？これじゃ貴方が最高に良いからって勧めるのも当りまえね？私も坊に教えてやろうかしら。あの子、どうなのかな。彼の隣に掛けて時々体が触合ったりして、それで平気なのかしら。私なんか心配で何度も化粧室に駆込んでいるのに。よっぽど何も知らないのね、あの子。まあいいわ、その方が可愛いから。私は坊で十分だ。坊は可愛い。私の妹。あんな澄ましたチビとはもう会うもんか。会えやしない。こんなけがれた体で。こんな臭い体で。また熱があがっちゃった。ちよつとしすぎね、いくらなんでも。風邪引は便秘も酷い。うんちと浣汁が服を着て歩いているようなものよ。顔まで変っちゃったわ。もういいの。面会も謝絶を申渡したんだから。もうおしまいよ。清々したわ。さようなら。バイバイ、坊や。元気だね。ㄱバカバカバカバカ馬鹿馬鹿！下品！阿婆擦！売女！淫売！死んじやいなさい。もうパパにも会えない。ママにも会えない。彼には会わなかった。坊には嫌われた。きつと嫌われている。キスが以前と

[illegible]

ひろおき君ごめんなさい。許して。もう一度私に会って。私
が行きます。貴方の所に行きます。チャンスを頂戴。綺麗な顔のと
きに会って。こんなぶくぶくな醜い顔では会えない。分って。愛し
ている。もう貴方のために私、ひどいことになってしまった。助け
て。貴方しか私を助けてくれる人はいない。お願、手だけでもいい
から握って。厭。手だけじゃ厭。貴方のすべてが欲しい。私のもの
したい。ATASHINO MONONISITAI. NAT
TE. NATTE. ATASHINO MONONINAT
TE. ATASHINO NAKANIHAITTE. IC
HIBAN OKUMADEHAITTE DENAIDE.
HITOTSUNINATTE. ATASHITO HITO
TSUNINATTEEEEEEE! ONEGAII
I. ATASHIONAMAGOROSHINISHINA
IDEEEEEE!

第九回

2章『己呂武反而』(つづき)(後書き)

編者の天野です。

滋子の原稿により忠実なPDF版はこちらから

<http://dl.getdropbox.com/u/976165/shigeko.pdf>

第十回

2章『己田武反而』(つづき)(前書き)

編者注：角括弧の中のA n n & a m p ・B e a uは原本にあるルビ

第十回 2章『己呂武反而』（つづき）

nn&Beau」小劇場へようこそ

姉坊「A

鎌田滋子処女作品
アルスト 茶番

フ

時：

1983年7月11日以降

場所：

山手、宇治、及大徳寺界限（の予定。まだ作劇中。）

人物：

オイフォリオンこと喜多野拾遺、実は従五位下バイロン朝臣ジョー
ジ・ゴードン

ボーこと清水由加里、実は妖精

アニーこと鎌田滋子、グレートヒエンとっていたら実はドクター・
ファルスタスだった

やっこ、実は悪天使か

ほか未定

「ボーとアニー和解の場」 7月11日19時30分頃、山手の二階、滋子の部屋。背景音楽（これ大事）：ドビュッシー弦楽四重奏第三楽章。滋子、ベッドに寝ている。風邪。熱。実は恋も患っている。それから、ある重度の急性依存症。部屋の中は肌寒い。毛布を被っている。ドアにノックの音。滋子、はっとする。

ア： どうぞ。 （ボー登場。）

ボ： どう、お姉ちゃん。苦しい？

ア： んん？大丈夫。でもちよっと苦しいかな。 （ボー、ベッドの脇の椅子に掛ける。）

ボ： お姉ちゃん、私、お姉ちゃんの気持、分る。

ア： そう？

ボ： お姉ちゃん、私はもういい。

ア： いいって、何が？

ボ： お姉ちゃん、分っている。

ア： 駄目よ。明日行つてきなさい？どうしていいのよ。

ボ： お姉ちゃん、それも分っている。

ア： 何のことよ。苛めないでよ。お姉ちゃん泣きそうなんだから。ボ： お姉ちゃんは、拾遺さんを愛している。だから、私、明日行つて拾遺さんにお姉ちゃんの気持を伝えてくる。

ア： （大袈裟な身振と懇願の表情で。）駄目、坊、それは駄目！やめて！

ボ： 私、言います。それが一番です。

ア： 坊、やめて。私恥ずかしくて死んじゃう。

ボ： しっかりして。

ア： もう忘れることに決めたの、もう会わないって決めたの！やめて、お願。

ボ： お姉ちゃん、正直じゃない。本当は伝えてもらいたいくせに。
ア： んん？違う。愛しているけれど伝えられない。言つては駄目。
ボ： でも、お姉ちゃん、本当は伝えたいんでしょう？私、分っている。大丈夫。任せてください。私も馬鹿じゃない。ちゃんとやります。私はもう諦めたから大丈夫。昨日もちゃんと応対した。自分の事ではなくなつてからあがらなくなつた。大丈夫、任せて。

ア： 伝えるつて、どう言うの？

ボ： 拾遺さんの男心をくすぐるように言つんです。もう言うことまでへへ決めてある〜考えてある。

ア： （喫驚の表情。）男心？

ボ： お姉ちゃん、私をお馬鹿さんだと思っている。私、狡賢いんですよ、結構。拾遺さんがデートに誘つてくれるのもお姉ちゃんの差金です。きつとそうです。お姉ちゃんが渡した手紙の中にそういうことが書いてあつたんでしょう？

ア： 何よ、急に大人ぶつて。

ボ： お姉ちゃんが子供だから。

ア： それじゃ何もかも私が馬鹿みたいじゃない。何よ、もう厭だ、こんなになつちゃつて。彼になんか会えない。

ボ： でも会いたくて会いたくて病気にまてなつた。

ア： お姉ちゃんを助けてくれるの？

ボ： できるだけのことはやつてみる。だって、大好きなお姉ちゃんのためだもん。やつて当然でしょう？

ア： （泣きながら坊を抱寄せようとするが、風邪を移してはいけないと気が付いて、手だけ握る。）坊、お姉ちゃんのこと、まだ愛している？

ボ： 当りまえです。私は誰よりも誰よりもお姉ちゃんを愛している。お姉ちゃんはいつも私のことを一番に考えてくれる。

ア： （感激しておいおい泣く。ほとんど絶叫。父親譲の豪快さ。）
ごめんねええ！お姉ちゃん坊に悪いことをしちゃったああ！私厭だ
ああ！坊を傷付けちゃったああ！許してええ！

ボ： 私は傷付いていない。全然。

ア： でも坊も好きだったんでしょおお！おお。

ボ： でもお姉ちゃんほどではない。違う。言直します。私のは「好き」ではなくて憧です。ちよつと憧れてみた。お姉ちゃんのも実は「好き」じゃない。もつと何か深くて尊いものです。私とは全然違う。

ア： （冗談めかそうとして。でも相変らずおいおい。）何よおお、いつから貴方そんな哲学者になったのよおお。お姉ちゃんを恨むでしょう、初恋の人を取られて。えええ。

ボ： 初恋なんかすぐに覚めます。中学生だって知っている。お姉ちゃんは子供です。純真です。お姉ちゃんは拾遺さんに恋なんかしてない。恋だと思っているの？少女みたいに。

ア： 坊、お姉ちゃんを助けてええ！本当はお姉ちゃん、死にそうなのおお！もう何も分らない！助けてええ！お姉ちゃんを助けてええ！

ボ： 分る。お姉ちゃんを見ていれば分る。お姉ちゃん、私を抱かないの？きつと苦しいのがやわらぐよ。

ア： だつてお姉ちゃん本当に病気なのよ！風邪を引いているのよ！ボ： 大丈夫。引くならもうとくに引いている。キスしていいよ？

ア： （我慢しきれず抱付く。しかし、自分の穢れた寝台に入れたくないから、）坊の部屋に行つていい？（二人は抱合つた奇妙な蟹歩で退場。）

第十回

2章『己呂武反而』（つづき）（後書き）

編者の天野です。

滋子の原稿により忠実なPDF版はこちらから

<http://dl.getdropbox.com/u/976165/shigeko.pdf>

第十一回

2章『己呂武反而』（つづき）

「アン、バスルームで愁嘆の場」無言劇。同月12日、午前11前後（？記憶曖昧）、久しぶりの入浴。バスタブの湯に、石鹸を、多量にとかして、念入に脱臭及洗浄。微熱。でも、構わずごしごし。洗浄が終ると、鏡に向って、一年振の剃刀。ひとりでに涙がこぼれる。しゃくりあげる。こんなことをしておく必要などあるはずはないと思う。でも、心の中には、ひそかな欲望がある。ひそかな欲望と言つのはおかしい。ほとんど、人を窒息させる位に強烈な欲望。考出すと居ても立つてもいられない、息苦しい欲望。満される可能性が限なくゼロに近いだけに、尚更。折角、念入に洗浄した所も、又、穢始めている。最近、呪わしい行為が習慣化して、一旦穢始めると、心臓が、異様に高鳴って、体が変になり、より一層穢れてしまふ体質になった。剃刀を使っているあいだにも、髀の内側まで、幾筋もの欲望が下りてゆく。そして、浅ましい姿を、鏡に、とくと見せつけられ、涙に咽びつつも、結局は、我慢しきれなくなつて、バスタブに横たわつて、汚泥にまみれる。暫くは、満されたような錯覚を味うのだ。麻薬も、こんな感覚なのだろう。でも、覚めたときの虚しさはひととおりではない。だから、いつまでもやめられない。波が去りそうになると、又引寄せろのだ。三時間後には、坊が、彼を連れてやってくるというのに、この雌の獣は、そんなことをしている。誰も聞く者のいない今とばかりに、獣の声を張上げ、バスタブを、ガタガタ言わしている。普段は、ベッドで、タオルを敷いてする。そんなときのアンの心の中には、あるイメージがある。いつも同じイメージだ。（作者からひと言。ここを演じる人は、同じイメージを描いて演じてください。リアリティーが出ませんから。）

彼が、赤ん坊になつて、すっぱり抱かれて、顔を、胸に埋め、おしやぶりを頬張つて、溢出るミルクを、ごくごく飲んでいる。彼は、無上の幸福を、満面に湛えて恍惚となつてゐるけれど、顔は、雌に見えるはずもない。なぜつて、胸の中に隠れてゐるのだし。でも、雌の心の目には見えてゐる。おしやぶりの先の、綺麗な、大きな、珊瑚色の目が、心の目だ。心の目には、彼の美しい美しい優しい、崇高な、世にも稀な、高貴な、いとおしい顔が、無上の幸福に満されてゐるのが見える。見える。完全に見えてゐるのだ。雌も、その顔を見て、無上の幸福に包まれてゐる。そのしるしが、なめらかな液体。内面世界では、液体は清らかな小川の流だ。彼の健気な、いじらしい、一生懸命な、私を信じきつて頼切つた、いとおしい、いとおしい、息苦しいほどいとおしいタツノオトシゴ、白くてちつちやくて可愛いオトシゴ、頬擦したいオトシゴ、んん、御免ね、根っこ、根っこ根っこ根っこが私の奥深く奥奥奥ふかーくで立派な大きな根っこになり、しつかりとおなかの壤土に幾重にも幾重にも絡みつき掴み掴んで、引っこ抜こうにも決して、絶対に絶対にポール・バナヤンでも引っこ抜けない、深い深い根をおろして、それはもはや、私のおなかと拾遺の根っこことはまったく区別できないひとつの物、ひとつの木、中国の人が空想したようなせこい二本木のよな問題にもならないせこ物ではなくて、根っここと土がまったくヒトツになた、永久にヒトツになつてしまつたentityに私達はなつてゐる。そのentityに豊なうるおいを与えるのが私の液。清い清い清らかで滑らかな、彼が口から飲んでも大層美味しい、栄養豊かな私のエキス。だから、拾遺とヒトツになればなるほど豊に流れて、どんどん流れて、流れれば流れるほど私の体はのぼせ、興奮し、心臓が破裂しそうに打つて、どんどん流れるで。拾遺も、口からミルクと、オトシゴから、あ、又御免ね、根っこ、根っこからエキスト、両方の豊かな栄養を吸つて、あの優しい、崇高な顔のまんまで、彼も心臓はどきんどきんと私と同じように異様に高鳴つて、私に甘え、甘え、甘えて、もっと甘えて、もっとずっと激しくミルク

クを吸い、痛いほど吸って、吸って、もつと吸って、痛いほど吸って、千切れてもいいからそれ位強く吸って、お願もつと吸って、もつともつと吸って、吸う、吸う、狂う、気が違う、その位吸いつくして、おもいつきり私に甘えながら、じゃれながら、脇の下を首の回をくんくん嗅ぎながら、根っこは私の土壌を搔回して、オトシゴじゃ厭、オトシゴじゃ厭、しっかりした根こになって、根っこ根っこ根っこ、その根っこが私を気遣にする。破けるほど、お願、死んでもいいからもつともつと、もつと中に、もつと中を、私の中を搔回して、貴方は蛸のように私に絡みついて私に抱きついて、私も貴方を抱きしめて、腕でも抱きしめ、脚でもぎゅうううと抱きしめ、貴方は腕でも抱きつき脚でも絡みつき、もう二人とも軟体動物になって貴方と私は抱合って、抱きしめあって引つかきあって、私は貴方の額から生際からこめかみも旋毛も頭全部にキスを浴びせて、貴方も、そんなときは顔を上げて綺麗な目を向けてくれるから唇同士、届くかな、多分届くと思うけれど、届かなければ、私が少し屈んで、貴方は照れるから真赤になって、私も恥ずかしいから真赤になって、清らかな、無上の、天国的なキスを口と口、舌と舌でいつまでもキスし合う。キスし合ううう抱合ううう。狂犬のようにあちこち噛み噛み噛み噛みあつて、くんくんくんくん嗅ぎあつて、歯を立てて噛むから血が滲んだのを美味しい、しょっぱい、血のにおいがする、血の味がする、でも美味しい美味しいと嘗めあつて吸いあつて、狡い、貴方はミルクを吸っているくせにそのうえにもおしゃぶりの血まで吸って、私は貴方の額の血しか吸えないけれど、私は、私は、ミルクを飲まれて、それから、少し恥ずかしいけれど私のエキスだから貴方にはそうされたい、できるそばからぴたぴたねぶられ私は味わわれて搔回されて、ああ狂いたい、もつと狂いたい、狂わせて、すべらせて、べとべとべと、もつと、もつと、もつと、もつと。又根っこが戻ってきて余ったのをちゅっちゅと吸いあって、漏斗はきゅっきゅと締めて私は貴方に頬擦をして「愛している。大好き。大好き、大好き、大好き。いとおしい。いとおおおお

[illegible]

しょ？貴方のゼー……んぶを頂戴。私、全部絞りつつちゃう。私の漏斗がきゅっきゅと締って貴方の根っこから牛乳のように白い蜂蜜を絞りだして、血も吸いだして、そう、血、血、血、貴方の高貴な血を吸尽して私の中で循環させたい。私が又栄養を与えて育ててあげるから大丈夫、世界で一番甘いミルクとねっとりと栄養ある私の濃縮液で大きくしてあげる。そしたら又貴方を絞っちゃう。ぐるぐるぐるいつまでもそうしてしましょね？だからplease I want to, I have to, I have to have to have to hold you I will hold you hold you hold you hold you feeding you feeding you feeding you feeding you while having you having you kissing you kissing you and going MAD, I'm MAD, MAD MAD 魔ー女魔ー女、魔ー女魔魔魔。へ、醜い醜い醜い醜い肉の塊！肉の塊！ぶす、ぶす、ぶすぶすぶす、ぶすでもいい、吸わせてサックさせて吸う吸う吸うサックサックサッキューサッキューサッキューサッキューサッキューサッキューぶす！ぶす！このぶすぶすぶすぶすでもいいただキスさせてキスしつくさせてくれれば私は又綺麗になれる。お願いキスさせてええ！！！貴方をちょうだい！！！もらった。もらった。もらった。もらった。もらった。もらった。貴方は私の物。茶番じゃない、これは本当！茶ではないの！血なの！そして私は貴方の赤ちゃんを身籠る。貴方が私の赤ちゃんのくせに、だから私の赤ちゃんの赤ちゃんを身籠る身籠る貴方の赤ちゃん。私の赤ちゃん。私の赤ちゃんの赤ちゃん。身籠る。ああ幸。死んでも良い。その状態で死にたい。でもまだ死なない。私は赤ちゃんを産んで、私の腕にしっかり抱いて、私と同じものである赤ちゃんに頬擦をして、飲切れないほど溢れでるミルク、私のミルク、ミルク、ミルク、ミ

ルク飲ませたい飲ませたい飲ませたいいい！赤ちゃんが飲む、飲む、飲む飲む飲む飲む。私はたまらなくなつて頬擦をする。うううん、可愛い。ままでちゅよ。ままにきちゅちて。いとおおしい。泣きたい。かわいいいい。彼は、ちよつとだけ膨れて、彼つて貴方よ、ひろおきさん、貴方は焼餅を焼くの。二人とも可愛いいいいとおおおおしい。でも大丈夫、貴方よ、ひろおきさん、赤ちゃんのおなが一杯になつてすやすやすうすう眠つたら、又私と貴方はエキスの交換をして今まで此処に書いたことをもう一度ゼー――んぶ最初から最後までやりなおしつくして二人目が出来る。三人目、四人目、何人でも何人でも。もう私達はそのまま死んでしまいたい。（作者から、観客の皆さんへ。この女は魔女が獣の類でしょう。作者は、そう思いません。百パーセントは、そうは思わないのです。良く分らない。女が、呪わしい行為をするときには、今のような宇宙的な幸福を思描いているのです。彼と女は、まったくヒトツの、わかちがたい、絶対に離れられない一個のentityであるのです。）でも、やがて覚めなければならぬ。もうすぐ、坊と彼がやってくる。アンは、穢れた所を、又念入に洗浄して、べとつく汗を掻いた脇の下も石鹸で洗つて、今一度、鏡の前に立つ。そして、再び、己の、浅ましくなつた姿に、涙を流して、この愁嘆場は幕。

第十一回

2章『己呂武反而』（つづき）（後書き）

編者の天野です。

滋子の原稿により忠実なPDF版はこちらから

<http://dl.getdropbox.com/u/976165/shigeko.pdf>

第十二回

2章『己呂武反而』（つづき）

「アニー、めそめそ泣の場」同日、午後三時半頃。家のパーラー。アニーは待ちくたびれている。二分ほど前に、ボーが港の見える丘から電話してきて、ひろおきさんとこれから行きますと伝えてきた。ボーは、ゆうべ、アニーの為に一肌脱いでくれる約束をした。オイフォリオンへのアニーの切ない女心を知ってもらえるように立回るでも、ずばりそのまま伝えてはいけなないと、アニーが固く禁じている。勝負はこれから、オイフォリオンにはアニーがみずから訴えなければならぬ。アニーは、そういう訴を自分からした経験を持たないので、生きた心地もしない。それに、午前中から昼過に掛けてを考えると、自己嫌悪と恥ずかしさで、オイフォリオンの直視に耐えられそうもない。酷く糞れて、容色に自信がない。引目を感じる顔にはニキビ。むくみ。目が腫ぼつたい。化粧は念入。とっておきの香水も付けて。異なことだ。この女は、己の容姿と少しばかりの教養を鼻にかけて、今日まで、何人の求愛者を袖にしてきたかも分らない。驕慢なことは、世の男を人とも思わない。それが、今日までのアニーなのだ。第一、男という性がきらいなのだ。自分ではそう思っていた。ところが、今日は、傍目にもおかしいほどぞわついている。訪ねてくる相手は七才も年下で、弱々しい、ましてやスポーツなどしそうな、白面の高校生で、背丈も自分より遙かに小さく、体重に至っては十キロも軽いだろうに。その少年に、この世にも気位だけは高い自称レイディーは、完全に骨抜にされている。女の目には、男といっては、彼以外に存在しなくなった。心から愛している父親は格別。でも、父親を除けば、ほかの男は少年と比べた場合、人間未満だ。だから、少しでも良く見られたくて仕方がな

い。今朝、鼻の下に、又新に拵えたニキビを呪わずにはいられない。風邪が長引いて、微熱がある。ああ、あ。どうするんでしょうかねー、この馬鹿な女は。ま、ひとつ見てやりましょうや。

かちやと、ポーチの扉の音。ちりんちりん。アニーは、おしっこを我慢するような、畏った姿勢で、ソファーに腰掛けて小さくなっていたが、今の音で、もう逃出したい。脈拍約390。

ボ：ただいまあ。お姉ちゃん、いる？お客さんだよおお。

ア：あ、由加里ちゃん、おかえりいい。（わななくわななく廊下に出る。）あ、こんにちわ。（何が「あ、」ですか、まったく。）

オ：こんにちわ。一昨日はすみませんでした。僕が悪かったんです、急に來たりして。どうですか。お見舞に來ただけなんです。これ、由加里さんと僕から。詰らないものです。いえ、僕の案だから。由加里さんは賛成してくれました。宜しかったらどうぞ。ただの果物ですから。（元町で買った詰合を差出す。不意打をくらって、これで又ハートはめろめろ。しょうがないですねー。それにしてもオイフオリオンの遣口はいつもこうで、変にぶっきらぼうなジェントルマンを装っていて、それが見えすいていて、色事師が全然板に付いていないのに、なぜかしらそれがアニーを参らせる。自分でもおかしいと分っていないが、むざむざ相手の術策に嵌ってゆく。まったく大した坊やだ、オイフオリオン！君もアニーの氣を引こうとしているんだろ？分っているんだ、それ位。それがどうにもならないから呆返っちまうんだ、アニーという馬鹿女は。とにかく、アニーは真赤。何とか落着こうとする反面は反面なりに、相手に自分のこういう可愛いところを見てもらいたくもあるから、いっそもっと赤くなってみようかとも考える。これを要するに、何が何だか良く分らないのである、この女は。）

ア：まあ、ありがとー。

ボ：お姉ちゃん違っよ、私は何もしてないよ。ひろおきさんが>果

物をく買いたいと言うから、一緒にお店に入っただけ。

ア：（真赤になってもじもじしているオイフォリオンを見おろす。そして涙ぐむ。涙ぐみは嘘ではできませんね。）

オ：いえ、差支なかつたらどうぞ。（ボーに向つて）由加里さん、今日はどうもすみませんでした、いえ有難う。（アンに）じゃ、これで。お大事にしてください。

ア：そんな、どうぞ中に。折角来てくれたのに。

オ：いえ、今日はこれで。友達を待たせているんです。

ア：ええ・・・そんな。ちよつとだけでも。駄目？

オ：折角なんですけれど。領事館でみんな待っているもんですから。フランスに帰る友達の送別会で。

ア：そんな・・・。

オ：じゃ、お大事にしてください。由加里さん、有難う。お陰で楽しかった。（ちりん、かたんの音で退場。・・・なんだなんだ？ 違っているじゃありませんか。アンさん、貴方は自惚が強過ぎますよ、まったく。気を引くの術策のと、何のことです。まるで逃げるようにして帰っていったじゃありませんか。目も全然合そうとしないし。アンとボーは落胆の態でパーラーに。二人並んでソファーに腰をおろす。）

ア：どうしよう、私、ふられちゃう。

ボ：ひろおきさん、きつと照臭いんです。絶対そうです。私には分る。お店で手紙を書いていたよ？ それだと思う。（詰物にカードが添えられている。アニー、読む。観客の皆さんの為には現物を添付しておきます。）

ア：坊、どうしたらいい？ 私、泣きたい。すっかりぶすになっちゃった。ひろおき君はぶすがきらいよ？ きつと。

ボ：御免なさい。私がつと上手に言えば良かったのに。お姉ちゃんのことを言ったら真赤に照れて、それからぐずぐずしてく来ようとしなんだもの。でも、ひろおきさん、お姉ちゃんがきらいじゃないよ？ 恥ずかしがっているだけ。

ア：何て言ったの？

ボ：お姉ちゃんが一日のことを気にして悩んでいるって。「ひろおきさんがおこつてもう来てくれないんじゃないかって気にしていました。お姉ちゃんはある見えて、とてもデリケートな人なんです。悲しいことがあるとすぐに泣いちゃうんです。ひろおきさんのことでも泣いていました。」って。

ア：坊、そんなことを言っちゃったの？ 厭だ！ こんなでっかい体をして、赤ん坊みたいじゃない。それから？ 何だって？

ボ：真赤になつて、苦わらいして、「ああ、そうですか。」って。

「僕、どうしたらいいですか？ 全然気にしてないってこと、伝えてもらえませんか？」って。

ア：そしたら？

ボ：「できたらひろおきさんがもう一遍来てくれたら、お姉ちゃんが喜ぶんですけれど。^^私、お姉ちゃんは恩人^^>お姉ちゃん是我的恩人<だから、お姉ちゃんが悲しんでいるの、見ていられないんです。本当は、今日、ひろおきさんに来てくれるようにお願いに来たんです。お姉ちゃんは泣虫の淋しがりやで、そのくせ嬉しいことがあると子供みたいにはしゃいで、私が見ても本当に可愛い人なんですよ？ ひろおきさんもそう思うと思います。」って。

ア：（顔を両手で覆つて、でっかい体を右に左にゆさゆさと振りながら）もう厭だ！ 坊、変なことを言わないでよ！（皆さんにひと言：別に可愛い子ぶろうとしてゆさゆさしているのではなくて、言われてみると、いつもそんなことをしていた自分に、漸く最近気が付いたのであります、アンさんは。ああ、あ、は。何が上品なお姉さんですかね、まったく。顔から火が出る。あの手紙を取返してパンツと一緒に灯油を掛けて焼いてしまいたい。などと、アンは後悔するのであります。でも、いえ、この馬鹿女は、よく自分を可愛いだなんて思っていますから、ゆさゆさするのも不自然ではないのかもしれない。そうでした、まったくです。）で、何だって？
ボ：ただ照れて「は。」って。

ア：当りまえよ！きつと心の中で笑っている。それで？

ボ：お姉ちゃんが、今朝からお菓子を焼いているって。

ア：厭厭厭！もう駄目。何よ、坊、厭だ！それじゃまるで私が坊を使って誘出しているみたいじゃない。（だってそのとおりでしょうが。何さ、巨大なブリッコ。ブリッコ・ジャイヤンだ、お前は。変な事だけは覚えあがって。）

ボ：私が馬鹿でした。ひろおきさんがあんなに照れると思っていなかったんです。お菓子まで作っているから、来てくれたら、きつとお姉ちゃんが喜ぶと思いますって言ったら、>急に慌てだして、<「近くに花屋さんはありませんかね。」だとか、「電話はないでしょうか。」だとか、私に聞いても仕方がないことを聞いて、「お花がいいでしょうかね。ケーキでも買っていきましょうかね。」ってやたらに元町をうろろして時間を使って、結局今になっちゃった。二人でレストランに入ったときにはそんなに照れなかったのに。「実は僕も女の人と二人で食事するの、初めてなんです。失礼があつたら慣れないからです。大目に見てください。」って、それを言うときには物凄く赤くなつたけれど、あとは、うちに来たときと全然変らないし、面白い話も沢山して笑わせてくれるし、だから、私も調子に乗って、言わなくてもいいことまで言っちゃいました。お姉ちゃん御免ね？私、又考えて、ひろおきさんを連れてくる。

ア：（めそめそ泣く。幕。）

第十二回

2章『己呂武反而』(つづき)(後書き)

編者の天野です。

滋子の原稿により忠実なPDF版はこちらから

<http://dl.getdropbox.com/u/976165/shigeko.pdf>

第十三回

2章『己呂武反而』（つづき）

しげ子さん、元気を出して下さい。しげさんは、明るく元気な顔が似合う、と僕は思います。僕は金曜日の朝、帰ります。もしも、木曜日の日に、元気になったしげさんの顔が見られたら、僕は嬉しいです。今度は、Op.25を聴かせて下さい。特に2、3、4、5、6番なんか、しげさんが弾いたら、素敵だろうな。電話します。拾遺

P.S. 一昨日のことで、何か行き違いのようなものがあつたのなら、僕が謝ります。一昨日は、ちよつと、しげさんの顔が見たくなつたので寄つただけなのです。悪く取らないで下さい。

第十三回

2章『己呂武反而』(つづき)(後書き)

編者の天野です。

滋子の原稿により忠実なPDF版はこちらから

<http://dl.getdropbox.com/u/976165/shigeko.pdf>

第十四回

2章『己呂武反而』（つづき）

「アン、物思の場」同日、夕刻。一階、読書室の安楽椅子。オイフオリオンに貰ったカードにキスしたり、頬擦したり、胸に押当てたり。

A：（独白）ああ、ひろおき、ひろおき、どうして貴方はひろおきな？何がこういう文句を書かせるの？×10回。私は嫌われていない。良かったあ。やっぱり気があるのかな。きつと好いてくれている。あの手紙の効果かな。あんな見えすいた手紙を読んで、何も感じないはずはないもの。ああ、恥ずかしい。よくあんなことが書けたものだわ！まるで「私は貴方が欲しいの。」って言っているようなものじゃない。何と思ったかしら。若い男に飢えた女と取らないかな。でも嫌われてはいない。私を何とも思っていないくて、こんな殺文句ばかり書いてこられるはずはない。憎いわね、本当に。人の心を手玉に取って。生れつきの品性ね。あんなに小さくて可愛いのに、心はジエントルなんだわ、もう、いとおおおおおおおしいでしょう。息ができなくなっちゃう。聞きたい言葉ばかり書いてきて。彼はきつとあねさん女房よ。でっかいお姉さんを求めているんだわ。こんな言葉を、もしも考えて書いたんなら、彼、よほどの凄腕よ。でも、彼、あんなに初なんだもの。店先で、坊が見ている前で走書したんだもの。心のままに書いたのよ。もう、本当にタイプ。タイプタイプタイプ。タイプウウウ。（ゆさゆさ。）こんなことが書ける人って素敵。素敵。素敵。口はあんなに下手なのに。恥ずかしいからね。私の前だと喋れなくなるんだわ。玄関ではあ

なに真赤になつて、しどろもどろになつて。電話でも照れちゃつて。何を言っているのかも分らなかった。でも、そこが堪らなく好き！本当は、彼の心の中には、このような、私を骨抜にしまふ言葉が溢れているのね。「しげ子」だつて。わざと仮名書にしてくれて私の名前を五回も書いてくれたあ。いきなり「しげ子さん、」つて嬉しいいい。はあい、なあに、私のヒロミオ。私、貴方とヒ素を飲んでみたい。何てジェントルウウウ。タイプウウウ。（ゆさゆさ。）私の心が通じたのよ。ああ、恥ずかしい。いきなりYour s e v e rだなんて、私、こういう神経をしているんだろ。だからあんなに照れるんだわ。馬鹿ね、私。可愛いいい。いとおおおしいいい。私に来て？ひろおき。私の胸の中に飛込んできて？Come to me , come to me .死ぬほど抱締めてあげたい。私、もう絶対に、恥ずかしくないあねさん女房になるだから、早く私に来て私の物になつて、ひろおき。貴方なら、きつと理解してくれる。私は貴方しかない。本当にひろおきと結ばれるだろうか。そんな事があるだろうか。あつてほしい。今度二人きりになったら、迷わずもう抱締めてキスしちゃうんだ、私。絶対そうする。坊が見ていたつて構うもんか。もう、坊にも遠慮はいらないんだ。早く抱締めないと、私本当に病気で死んじゃう。こんな生活をしたことはないもの。（作者注：実は、カードを貰った感激は、今でもなくなっていないのである。時々取出しては胸に押当て、タイプウウとやっている。わろうべし。）アン反駁：でもやっぱり感激。タイプウウ！ジェントルウウウ！いとおおおおしいいい！死んじやいそう！

第十四回

2章『己呂武反而』（つづき）（後書き）

編者の天野です。

滋子の原稿により忠実なPDF版はこちらから

<http://dl.getdropbox.com/u/976165/shigeko.pdf>

第十五回

2章『己呂武反而』（つづき）（前書き）

天野注 この回では「冒読「ぼうとく」」という語が出るが、滋子が書いた字とは違う。彼女は正字を用いて表記した。ところが、それをそのまま入力すると「冒&#28678;」と画面には表示されてしまう。泣く泣く俗字に置き換えることとする（泣く泣くというのは、滋子の遺言を完全には実行にうつしえないという意味において。漢字が苦手な私にしてみれば、正俗の別なんかどうだっていいことだ）

第十五回

2章『己呂武反而』（つづき）

「アンとオイフォリオン、初デートの場」7月14日、朝十時、港の見える丘公園。ベンチにボーとアニー。テテマロ。

A：来てくれるかな。来てくれないような気がする。だって、私、二十四のお年増よ？

B：大丈夫。ひろおきさん、お姉ちゃんの気持が分っている。必ず来る。絶対にお姉ちゃんの心を踏みにじるようなことはしない。そんな人じゃない。

A：坊、やつぱり一緒にいて？私、恥かしくて死んじゃう。

B：お姉ちゃん、神様の罰だよ？最初はあんなに私をからかっておきながら。今度はお姉ちゃんの番。

A：だって、誰がこんなことになると思うのよ。私、本当にひろおき君と坊を仲良くさせようとしたのよ？本当よ？これ。考えてもみて？ひろおき君は十七の学生よ？初からそんなことを考えるとと思う？私が。

B：お姉ちゃんって勝手。すごくわがまま。そこが可愛いところだけど。私は大好き。でも、男の人は逃げちゃうかもしれないね、可愛すぎて。

A：何よもう、上げたり下げたり。私は生きた心地がないんだから苛めないですよ。お願い、一緒にいて。私、ひろおき君に何を言っているかわからない。みんなには見られそうだし、恥かしくて。いい年をしたでっかい女が。厭だ、もう。大年増が小さな男の子の前で真赤になっているなんて。見る人に笑われちゃうわ？

B：お姉ちゃん、言っておくけど、絶対に「ひろおき君」なんて言っちゃ駄目だよ？「ひろおきさん」って言うんだよ？

A：どうしてよ。

B：当りまえでしょう？もう。お姉ちゃん、散々お説教してくれたのは何だったの？基礎が出来ていませんよ？お姉ちゃん、何でも基礎が大事。考えてごらん？年上の背の高い人に「くん」なんて言われたら「はあい、先生。分りましたあ。」って答えるしかないでしょう？どうやってキスなんかしてもらう気？

A：此処で？みんなの見ているところで？ひろおき君だってするわけがない。あの子、キスなんかしたことがないもの。

B：もう、駄目だったら。お姉ちゃん初から子供扱にしている。「ひろおきさん」て呼ぶの！で、お姉ちゃんの得意技を使って、お姉ちゃんからキスしちゃうの。それから正直に気持ちを伝える。それ以外に方法はないよ？

A：できるかな、そんなこと。できないできない。そんなことができるわけがない。坊、彼にキスしてくれるように仕向けて。

B：お馬鹿さん。何？お姉ちゃんは。本当に愛しているの？年とか誰が見ているとか関係ないでしょ？（オイフオリオン登場。待つてました！色ボーイ、今日は転ぶな！）

E：すみません。待ちましたか。ゆうべ、お酒を飲まされちゃって今朝も朝飯食いにいこうってうるさいんですよ。

B：あ、ひろおきさん大事な待ちあわせに二日酔ですか？お姉ちゃんをがっかりさせちゃいますよ？

E：いえいえ、大丈夫です。酒は強いんです、こう見えて。よろしかったらこれからヘンリー・アフリカにでも繰込んでお迎というのはどうでしょう。

B：あ、いけない。まだ酔っている。何時まで飲んでたんですか？
E：何時までって、さっきまで。でも、全然平気であります。「ちびの大酒」とは言いませんね。まあ、そんなところです。みんなにあげげの喜多さん、て言われてないか、それも。汚い喜多さんに

なっちゃったな、どうも。すみません。いいお天気で、暑くなりま
すね、これは。滋子さん暑くないですか、長袖で。

A：んん？大丈夫。ひろおきさん、お忙しんじゃない？

E：もう、大変な忙しさで。馬鹿な忙しさ。野郎仲間から暫しの解
放です。僕には滋子さんと由加里さんの方が合っているんですよ。

B：ひろおきさん、一人で来たの？

E：悪友がついてきちゃったんです。どんな人だどんな人だってゆ
うべからそれで飲まされちゃって、こんなにふやふやになっちゃっ
たであります。「お前一人で二人も相手できんのか、一人紹介しろ。
」って。あすこに目付の良くないのがいるでしょう。（一人、自転
車に跨ってこつちを見ている。）これで僕は身の破滅です。「喜多
野の奴は凄い美人を二人も専有している。」って噂が立って、新学
期は磔にされるでありますよ。

B：あ、私、あの人。女の子二人とひろおきさんと元町を歩いてい
た人。

E：あれ、由加里さんにも見られていたんですか？（自転車の子、
すーっと何処かへ退場。）ま、奴ばかりは仕方がないんです、ずつ
と泊めてもらっているんですから。

A：御免なさいね？ひろおきさん。じゃ、電話を掛けたりして御迷
惑だったでしょう？

B：お姉ちゃんが悪くないんです。私が掛けさせたんです。御免な
さい。お礼が言いたかったものですから。

E：いえいえ。これで僕は英雄として死んでゆくのであります。英
雄はみな破滅の道を踏む、これは真理でありましょう？全然持てな
いと思われていた僕が、その実、誰も適わない色魔だった。崇めら
れつつ磔刑に処せられるのであります。テテ様、喜多野拾遺、ただ
いま参上つかまつりました。

T：Rough.

B：お姉ちゃん、じゃ私、テテともうひとまわりしてくるからね。

E：あれ、行っちゃうんでありますか？

B：お姉ちゃん達はいいいよ？私一人で。ひろおきさんとお姉ちゃんは暫くしたらお店に行ってください。私、テテを家においたら行きますから。一時間位だと思う。

E：みんなで参りましょう、テテ様のお散歩。

B：だって、ひろおきさん足付が危いですよ？ここで休んでいて下さい。

E：自分は大丈夫であります。

B：ひろおきさん！レイディーがいらっしゃいますよ？英雄がレイディーに歩かせていいんですか！それにお姉ちゃん、ひろおきさんに見てもらいたくて今日は思切お洒落してきたんですよ？褒めてあげないんですか！

同時に：（A）坊、変なことを言わないで。（E）いえ、今申し上げますようにしていたところであります。

E：晴れた日の滋子お姉様は特に綺麗であります。勿論、負けず劣らず由加里お姉様も素敵であります。

B：ひろおきさん、心から言っていない。お姉ちゃんの目を見て褒めてあげてください。

A：いいの、いいの。坊、何を言出すのよ。ひろおきさん、御免なさいね？

E：自分は参りました。でも本当であります。滋子さんはとても綺麗であります。本心から言っております。僕は照れてしまいますのであります、どうも。

B：じゃ、またあとでね？（ボーとテマ口退場。）

E：そして二人だけになった。やがて誰もいなくなるでありますよ。う……。や、こんにちわ。まだお早うですか。飲みどおしで分らなくなっちゃったであります。

A：今からお酒の味を覚えたら大変ね。掛けない？

E：は、座った途端に居眠をしそうなので自分は立つであります。

A：お願、座って。ね？寝てもいいから。

E：は。では。（ベンチに掛ける。）参っちゃったな？

A：私といるのが厭なんでしょう。

E：いえいえ、決して。僕は光栄であります。

A：ひろおきさん、変な言いかたはよして。私、今凄く恥かしいの。分るでしょう？

E：は。

A：明日帰るの？

E：はい。

A：お祭？

E：いえ。もうこっちに用がなくなったので。いつまでも友達の上に転りこんでいるわけにもいかないの。

A：今度はいつ？

E：九月の初です、新学期が始る。

A：淋しくなるわ？私も由加里ちゃんも。私達、新しいお友達が出来て、二人で喜んでいるのに。毎晩、ひろおきさんの噂をするのよ？

E：僕、詰らないでしょう？付合いくくて面白くない奴だって言われているんですよ、実は。孤立主義の秘密主義で、いつも本音を言わない奴だ、何を考えているか分らないって、いつも言われます。先生には自信過剰だとか自惚だとかって言われます。” For H

eaven's sake, stop looking so pleased with yourself!” なんて。僕は

普通にしているだけなんですけどね。家が遠いことも関係があるのかもしれない。箱根の関所どころか逢坂の関を越えていくんですから。これ、やつこの湯、蜘蛛も蛙も義理を立てるが、夏蝉まるで知らんぷり。入るばかりで別れちゃ忘れ返る返るも恩知らず。知らんぷりの雲隠で一度も友達を呼ばないんです。普茶料理でも御酒造したいから、おおさかのずきでファースト・レイト・サケを酌みかわして騒ごうじゃないの、ちよつと伏見にとばりにこいや for sake's sake なんて、またわけの分らないことを言うやつだってラベルを貼られちゃいますね。別に構いませんけど、僕は。孤立主義の変人で。僕の庵も都の巽、住むのは白狐孤立主義と。

この世をば、鬱陶しいじゃないけれど、主義立つ川は鴨川の、カムカム誘う水ながら、音信絶えてとく稲荷山つてね。友達も少いですよ、だから。女の人には特に嫌われます、隣の学校の人なんか。ひろい奴だ、ふたばつちめえ、なんて、

A：じゃ、私達とは全然違うわね、その人達。ひろおきさん、私達のアイドルだもの。

E：ぷつ、あほらし。やめてください、からかうの。何を言うてる、ゆうべの晩飯はカップヌードルでありました。案外旨いですよ？最近出た味の、何て言ったかなあ、

A：本当よ？これ。それにひろおきさんが何を考えているか分らないなんてこともない。分る人には分る。私には良く分る。でも、ひろおきさん、人に分るなんて言われるのがきらいなんでしょう。

E：え、まあ。

A：凶星でしょう。だから分るって言ったでしょう？むしろ変人になりたがっているところがあるでしょう。ピンポン。

E：参ったな。そう言われると、思当る節があるな。

A：絶対そうよ。私には分るんだもん。なぜだと思う？

E：それは自分が酔っぱらっているからであります。人間、無防備なときには心の中を見透されるものであります。

A：全然違う。でもそんなふうに惚けるだろうと思った。分る理由はね、私もそうだから。私も多分、人から見たら相当自惚屋で自信過剰よ。ひろおきさんはどう思う？私を見て。Do I look pleased with myself?

E：そんなふうに思ったことは一度もありません。

A：嘘、きつと嘘よ。なんて高慢ちきな女だと思っているくせに。良いの。自分で分っているから。私も友達が少いんだから。でも、私、沢山なんか要らない。一人か二人で十分。怒らないでね？私、ちつとも非難の心算で言うんじゃないんだから。むしろ、親愛の情というか親近感を持って言うんだけれど、やっぱりひろおきさんも相当な自信家よ。高慢ちきよ。先生の言うことは当っているわ？で

も良いじゃない。ひろおきさんもそれで良いと思っっているんでしょ
う？だって、はっきり言って私達、特別なもの。多少とも人にはな
い教養を身に付けたんだもの。だから高慢ちきになって友達をなく
すのよ。きつと、それを言ってくれた先生も相当な自信家で高慢ち
きよ。先生も愛情から言ってくれるんだわ？

E：よく分りません、僕には、教養なんてことは。高慢ちきだとも
思わないんだけどな。

A：私もそうだった。みんなに高慢だ高慢だって嫌われたけれど、
そのときにはさっぱり分らないの。だから歯牙にも掛けない、それ
が又高慢だって思われる。でも、怒らないでね？私も親愛の情をこ
めて言うんだから。ひとつの打明話。だって、こんな話をして通じ
る人は滅多にいないんだもの。私とひろおきさんはとても似ている
と思う。んん？絶対に似ている。「絶対」なんて、凄いでしょ？
私の自信。

E：参りました。

A：ひろおきさん、きらい？きらい？こんなことを言う人。

E：いえ、絶対にきらいじゃありません。自信を持って言えます。

A：良かった。じゃ、もうひとつ聞いていい？好き？こんなにずけ
ずけ物を言う女の人。

E：そんなふうにしたこともありません。僕の姉達に比べれば、
何でもありません。

A：本当？じゃ、最後に、ある事を、もうひとつだけ言っちゃおう
かな……。ねえ、言ってもいい？

E：何をですか。

A：分っているくせに。どうしよう。

E：は。

A：どうしよう……。ねえ、言ってもいいでしょう？言ったら軽
々しい女だと思う？端ない女だと思う？私のことを悪く思う？

E：妙なシチュエーションになってきたな？これは、

A：厭！意地悪。私、今死ぬほど恥かしいのよ？でも、どうにもな

らないの。ねえ、私のことをどう思っている？正直に言つて。

E：参つたな？酒なんか飲むんじゃない？あ、ちよつと考えてもいいですか。

A：考えることなの？きらい？きらいじゃない？それも考えなくちゃ駄目？

E：いえ、きらいだなんてことはありません、絶対に。そういうことじゃなくて、何というか、その、

A：私、好きになっちゃった。どうしよう。ね、どうしたらいい？

E：へ、どう致しましょう、拙はどう致しましょう。好きというのはどうも、そういうことをあまり聞きつけない方でして、何しろ持てない人間の代表格というか、上方のださ公卿と言われておりますので、こういうミーニングでげしょう。

A：惚けている。でもそういうところも好きになっちゃった。（感情を爆発させて）愛しているの！貴方のことを考えると夜も眠れなくて病氣になっちゃうの！どうしよう。どうしたらいいの？（手で顔を覆つて、少し芝居染みた泣をする。この辺からの何行かは三分掛けてゆつくり演じること。オイフォリオンの手が腕に掛る。）

E：滋子さん。泣かないで。参っちゃったな？滋子さん。（オイフォリオンの手が背中に戻る。）どうしてこうなっちゃうのかな？

A：（涙と鼻でくしゃくしゃの顔を上げて）ひろおきさん、こういうぶすが嫌い？ね、私ってぶすでしょう？（左、本当に言つたセリフ。）でも、私ひろおきさんが好きになっちゃった。どうしよう。ねえ、どうしよう。（どうするどうする！）

E：参っちゃったな？ね、滋子さん、涙を拭いて下さい、と言つて拭く物も持っていないや、滋子さん、僕のシャツでどうぞ。（まくつた下は貴族的な暫白の胸。アン、思切つて抱付く、というより抱きかかえて、オイフォリオンの胸に顔を埋める。面積が小さくて難儀するが、優しいオイフォリオンは、最初は恐々と、あとから段々強くアンを抱える。ぶすの顔を一度上げてオイフォリオンの目を見る。唇目掛けて一直線。酒臭いのも構わず長いこと吸付いて離れない。

やつと離れると、飽きたらずにもう一度吸付く。人目があることは関係がなかった。）

A：（芝居染みて）御免なさい。

E：いえ。

A：私のこときらいになった？

E：いえ、全然そんなことはありません。（いい男！の子）

A：これから口を利いてくれる？

E：勿論です。

A：手を握ってもいい？

E：どうぞ。

A：（ありったけの媚を示して）貴方から握って？駄目？

E：いえ。（膝上に組合わされたアンの両手にオイフォリオンの両手が被さる。）

A：何か言ってくれないの？ね、私じゃ駄目？年上すぎる？ぶすぶす？

E：いえ、そんなことはありません。（役者！）

A：私に何もかも言わせるの？私だって恥かしいのよ？でも、私、こうする以外にしようがないんだもの。（又少し泣いてみせる。）

E：滋子さん、お願です、泣かないで。僕はこういうことに慣れてないから、その、

A：私だって同じなのよ？貴方と同じ位恥かしいの。お願い、何か言っで。私じゃ駄目？

E：いえ、とんでもない、駄目だなんて。僕は滋子さんほど素敵な人を知りません。（さすがのオイフォリオンも真赤。）

A：じゃ、どうなの？好き？きらい？それだけ聞かせて。

E：勿論好きです。

A：本当？（又可愛らしく泣始める。）

E：僕は初て見たとき、何も分らなくなりました。何て綺麗な人だろうと思いました。参ったな、照れます、本当に、こんなことを言っているなんて信じられません。

A：嬉しい……。私を浮気な女だと思う？

E：とんでもない。僕は滋子さんを尊敬しているんです。

A：あのね、信じてもらいたいんだけど……。厭だ、口にするのも恥かしいこと、

E：いえ、大丈夫です。もう酔っていませんから、何でも真面目に聞きます。気にしないで下さい。

A：私、ひろおきさんのことを初から……。厭、ほかに言葉が見つかからない、初から狙っていたなんて思われたら死にたくなっちゃう。そんなふうには思わないで？

E：勿論です。

A：でも、貴方に変なことばかり言ったり、まだ言葉を交したこともないうちからお辞儀をしたり、私を厭らしい女だと思ったでしょう？

E：いえ、そんなこと、

A：嘘嘘、絶対そうに決っている。私、そのことを考えると……。ね、キスして？駄目？

E：下手でよければ、でも、僕酒臭いですよ、

A：お願い。（オイフオリオン、中腰になってアンの肩を抱き、接吻。）

E：僕、好きになっても良いんですか。好きになりそうです、妙だな、

A：好きになつて？お願い。私、何でもする。好きって言つて？

E：好きです。

A：本当？

E：本当です。さっきまで分らなかったけれど、僕は滋子さんが好きなんです。実は、ずっと好きなんです。だから遊びにいたり泊りにいたりしたんです。滋子さんのことを考えると眠れなくなります。

A：私も貴方のことしか考えられなくなつた。（ここでアン、目を瞑つてキスを催促。オイフオリオン、接吻する。アンは彼を胸に抱

きすくめ、彼も抱付く。華奢なことは坊とあまり変らない。漸く、アンの思は叶う。）愛している。ひろおきさん、私、貴方を愛している。貴方は？

E：愛しています。

A：名前を呼んで言つて、あのカードみたいに。

E：僕は滋子さんを愛しています。本当です。滋子さん、（ギリシ屋！）僕は貴方を（六代目！）愛しています。

A：もう、私、貴方に何でも言う。でも、それできらいにならないで？ね？（いつのまにか二人は立上っている。アンはオイフォリオを腕の中に抱いて今にも食付きそう。初て周囲の視線が気になつて、座る。左右のベンチに人はいないので、多分、それほど注目を集めずにすんだはず。）

E：僕が滋子さんをきらいになるなんてありません。滋子さんがそうしろと言ふんなら、僕は今此処で死んでみせます。本当です。

（素敵！なんてジェントル。なんてリファインド。なんてナイトリ！。なんて初。可愛い。いととおおおいしい。あれ、皆様、失礼致しました、アンがいきなり作者部屋に闖入しました。）

A：まあ、どうしましょう。じゃ、貴方の心を下さる？（これも本当に言つた言葉。皆さん、どうです、この女。）

E：さつきから滋子さんのものになっています。（ナイトリー！ジェント・・・アンさん、もう結構。此処は座付作者以外立入禁止。）

A：あのね？私、貴方が思っているかもしれないほど浮気な女じゃなくてよ？キクヤの二階でお辞儀したのは貴方の気を引こうとしたんじゃないの。あんなことを誰にでもしよっちゅうしていると思つたら厭。あれは、前に何度か貴方をお見掛したものだから御挨拶したの。でも、今はかえつて良かった。だって、貴方に愛してもらえるんだもの。私、普段は決してあんなことはしないのよ？

E：分つています。でもあんなふうにしてもらえて、僕はどんなに誇らしかったか、みんなに対してどれだけ得意だったか、それを言わせて下さい。あのあと暫く、綺麗な人は誰だ誰だと煩く聞かれて、

僕は困ったような顔をしながら、その実、非常に得意でした。知っている人かと聞くので、「ああ、まあな。」と嘘まで付いていました。

A：嬉しい。私、実は、ひろおきさん以外の男の人とは滅多に口も利かないし、自分から挨拶することなんてないの。信じてくれる？

E：どうして僕なんか。僕は学校で最も持てない人間なんですよ？

A：ひろおきさん、惚けている。絶対にそんなことはない。でも本当だとしても、私には、ひろおきさんがほかのみんなとは違って見えた。私と同じ仲間だなんて。だからお辞儀をしたの。コンサート会場では、沢山の人の途中ですぐに貴方が分った。実はね、私が貴方に恋したのはあの日から。自分でも分らなかったけれど。でも、今思うと、あの晩から、私はひろおきさんに引かれたの。貴方は？いつから私のことを意識してくれた？

E：一目見たときからです。学校の裏庭から出たとき、滋子さんが僕に、しかも僕だけに会釈してくれました。あのあと、僕は帰の新幹線の中から家に着いて寝るまで、ずっと滋子さんの顔が頭から離れませんでした。滋子さん（と言って、アンの手にキスする）、僕は天地神明に誓って言います。僕は貴方ほど美しい人を見たことはありません。僕は貴方の顔を思浮べるだけで何も考えられなくなります。

A：まあ、どうしましょう。

E：もう少し言わせて下さい、続があります。僕は貴方ほど素晴らしい女性を知りません。と言っても僕は持てないださ男ですから知るはずありませんけれど、貴方ほど優しくて綺麗ですばらしい人を知りません。僕にピアノを教えて下さい。フランス語を教えて下さい。

A：私、一生懸命ひろおきさんの気に入るようにします。気に入りたいの。ね、私を見限らないで？もう一度キスして？（オイフオリオン、限なく紳士的に振舞う。到底二日酔とは思えない。）私、白状する。貴方が泊っていた晩は一睡もできなかった。貴方が恋し

くて、貴方のことばかり考えて。あの変な手紙を書いたときも、貴方に何とか気に入られたくて何度も書直したの。でも、あんな品のないことを書きちゃった。下品な女だと思ったでしょう？（この女は人一倍淫乱なくせに、こういうしおらしげな言葉がいけしゃあしやあと口をついて出る。わろうべし。）

E：僕が貴方をそんなふうと思うことがありえるでしょうか。僕はあの手紙を貰って天にものぼる心地でした。友達の家で何度読返したか知れません。しまいには友達の名にとまって、盗読されました。さつきは、どんな人なのか知りたくて付いて来たんです。ですから、本当に新学期には僕は礫間違なしです。奴も盲でない限、貴方を山手一の麗人と認めて、僕を呪いながら帰っていったに違いないんです。A：ひろおきさんて面白い。真顔でそういうことを仰んのね。ね、本当に好きな人がいないの？ガールフレンドがいらないなんて信じられない。

E：まったくノーマークの僕だから、最期が一層華々しく悲劇的になるわけです。上方のださ公卿が実は山手一の大色魔だったと。

A：あのね？私、物凄い焼餅焼なの。もしもあとでひろおきさんにガールフレンドがいたなんて分ったら私、化けて出る。いい？

E：そんなことを言ってもらえる僕は果報者です。（間）報われついでに今一度おん唇の荣誉に与らせて頂けましょうか。

A：（本当に、という意味は、芝居染みていないという意味で、本当にしおらしく）え。

E：あ、そうだ、僕うがいをしてきます。こんな息では失礼ですから。

A：いいわ？そんなこと。（オイフオリオン、中腰になってぶちゅー。　　ゝゝアン、じとー。　　ゝゝ

E：今はまだ下手ですけど、必ず上達します。勘弁してください。

A：厭、そんなことを言っちゃ。（ここから幕引まで手を握合う。）

E：そうです、それから僕だって、あの晩は一睡もできませんでした。できるはずがありません。

A：なぜ？

E：貴方には分っています。

A：聞かせて。

E：それは、ある人の美しい面影がちらついて眠らせなかったんです。

A：まあ。

E：次の晩も、その又次の晩もです。

A：私もですね。

E：でも、眠らなかった夜の数だけは僕が優っていると思います。

A：まあ、私、どうしましょう。

E：いいえ、洗いざらい言ってしまうえば、今朝もこの体たらくで現れたのは、友達に飲まされるまでもなく自分から酒を呷ったんです。

A：なぜ？

E：貴方の顔が見られないように。

A：どうして？

E：僕は汚い人間ですから、考えることが汚いんです。これ以上言うのは許して下さい。貴方の美しさを冒瀆したくありません。

A：まあ。私、ひろおきさんを見損っていましたわ。

E：すみません、

A：そうじゃない。私、貴方が年下なものだから、つい自分の方が大人だなんて思っ。間違っていました。ひろおきさん、私にがっかりしないでね。でも、私、ひろおきさんに勝っていることがあるのよ？ひろおきさんが私のことを思ってくれる前に、私はもう貴方を愛していた。家に来てくれた日から、はつきりと貴方を愛しているんだもの。

E：それは分りません。僕はただ意識していなかっただけで、心の中では愛していたんです。汚いことを考えるのはその裏返です。僕は多分、一目惚したんだと思います。

A：んん？違う。私は、6月30日の日には、もう決めていました。貴方以外にいないって。貴方に嫌われたら一生一人でいようって決

めたんです。

E：僕はそんな果報者なんですか。

A：あら、厭だあ！どうしよう。（ゆさゆさ。）ね、私ってこんななのよ？構わない？

E：そういうところが僕は素敵だと思います。由加里さんも言っていました。お姉ちゃんほど可愛い人はいないって。僕もそう思います。あ、すみません、生意気を言って、僕みたいなちんちくりんが、A：全然そんなことはない。

E：いえ、あります。僕がちんちくりんで短足なのは歴々たる事実です。滋子さんこそ構わないんですか。もう伸びませんよ、僕の足は。それでいいんですか。

A：私は、そういうことは全然関係がないの。それは、私の父は大男よ。190以上あるんじゃないかしら。その大男を心から愛しています。でも大男だから愛しているんじゃない。母も大きいのも、私より少し低い位。だから私がこんなになっちゃったのも遺伝なの。仕方がないの。学校ではしょっちゅうからかわれた、化物化物ってでも、そんなことはちっとも気にしなかった。私の中身とは関係がないもの。私、人がどんなに大きかろうと小さかろうと、太ってようと痩せていようと、白かろうと黄色かろうと茶色かろうと、髪の毛があろうとなかろうと、私の父は見事な禿頭よ？でも関係なく愛している。ひろおきさんはいい？こんな化物みたいにでっかくてお願い、厭だなんて言わないで。私、どんなにでも可愛くなります。E：滋子さんと僕とでは全然違います。滋子さんならよりどりみどりで。僕みたいな小僧が滋子さんに愛されるのは驚異です。いつ決闘を申込まれても不思議はない位です。やっぱり僕は磔のようです。

A：だって、私、ひろおきさんほど素敵な人を知らない。それに、私は持てません。男性に不評判だから。仮に持てたとしてもひろおきさん以外に興味はありません。だから、私って憎ったらしいらしいの、特に男の人には。でも構わない。んん？構う。私、貴方にだ

けは可愛くなりたい。可愛くなります。だから堪忍して。でっかいのが小さくなれて、それで貴方が喜んでくれるんだったら、私、いつでも小さくなる。

E：僕、なんか夢を見ているようです。夢じゃないかな。ずっと寝てないからな。

A：あら、私も寝ていないのよ？ある人の面影がちらついて眠らせないの。風邪を引いたのもその所為。私ね、本当は、貴方が帰ったあとで泣いたのよ？折角来てくれたのに、顔があんまりぶすだから、貴方にはどうしても見せられなかった。一昨日のカードで私、救われたわ？ひろおきさん、有難う。私、あれを見て又泣いちゃった。貴方の言葉が嬉しくて。一字一句暗記しているの。何十回読んだか分らないんだもの。ひとつ聞かせて？

E：何ですか。

A：あのカードの言葉、何処で考えたの？

E：何処でといますと、

A：由加里ちゃんに色々聞いたんでしょう？レストランで。其処で思付いたの？

E：何か気に障ることがありましたか、

A：んん？そうじゃなくて、何処で考えたのか知りたかっただけ。ね、教えて？

E：すみません、考えたというほどでもないんです。果物屋さんにカードがあつたものですから、ちよつと書いてみただけで、

A：ね、キスして？（キリがないのでこの辺で幕。作者注：あとで二人で十番館に現れたときのオイフォリオンは、ティーシャツを裏返にして着ていた。アンはすっかり舞上ってしまつて、そんなことには気が付かなかつたけれど、ボーがあとでそれをアンに言うときに、「お姉ちゃん、良かったね。」とニヤニヤした。アンが「何のこと？」と言うと、「ひろおきさんのシャツ、あっちこつち口紅が付いていたよ？」と言われたので「厭だあ！」と言いなながら、いいないばあをするような、例のでーっかいゆさゆさを思切可愛ら

しくした。
)

第十五回

2章『己呂武反而』(つづき)(後書き)

編者の天野です。

滋子の原稿により忠実なPDF版はこちらから

<http://dl.getdropbox.com/u/976165/shigeko.pdf>

第十六回

2章『己呂武反而』（つづき）

「アン、悪天使に絡まれる」7月15日、夕方七時頃、家の門前。雨。アン、外出から戻る。門の前に傘をさした奴「やつこ」。

Y：やあ、滋子さん、やっと会えましたね。

A：お願です、話掛けないで下さい。あなたに私、何の用もありません。

Y：どうしてそう邪険にするんです。

A：言われました。もう二度と来ないで下さい。さようなら。

Y：なぜ返事をくれないんですか。電話番号を変えたのは僕の所為ですか。

A：そうです。それから、返事を差上げないのは、一通も開封していないからです。全部捨ててしまいました。何通頂いても無駄です。もう手紙もお断します。

Y：ひどいな、あれは手紙じゃないんですよ？滋子さん、僕は貴方にプロポーズまでした男です。

A：やめて下さい。思出したくないんですから。

Y：滋子さん、せめて僕の顔を見てくれないじゃありませんか。

A：いいえ、思出したくないんです。

Y：なぜ僕をそんなに嫌うんです。僕は、心から愛しているんです。それが言いたくて何回も何回も来るんです。滋子さんのことは全部承知でプロポーズしているんです。いいですか？全部承知しているんです。これを分ってもらいたくて今まで数えきれない位、此処に來ているんです。昼も夜も來ているんです。時には門を開けてポー

チで待っていることもあるんです、貴方は知らないでしょうが。

A：全部。何を全部御承知なんですか。

Y：僕の口からは言いたくありません。滋子さんが御自分の胸に手を当てて考えれば分ることです。僕はそのことまで承知で結婚を申込んでいます。滋子さんは僕のことを誤解していらつしやる。

僕は軽々にプロポーズしたわけではありません。それに、噂を広めたのが僕だと滋子さんは、

A：やめて下さい。名前を呼ばないで。あなたが何を御存知なのかは知りません、知りたくありません、帰って下さい、帰って。

Y：僕は貴方が忘れられないんです。愛しているんです。滋子さん！僕の妻になつて下さい。こんな男がほかにいますか。僕を少しは哀に思ってくれないんですか。仕事も辞めました。僕は精神的にぼろぼろなんです。僕はすべてを引受けます。それでも僕は貴方を愛しているんです。

A：聞きたくない。帰って。

Y：じゃ、貴方は僕よりもあの学生を取るんですか。彼がかわいそうじゃないんですか。

A：あなたは一体。何を調べているんですか。やめて、やめて、やめて。

Y：貴方はどんな理由で清水さんなんかと暮しているんです。彼女のことも書いて、

A：もうやめて！二度と顔を見せないで。（門をがしゃんと閉めて家の中に駆込む。テテマ口、狂ったように吠えている。）

「アン、物思の場その二」前場からの続。無言劇。まっすぐ読書室に入り、安楽椅子に腰を下す。一時間以上考込む。

「ストリップ・ショーの場」同日、夜八時半頃、二階、ボーの部屋。
英語の文章を朗読している。ドアにノック。

B：はい、どうぞ。（アン、登場。）お帰りなさい。遅かったね。
御飯まだでしょう？けんちん汁を作ってみた。

A：御免ね、遅くなつて。大分前に帰っていたんだけど、下で考
事をしていたものだから。

B：ん、知っていた。さつきテテが物凄く吠えていたね。又あの人
が来たの？

A：到頭つかまっちゃった。坊、あの人を知っているの？

B：んん？全然知らない。何度か話掛けられたけど、黙って通過ぎ
た。

A：ん、これからもそうして？もしもあの人に会ったら。

B：お姉ちゃん、疲れているよ？どうしたの？今日、ひろおきさん、
見送った？

A：見送ってから横浜線に乗って八王子まで行つて、それからディ
ーゼル線に乗つて高崎まで行つて帰ってきた。ずーっと乗りっぱな
し。駅からは一度も出ないの。

B：どうして？

A：考事。電車に乗つて、いろんな人の顔を見て考事をするの。面
白いわよ？がたんごとん、がたんごとんつてずーっと揺られている
の。おなかですいたら立食そば屋さん。みんなにじろじろ見られち
やった。服に御汁のにおいがついて大変。

B：ひろおきさんと何かあったの？

A：んん？何もなし。んん？あった。思切抱締めてキスしちゃった、
駅みんなの見ている前で。凄いでしょ？自分で感心しちゃった、
よくそんなことができるなつて。

B：それは感心ですね。一日で随分大胆になったんですね、昨日はあんなに恥かしがっていたのに。

A：そう、物凄い進歩。だってひろおきさん、とっても可愛いんだもの。それに彼、とっても紳士。

B：御飯食べよう？それともお姉ちゃんは胸が一杯で食べられない？

A：御飯を食べる前にしておきたいことがあるの。（歩寄ってボーを抱きすくめ、心のこもったキス。）坊、愛している。大好き。坊はお姉ちゃんを愛している？

B：私はお姉ちゃん以上に好きな人はいない。（鼻と鼻を擦合せて、又長いキス。）

A：お姉ちゃん、坊を食べちゃいたい。坊がいなかったらお姉ちゃん死んじゃう。

B：それはひろおきさんに言うことでしょ！

A：んん？坊も同じ。お姉ちゃんは坊をとっても愛している。でも坊とは結婚して赤ちゃんを産めないでしょう？男と女の違があるだけで、お姉ちゃんは坊もひろおきさんも同じに愛しているの。もしも坊と結婚できるんなら坊とも結婚する。

B：お姉ちゃんは欲張。

A：そう、物凄い欲張なの。嫉妬も凄いんだから。だからもしも坊がお姉ちゃん以外の女の人とキスなんかしたら絶対に許さない。坊は私だけの妹だもの。そうでしょう？

B：そうだよ？私もお姉ちゃん以外の人にキスされたくない。

A：でも、好きな男の人とのキスだったら許す。

B：もう良いの！それは。

A：良くない！（涙声になる。）お姉ちゃん、坊の心を踏みにじっちゃった。弄んじやった。どうしよう。許して？

B：そんなことはない。私、やっぱりひろおきさんが好きじゃなかったの。お姉ちゃんがあんまり仕向けるから自分でも好きなんだって思込んでいただけ。それがはつきり分った。

A：（おいおい泣きながら）でもやっぱり弄んじやったああ！御免

なさい、坊、許してええ！えええ。お姉ちゃんが馬鹿だった！坊をだしに使っちゃった！おいおいおい。ううう。

B：お姉ちゃん、可愛い。

A：坊大好きい！愛しているうう！ううう。

B：お姉ちゃん、泣声が大きいね。ひろおきさんがびっくりしちゃうよ？

A：だってパパの娘だもの。おお。

B：御飯にしよう？

A：待つて。・・・坊はお姉ちゃんを百パーセント信じているでしよう？

B：信じている。

A：お姉ちゃん、坊に見せてほしいものがある。そのかわりお姉ちゃんも坊に見せる。

B：何？

A：（アン、ひしと抱締める。）坊、此处に来てから何キロ増えた？今いくつ？

B：49だったかな。7キロ位増えたと思う。

A：道理で最近の坊、凄く綺麗。本当に美人。ひろおきさんも由加里お姉様は綺麗であります、素敵でありますって言っていたでしょう？あれ本心よ？彼、物凄い照屋さんだから心にもないお世辞なんか言わないの。だからお姉ちゃん、少しだけ焼餅を焼いている。

B：（赤くなつて）お姉ちゃんに褒められるんなら嬉しい。

A：生理は順調なの？

B：ん、終ったところ。

A：坊はいつも規則的なね。

B：お姉ちゃんは？

A：いつも目茶苦茶よ。二三度うまく巡ってきたなと思ったらまた分らなくなったり。お通じは毎日あるの？

B：ん、あるよ？

A：良いわね？肌がとっても綺麗。お姉ちゃん、荒れているでしょ

う。

B：お姉ちゃんは毎日じゃないの？

A：毎日どこるか週に二回あれば良い方よ。厭になっちゃった。ひろおきさんにニキビ顔で会うの。

B：お姉ちゃん、運動不足だよ？もつとお陽様に当たたら？明日からテテの散歩、一緒に行こう？水泳もいいていうよ？お姉ちゃん、スイミング・クラブに通ったら？

A：あら、お姉ちゃん、こう見えても背泳の選手だったのよ？大学時代。

B：お姉ちゃんって何でもできるんだね。

A：んん？もう水泳はやめたの。坊、おっぱいが大きくなったんじゃない？

B：太っただけです！相変わらずぺちゃんこのままです。

A：そんなことはない。（ボーの胸に手を当てる。）お姉ちゃんには分る。もうひとつ大きなブラジャー、買いにいくのか。

B：結構です！今でも有余っているほど。

A：坊、お姉ちゃんとおっぱいの見せっ子でしょうか。

B：何のこと？どうしたの？いきなり。

A：坊、お姉ちゃんに裸を見せるのは恥ずかしい？

B：恥ずかしい。

A：馬鹿ね、お姉ちゃんじゃない。どうして恥ずかしいの？一緒にお風呂に入ろうか。

B：厭です。だってお姉ちゃん、人には絶対におっぱいを見せるものじゃないって言ったでしょう？

A：そう、見せちゃいけない。でもお姉ちゃんと坊が見せあうんなら構わないでしょう？

B：構います！厭だ厭だ。恥ずかしいです。特にお姉ちゃんじゃ引目を感じます。

A：馬鹿ね、じゃ、好きな人が出来たらどうするの？見せないの？

B：お姉ちゃんはひろおきさんに見せたの？

A：見せるわけがないでしょう！お姉ちゃんが言っているのは結婚したらつてことよ。

B：私もそのときに考えます。

A：んん？お姉ちゃん、坊のおっぱいが見たい。見せて？お姉ちゃんも見せる。

B：どうして？

A：信じて。私はレ何とかでもホ何とかでもないから大丈夫。上だけ脱いで？ね？私が脱がしてあげる。（有無を言わせず、うしろから抱留めて、前のボタンを外しはじめ。ポーはジョイナスで買った薄紫色の半袖の詰襟ブラウス。）

B：お姉ちゃん、こんなことをしてどうするの？

A：大丈夫。坊の為なの。（ブラウスを脱がせてブラジャーも取る。メンソレータムを塗ったときに着けていた、青いリボンのブラジャー。ポーは、アンに背を向け、両手で乳房を隠している。むせるような、少女の甘い脂の匂。一体、あの悪臭は何だったのだろうか。真赤になって涙ぐんでいるポーの前に回って、抱締める。長いキス。）大丈夫。お姉ちゃん、もうずーっと前から知っているの。坊が此処に来る前から知っていた。坊の痛はお姉ちゃんの痛でしょう？だから、一度良く見せて？（言われて、ポーは手をだらりとさせたので、アンはポーの体から離れる。顔蒼白。）坊！

B：（ベそを搔いて）お姉ちゃん、見て何になるの？

A：坊！貴方どうしたの？ねえ、痣はどうしたの？

B：何の痣？

A：（ポーをベッドの上に倒し、覆いかぶさる。間近からつぶさに見る。）坊、手術なんかしないわよね。

B：何の痣？何の手術？

A：（左右の乳房を撫でながら）私、幻を見たんだ。化されていたんだ。腕を上げてみて。（左の脇に豊に生揃った毛を乳首の方へ撫付ける。）私、何を見たんだろう。（ポーに長いキス。さすがにポーも不安げ。）御免ね？お姉ちゃんの見間違だった。坊の此処に痣

があつたの。大きな醜い痣。毛が茫々と生えて。良かった！坊、良かった！お姉ちゃん嬉しい！綺麗なおっぱい、もう少し見せて。（ためつすがめつ。指の先ほどしかない、可愛い、濃い紅色の乳首に、思わずキス。口に含むと仄かに甘い。右の乳房、左の乳房と頬擦して、可愛い可愛い乳首にキスしたり撫でたり、大はしゃぎ。）坊！坊！良かった！お姉ちゃん、どれだけ心配したか知っている？ねえ、知っている？何日も眠れなくて、変な夢まで見て、もう病気になる！そうだったのよ？良かった、坊、良かった。神様、感謝します。坊、凄く綺麗。貴方のおっぱい、物凄く綺麗。坊大好き！愛している！（口にぶちゅー。）

B：もういいの？服を着ていい？寒いよお。

A：御免。お姉ちゃんが暖めてあげる。今夜は此処で一緒に寝よう？ああ、坊、あなた本当に可愛いわ。もう誰の前でも絶対に服なんか脱いじや駄目よ？んん？待つて。坊、全部見せて。今日だけ。貴方の裸を見ておきたい。ね？いいでしょう？もう恥かしくないでしょう？

B：だつて、

A：だつてだつて、貴方あんまり可愛いんだもの。お姉ちゃんとして見ておきたい。見せて見せて。

B：お姉ちゃんつてしょうがない。大きな赤ちゃん。（間）恥かしいよ！お姉ちゃんが脱がせて！（アン、靴下とスカートとパンツを脱がせる。）

A：坊、あなた本当に可愛い、綺麗な体。（前を向かせる。）どこにも痣はないんでしょう？

B：ない！

A：大きな黒子は？

B：ないよお。（アン、又ベッドに倒して仔細に見る。）

A：坊、この体、大切にするの。分った？絶対に変な男を近付けちゃ駄目。

B：分っている！もう着るよ？（どンドン着てゆく。）

A：むふふふ、目の保養をしたわい。

B：お馬鹿さん。

A：良かった、お姉ちゃんの見間違で！お姉ちゃん、てつきり坊の左胸の大切な所に大きな黒い痣があると思っていた。細長い毛が何本も生えているの。物凄く気味が悪くて、夢にまで見ちゃった。

B：いつそんなの見たって言うの？

A：鎌倉で。貴方が屈んだときに、おっぱいがこつ、まるみえになつたんだもの。

B：いやあ！

A：そうよ。もともと貴方があんなひらひらした物を着て歩くからいけないんだわ？お姉ちゃん、貴方の為にどれだけ悩んだと思うの？あんな物を人に見られたらって、生きた心地もなかった。鎌倉の帰に服を買いにいったのもその為だったのよ？大雨の中、貴方に合う下着を買いに関内まで行ったりして。どう？お姉ちゃんに感謝しなさい？

B：御免なさい。

A：ヌードを見る権利位あるでしょう？どう？そのブラジャー。可愛いでしょう？一生懸命考えて探したんだから。それから坊は腕の下をそのままにしておきなさい。剃っちゃ駄目。坊は色がとても白いからあつた方が絶対に綺麗よ？第一、自然にある物を剃るなんて理不尽な風習だわ。汗を掻いたときはアルコールで拭けばちっとも臭わない。そのかわりひらひらした物を着ないの。吊革なんかに掛つたときに、人に見えたら厭らしいでしょう？だからお姉ちゃんは夏でも長袖。坊に上げた服、袖が全部締っているでしょう？お姉ちゃん、そういうことまで考えてあげたんだから。

B：知らなかった。

A：前に着けていた下着とかひらひらしたシャツ、まだ残っているの？全部出した？

B：（箆笥を指して）あの中。

A：捨てちゃいなさい？んん？あとでお姉ちゃんが燃やしてあげる。

灯油を掛けて燃やしちゃうから寄越しなさい？もう二度とあんなものを着けちゃ駄目。

B：はい。

A：どうだ。お姉ちゃんにキスする気になったか。

B：でもお姉ちゃん狡い。私だけ脱がして、ストリッパーみたいに次はお姉ちゃんの番。さ、見事なヌードを拝見しますよ。皆さん、踊子さんに手を触れないようにお願いします。ひろおきさんが怒りますから。

A：あつかんべえー。

B：お姉ちゃん狡いよお！

A：じゃキスしろ。

B：あつかんべえー。

A：その方、中々見事な裸じゃったぞ。ちと胸と腰の回が淋しいがのう。早よう好いた男に可愛がってもらうことじゃ。なんならわしが可愛がってやっても良いぞ。

B：お姉ちゃんもそうして大きくしたの？

A：馬鹿ね、お姉ちゃんのは遺伝よ。ママを見たら分るでしょう？お姉ちゃんは赤ちゃん生産機なんだから。

B：へえ？じゃ、ひろおきさんはこれから重労働だ。耐えられるのかな、お姉ちゃんに、あんな小さな体で。お姉ちゃん、あんまりわがママを言ってこき使っちゃ駄目だよ？少しは手加減するんだよお？でないとへとへとになって逃げちゃうよ？

A：これ、言わせておけば。

B：だって言っただけでないと、お姉ちゃんは物凄くから、ひろおきさんが圧倒されちゃうもの。昨日は何回キスさせたの？ひろおきさんの唇が腫ぼったくなっていたよ？

A：（ボーを抱寄せ、唇を強く吸って）こっこのをね、八百回位。

（幕。）

第十六回

2章『己呂武反而』(つづき)(後書き)

編者の天野です。

滋子の原稿により忠実なPDF版はこちらから

<http://dl.getdropbox.com/u/976165/shigeko.pdf>

第十七回

2章『己呂武反而』（つづき）

「ボーに呆れられる場」7月16日、午後五時丁度、山手のアンが伏見のオイフォリオンに電話する。呼出音が鳴るか鳴らないか、向うが出る。

E：もしもし。

A：もしもし、鎌田と申す、

E：あ、滋子さん、ひろおきです。

A：今電話して大丈夫だったかしら。

E：はい。姉たちもみんな宵山です。結局、僕一人で留守番です。

A：何て言訳したの？

E：風邪気味でぞくぞくするって。

A：御免なさいね？嘘をつかせて、

E：いえ、まるつきり嘘でもないんです。一昨日以来、僕は滋子さんの事のほかは何も考えられなくて、病気も同然です。お祭どころじゃないんです。

A：まあ、どうしましょう。私のことをそんなに思ってくれるの？

E：滋子さん、僕は貴方の事を考えると息ができないほどです。ただ言葉を言っして下さい、僕は宇治川に身を投げます。

A：好き。愛している。

E：僕は何を言いましたよ。

A：名前を呼んで。

E：滋子さん、僕、

A：「さん」はいらない。

E：僕みたいな小僧が、

A：お願。呼んで？

E：滋子・・・、僕は真赤です。

A：私も真赤。でもこれからずっとそう呼んで？

E：はい、では、

A：厭、そんな言いかた。私、そんなに怖い？

E：いえいえ、とんでもないことです、

A：厭だったら。私、うんと可愛くなりたいの。うんと可愛くなる。どうしたらいい？言って？

E：滋子さんは今のままで素敵です。

A：もう、私は「さん」じゃないの。「です」「も」「ます」「もよして駄目？

E：分った。意識して使わないようにする。

A：そうよ、昨日も今ののように言ってくれたでしょう？

E：電話だと照れちゃうんだよな。僕、自分でもおかしくなるほど照性だから。

A：そこが好き。全部好き。貴方は？

E：僕は口では言えない。

A：言ってみて。名前も呼んで？

E：滋子、僕は滋子に今の思を伝えようとしたら、そのうちに息がでなくなつて死んじゃうよ。それほど愛している。

A：私、嬉しい。最後の言葉、もう一度、んん？もう三度聞かせて？ Words , words , words , words . ね？名前を付けて聞かせて？

E：滋子、愛している。滋子、僕は滋子を何よりも愛している。滋子、僕は滋子の為に今すぐ死ねたらいい、それほど愛している。滋子、本当は words にならない。

A：キスして？

E：ちゅっ。（皆さん、馬鹿らしいでしょう？もう少し付合つてやって下さいな。アンは、今、最高の幸を感じているのです。）

A：ひろおきさん、御免ね？

E：何がですか？

A：厭。「ですか」は厭。

E：だって、いきなり「ひろおきさん」なんて言うから。

A：私は「ひろおきさん」って呼ばせて？貴方には「滋子」って呼んでほしい。

E：分った、滋子。

A：はあい、なあに。

E：大好きだ、死にそうだ。

A：私も死んじやいたい。ひろおきさんとヒ素を飲みたい。んん？でもまだ厭。

E：どういう意味？

A：当ててみて。

E：参ったな。言えないよ。

A：ひろおきさん素敵。

E：滋子は素敵の自乗だ。僕は本当に正直に言うけど、僕は滋子ほど綺麗な人を見たことがない。お世辞じゃない。本当だよ。

A：まあ、どうしましょう。じゃ、私の中身は？駄目？可愛くない？

E：素敵の自乗。滋子ほど可愛い人は絶対にいない。

A：三乗じゃないの？私は可愛くなりたい。

E：滋子は内も外も最高だよ。甲乙なんかつけられない。

A：見ていて？私、ひろおきさんの為にもっともっと可愛くなる。

ひろおきさん、御免ね？こんなに年上で。ひろおきさん、気にする？

E：気にしない。僕がちびだってことも気にしない、滋子さえ気にしなければ。

A：嬉しい。私泣きそう。もう一回キスして？駄目？私、贅沢でわがまま？

E：ちゅっ。（皆さん、お付合、有難うございました。さてここからが本題です。）

A：ひろおきさん、詰らない事を聞くようだけれど、首の下に黒子

があるの？

E：ん、ある。どうして分った？

A：ん、ホテルでお別のキスをしたときに、襟の間からちょっとねえ、どの辺に付いている？

E：肋骨の上の方と言うか、ここ何骨って言うんだろっ、鎖骨って言うんだっけ。その下あたり。左側に。

A：いくつあるの？

E：ひとつ。結構大きいのが。

A：そばにもうひとつ小さいのがない？

E：んん？ひとつだけ。大きいよ？小さいと言えば小さいかもしれないけど。どうして？気味が悪かった？

A：んん？全然そんなことはない。

E：滋子。

A：なあに？

E：愛している。

A：嬉しい。

E：僕、本気になっちゃったよ。

A：私はとうから本気。

E：今月は来られないの？

A：行かれるかもしれない。坊の仕事が決って落着けば。どっちにしても大文字焼は必ず三人で見ましよう？私、パパとママにも会ってもらいたい。

E：やっぱり、僕、気おくれがするよ。僕は気にしないけど、お父さんとお母さんが何て言うか。

A：大丈夫。パパは何でも分ってくれる人だから。んん？大喜するに決っている。私、パパと一度も喧嘩したことがないのよ？怒られたこともない。

E：滋子。

A：なあに？

E：可愛いね。

A：本当？どこが？

E：だってパパだなんてさ。よっぽど仲が良いんだね？

A：そう。物凄く愛している。パパもママも。ひろおきさんの次に

E：僕って凄いんだな。

A：そうよ？私、ひろおきさんとかパパみたいな男の人しか愛せない。ねえ、ひろおきさんは焼餅焼？

E：どうだろう。分らない。こんな経験、したことがないもの。

A：私は物凄い焼餅焼。ひろおきさんがほかの女の人と口を利くだけで焼いちゃう。

E：知っているよ？この前言ったじゃん。

A：んん？きつと想像以上よ？だって、もうお姉さん達に少し焼いている位だもの。

E：自分はどこまでも光栄であります。

A：ひろおきさんはどう？私がほかの人と笑顔で話していたら。焼くでしょう？

E：僕はそこまでじゃないと思う。僕は滋子の笑顔が好きだもの。その人にも見てもらいたい。

A：厭。焼いてほしいの！私、ほかの人となんか口を利きたくない。ねえ、じゃ、何を聞いても焼かない？

E：どういう意味？

A：私、パパと物凄く仲が良いのよ？きつと想像以上よ？

E：お父さんのお嫁さんになりたいの？

A：私はもつと別な人のお嫁さんになるの！

E：参ったな。

A：どうして参っちゃうの！迷惑？

E：嬉しすぎて参っちゃう。

A：でも、ひろおきさんを好きになる前は、ほとんどパパのお嫁さんだったのよ？それ位仲が良いの。

E：お父さんは映画スターみたいな二枚目。

A：全然。熊のような人。ひろおきさんとは比べものにならない。

E：僕は焼かないよ。だってお父さんでしょう？

A：あのね？私、最近まで、一緒に、その、言いくいな、

E：何？

A：お願、何を聞いてもきらいにならないって誓って。

E：なるわけがないじゃん。ただお言葉を。なんなりとして見せま
す。

A：私、パパとお風呂に入ってた。

E：ぶつ。そんなことを言いくいって言ったの？滋子ちゃん可愛
い。

A：本当？本当？ああ、やっぱりひろおきさんって素敵。素敵。素
敵。

E：お父さんとお風呂に入って何が悪いの。でっかい赤ちゃんみた
いで可愛いよ。

A：私、ますます惚れちゃう。ひろおきさんって本当に素敵。そん
なふうに分つてくれるなんて。

E：何でもないよ、そんなこと。だって僕は姉さん達と入るんだか
ら。

A：え。嘘。本当？

E：ん。三人もいるから毎晩かわりばんこに、

A：厭！厭厭、絶対に厭。すぐやめて、お願。

E：どうしてさ。だって兄弟なんだから、

A：駄目！厭なの！もう、私泣いちゃう！

E：滋子ちゃん、本当に可愛いね。由加里さんの言ったとおりだ。

A：そんなことはいいの！ね、もうやめて、お願。私、又病気になる
っちゃう。

E：それは困った。じゃ、やめるか。姉さん達は変に思うだろうけ
ど。

A：厭！私、悔しい。凄く悔しい。ねえ、昨日も一緒に入ったの？
何番目のお姉さん？

E：どうしたの、泣いているの？

A：そうよお。

E：参ったな。僕はそこまで焼かれなくてもいいんだけどな。

A：厭なの！いつからなの？いつから一緒に入っているの？

E：困ったな。まずいことを言っちゃったな。

A：悔しい。私、凄く悔しい。

E：そうじゃなくてさ。噓。ちよつと冗談の心算でさ。

A：何？じゃ、入ってないの？

E：ん。

A：本当？お姉さん達と入ってないの？

E：入ってない。冗談だよ。

A：もう大きらい！

E：御免、怒らないで？そんなに厭がると思わなかったから。ねえ、泣かないで。

A：私、本当にしちゃったでしょう？

E：御免。

A：もう、本当？本当に冗談？正直に言って。

E：本当に冗談だよ。何処の国に姉貴と風呂に入る奴がいる？

A：一回も？ねえ、一回も入ったことがない？お母さんも厭よ？ね、お母さんとも入らない？

E：小さいころは入ったよ？幼稚園位まで。それも駄目？

A：駄目！でも仕方がない。それは我慢する。私、病気になるならい。

E：滋子って凄く可愛いんだね。それで二十四の174なんだもんなあ。感心しちゃった。由加里さんにもそんななの？

A：何よお。だから物凄い焼餅焼だって言ったでしょう？私に焼かすようなことをしない？

E：しない。

A：本当？ね、本当よ？

E：ん、できない。だから許して。

A：許したわ！

E：滋子。

A：何よ。

E：可愛いね。

A：私に焼かして面白がっているの？私、般若みたいになって、

E：滋子。

A：何？

E：ヒ素入のビーフ・シチューが食べたいね。

A：まあ。

E：滋子。

A：なあに？

E：ちゅっ。（作者注：これからの二十分位は、いくら何でも馬鹿らしすぎるかもしれないので割愛。）

A：じゃ、ひろおきさんから電話してくれる？今朝みたいに。そしてたら私が掛直す。

E：御免ね。まだ姉貴どもに嗅付けられたくないからさ。からかわれること請合だもの。

A：きつとお姉さん達、みんな美人ね。

E：そんなことがあるもんか。

A：嘘。一番近いお姉さんとはいくつちがい？（この辺は、別るときに交した会話をも取交せて書いて、このとき一度にした会話のようにしておく。）

E：ゼロオ。双子だから。

A：ひろおきさんに似ているの？

E：そっくりだって言われる。でも向うの方が僕より背が高いんだ、畜生、癪に障る。

A：又焼けてきた。

E：ぶすぶす、物凄いぶす。古狐みたいな顔。

A：もつと焼けてきた。どうしよう。

E：本当だってば。全然口も利かない。

A：一番上のお姉さんとはいくつ？

E：よっつ。今二十一だから。

A：悔しいいい。みんな美人なんでしょう。

E：狐と狸とスカンク。目も当てられない。

A：嘘つき。

E：僕の所為じゃないよお。

A：ね、九月より前に出てこれないの？うちに下宿なさいよ。そうだ。そうしましょう？新学期からベリック・ホールじゃなくて姉坊ホールの寮生になるの。私、毎朝あたたかい食事を作ってあげる。

E：どうかな。そんなことがクラスにばれたら本当に吊しあげを食っちゃうよ。今でも相当やばいからな。

A：ねえ、来週の週末は忙しいの？

E：多分暇。でもまだ行けないよ？いくら何でも家族の目があるもの。

A：んん？私が行く。ホテルに会いに来て？昨日みたいに優しくして？でないと私、待切れなくて死んじゃう。

E：来てくれるの？

A：多分週末なら大丈夫。坊も仕事探はしないだろうから。土日は外してもらうようにする。

E：嬉しいな、そんなことができれば。ね、何処で会おう。

A：何処でも良い。誰にも見られない所。静な所。宇治なんかどう？出掛けられる？

E：近くて最高。でもキスするのはホテルにしようよ、昨日みたいに。みんなが見ていたらしくいよ。

A：あら、私もよ？公園のときは特別。私だって人の見ている所でなんかできないわ？でも手は繋ぎたい。んん？やつぱりキスもしたくなるかもしれない。お姉さん達に見られない？万福寺とか三室戸寺あたり。

E：姉貴達は絶対にそんな所に行かない。河原町のディスコで体を揺しているような連中だから。

A：お父さんとかお母さんは？誰にも見られない？

E：大丈夫。京の方にしか行かないから。親父なんか万福寺に行っ

たこともないんじゃないかな。みんな抹香臭いことが大きらいだから。

A：本当は私もきらい。お寺になんか行きたくない。私、クリスチヤンなのよ？

E：へえ、カトリック？

A：んん？プロテスタント。洗礼教会。家族みんな。

E：道理で滋子は上品なんだね。僕、ますます尊敬しちゃう。

A：からかわないで。構わない？クリスチャンでも。

E：僕、クリスチャンさん大好き。僕もなる。

A：本当？ねえ、本当？

E：半分冗談だけど半分本当。なりたくない理由はひとつもない。

A：なってくれたら、私、幸すぎて泣いちゃう。毎週日曜日は、ひろおきさんと教会に行くの。坊と三人で行くの。坊も行ってみたいって。

E：今は由加里さんと一緒に行かないの？

A：坊の仕事が決ったら。良い教会を探して。ひろおきさんも行きましょう？

E：行ってみたいな。でも駄目かな。日曜日でしょう？僕こっちに帰ってきちゃうもの。

A：姉坊ホールの寮生になれば？

E：でも、クリスチャンがそんなことをしたらいけないんでしょう？特にプロテスタントは。ヒ素泥棒の先輩が言っていたけど、そういう不道德なことをするやつは地獄に落ちるって。なんだっけ、「ななつの死罪」とやという中にも挙げられているんでしょう？

A：それは、別のことよ。

E：どう別？

A：どうって、厭だ、私に言わせないで。男の人と女の人が結婚前に、その、

E：その何？

A：厭。分っているくせに。

E：しなければ構わないの？キスしたり密会したり。

A：厭よ。変な言葉を使わないで。デートをするのは当然でしょう？私は宇治までひろおきさんとデートしにいくだけだもの。デートもキスもしたことがない人とどうして結婚できるの？

E：今日二回目のプロポーズですか。

A：もう厭厭！私、いつもはこんなおつちよこじゃないのよ？ひろおきさんの前だと私のいけないところばかりが出ちゃう。

E：滋子ちゃん可愛いよ？

A：意地悪。いいの！密ナントカじゃないの！デートよ、れっきとした。

E：じゃ、姉坊ホールの寮生になるのは？

A：それだって大丈夫！バスルームさえ分ければ良いでしょう？私達は一階のを使うから。

E：でも何だか罪の臭がするな、

A：厭よ、変なことを言わないで！じゃ、アメリカのルームメイトなんかどうなるの？他人の男と女同士が大きなアパートを借りて共同生活するじゃない。それも死罪？

E：それは分らないけどさ、でも其処で僕と滋子と由加里さんが共同生活だなんて、ちよつと怪しいですよ？これは。ん、危険な悪の花のかおり。

A：もう、違うつたら。それに姉坊ホールなんて言ってみただけ。

私はそれほど淋しいってこと。いつもひろおきさんのそばにいたいのも！でも、そんなこと、御両親が許さないでしょう？

E：ばれたら厄介。姉貴らにも磔にされる。

A：もう、そんなことを聞くと私、又焼けてきて何が何でも引越させる。

E：参ったな、そのうちには僕も滋子の焼餅病に感染しそうだな。

A：感染しましょう、感染しましょう？ね？二人で死ぬほど焼餅を焼合つの。でも絶対に絶対に焼かせるようなことをしちゃ厭。それから私以外の女の人のことで焼いても厭。私もひろおきさん以外の

人は知らない。

E：僕は滋子に酔ってしまいそうだよ。

A：私はもつともつとひろおきさんに酔いたい。死ぬほど酔ってみたい。

E：本当に来週来るの？

A：行く、絶対に行く。これからでも行きたい。今晚はどう？暇？今からなら九時か十時には着くでしょう？

E：今日はもう無理だよ。だって風邪で動けないってことになってるんだよ？大体何処も彼処も満杯で泊る所なんかないんじゃないかな、多分。それとも実家に泊るの？

A：じゃ、明日は？日帰で行く。私、淋しい。今晚は又眠れない。

E：滋子ちゃん、淋しいのは一緒だよ。僕もゆうべ全然寝てない。ずっと寝てないよ。寝るのを忘れちゃった。

A：本当？ね、本当にそんなに思ってくれている？

E：本当も本当。最近馬鹿になっちゃった。

A：明日はみんな山鉾巡行を見に行くの？

E：行かないね、多分。親は行くかもしれないけど。

A：じゃ、電話もできないの？

E：する。何とか。公衆電話からでもする。

A：そうだ、コレクトで掛けて？そしたら長話ができるでしょう？

E：滋子。

A：何？

E：来週はビーフ・シチューを食べようね。ヒ素は盗んでおく。それからブランジャンが持っている葡萄酒の壺も。

A：まあ。（アン、陶然。）まあ、私、何て答えましょう。どうしてそんなことが言えるの？ひろおきさんとってもジェントル。素敵いい。（ここで又省略。）

A：じゃ、切るわね？坊が呆れた顔で見ている。ちよつと換るわね？

B：もしもし。ひろおきさん工合が悪いんですか？（間）あ、良かった。それから、お姉ちゃんを大事にしてやって下さいね？お姉ち

やん、可愛いでしょう？お姉ちゃんひろおきさんをとて愛していますよ？いつもひろおきさんの噂ばかり。（間）あまり話すとお姉ちゃんが焼餅を焼くから換りますね？じゃ、また。

A：どう？坊は。可愛いでしょう？でもひろおきさんは私だけ見ていて。

E：はい。

A：じゃ、又明日ね？電話待っている。三回愛しているって言って名前も呼んで。

E：滋子、僕は滋子を愛している。滋子、滋子を愛しているのは僕だ。滋子、喜多野拾遺は鎌田滋子を愛していることを僕は宣言する。これでいい？

A：今の言葉で明日まで我慢する。じゃあね？・・・ん、バイバイ？（受話器を置く。）

B：よくやるね、お姉ちゃん。偉い。

A：あとは坊で我慢しておくか。（アニー、ポーを抱寄せてぶちゅー。幕。）

第十七回

2章『己呂武反而』（つづき）（後書き）

編者の天野です。

滋子の原稿により忠実なPDF版はこちらから

<http://dl.getdropbox.com/u/976165/shigeko.pdf>

第十八回 2章『己呂武反而』（つづき）

「今度はオイフォリオンを脱がす場」7月30日夕刻、東山七条パークホテルの一室。アンとオイフォリオンは二週間ぶりのキスと抱擁を交している。アンは可愛く振舞って立上ることをせず、ベッドに横たわり、オイフォリオンが覆いかぶさる。本当は乗っかる。鼻を擦合ったり、頬擦をしたり、見つめあったりでアンはとろけそう。（又冒頭暫くは馬鹿らしいですよ？でも読んで読んで！）

A：三回言つて。

E：三回では言えない。

A：じゃ、何回でも。

E：二週間も離れていたんだよ？言葉でなんか言えないよ。だからこうするんじゃないか。（ちゅっ。）そして無言のうちに滋子を僕のものにする。

A：まあ。ひろおきさん、何処でそういうラインを思付くの？

E：思付くんじやない。僕の思そのものだ。でも滋子の顔はどんな綺麗な言葉を使つてもけなす言葉にしかない。所詮 words ,

words , and just words .

A：まあ、そんなことを言われて、私、どうしましょう。

E：どうもしなくていい。ずっとこのままで。

A：憎いわ？ひろおきさんに見つめられると、私、何も分らなくなる。

E：じゃ、この意味が分らない？滋子、僕は滋子を愛している。滋子、滋子を愛しているのは僕だ。滋子、僕は滋子を愛しているから

こうする。（ぶちゅー。）

A：ねえ、ひろおきさんが今のような言葉を囁いた人は今まで何人？
E：ゼロ。

A：嘘嘘、そんなことは信じない。ねえ、私ってしつこい？同じことを何遍も聞いてしつこい？

E：ちつとも。滋子みたいな人にそんなふうに思われて僕は果報者
A：じゃ聞いちゃおう。ねえ、何人？電話じゃなくて顔を見ながら聞いておきたいの、どうしても。教えて教えて。正直に言つて。私、すべて受入れる。だから、ひろおきさんが今まで交際した女の人は何人？

E：ゼロ。自慢じゃないけど。

A：嘘。絶対に嘘よ、そんなこと。ねえ、今のうちに白状しちゃいなさい？あとが楽になるでしょう？

E：じゃ、一人。

A：（むつくりと頭をもたげて）本当？ねえ、本当？誰なの？ねえ、誰？初恋の人？

E：そう。

A：厭だあ！どうしよう。じゃ、その人ともキスなんかしたの？

E：した。

A：信じられない！もう、どうしよう。悔しいいい。誰？ね、誰？
E：ねえ、これからいつもそうやって可愛くしてくれるの？僕嬉しいな。焼餅も悪いもんじゃないね。癖になりそう。

A：真面目に答えて！貴方今まで嘘をついていたんじゃない。その人何ていう人なの！隣の学校の子？

E：「貴方」か。僕、嫌われた？

A：きらい！嘘つきはきらい。

E：嘘でもないんだけどな。無理やり捻りだした答。（ニヤニヤ。）

A：何？どういうこと？

E：その一人とは滋子ちゃんていう可愛い一人。

A：（むしゃぶりついて）許さない。からかってばかり。

E：からかってないよお。全部正直に答えている。

A：じゃ、ほかにはいないのね？今まで私のほかには一人もいないのね？

E：いない。誓っていない。

A：手も繋いじゃ厭よ？そういう子もいない？今まで一人もいなかった？

E：いない。いながらプロムの相手も紹介してもらったんじゃないか、友達に。元町を歩いているところを滋子に見られたとき、あれが生れて初めのデートだよ？選りに選ってそこを押さえられちゃうんだからな。僕は滋子に隠れて悪いことはできないよ。

A：そう。できない。絶対にさせない。ああ、良かった。もう！さつきは目の前がまっくらになったわ！じゃ、初恋の人は？ね、教えて。焼餅を焼かないから教えて頂戴。

E：滋子から教えてよ。

A：知りたい？

E：ん、知りたい。

A：あまり知りたそうでもないじゃない。もっと焼いて。焼餅を焼いて頂戴。

E：焼けてきた。さ、誰だ、その初恋の野郎というのは。

A：パパ。

E：ちえっ。じゃ、どうしたって敵わないじゃん。熊みたいな大きな人なんでしょう？

A：物凄くでつかいわよ？私が可愛く見えるほど。

E：滋子はどこからどう見たって可愛いよ。僕、滋子の大きいところまで好きになっちゃった。

A：エッチ！

E：滋子こそ勘違だよお！一体何を考えてんの？

A：ひろおきさんが悪いわよ。だって、こんなにくつついてそういうことを言うから。

E：言うから何？

A：厭。意地悪。

E：ますます好きになる。でも、白状するとずっと気にはなっていないんだ、実は。僕、エッチだから。

A：まあ。何が？

E：（いきなり其処に頬擦をして）此処が。

A：（感激して）でも、厭じゃない？こんなのみつともなくない？

E：何でさ。厭なわけがないじゃん。滋子には丁度これ以外にありえない。此処も大好き。滋子の全部が大好き。きれいなところはどこもない。全部愛している。

A：私、ひろおきさんが好きよ？もつと抱締めて？

E：いいの？

A：貴方にはそうされたい。お願い、ぎゅっと。

E：（強く抱付いて）心臓がときどき鳴っているね。僕も頭がおかしくなりそう。

A：（オイフォリオンの頭を抱きかかえて額に口を付け）私、幸。ずっとこうしてほしかった。

E：どうしたの？泣いているの？ねえ、滋子、どうしたの？（優しいオイフォリオンの顔が私の顔の上に来て見つめる。限なく清らかな接吻。髪の毛を撫でて）滋子の髪の毛は多いね。とても黒くて、しつかりしていて、良い匂。

A：あまり多くて厭じゃない？

E：厭なところなんかあるもんか。全部好き。全部愛している。ね、何かあったの？

A：嬉しいだけ。

E：今度は僕から聞いていい？

A：何？

E：滋子はどうしてこんなに綺麗なの？

A：まあ。

E：泣いた顔は笑った顔より一段と素敵。世の中に滋子ほど綺麗な人がいるかしら。

A：どうしましょう。

E：ニキビが可愛い。ちよこんと。

A：あまり見ないで？気にしているの。

E：泣いていいよ？もつと見ていたい。

A：ね、ずっと愛してくれる？

E：そんな質問に答えなくちゃいけないの？

A：答えて。

E：僕を見くびらないで？先月の十六日の晩から、僕が考えたのは滋子のこと以外にないよ？今月十五日の昼からは、考えることも思うことも全部滋子になっちゃった。寝ても覚めても滋子よりほかのことは、頭に入ってこないように遮断している。全部雑音。考えれば考えるほど、これは運命だから、僕はもう決心した。ほかのすべてを捨てても滋子を取る。こうなったら僕が滋子を離さない。

A：本当？何があっても？私にどんな厭なところがあっても？どんな欠陥があっても？

E：まだ僕を小僧あつかいにしている。僕は滋子のために脱皮しようとしているのに。 You hurt me .

A：じゃ、こんなことを、女の口から言うのは、物凄くはしたなくて、厭だけれど、じゃ、思いきって言うけれど、でもどうしよう、言いにくい、ねえ、

E：滋子、僕なりに少しは成長した心算だから。この二週間、毎日毎日何時間も、ただ電話したんじゃないでしょう？僕の方に垣根はないよ？全部とっぱらった心算。だから僕は恥ずかしいことでも、恥ずかしがらないことにした。ねえ、僕は滋子さえ厭でなかったら滋子とこのままじわりたい。

A：嬉しい。ありがとう。私で良い？

E：そんなことは滋子よりほかの人とは考えられない。

A：（涙をぼろぼろこぼして）私、この気持、言葉にできない。私を厭らしく思う？ねえ、浮気な軽い女のように思う？

E：ちつとも思わない。断じて思わない。滋子ほど憤みぶかくて嗜

のある人はいないと思っている。気やすめに言うんじゃないよ？本当に思っていることしか今日は言わない。ねえ、滋子も僕がその場かぎりのことを言っているんじゃないってことは分るでしょう？お世辞や気やすめじゃないってことは僕の目を見れば分るでしょう？

A：分る、分る。ひろおきさんって良い人、立派な人。私が馬鹿だった。許して？

E：滋子、僕は心の準備をしてきた。電話で話していてこうなるだろうと思っていた。でも、あまり期待しないで？僕、なにしろ、

A：厭。そんなことを言わないで。それじゃまるで私が、私だって私だってこんなふうになったことなんかないのよ？誰かと二人きりになったことなんかないのよ？貴方が初てなのよ？分って？

E：それなのに僕なんかでいいの？僕は滋子が厭なら仕方がない、諦める。ただ滋子が、その、電話の様子で、何となく、その、話しかたから、

A：厭厭、もう言わないで。

E：ねえ、滋子が恥ずかしがるのは可愛いよ？僕はそういうところが大好き。けれど、今日は気持を言合おうよ。その為にわざわざ会いにきてくれたんでしょ？

A：ひろおきさんって良い人。ありがとう。好きよ？

E：ねえ、僕が喋るから滋子はイエスかノーで答えて？それなら良いでしょう？僕も綺麗な人の前でこんなことを告白するのは恥ずかしいよ？でも、今日はそうした話をしようと思った。実はね、僕、滋子と電話をするようになって、よく夢を見るようになった。滋子とまじわっている夢。だから滋子もしかしたら同じじゃないかと思った。僕は滋子とまじわりたいよ？でも、滋子が厭なら僕はあきらめる。滋子はどうか？まじわってくれる？

A：イエス。

E：滋子、ありがとう。ひょっとして滋子も同じ夢を見た？

A：イエス。

E：やっぱり。そうだろうと思っていた。僕の子供を妊娠したいん

じゃないの？

A：（ぼろぼろ泣きながら）イエス。

E：今日はその心算できたんでしょう？

A：イエス。

E：僕には理由は分らないけど、滋子はどうしても赤ちゃんが欲しいんでしょう？それも僕のじゃなければ駄目なんでしょう？すぐにも妊娠したいんでしょう？

A：そう、そう、そう。おいおいおい。ひろおきさん助けて。私、その夢のとおり。

E：じゃ、滋子の今の、うつつの気持はどうなの？何遍も言うように、僕は滋子とまじわりたい。それ以上の幸はないよ？滋子はどうか？夢の気持じゃなくて、今のうつつの気持は、どう？僕とまじわりたいの？どうしてもまじわりたい？僕の欲望に合せるのではなくて滋子自身がそう思っている？僕はどうしてもまじわりたい。滋子はどうしても？

A：イエス。

E：滋子、ありがとう。

A：でも、貴方はいいの？今日、私、きつと妊娠するわよ？貴方はまだそんなに若いのに、

E：ねえ、滋子、「貴方」はよそうよ。三回名前で呼んで？

A：おいおいおい。ひろおきさん、私、貴方の前ではまるで子供になっちゃう。どうすれば良いの？

E：僕は滋子と結婚したいもの。何が何でも滋子と結婚するもの。ちよつと位早く赤ちゃんが出来たって構わない。学校なんかやめて働く心算。でも、滋子はどうなの？そんなことをして困らない？

A：これは私の思がひろおきさんに通じたんだわ？でも私、ひろおきさんに絶対に学校をやめほしくない。大学にもいつて？ひろおきさんには迷惑を掛けない。赤ちゃんの面倒は私と両親で見る。だから、その、貴方とは、

E：赤ちゃんだけ生みたいんだね。分らないな。でも、僕は滋子と

結婚するよ？結婚もしなのにまじわることなんかできない。

A：何て貴方は良い人なの？私、本当に心から愛します。尊敬します。

E：僕も心から滋子を愛するし尊敬する。滋子ほどの人がそこまで思込むんだからよほどの理由があるんでしよう？

A：ひろおきさんが大学を出たときに、もしもまだ私を愛していてくれて、しかも結婚してくる気があるんだったら、私はそのときまで待ちます。赤ちゃんのことは気にしないで勉強して頂戴。

E：そういう言いかたは酷いな。いくらちんちくりんの僕でも一往男のはしくれの心算だよ？心から愛している滋子に「もしも」なんて言われると自尊心がなくなっちゃうよ。

A：おいおいおい。何て貴方ってすばらしい人なの？私、ひろおきさんと結婚する資格なんかない。私、あきらめる。

E：ちよつと、何を言っているの。僕はあきらめられないよ。さつきも言ったでしょう？もう僕が滋子を離せないんだって。焼餅を焼かれる癖まで付いちやってすっかりスポイルされているんだから。

A：おいおいおい。ひろおきさん素敵いい！大好き！愛している！おいおいおい。

E：滋子ちゃん泣声が大きいんだね。驚いちゃった。フロントに通報されちゃいそうだよ。

A：おいおいおい、からかわないでええ、本当に泣いているんだからああ。

E：可愛いな。どうしてこんなに可愛い人が今まで放っておかれて僕なんかが選ばれるのかな。嘘みたいな話だな。ほら、滋子ちゃん、涙を拭いて。（オイフォーリオン、ティッシュで拭う。それからアンの顔中にキスを浴びせる。段々感情が高まってきて、彼の唇は首筋までおりてきた。アンは夢の中。肩を撫でいた彼の右手が脇に潜込んだときに、アンははっとして）

A：待つて。

E：御免。御免ね？僕、エッチだからさ。

A：そうじゃないの！あまり泣かせないで。

E：そうだよね。まだ話がすんでないもんね。滋子は妊娠したら、じゃ、どうする心算だったの？

A：私が育てる。坊もきつと可愛がってくれるわ？パパとママも孫の顔が見られて大喜する。ひろおきさんは養育費なんか全然心配しなくて良いの。もしも、そうか、御免ね「もしも」だなんて。何て言おうかしら。認知するのは結婚してからで良いの。

E：滋子は、じゃ、いつ結婚してくれるの？

A：それは私が聞くことよ？

E：だから、僕いますぐにでも。明日にでも籍を入れようよ。畜生、年齢未満だな。でも九月になったら僕の自由意思で結婚できるんだ。あとひと月とちよつとだな。そしたら結婚しようよ。赤ちゃんはそれからでもいいんじゃないの？

A：私、ひろおきさんの将来を台なしにさせることはできない。

E：じゃ、やつぱり、結婚はしなくても赤ちゃんは欲しいんだね。分らないな。どうして？どうして滋子ほどの人がそう考えるの？

A：結婚したくないんじゃない！したいの！ひろおきさんと結婚したいの。死ぬほどうしたいの。赤ちゃんなんかできなくてもひろおきさんとは結婚したいの。私は赤ちゃんよりひろおきさんを愛しているの！

E：ますます分らないな。じゃ、結婚しようよ。僕は公園でキスした日にそうきめたよ？だって、滋子もその気だったから。僕にはそう思えたけれど。僕の自惚かな。

A：違う違う。私って何て幸なの？私も結婚するんだったらひろきさん以外にいないって、泊りにきてくれた日にはもうきめていたのよ？

E：じゃ、きまりだ。おっと、大事なwords を忘れていた。

滋子、will you mar、

A：待って。待って、待って。私、言うことがある。あのね？ああ、どうしよう、貴方に嫌われたくない、

E：昔結婚を約束した恋人がいした！どうだ。

A：どうして？なぜ分るの？

E：なぜ分るって、大概分りすぎるシチュエーションですよ？今の場合は。姉貴の見るテレビだとか映画もこういう筋書だもの。更には、その恋人とは実質もう、

A：違う！そうじゃない。変なことを言わないで。

E：御免。そうだよ。滋子はプロテストだもの。調子に乗っちゃった。御免ね？滋子、御免。

A：いいの。

E：僕が言いたかったのは、仮にそんなことを気にしているだったら、僕は受入れるってこと。もしもそんなことでためらっているのなら、それには及ばないよ？

A：ねえ、じゃ、今日は何を言っても厭らしい下品な女って思わない？

E：滋子が言うことだったなら絶対に思わない。

A：私は死ぬほど恥ずかしい思をして言うんだってことを分ってくれる？

E：勿論。厭な言葉でもやむにやまれず口にしくちやいけないことだつてあるよ。誰だつて。僕なんか下品だからついこのあいだも” * p * * * * s , y o u m o t h * * * * * * e r ! ”
つて三度いつてやった。

A：嘘ばかり。ひろおきさんって何て素敵な人。又泣きそう。

E：あれあれ。じゃ、滋子の言う恥ずかしいことってどれほど恥ずかしいと？ F “ m a とか？

A：あのね？私たち、今日は心の結婚をして、この部屋で二人だけの誓を立てて、それから夫婦なれない？

E：僕はその心算で来たよ？

A：そして籍を入れるのはずっとあとにしましょう？

E：滋子がそうしたいのなら。でも、滋子の宗教は許してくれるの？婚前交渉は禁じられているんでしょう？

A：んん？だからちゃんと神様の前では結婚するの。牧師さんもないし、誰も立会人いないけれど、神様に立会ってもらって、私達のあいだで誓を交すの。人は何と言おうと、私達は夫婦よ？

E：滋子、すばらしく美しいことじゃないか。何を恥ずかしがることがあるの？

A：んん？でも、そのあとは、その、

E：夫婦のまじわりをするんでしょう？当然。

A：構わないの？

E：滋子が構わないんなら。僕はそうしたい、どうしても。ねえ、九月に籍は入れたくないでしょう？籍を入れてからでは駄目なんでしょう？いや、非難しているんじゃないよ？僕は、形なんかどうでもいいよ。実質結婚するんだもの。僕にはそれが大事。ただひよつとして滋子は世間の目があるんじゃないかなって。

A：私、今日ひろおきさんの奥さんになって、すぐにも身籠りたい。

E：ありがとう。僕も今日滋子の旦那さんになって、すぐにもまじわりたい。

A：ひろおきさんって良い人。じゃ、私、妊娠してもいいのね？

E：滋子ちゃんって最高に可愛い。こんなことを言出すのに恥ずかしがって赤くなってもじもじして。

A：私、もっと可愛なる。可愛い奥さんになる。今日結婚してもひろおきさん今までどおりの生活をして？大学にもいって、社会に出て、これで良いと思ったときに私と赤ちゃんを迎えにきて？それまではパパに世話をしてもらう。でも、山手に遊びにきてくれなくちゃ厭。新学期が始ったらしょっちゅう来て。だって旦那さんのような？んん？あの家から通って？そして毎晩私を抱いて。厭だ、どうしよう、毎日私を可愛がって！それから、もしも留学するんなら私と赤ちゃんも付いていきます！大丈夫よ。パパは許してくれる。私と孫の為にならなんだってする。ひろおきさんの御両親には入籍するときに紹介して？パパとママはひろおきさんに会いたがるけれど、

ひろおきさんが厭なら入籍してからでも良い。

E：僕は自分の親にも会ってもらいたいし滋子の御両親にも会いたい。

A：ひろおきさんの御両親とは入籍後にさせて？私、御両親に合わせる顔がないもの。

E：滋子がそうしたいのならそうしよう？僕は滋子が大切で、あとは大したことじゃない。じゃ、籍は入れなくても実質夫婦なんだね。僕に経済力がついたら籍を入れるんだね。

A：そうしてくれる？それから、じゃ、厭でなかったらパパとママに会ってやって？パパの喜ぶ顔が見たいもの。ひろおきさん、安心して頂戴？パパ決して怖い人ではないのよ？私に赤ちゃんができるって知ったら、ひろおきさん、きつと下へも置かない持てなしょ？本当よ？これ。パパも籍なんて形にはこだわらない。孫の顔が見られるだけで死ぬほど喜ぶの。ママもそうよ？だから、坊と三人で行きましょう？

E：僕ほどの果報者はいないよ。

A：ひろおきさん大好き。私って何て幸なんでしょう。

E：いつ会わしてくれるの？御両親に。

A：お盆休。坊、仕事が終わったでしょう？休の前は研修で忙しいの。休あけから仕事はじめ。そんなに日数はとれないけれど四五日京都を見せてあげる心算。坊は私達のキューピッドでしょう？ひろおきさんを紹介するときには絶対にそばにいてほしい。それからみんなで川床料理でも食べて、一緒に送火を見ましょう？そうだ、坊には鰻寿司を食べさせなきゃ。ああ、何て素敵でしょう。そのときにはひろおきさんも何とか誤魔化して紫野に一泊して？そしてパパの背中を流して？私、泣きそう。

E：滋子、僕、言葉にならないよ。詩のようだなあ。僕も泣きそう。

A：僕、大丈夫？来月の十五日あたり、おとまりできる？怖い怖いお姉さん達の目が誤魔化せるかしら。滋子ママがお電話してあげましょうか。「ひろおき君はうちであずかりますから御心配なく。今

お風呂に入っています。ちゃんと早寝させて明日間違なおかえします。」って。

E：うん、ママ。だから早くおっぱい頂戴？

A：ばーか。エッチな人はきらい。ねえ、誓を立てる前にひとつ見せてほしいものがあるんだけど。

E：何？

A：あのね？ああ、言にくいな。あのね？

E：何？僕のちんぼこ？一往それらしき物は付いているよ？実はさつき勝手に暴れだして困っちゃった。何とかお役に立てると思います。

A：馬鹿。何を言っているの？きらい、そっいつ下品な話。

E：御免なさい。

A：あのね？シャツを脱いで？

E：シャツね？パンツじゃなくて。

A：もう厭！

E：はいはい、シャツを脱ぐと。たいしたマッスルじゃないよ？僕は。（シャツをとる。大層なめらかな肌。女のよう。）

A：黒子を見せて？

E：これ？

A：（涙がはらはらと）ねえ、ふたつあるわよ？小さいのがひとつ。

E：これは黒子じゃないでしょ。ただの点だよ。

A：やっぱり有ったのね。

E：ねえ、どうしたの？あれれ？どうしたのかな。ねえ、滋子ちゃん。僕、滋子ちゃんの泣顔を見ると抱きつきたくなっちゃうんだよね。

A：キスして？

E：滋子、僕たちは結婚するんだね。

A：初恋の人、誰だったの？（消灯。）

第十八回

2章『己呂武反而』（つづき）（後書き）

編者の天野です。

滋子の原稿により忠実なPDF版はこちらから

<http://dl.getdropbox.com/u/976165/shigeko.pdf>

第十九回

2章『己呂武反而』（つづき）

「アニー、ボーに子供あつかいされる場」7月31日、夜十時半頃、山手の家。一階読書室、安楽椅子に掛けて考込んでいるアニー。パジャマのボーが入ってくる。

B：お帰りなさい。

A：ただいま。（立上ってボーを抱締め、長いキス。背中とお尻を撫でながら）坊、可愛い。お姉ちゃんの坊。又ちよつと太ったんじゃない？（本当にふつくらとした感触。初のころとは大違。）

B：まだまだ。お姉ちゃんには程遠い。

A：んん？明日本当に新しい下着を買いにいこう？これじゃ締過ぎよ。膨むものも膨まなくなっちゃう。寝るときにはちゃんと外して寝ている？

B：大丈夫！言われてからはちゃんと取っている！膨まないのは遺伝です。

A：お姉ちゃんがどんなに嬉しいか分る？あー、本当に良かった、痣なんかなくて。良かった良かった。坊は綺麗。坊は美人。坊大好き。Do you love your big sister,

Beau？

B：Very much, Annie.

A：How very much？

B：This very much.（ぶちゅー。鼻の擦合。又ぶちゅー。皆さん、馬鹿らしいですか。でも、これが二人の儀式なのです。）

A：ねえ、坊、怒らないでね？

B：ん、怒らない。何？

A：（ボアの左手を取ってそれに接吻）一度お姉ちゃんと整形医院に行ってみようか。仕事を始める前に。

B：でも直らない。

A：んん？きつと何か処置はあると思う。何か被せて分らなくするとか。お姉ちゃんはよく分らないけれど、一度専門の人に見てもらおう？

B：でも、私、もう良い。

A：気にならないの？

B：気にしてもしょうがない。

A：でもお客さんの前に出たときに、その、坊が、何というか、その、

B：恥ずかしくはないかってこと？

A：怒らないで？

B：怒らない。

A：平気？坊は。人に見られても平気？

B：平気ではないと思うけれど、

A：じゃ、一遍見てもらおう？ね？お姉ちゃんが一緒に付いていつてあげる。（しくしく泣く。）

B：お姉ちゃん、どうしたの？

A：だって坊はこんなに美人で可愛いのに、どうして怪我なんかしたの？あんまりじゃないの。お姉ちゃん悲しい。ううう。おいおいおい。

B：又お姉ちゃんのオイ泣タイム？

A：おいおいおい。お姉ちゃんは坊が大好きなの。愛しているの。一遍行こう？ね、一遍。んん。おいおいおい。

B：ん、行こう？行く。見てもらう。

A：坊がかわいそう、かわいそう、坊、どうして。えええ。おいおいおい。

B：大丈夫だよ。

A：御免ね、坊、お姉ちゃんが悪かったああ、お姉ちゃんを許してええ。

B：何を許すの！

A：だってお姉ちゃんがひろおきさんを取っちゃった。取っちゃった。折角坊に好きな人が出来たと思ったのに、お姉ちゃんが取っちゃった。どうしよう。おいおいおい。

B：もう、怒るよ？取ってないの！ひろおきさんはお姉ちゃんが好きなの！

A：でも、坊を変な人に渡したくない。又お姉ちゃんが探してあげる。今度は任せて。

B：分った。任せる。あまり期待しないで任せるから探して。だからもう良いでしょう？オイ泣タイム終了。

A：病院にも行くのよ？

B：行く。

A：明日ブラジャーも買いにいこう？

B：ん、買って？

A：坊はお姉ちゃんがきらいにならない？まだ愛している？

B：お姉ちゃん、ひろおきさんにもこんなことをしているの？ひろおきさん疲れるんだろうなあ。

A：生意気を言わないで。彼はこれが好きだって喜んでくれるの！

B：参ったであります。お姉ちゃんも随分疲れているね。でもとても綺麗。いつもよりもっと綺麗。どうしてかなどうしてかな。（ニヤニヤ。）

A：何よ。

B：ひろおきさんは元気だった？

A：元気よ？夕方まで宇治でデートしてわざわざ京都駅まで見送に来てくれた。彼、本当に紳士。絶対に疲れた顔とか暑そうな顔なんか見せないの。電車の切符も何も全部彼が買って、私は座っているだけ。汗を掻かせないようにするの。本当に優しい人。すばらしい

人。

B：良かったね。お父さんとお母さんは元気だった？

A：ん、元気よ？お盆には坊に必ず遊びにおいでって。

B：そう。

A：何よ。

B：同じことを電話で言ってた。

A：え？電話があつたの？

B：そう。夕方。お盆にはお姉ちゃんに必ず遊びにおいでって。

A：坊、お姉ちゃんをからかって面白がるのね？

B：大丈夫。お姉ちゃんは上野の美術館に行っていますって言うておいた。私、嘘をついちゃった。嘘は泥棒のはじまりだけど。

A：何よ、生意気を言って。何が言いたいの！

B：実家に泊らなかつたんなら、じゃ、ひろおきさんの家に泊ったんだ。

A：泊るわけがないでしょう？ホテルよ。駅の近くの。実家は遠いんだもの。

B：宇治よりも遠いの？

A：坊、貴方いつからそんなに頭の回転が早くなつたの？

B：お姉ちゃん私を馬鹿だと思っている。

A：思つてないわよ。坊はお姉ちゃんなんかよりずっと賢い。だからいつも負けるじゃないの。

B：私を子供だと思つているんでしょう、まだ何も知らない。

A：思つてない。

B：さつきひろおきさんから電話があつた。

A：どうしてそれを早く言わないの？

B：だって、言出せなくて、

A：何だつて？

B：特に用はないって。無事に着いたか確めにつて。優しいね、ひろおきさんつて。紳士だね。良かったね？お姉ちゃん。

A：あー、声が聞きたかつた。あんなにすばらしい人が世の中にい

るかしら。本当よ？ひろおきさんの良さの十分の一も知らないうちからお姉ちゃん、好きになていた。坊の言うとおりだわ？「ひろおきくん」なんてとんでもない。私って馬鹿ね。いっぱいのお姉さんの心算でいるなんて。今じゃ「滋子ちゃん」って慰めてくれるのよ？
B：良かったね？お姉ちゃん。でも今日は電話の様子がいつもと違ったよお？変によそよそしくて、不得要領で、慌てて切ったりなんかして。何かあったのかなあ。

A：何を言わせたいの！

B：言わせたいんじゃないの。言いたい。でも言って良いのかな。確信が持てないな。

A：確信って何の確信！何を言うの！変な目で見て謎掛なんかしないで頂戴。

B：おめでとうって言いたいんだけどな。私の思違かな。

A：何のおめでとうよ。

B：お姉ちゃん。私、子供じゃないですよ？

A：分っているわ？

B：じゃ、慌てたり恥ずかしがったりしちゃ駄目ですよ？私、お姉ちゃんの妹なんだからね？いい？私も子供じゃないよ？

A：何？

B：お姉ちゃんが今一番欲しいもの、そういう物があるとする。

A：（恐る恐る）それで？（多分世界が崩壊する寸前の顔。）

B：ひろ、

A：お願いお願い、もう言わないで。お願い。（椅子に倒込む。174センチが147センチになつてしょんぼり。ボーの手がアンの肩に。）

B：お姉ちゃん、どうして？隠さないで？どうして隠すの？私、嬉しいのに。喜んでいのに。凄く嬉しいのに。そうなんでしょう？

A：坊、お願い、ちよつとのあいだ一人にして？ね？お願い。

B：ん、分った。じゃね？部屋で待っている。

A：有難う。（幕）

「アニー、世界が崩壊する場」およそ一時間後、ボアの部屋。ボアは安楽椅子で文庫本を読んでいる。ラジカセからは小音量でランパルのフルート、ドビュッシーのビオラ・ハープのソナタ。ドアにノック。

B：入って、お姉ちゃん。（アン登場。ボアの横に座る。）

A：何を読んでいるの？

B：ファウスト、ツルゲーネフの。

A：へえ、そんなのがあるのね。お姉ちゃん全然知らなかった。

B：お姉ちゃんも読んでみる？もう読終るから貸してあげるね？感想を言合おう？

A：楽しみ。米川正夫の訳なのね。お姉ちゃんも絶対に読もう。

B：さつきは御免ね？

A：んん？言ってくれて良かった。（間。）坊、ドビュッシーが好きね。お姉ちゃんも大好き。坊は何の曲が好き？

B：全部いいな。でも夜想曲なんか特に好き。お姉ちゃんは？

A：お姉ちゃんも夜想曲は大好き。オーケストラはあまり好きじゃないけれど夜想曲は好き。ピアノでは練習曲が好きね。坊もたまに聞いているでしょう？ドレミファソファミレって。

B：お姉ちゃんが弾くので全部覚えちゃった。

A：何番が好き？

B：最初のかな。でも次のも好き。それから三番目も四番目も凄く好き。

A：じゃ、お姉ちゃんと同じだ。趣味がそっくりね。

B：光栄であります。

A：何を言っているの？馬鹿ね。（また間。）ねえ、さつき「一番欲しい物」って言いかたをしたでしょう？

B：んん？御免ね？何でもない。

A：どういう意味で言ったの？

B：んん？あまり考えないでおかしな表現をしちゃった。ドレミファソ。

A：嘘。どういう意味？私、何かが欲しそうに見える？

B：嘘じゃない。言葉の勢で変な言いかたになっただけ。

A：じゃ、何を聞きたかったの？

B：んん？もう良い。

A：良くない。坊には隠事をしたくない。だから坊も隠事をしないで？お姉ちゃんには隠さないで？

B：ん、分った。

A：何？どうして「一番欲しい」なんて言ったの？

B：お姉ちゃん、嘘じゃない。さっきはたまたま変な表現をしただけ。でも、もしもお姉ちゃんにそういう物があるとすれば赤ちゃんでしょ？

A：ん、そうかもしれない。分らない。どうしてそう思うの？

B：私は妹だよ？いい？同じ女だよ？お姉ちゃんのことが一番大切。本当だよ？これ。

A：ん。言って？

B：お姉ちゃんも一人の女でしょ？私、よく分る。

A：何？

B：この前、お姉ちゃん、熱を出したでしょう？

A：それで？

B：お姉ちゃん、その前から急によそよそしくなった。キスの仕方も変った。抱きかたも変った。

A：坊に焼餅を焼いていたもの、ひろおきさんのことで。

B：そうじゃない。お姉ちゃん、正直じゃない。

A：どうして？

B：お姉ちゃんが寝込んでいたときに、一度洗濯機が止ったんだよ？水が入ったまま。

A：え。

B：お姉ちゃんの洗濯物が洗剤に漬ったまま止っていたの。水色のタオルが引掛って動かなくなっていた。私、一度全部出して、

A：お願、黙って、もう黙って。（間）どうしよう。私死にたい。死にたい。

B：大丈夫！お姉ちゃんは女でしょ？人間でしょ？そういうときもある。

A：（めそめそ泣きながら）厭。そんなの。

B：私が知っているだけで誰も知らないこと。私はお姉ちゃんの妹。

A：きらいになったでしょう？こんなお姉ちゃん。

B：お姉ちゃんを愛している。

A：じゃ、いつから、ああ、もう私お姉ちゃんの資格なんかない。

B：ある。そんなふうに考えないで。

A：いつから？いつから知っているの？

B：洗濯機の前から。全部知っていた。

A：どうして。

B：お姉ちゃん、部屋が隣でしょう？

A：何、聞えるの？

B：聴いたの！泣いているのかと思って。

A：私死にたい、どうしよう。

B：死にたい死にたいって言わないの、これしきのこと。お姉ちゃんは大袈裟でかい。

A：苛めないで！私、本当に、穴があったら入りたい。坊には分らない。

B：分る。何で？私にはストリップ・ショーまでやらせたくせに。じゃ、私は恥ずかしくないと思うの？

A：それとこれとはまるつきり違う！ずっと軽蔑していたのよ？あんなことをする人はみんな穢らわしいって軽蔑していたのよ？私が仲間になっちゃった。

B：どうして軽蔑するの？

A：とにかくするの！ひろおきさんの顔が見られない。パパとママ

にも合せる顔がない。

B：じゃ、私が知らなかったら顔が見られるの？

A：見られない！だからずっと悩んでいたんじゃない。ひろおきさんにドアを開けなかったのもそのせいなのよ？

B：今は？

A：だから悩んでいるの！どうにもならないの！ね、信じて？私、ついこのあいだまでそんなことをしたことがなかったのよ？本当よ？これ。

B：じゃ、附いていたものは？今までなかったの？

A：附くの？坊は。

B：附く。

A：嘘嘘、そんなこと。

B：本当！当りまえだもの。

A：でも、坊は、

B：何？私は子供だからそんなはずはないの？

A：そうじゃないけれど。どういうとき？

B：お姉ちゃんにキスされるときもだよ？初のころは。今は慣れたけど。

A：嘘！信じられない。

B：だからちよつと心配したもん。お姉ちゃんは本当はレ何とかじゃないかって。お姉ちゃんは何も知らないの？

A：じゃ、ひろおきさんの隣に座ったときにも？

B：全然。好きじゃないもん。お姉ちゃんは一歩附いていた。

A：何よ坊、全部知って見ていたの？お姉ちゃんのことを。

B：お姉ちゃん、私をお馬鹿さんだと思っているんだもん。

A：じゃ何？お姉ちゃんがひろおきさんを取ったんじゃないっていうのは、

B：そうだよ？ひろおきさんが泊ってからお姉ちゃんは洗濯物が増えるし、夜は泣く声がするんだもん。私とは全然違う。お姉ちゃんに本当に愛しているの！私は少し懂れただけ。と言うか、お姉ちゃん

んに憧れさせられた。

A：まあ。何てこと？本当？それ。

B：お姉ちゃん、赤ん坊みたい。

A：ねえ、坊、じゃ、坊はするの？

B：しない。でもする人がいるのは知っている。

A：厭だ。私、したくない。

B：やめれば良いでしょ？

A：どうにもならないの！

B：赤ちゃん。困った赤ちゃん。

A：私泣きたいの！死ぬほど悩んでいるの！真面目に聞いて。

B：真面目に聞いている。

A：私、どうしよう。

B：自然に任せればいいんじゃないの？我慢なんかしないで。あとは忘れて悩まなければ。

A：坊、私を軽蔑しているんでしょう。心の中では笑っているんでしょう。

B：お姉ちゃん！私怒る。どうしてお姉ちゃんを軽蔑するの？笑ったことなんかない。

A：もうしない。

B：そんなことを言うのは逆効果なんじゃないの？

A：聞えるんでしょう？

B：気にしない。でも少し静かにしたら？

A：厭！ふざけないで。ねえ、絶対に秘密にしてくれる？誰にも言っちゃ厭。人に知られたら私本当に死んじやう。

B：私が言うと思う？

A：本当ね？一生のお願い。もうしないから。

B：お姉ちゃん、それからね、お風呂場はやめた方がいいよ？通気孔を通って庭まで聞えるから。

第十九回

2章『己呂武反而』(つづき)(後書き)

編者の天野です。

滋子の原稿により忠実なPDF版はこちらから

<http://dl.getdropbox.com/u/976165/shigeko.pdf>

第二十回

2章『己呂武反而』（おわり）

「曇れる日。山手公園。」

坊、貴方はどこまでもお姉ちゃんの坊よ。決して、決して、どんなことがあっても、お姉ちゃんは貴方を愛しなくなるなんて決していない。貴方は勇気をもって告白してくれた。私にばかり恥かしい思をさせまいと。貴方は朝から深く考込んでいた。ソファーに二人並んで掛けて、レコードを聴いた。以前の癖だった、ゆつくりと、うつとりと眠たげな瞬を、貴方はしていた。貴方も私も思い出の、大好きなフランクのソナタを一曲聴終ると、「お姉ちゃん、散歩に行こう？ うんちが出るよ？」私を促して、外に出た。貴方はテテの紐を持ち、あの憩の場所、愛すべき二人のサマーハウスに私達は出掛けた。曇っているから気温はそんなに高くはない。けれど、湿度があつてむしむしする。なのに私は長袖。貴方は「お姉ちゃん暑くない？ もう半袖にしたら？」と、私が汗になるのを気遣つて、ずつとテテの紐を持つてくれた。私は「んん？ 大丈夫。お姉ちゃんは夏でもいつも長袖。焼きたくないから。」と言つた。嘘！嘘嘘嘘！でも貴方は「ふーん。美人は大変だね。」と私の言葉を疑いもせず、紐を持つて歩続けた。私は嘘つきなのに、貴方は嘘つきに告白した。

「お姉ちゃん、私、お姉ちゃんに言つてないことがある。その所為でお姉ちゃんは私を実際よりも良い子と思つている。今日は全部言うね？」サマーハウスの中に座り、テテの紐を手まさぐりにして、こめかみの黒子も鮮かに、ゆつくり瞬いて、「お姉ちゃん、私、子供を堕したことがある。」私は顔面から血が引いてゆくのが

分り、俄に吐気を覚えた。「相手は親戚の人。義理のおじさん。私を引取った人。叔母さんの旦那さん。中学二年生の夏だった。無理やり裸にして玩具にした。嘗めたり、指を入れたり。変態だった。左手の怪我した指を口の中に入れてぺろぺろ嘗めるの。それが一番興奮するって。変態だった。最後はいつも指を嘗めながら、おなかの中にするの。初て犯されたときは初潮前だった。何回犯されたかも分らない。何十回も。秘密をばらしたら私を殺して自分も死ぬって。三年生のときだった。妊娠した。隠していたけど、結局は叔母さんにばれた。物凄くぶたれた。でも許すって。許すから病院に行こうって言われて手術を受けさせられた。学校にも知れて退学するようになった。そのあと叔母さんの目を盗んで車の中とか放課後の小学校で待合せて関係した。そうしないと死ぬって。おなかの中にするのはいつも生理の日を選ぶから、しょっちゅう血だらけになった。おなかの中にしない日は私を玩具にして、最後は怪我した指を嘗めて、お尻の中にした。叔母さんも見て見ぬ振をするようになった。けれど、おじさんのいない所ではいつもぶった。家に小学生の従兄弟が二人いて真似して私をぶったり蹴飛ばしたりした。横浜に逃げてきたんです。おじさんは追掛けてきて友達の所から連戻そうとした。アパートの前で待伏したり工場にやってきたり。私、途方に暮れているときに、お姉ちゃんに助けられたんです。あの晩なんか、大きな荷物を抱えてうろうろして、もしもホテルに泊めてくれなかったら、どうしていいかも分らなかったと思う。実は五月六月にも何度が会った。又友達のアパートに押しかけてきたんだものでも、もう二度と関係はしなかった。話して山形に帰ってもらった。もしも叔母さんと離婚して子供も手放すなら私、そのときに初て結婚を考えるって。「私はどうしても濃い苦いお茶を飲まなくてはいいられなくなった。貴方に何と言って別れたのかもはっきりしない。タクシーに乗って、私一人だけでふらふら帰ってきて、抹茶をお湯に溶して狂ったように飲んだ。胃が受け付けずに、すぐに戻ってしまった。

でも坊、貴方はお姉ちゃんの妹であることにかわりはない。貴方は生れかわったのよ！一緒に教会に行つて洗礼を受けましょう？お姉ちゃんも受直す。おじさんなんかに渡しはしない。絶対に。貴方はお姉ちゃんの妹。今度パパとママにも認めさせる。だから、いつまでもいつまでも仲良く暮そうね。　　（完）　　

八月九日

おねえちゃん。滋子おねえちゃん、泣かないで下さい。笑つて下さい。これでお別れではないんだからね、おねえちゃんと私は。元気を出して。毎晩会いに来る。私が来れない時はおねえちゃんが来て下さい。テテを連れて来てね。休みの日には泊まりに来てもいいですよ、ね、おねえちゃん。おねえちゃん、泣いてはいけませんよ。笑つて下さい。一緒に京都に行けないのは残念だけど、今度、秋にでもまたゆつくり見せて下さい。その時は、銀木犀の香りを嗅ぎたいね。お父さんとお母さんには呉々も宜しく伝えて下さい。ついでに拾遺さんにも。．．．ナンチャッテ。おねえちゃん怒った。恐い、恐い。そうだ、おねえちゃん、拾遺さんを連れて遊びに来て下さい。拾遺さんはたちまち寮の有名人になつて、知り合いの私は鼻が高いであります。ナンチャッテ。また冗談です。おねえちゃん、繋がれて来るわけがないもん。わざわざ真つ黒こげのこがし餅を焼きにね。アツカンバー！おねえちゃん、愛しているよ。本当だよ。手の事は心配しないでね。ある所がふくらんで来たら手の事も考えて下さい。でもまだまだ先の事でありましょう。．．．。じゃーね、おねえちゃん。また来週二十日に来るからね。晩御飯を作つて食べようね。ちゃんと晩御飯を食べるんだよ！それからおねえ

ちゃん、納豆を食べなさい。好き嫌いが多すぎるからウンチが出なくなるんだよ。朝と晩に納豆を食べる事。それから朝と夕方は、テテの散歩をする事。そうすれば必ず気持ち良く出るよ。あー、そうですね。散歩の方は言われなくても朝八時と午後三時にどっかの公園をうろつくんでありますか。それはそれは御苦労様でありました。アツカンバー！ファウストを読んでいてね。感想を話し合おうね。楽しみにしているよ。じゃ、また二十日にね。昼すぎには来れると思う。電話するから。じゃーね、お姉ちゃん、もう書く所がないからね。どうしても寝る前にキスがしたくなったら、このカードと一緒に私の枕を抱きしめて「Do you love your big sister, Beau?」ときいてみてごらん。必ず答えるよ。

Very, very,

very much, Onaychan!

ひたぶるに一途なことを言って女をその気にさせた彼、本当にしみじみとしたことが沢山あったのが、そのあとで何がどうなったのかしら、手紙を送ってきて書いてあることには、僕の胸の中に燃える火は、恋の火ではないのです。僕がしげ子さんに燃やす思ひは、所詮キューピッドの気まぐれに過ぎない「恋愛」なんかより、はるかに清浄なものなのです。僕は、しげ子さんの心を乱したくありません。しげ子さんの喜びを損ないたくないのです。僕のは恋な

んかではない！世界中の恋人の恋の火を集めても、僕の胸に燃える
思ひにまさることはない。恋の火ならば燃え尽きる時が来る。この
火が消える時は永久に來ないでしょう。そして永久に、ああ永久に、
僕のしげ子さん、貴女に神様の祝福がありますように！とそんなふ
うに言ってきたのにつけ、彼女、ラジカセのスイッチを入れてあの
ピアノとバイオリンの調べ、そして、例の枕をだっこしてふとひと
りごと。何をかは待つちの山のをみなへし秋とみし夢夢ならなくに。

（完）

第二十回

2章『己呂武反而』(おわり)(後書き)

編者の天野です。

滋子の原稿により忠実なPDF版はこちらから

<http://dl.getdropbox.com/u/976165/shigeko.pdf>

第二十一回 3章『ちよつとまた編者のことば』

覚えていて下さるだろうか。お別れする前、わたくしは桜木町でタクシーを降り、京浜東北線に乗り換えて、アポイントメントがある川崎へ向かっていた。今年2006年3月12日、19時頃のことだった。『美人説』はお喋りが過ぎる、お前さんの脱線癖はどうにかならぬか、山手発川崎だったらあの半分の枚数で行けたはずだ、との、編集部からは御ことなので、ここは手短に申し上げよう

滋子に私は二つの件で使いを頼まれていた。ひとつが、山手へ行つてバインダーを取ってくる事。只今お読みの『己呂武反而』が中身だった

残るひとつは、川崎在住の小林信「まこと」牧師に面会して一通の手紙に関わる証言を得る事。手紙と云うのは、次章に訳出する、伶門が牧師に宛てた文で、1982年11月24日の日付があり、翌25日の消印、パソコンの原型をなす所のタイプライタと呼ぶ昔の機械を用いて弾き出された、長大な英文だ。驚いたのは、字句を訂正した痕跡が無い。(パソコンと違ってタイプライタなるやつは、一度キーを押し損じたらそれっきりで、改めなければ修正液を塗った。推敲は色鉛筆と鋏でやった。)それはいいが、書いてあるセンテンスは長く、全体的に難解、所々意味不通、私も慣れない仕事なので随分骨が折れた。これで翻訳家デビューと云うわけだ

詳細は跋文で述べるが、手紙を、牧師は26日の夕方に受け取った。以降、どう云う事が起こったのか、牧師に話して貰い、活字に移す 要するに、滋子の望みは次のようなことである。すなわち、自身の『己呂武反而』と伶門の手紙とを本にして貰いたい、更には、二つの文章を一つにくくるものとして、牧師の証言をも併

せ録し、一冊に編んで欲しいと。2章、4章、跋文にあたる

私が変に思い、牧師は想像だになかった事實は、手紙をコピー機で複写した写しが、なぜか滋子の手元にあるのだった。牧師が二十四年前の書簡文を保存していない場合を考えて、京都で預かった写しをバッグに入れ、3月12日、日曜日の晩、私は牧師宅を訪問した

さて手紙を印刷物にするのに、了解を求めるべき相手はただ一人より外にいない。と云うのが、一人息子たる伶門の血縁には、三才の年に離婚しフランスに帰国したと云う母親、この母方を除くなら、残るは叔父牧師と家族くらいなので。母親はと云えば、息子の葬式にさえ姿を見せなかった程だし、無論込み入ったことは知らないけれども、牧師の話では、離婚後、全く小林家と関係を絶った。伶門の父、小林通「とおる」氏は、牧師の兄である。伶門が死んだ翌年の1983年、9月2日、大森の自宅書斎で割腹して亡くなっている所を弟に発見された。五十一才だった

甥の手紙を、牧師は大事に持っていた。そして快く滋子の希望に応じてくれた。日曜の晩、約二時間半に渡って、手紙の主が死亡したいきさつが明らかにされた。それは跋文に纏める

四月初旬、牧師は大徳寺の家を訪れ、滋子と1982年11月以来の再会をしたそうだ。病気の彼女を見舞うことと、あと、先般わたくしが伝えた彼女の希望を、直接本人に会って聞くことが目的だった。鎌田滋子、山手から二十四年の思いが三百九十ページの読み物となって書店に並ぶ時、牧師と私は一冊携えて、今度は二人で見舞う相談をしている

第二十一回 3章『ちょっとまた編者のことば』（後書き）

編者の天野です。

滋子の原稿により忠実なPDF版はこちらから

<http://dl.getdropbox.com/u/976165/shigeko.pdf>

第二十二回 4章『親愛なる叔父さんへ』（前書き）

天野注 この章における山括弧> <は挿入句ではない。伶門のタイプライタ原稿には強調を意味する下線が随所に施されている。本画面では下線が使えず、かといって文字を斜体にすることも出来ない（ようだ）。そこで> <の中へ入れて示した。強調だから、英語ならば声を一調子上げて読むところだろう

第二十二回 4章『親愛なる叔父さんへ』

親愛なる叔父さんへ

1982年11月24日

この予期せぬ手紙は貴方を少なからず驚かす事と想像します。僕がそう云うのは、僕がこれを外国語で書いているからでは無く、僕がこの中に書こうとしている事柄に因つてです。

何度か英語で語り合つた事があるとは云え、普段、我々のコミュニケーションの媒体は日本語だったので、僕から貴方への最初にして最後の手紙は、仮名で書かれるのが、或いは自然かも知れません。しかし、僕が今掘り起こそうとしている、僕の心の内奥に秘められた、マグマの様にドロドロとして僕自身にも明確には定義も理解もできない何物かに、言語的な輪郭を与え且つそれを貴方に伝える手段として、仮名を用いる事は、僕的能力を越えます。僕は幼時より、自分の内側にある思想を、いつもフランス語か英語かであらわして来ました。日本語は僕の言語ではありません。僕がここに書こうとしている事柄も、僕の最も内側にある思想です：定義不能・理解不能であつても。

僕がしようとしている行為 貴方がこの手紙を受け取る時分には僕がし終えているであろう行為 それを見て、貴方は考えるかも知れません：僕が背教者の身に転落した結果であると。僕に洗礼を授けた貴方がその様に考えるのは如何にも当然です。しかし、それは真実ではありません。そもそも僕は、未だ嘗て本当の信者だつた事が無いのです。

僕が信仰を表明したのは希望からで無く絶望からでした。貴

方はそれを知っていたと思います。貴方は知っていました：僕が心理学、言語学、人類学、哲学との我慢比べに破れ、帰国した事を。「天野注。伶門は1981年1月、大学三年生の時、中退して帰国した」僕が自分自身に絶望していた事を貴方は知っていたと思います。

僕がティーンエージャーの頃より知性の錬磨に主力を傾注し、そうすることで心の安らぎを求め、理性を極めれば人生を極められると信じていた事は、貴方に告白しました。僕にとって、理性の中心にあるものは科学でした。科学を話す為の言語が数学でした。そして数学こそは、自己完結した究極のもの、人類が手に入れた純粹で完璧な美だと信じました。それ自体は宇宙の仕組みに就いて何も語りませんけれども、科学と手を結べば、数学ほど雄弁に、明晰に宇宙を語る言葉は無い。しかも、数学それ自体が美の中の美、美術はもとより、音楽よりも美しい美、いえ、芸術など比較にならないほど美しい美、決して自家撞着する事のない完全な美の体系だと信じて、十三歳よりその虜になりました。実に、数学こそが僕の初恋、僕の神様でした。僕の第一の絶望は、十六の時にやって来ました。即ち、僕の恋を数学的に立証する事は己の影を追う類、バケツの中に立って己を持ち上げる類の夢物語だとの証拠を、自分の目で見た時。それは取りも直さず、人間の理性そのものが不完全である事を意味しました。仮に僕がどんな偉大な頭脳を獲得しようとも、理性そのものが不良品ではどうしようもありません。理性が間違はなく、理性的だと云う事すら、それを理性のみを以て立証する事は不可能なものでした。＞それくは立証できるのです。皮肉にも、理性は自身の不完全さは立証したのです。彼女は拳銃を自身の頭に突き付けており、いつ引き金を引かない限りでもない。僕は引かないと信じはする。引かない保証は無い。僕の初恋は、そう云う気まぐれな自殺志願者なものでした。直観的に心配していた事が、厳密に示されていたのです。僕の落胆を想像して下さい。僕は完全主義者です。多分、僕は理性を通して完全に近付こうとしていたのだと思います。

明らかに、全ての真理を知ることとは出来ません；三年生だつてそんな事は企てません。しかし、少なくとも、頭脳を研ぎ澄ませば、自家撞着しない知性を手に入れる事は可能だと信じていました。神様は、僕のさやかな望みを、僕が生まれる以前に既に打ち砕いていたのです。僕がどんなに努力しようと、自家撞着しない保証は無い。僕は知性の錬磨から、知識の集積に重点をずらしました。出来るだけ沢山知りたかった。第二の絶望は直ぐ後に続きました。完璧でない知識　　ついでに云わせてください：その頃の僕に取って、完璧でないものは、ガラクタよりかほんのちよつとだけ増しだったと　　それを満足に知るのにさえ、僕的能力では三百年間生きなければならぬと悟った。それから云うもの、僕は人生に絶望し続けているのです。貴方に告白したのは、実はそう云う絶望でした。

今の僕を見て他人が思うかも知れないような怠け者では、僕は決してありません。僕は他人の何倍も（恐らく五倍も六倍も）頭脳労働をして来ました。先生たちは僕が授業中に勝手な本を読む事を許してくれました。第八学年の終わり「天野注。中学二年生、伶門十三才」までにはフラインマン教授の『物理学の講義』、シェークスピア集、『論語』、『古事記』などを読み終えていました。これを自慢して云うのでない事を、貴方は知っています。この程度の事で満足が得られたのなら、僕はどんなに幸福でしたろう。小さな達成感のようなものは直ぐに失せてしまうので、読んだ本をどんなに積み上げても得意になれませんでした。むしろ、それを読むのに払った努力を思う時、中国の古典などと言われる物は、腹の立つくらい馬鹿らしい代物でした。

僕は不幸せでした。いつも心の安らぎを求めて、いつも得体の知れない何かを求めて焦っていました。人を完全に満足させるもの、其の万古不易なる巖の上に彼の精神をどつかと据え、其の見事な美しさをただ賛美する事が即ち涅槃、そう云うものを求めています。しかも、それを発見する前に人生が終わってしまうかも知れ

ない！僕は人生の基盤を求めている、そしてそれを見つめる前に肝心の人生が終わってしまう。何と笑止な事でしょう。僕の不安の程を理解して貰えると思います。

僕は四つでした。この上もなく確かで変わらないものを見つけて、それを所有する願いが心に芽生えたのです。言うまでもなく、四つの歳で、自分の願望をこう云いお世話ではありません。ある日、父が六色の別々のインクの出るペンを呉れました。僕はそれに夢中になり、他の沢山の単色ペンとの書き較べに満足した後、僕の複数色のペンを父に向かって高々と持ち上げ、これが完璧なボールペンかと尋ねたのです。同じ年のクリスマス、彼はレコード・プレーヤーと何枚かのレコードを買って呉れました。以後十日ばかり、昼も夜もそれらをいじくり回して、とうとう僕を魅了した機械を壊してしまいました。僕が突然音楽への情熱を燃やし始めた訳ではありません。このレコード・プレーヤーをして、一台のレコード・プレーヤーたらしめているものが何であるのか、それを知りたい欲求に突き動かされていたのです。エジソンの好奇心を以てではなく。父が与えて呉れた物が最良のレコード・プレーヤーでない事を僕は知っていました。豪華なステレオ・セットが彼の書斎に鎮座しました。特別な折、彼が上機嫌の時、僕の大好きな『イタリア奇想曲』とか『合唱幻想曲』とかを掛けて呉れたものでした。従って自分のよりも優れたレコード・プレーヤーが少なくとも一台は存在する事を知っていました。僕はその差が何に因るのか知らなければなりません。自分のレコード・プレーヤーをひっくり返して、底がどうなっているか見ました。揺らして、中に何が入っているのか、カタカタいう音で当てようと思いました。回転盤に指を載せて止めました；針を指で撫でた時に出る音にびっくりしました。しまいにはネジ回しを手にしていました。そして心に誓いました：いつか父の書斎にあるようなレコード・プレーヤーを、いや、もしそれよりも優れたやつがあるのなら、その理想的なやつを所有しよう。

僕は第二学年にいました。担任の先生の名前を覚えているの

で確かです。彼の名前はブラザー・バールドでした。「天野注。伶門が通ったセント・ジョセフ・カレッジの授業は、多くブラザーと称する修道士、或いはフアーザーと呼ばれる神父が行った。第二学年とは小学校のそれ」ある日、授業中に戦争の話をしていました。

僕は手を挙げてブラザー・バールドに聞きました：理想的な爆撃機は何か知っていますかと。彼は何時もの人の好きそうな笑顔の上に位置する眉を寄せて“理想的な爆撃機！それは上等な単語ですよ、

理想的。’ 高等学校の単語です。良く出来ました！”と云って皆の前で褒めて呉れました。彼は質問を理解していませんでした。

“先生、僕は理想的な爆撃機が何であるか云えます。それはB29です。それは最も爆弾を落とすのに適している飛行機だからです。

でも、それは理想的な飛行機ではありません、なぜなら飛行機の最も飛行機らしい機能は爆弾を落とす事で無く、人間を高速で空中輸送することだからです。でも爆撃機と云う特殊な飛行機の中ではB29が理想的です。僕は理想的な飛行機だって知っています！”

僕はブラザー・バールドの驚きの表情をまだ覚えています。僕はその少し前に自動車に興味を持ったので、それに就いて読める物は手当たり次第に読みました。そこから交通手段一般に興味が広がりました。自動車からトラック、バス、オートバイに移り、そして忽ちそこから船、飛行機、ロケットへと拡大していきました。僕は何時も本や百科事典ばかり読んでいたので、自分が他の男の子たちと非常に違っていると知っていました。彼らを愚か者と決め付けていました。ブラザー・バールドなら僕を分かかって呉れるかどうか、彼を試している積もりだったのです。僕のこの理想的なものへの憧れは、僕自身が判断しうる限り、外より植え付けられたので無く、生まれながらにして持っていたものです。そうして、云いました通り、四才の頃には、日常生活で目にする品々をふるいに掛けていました。

僕は十四才でした、そして第九学年にいました。もはや色ペンとレコード・プレーヤーと飛行機は僕の興味の対象である事を止め、複雑な分析の本が、それらに取って代わっていました。他の九

年生達の多くは、僕と大変違った興味を持っていました。彼らの頭脳は異性の複雑さを分析するのに忙し過ぎて、数字などを分析していらませんでした。ジャンは分析家の中で最も物言いがはっきりしていました。

それは五月の、軽井沢への修学旅行での事です。ジャンは、素晴らしい雑誌を何冊か手に入れたから、それらを楽しみたい者は彼の部屋へ来いと誘いに来しました。僕のルームメートも分析家だったのです。“レモン、何でお前は来ないんだ？お前も気持ち良くなりたくないのか？”とジャンは云いました。“放っておいてくれ。”と僕は云いました、“僕はなりたくない。”“偽善者め。一人で自分の寝室にいる時、気持ち良くなっていないなんて云うなよ。”とジャン。“お前の好きなように思え。僕はならないんだ。”と僕。僕は嘘を云っていませんでした。勿論、彼らがどのようにして気持ち良くなっているのかは、百も承知でした。

なぜなら僕は習慣的な自慰者だったから。それでいて僕はジャンに嘘をついていませんでした。僕が自慰する時、気持ち良くありませんでした。それは痛かった。僕はそれをしたくなかった。しかし、その要求は圧倒的でした。苦痛にも関わらず、それをしなければなりません。さもなければ、僕は思考する事が出来ませんでした。思考出来ない事は、僕には死を意味しました。

ハセンテンス前に云った事を修正させてください：僕は完全にはく嘘をついていませんでした。言い換えれば、部分的には嘘をついていたのです。ジャンは外に聞いた事がありました；それに対して僕は嘘を云った；“お前は自慰しないのか、レモン？”

しかし、僕の嘘は嘘では無かった。僕の自慰が彼らのそれとは違うと云う意味に於いて。僕の生物の教科書にオルガズムと自慰に関するこう云う記述がありました；僕は一字一句覚えています。まずはオルガズム。それを定義してこう云ってありました；“男性の場合、その直後に精液の放出を伴う快い感覚。”次に自慰；“思春期に達した男の子は、自慰と呼称される活動に従事する事が、一

般的に知られている。オルガズムを得る目的で人が自身の性器を操作するこの行為は、成人期に入りつつある男の子（と女の子）にとって正常であり、節度を以て行われれば健康に有害では無い。”これを見れば、僕の行為は正常で、無くかった。或いはもしかしてそれは自慰では無かった。僕はそうで無いと決めました。

ジャンに並ぶ自慰の熱心な奨励者はテリーでした。彼は自慰が“サイコウに気持ち良い”と云う見解を持っていました。彼は得意な数学を使って自慰の過程を分析しました。それはこのような事でした。まずは、裸の女性（綺麗な顔をした方がより合目的）の写真が沢山載っている雑誌を開いて、ページを捲ってゆけばゆくだけ（然るべき映画を観ても同じ効果をもたらすが）下着がきつく感じられて来る。其れの与える圧迫感が気になり出した其の布切れをおもむろに取り外す。指、或いは掌、或いは両方（場合に因ってはkで始まる日本の食材、その他あらゆる口にすべからざる物）を用いて、体　　まあ、単純さの為にであるが、まあ、圧縮不可で完璧にリジッドな体　　その表面上の全ての点に、時間の機能として狂暴に変動する圧力を加える：例の布切れには無く、勿論。待つこと凡そ300秒。“気持ち良さ”はこの300秒間、時間に対して急激な曲線として示される。（ベースは1に非常に近いと考えられる、でなければ・・・）300秒に最大があり、そこで機能は途切れている。そこに大きなジャンプがある。300から凡そ330秒（個人差はプラス・マイナス15秒ほどであると云う）の間で、曲線は線型に0に到達する、つまり急降下するのだが、凡そ10の箇所にて途切れたジャンプがある。（ジャンプの個数にも、上の15秒に対応する個人差が予想される。）そして、甚だしいパラドックスではあるが、最大の起こる300秒よりも、他の途切れでこそ一般には楽しむ。（これの説明として、“気持ち良さ機能”の最大は実は300秒には無く、他の途切れの一つにあり、しかも、それら10箇所の内の複数に於いて、300秒でその値を凌ぐ、こんな事が考えられるであらう。）

“ 全くの話、急激に気持ち良くなるんだ！”とテリー。それが彼らの云う自慰でした。それが彼らの射精でした。ジャンは嘲笑するように僕に尋ねたものでした、“ 綺麗な女を見たらお前はhardにならないのか？ 雙葉の*****・*****、彼女をget laidしたくないのか？”

僕は彼女を***** ****したくなかった。綺麗な女を見て僕は*****になりませんでした。自ら汚す時は雑誌を見ませんでした。射精の衝動を起こす為に雑誌が必要だったのなら、僕はどんなに幸せだったでしょう！人生は平穏だったに違いありません。今でも僕にとつてそうであるように、射精衝動は>雑誌くを捲るページ数とは無関係だったのです。むしろ、『孟子』をめくるページ数と関連していた。ある夕方、漢字ばかりが縦列を作すその本の意味がなかなか分からず、辞書を引き引き苛立たしい思いで読み続けていた時、我知らずズボンの上から性器をいじっていました。若し読むのをふと中断してその事で何かを思ったとしたなら、そんな汚い物に触れていた事にただ嫌悪感を催しただけで、それ以上の事は何も無かったでしょう。何か考え事をしている最中に我知らず指で鼻孔を掃除している事に気付く時と同じように。罪悪感はありません。急に何かが痙攣したように感じて手で強く抑えました。もだえながら体を二つ折りにする恰好になりました。頭が真っ白になりました。この初めて汚れた折、今のが性欲の仕業だったのだと直ぐには心付きませんでした。人間が生殖する為に男女が性交するものだと、本で良く知っていました。しかし、それは、今自分が体験した事と結び付かなかったのです。

僕はその感じを大いに嫌いました。苦痛の新種でした。それ以上に、それは>汚くかった。僕の着衣を汚しました。それは酷い臭いでした。二度としないと決めました。僕はそれを次の日にしていました。その衝動は圧倒的でした。それをし終えるまで思考する事が出来なかった。それをし終えるまで死んだ状態でいなければなりませんでした。

それは恰も痛む歯があつた事に今気付いて、その苦痛を取り除く簡単な方法はそれを抜いてしまう事、そのようなものでした。ちよつと歯痛の氣になり出した人が居ても立つてもいられないように、あの下腹部の異様な疼きが氣になり出した僕は居ても立つてもいられなかった。痛くて血まみれになる療法だろうと悪い歯を抜いてすつきりしてしまえ！痙攣的でグジャグジャな仕事だろうとお前の知性を人質に取っているものを殺してしまえ！しかし、帰宅した人質が今は僕を輕蔑していると、僕は知っていました。それはサイコウで>無かつた。

ある日の倫理の時間で、自慰が熱を帯びた討論の主題になりました。“自慰は是か非か？慎む事は美德か？”先生が仕切る中、多くの者の目は血走っていました。ジャンを始め過半の者が是も非も無いと主張しました。食事や睡眠や排泄に道德が関わるか、同じく生理的要求に従つて行ふ自慰に道德が関わるか。非難する者はそれが快楽を求める行為だと云う点を根拠に非難しがちだけれども、それならバツハを聴く事も非難すべきだ。中には非とする者もいました。食事とは明らかに違ふでは無いか、“性的飢餓”で死んだ者がいるか。確かにバツハの音楽は快楽をもたらすけれども、同時に魂を高める作用がある。この発言をした生徒は勇敢でした、と云うのは、当然次の反論が期待されたから。“では君が自慰する時は魂を高める目的です、言い換えれば、魂を高める効果が期待出来ない場合は慎む、そう云う事か？”いや、そう云う事では無い、が彼の返答でした。自慰した時、彼は魂が打ちのめされた気分になり、罪悪感を覚える、であればこそ自慰が悪だと主張した、と。彼はクリスチャンでした。

僕は黙っていました。彼らは何かしら僕と無関係な人間活動に就いて話し合っていたのです。今論議されている“自慰”は定義上“心地よく”あり“自由意志による”のでした。誰もそれを疑っている様子はありませんでした。生物の教科書に書いてあつた事に照らしても、自慰は心地よくて自由意志によるのでした。

信じがたい事に、クラスメートのある者は、よく、昼食後とか部活動の始まる前など、少ない時間を遣り繰りして彼らの雑誌をカバンに忍ばせ便所へ行き、300秒後に輝く顔で出て来るのでした。彼らは一日分の充実を味わったのでした。それは丁度僕にとって、腐った食べ物を自分から詰め込んで気分を悪くしておきながら、喉に指を入れてその後起こる事をサイコウに楽しんで、心身共に生き返る、と云う程に不可解な事でした。

また喫煙をも僕はしません。タバコが好きになれません。正直の所が、あれを好む人がいるとは信じにくい。しかし、僕は敢えてそれを信じましょう。あれをサイコウと思う人がいる事をさえ信じます。仮に僕が喫煙を強制されるなら多分サイコウとは思わないでしょう。僕は喫煙者達とは作りが違っているのです。

僕はクラスメート達と作りが違っていました。射精後、僕の顔は輝きませんでした。暫く活動が再開出来ない程に疲れ果てました。破壊されました。それは全然サイコウで、無かったです。

故に、僕は自慰しなかった。“僕はしないんだ”は嘘で無かった。そうして、僕はそれを真実にしなければなりませんでした。それを、僕はしました。多くの試行錯誤の末。最初の射精があつて二年と八カ月後、最終的に。一つのライターが効き目を発揮しました。それ以降、僕は孟軻「もうか」の本を開けばいつも直ぐにそれを脇へ放り出して深い溜め息をつくのでした。あの男の云う通りだ、ホルンこそは無秩序の根源である、と自分自身に云ったものです。彼は誰よりも良く知っていたでしょう。

子供の時分、こむら返りで目を覚まされる事がありました。頻繁には無く、偶にです。同じぐらいの頻度で、睡眠時の射精がありました。全部で四回だったと思います。それは大学に入って初めて経験した事で、十カ月間悩まされた現象です。大学に入って最初の学期、その前日は眠らず、その日も朝方まで起きていて、非常に疲れて眠りに落ちました。間もなく、二年近く忘れていた異様な苦痛で目を覚ましました。その後も時々、正確には三度、疲労に押

しひしがれた時には特に、あの痺れるような発作で飛び起きる事がありました。そして奇怪な夢を見ていた事に気付くのです。この際ですから僕の叔父には洗いざらいぶちまけてしましましょう。これは非常な恥を忍んで云うのです。それも畢竟、滋子への僕の思いがどんなものを推し量って貰う、これも何かの手掛かりにならない限りでないと考えるからです。実に、こんな事を書く途中で彼女の名前を記す事を、彼女に対する侮辱のようにさえ思ふのです。

全てを書きつけましょう。僕の体に射精を起こさせる奇怪な夢は、いつもみな大同小異でした。それは見知らぬ者と交合するのです。それは正常な交合ではありません。その者は分娩時に取る恰好を取って、大森の家の僕のベッドの上と覺しい所に寝ています。その者は両手で僕の髪の毛を掴んで、僕の顔をその鼠蹊部に押しつけています。僕は抵抗せずそこに顔を埋めます。段々そこに液状の物が滲みだし、見る見るそれが垂れて行きます。僕はそれを思い切り吸い込みます。喉につかえるほど粘性の高いその物質は、味覚に極めて苦い。後から後から滲んできてベッドカバーに付きそうなので、一心に吸い続けるが、口中に粘ついて飲み込めない。何ぞ変な臭いが気になり出して少し顔を離してみる。よくよく見ると今まで口を付けていた所は、熟し過ぎたメロンの断ち割りのように輪郭が崩れている。そう見るや、今までの臭いがただの臭いでは無くて耐えがたい動物の死臭のように感じられてくる。僕は極度に興奮して、この世の物でない物の持ち主を確かめるべく、顔を動かそうともがきます。ところがその者は僕の頭を髪の毛でもって押さえつけ、両脚で僕の顔を締めつけるので、身動きが取れません。何とかその者の顔を見届けようと目を上げる。眼前の小丘を越えて見えるのはカーテンの間より忍び込む弱い光にぼんやりと浮き出た象牙彫刻のような、高く盛り上がる乳房で、その向こうにある顔はそれらに遮られて見えない。僕が目をもっと高い位置に持つて行こうとするのに合わせて、その者は腰を浮かして抵抗します。そしていよいよ両脚が締めにかかります。僕はあきらめます。また吸引し始めます。

僕の興奮は激しい動悸になり、息が出来ません。目眩で何も見えなくなつた中、ひたすらにがみと悪臭の虜になっています。僕は憤然と自分の性器を掴み、顔をそこに挟まれ、窒息しつつ錯乱した状態で、射精します。同時に、下半身の感覚を奪われる程の痙攣で目を覚ますのです。

さて、僕はここまで告白しました。嘗てこのような事どもを叔父に告白した甥がいたでしょうか。ただ僕はこれ一つを冀うのであります；即ち、貴方も僕と同じ心の誠実さを以てこの手紙を読んで下さる事を。

僕は魔婦との交合を酷く恥じました。潜在意識にはあのような獸的欲求が隠れていたのです。ひょっとして僕は何か不明瞭にしているかも知れません。大学に入るまでその夢を見なかったではありません。一二度は幼い時分に、そして三四度は思春期に入ってからと、同じ夢を見た事がありました。言い換えれば、合わせて十回ほど魔婦と交合したことになります。従つて、夢が僕の欲望の現れで無いとは考えられません。ただ、大学に入って初めて、その為に射精したのです。

僕を更に苦しめた事は、夢精があつた後の二三日間は“本物の”の射精衝動、つまりライターの助けで絶つた欲求が、俄に高まるのでした。云いましたように、夢精が起くるのは決まって疲労の溜まつた状態で就眠する時でしたから、疲れる事を避けて短い昼寝を取る習慣を付けました。授業と授業の合間に寮へ戻つて、十五分か二十分、横になるのです。これは単純ながら効果的な対処法でした。五回目の射精は無かつたと思います。

僕は自分の中に潜む悪を正当化する積もりは毛頭ありません。夢は貴方以外には話せない事柄です。それを一方では認めながら、睡眠中の現象である夢精は、意志の力の及びにくい種類の生理現象だと、一方では考えるのです。少なくとも、この特定の夢の中で起こつた事を、僕の意志で阻止することは不可能でした。意志の範囲内の事、それは克服し、克服し続けました。一度ライターの威力を

知った者にとって、射精の欲求は意志の力で抑えられる種類のもの
でした。“本物”の射精衝動には二度と屈しませんでした。じきに
魔婦も諦めたのでしよう、大学で二年目を迎える前には、あの、僕
の知力を奪う現象、脳髄を麻痺させる痙攣的生理現象に、完全に勝
利したのです。“お前が何を云おうとね、ジャン、僕は>しないく
んだ。”ここにおいて、軽井沢以来四年と三カ月、僕が作り上げて
来た真実は、>事実<になりました。勿論、僕は聖なる男ではあり
ません。イエスは僕に姦淫した責任を負わせるでしよう。僕は閨人
「えんじん」ではありません。そうであろうとしたに過ぎません。
そうして殆ど成功しました。

もはや知識の集積に意味を見出す事が出来なくなり、去年の
一月、日本に帰って来ました。殆ど世の中との交わりを断ち、日が
な一日、自室に籠もってワーグナーを聴いたり、詩を読んだりして
暮らしました。新約聖書も読みました。一読パウロは取るにたらぬ
男でした。キリスト教会は、僕の神が住まう神殿で無かった。

その頃自由が丘のマツバラ・ヤエコ女史の所で再びピアノの
稽古をつけて貰っていました。大学に行く以前、四年程通った教室
です。マツバラ女史は、課題曲を出すと先ず三週間自宅での練習期
間を呉れます。三週間が過ぎると、生徒は練習の成果を自由が丘へ
披露しに行く。その日から週一回、二週間の内に計三回の稽古をつ
けて貰う。初回の日、次の課題曲を与えられ、それはそれでまた三
週間後に備えます。つまり、のべつ新旧の課題曲を抱えながら、五
週間の周期で曲を入れ替えてゆくのです。課題曲は三四分ずつの短
い楽章とは云え大概三曲です；どちらかと云えば骨の折れる仕事と
云うべきでしょう。一年以上通っていると以前に習った曲を再び課
せられる事があるので、僕の場合重複曲がいくつもありましたけれ
ども（大学に行っていた二年五カ月を差し引けば、締めて五年一カ
月マツバラ女史の指導を受けたことになります）レパートリーが最
低でも千二百分間は膨らみました。

去年の十一月、最初の水曜日、ニューヨーク・スタインウエ

イのコンサート・グランドが据えられた室にいつも通り入って行く
と、先客が一人、ソファ―に掛けてマツバラ女史が来るのを待って
いました。僕が入って来たのに気づくと、彼女のほうから軽く会釈
してコンバンワを云いました。彼女が掛けているソファ―は三人し
か掛けられない小さな物で、生徒たちは、ピアノに向かつていない
間はそれに掛けるか、そうでなければ床に座るかして、授業に参加
するのでした。通常の授業は四人乃至六人ですから、二人がソファ
―を占め、二人乃至四人が床に座りました。僕は、その生徒と一緒
になるのはその時が初めてでした。何でもない場合なら、僕はその
先客の女生徒にコンバンワを返して彼女が座っている反対の端に掛
けるところです。そして、自己紹介をした事でしょう。これはしか
し、何でもない場合とは違いました。僕の入室と同時に片端に寄り、
座りやすい状態にしておいて、ほのかな笑顔で見上げているこの女
性を前に、僕は自分が統合不全に陥りつつあるのを意識しました。
そこに道化のように突っ立っていました。いつそ顔に白粉が塗って
あったなら、少なくとも赤面の恥ずかしさからは逃れることが出来
たでしょう。一瞬間、ソファ―に掛けたものか床に座ったものか迷
いました。でも、後の選択肢はいかにも不自然であるに違いない。
僕はおずおずソファ―の反対側にあとう限り小さな領域を占めると
ともに、コンバンワを云いました。自己紹介もしないで、手に持つ
ていた（神よ感謝！）ドビュッシーの『喜びの島』の譜面を開き（
これが課題曲でした）それに没頭し始めました。親愛なる叔父さん、
僕の無様さと頭の混濁を想像して呉れるべきです。

彼女も僕と同じ曲を習いに来たのでした、と云うのも、同じ
曲を勉強している生徒と一緒に授業を受けてお互いに批評し合う仕
組みになっていたのです。黙って楽曲研究に入ってしまった者と二
人きりになったのが彼女も気詰まりなのでしょう、むやみに咳払い
しています。どうしたことか他の生徒が来ません。今日は彼女と二
人だけの授業なのか？時間も過ぎていく。いったいマツバラ女史は
何をしているのだ！生憎、僕の隣人は開くべき譜面を持ち合わせま

せんでした。（彼女はどんな曲もわけなく暗譜するので手ぶらで教室に入って来たのでした。）異様な沈黙にたまりかねて（と、後日、この日のことを彼女が僕に告白したように）彼女は独り言でも云うようにつぶやきました。【先生、遅いですね。どうしたんでしょう。・。今日の曲、難しい曲ですね。わたし、あまり練習できなくて・。】「天野注。ここはローマ字で表記してある。以下、原文が日本語の場合、すみつき括弧」【そうですね。そうですか。僕も、練習の時間がなくて。】僕は音声を呑み込むようにして意味のない相槌を立て続けに打って頷き、彼女を見ました。すぐさまその晩二度目の、数分以前に僕を立ち往生させた、何かしら深刻な事柄をでも訴えかけるように大きく見開かれた、あの信じがたく美しい目に再会しました。貴方もよく御存じの、彼女が人の話を聴く時にする、あの目です。その目達に見つめられている、あの二人きりの教室にいて、僕は自分自身の取り扱いに困りました。何か話の種は無いかと、頭の中を引っかけ回しました。僕は生来、慌てるとまるで何も考えられなくなる質です。藪から棒に【趣味は何ですか。】と云ってしまった自分に呆れて、彼女の顔をぼかんと見ていました。彼女の目は益々大きく、いよいよ深刻そうに、あまつさえ大層潤んでいました。上気してかツかとなっている僕の顔を、一つの滑稽な対照物に為し得る、淡い蒼味を帯びた顔をして、彼女はひとことひとことゆっくり発声しました。【趣味・。わたしの趣味は、詩を読むこと。色々な国の、色々な時代の、詩を読むこと。たまに、自分でも、下手な詩を作ったりして。それから、どこでもいいから、都会の音が聞こえて来ない、寂しい所に旅して、一日中、ぼうつと、山を見て過ごすの。あの山には、きっと、仙人の庵があつて、夕方になると、炉には、火が入る。仙人は、採ってきた山菜で、晩の食事を作る。そんな空想をしたり。馬鹿馬鹿しいでしょう？あなたは？】発言中焦点を失っているようになっていた彼女の瞳が、僕に向けられました。彼女の問いに対して趣味はピアノだと云い、云った後、自分の重ね重ねの愚劣さにへどもどして、今更自己紹介しました。

そして右手を彼女に差し出しました。どうぞ随意に笑ってください。続いて彼女も自己紹介をしましたけれども、僕は全く動転していたので、何も聞こえませんでした。

彼女の名前は滋子でした。

誰かせわしなく扉を開け閉てする物音で我に返りました。いつもの小刻みな足取りでマツバラ女史が入って来るのでした。彼女は遅くなったのを詫びて、今日は『喜びの島』を研究します、いま『喜びの島』をやっているのは貴方がたお二人だけだから、今日から三回、我々三人で研究を進めますと宣言しました。貴方がたお二人はお互い知っていたかしらと、僕を見て尋ねました。僕はいと答えました。彼女はそんなら早速始めましょうと云って、滋子に弾いてみないかと提案しながら腕を伸ばして鍵盤に向けました。云うまでもなく、僕は滋子が弾くのを聴くのはそれが初めてでした。僕を驚かした事に、彼女は椅子に座ると何の合図も断りもなく音階を弾きだして、暫くそれで遊んでから、今度は気まぐれな和音をあれこれ奏でていましたが、これまた何の合図も断りもなく、本演奏に移りました。ただその事一つで僕は気を吞まれてしまいました。ところで貴方は彼女の演奏をよく御存じです。その夕方の彼女の演奏がどんなものであったか、説明は省きましょう。彼女は一度も止められることなく、全曲弾くことを許されました。マツバラ女史はただ“今のは非常に良かった、”といって笑顔を浮かべました。さて僕の番になりました。御存じかも知れないように、小品は長いトリルで開始します。その冒頭のトリルを行いつつあった僕の右手をマツバラ女史はいきなり抑えて、駄目を出しました。“こんな風に、”と始めの数小節を実演してみせました。その夕方の僕の演奏がどんなものであったか、残りの説明は省きましょう。僕は何度となく止められ、やつの事でおしまい最低音を叩き出すことを許されました。アルペッジョは余りに弾き違いが多いので、マツバラ女史は閉口していました。

『喜びの島』は確かに難物です。それで、課せられていたの

は通常の三曲で無く、その一曲のみです。滋子がもう一度ピアノに来るように促されました。二度目の演奏中、今度は要所所で中断して、ここはこんなフレージングにしてみたらどうか、この曲は完璧な出来だから貴方のように可能な限り譜面に就くのが最良なのだけれども、サムソン・フランソワなどはこんな風にやったもので面白いと思わないか、など提案めいた実演を鼻唄交じりにして聞かせていたが「伶門君、あなたどう思う？」と出し抜けに言いました。はつとして二人の顔を見上げました。滋子は例の目です。それよりもマツバラ女史の顔に発見した悪戯っぽい笑みには、すっかりどぎまぎしました。

僕は二度目を弾くまでも無く定刻前に辞去しました。最後まで授業を受ければ、滋子と一緒に自由が丘駅へ歩かなければならなくなります。

僕の親愛なる叔父さん、その夜の事をここに告白するのに垂れた頭を以てするのです。十五才の冬、あの凍てつく夜の血塗られた闘いで閉じ込めることに成功して以来、長い間厳しき鞭もて脅しつけ飼い馴らして来た野獣；曾て僕の若い精神と肉体とが相剋の限りを尽くした末、上天に輝いた精神の勝利が、青春に授与した侵しがたい勲章と言うべき。そしてあのライターと共に今や一つの記念物に成り下がった

野獣；その飼い馴らされた記念物が揺り起こされたのでした。初めは断続的に、何とも言えず悲しげな啼き声が聞こえていましたが、それはやがて等間隔な規則的な不吉な唸りに変わり、そのものは臭い息を、耐えがたい獣の臭いを、吐き散らし辺りに充満させ、空気を重くしました。大腿骨に這い上がってくる怪しい地響きと共に伝わる等間隔で規則的な唸りは、もはやライターの如きは玩具同然の虚仮威しだと言いたげです。そのものの息は一段と臭く、空気は一層重く、その唸りは僕の腰部をびくりぴくりと引きつらせます。勢いにのってそれは唌り立ち、異様な苛立たしさで檻の中を行きつ戻りつします。そしてその夜、克く復た勝つを得なかったのです。獣は曾て見た事が無いほど荒れ狂

いました。一度はその強迫に屈伏しておとなしくさせても
いな、寧ろ一度屈伏してしまつたが為にと言うべきでしょう

いずれまた勝ち誇つたように起き上がつて挑んで来ます。檻を放
たれた獣は容易にはその獸性を静められる事を嫌いました。久しく
捕らわれの身になつて牧草を食むようにさせられていたそれは、夜
一夜、五度六度と肉を割き骨を噛み砕き生き血をすすり、堪えに堪
えてきた空腹を満たすものの貪り方で、唾液迸る牙を深く僕の臍腑
にもぐりこませました。その都度僕の手は汚れに染まつてゆきまし
た。僕の手、前日の夕刻、滋子の手を握つた手です！

それでも僕は努めて滋子の面影を追い払いました。どうして
彼女の顔を獣の餌食にできましよう：貴方が、ラファエロを彷彿さ
せると思わないかと、いつだったか彼女の奏でる礼拝堂のピアノを
貴方と僕とで聴いていた日曜の午後、僕にそのように言われたその
顔を。マツバラ女史の教室で彼女の視線が初めて僕に向けられた刹
那、その女性の顔を見た時、僕の脳裏を過つた映像は、正に画集で
見ていた、無限に柔らかくてたおやかな表情　　慈しみに満ち
た表情　　を湛えながら、仮にも我が抱くものに危害を加え
させじと、目には見られぬ力どもに向かつて目を瞪る、無限に強い
顔でした。そうです、あの呪わるべき夜、僕は一方では滋子を意識
の外に逃がすことに努めつつ、他方では己が精神を生贄に、己が肉
体を餌食に、獣の貪婪をしずめたのです。

僕は自分自身に言いました。これは断じて世間一般の場合と
同じでは無い。証拠に今僕は、思考の中から不純な想念を追放して
いる。ただ極度に苛立つているだけなのだ。今日は余りの緊張の為
に神経を破壊された。この行為は興奮し錯乱した精神を安んじる目
的で行うのだ。止むを得ない行為だ。もし敢えて覚醒中に捌け口を
与えてやらなければ、その時こそ例の魔婦の手に落ちない限りでは
ない。そうなれば、自由意志に麻酔をかけられた状態で悪むべき泥
沼に引きずり込まれるのだ。純粹に精神の安定作用を目的とした、
生理上の処置として行ふ場合と、世間一般の場合とを、同日に論ず

べきで無い。

僕は一晚中発作の波に襲われました。体内に埋め込まれた鉛が鈍く疼いて居たたまれなくなる。邪念を払って疼きを断つ。開放と自己嫌悪とが相半ばする中で浅い眠りに落ちる。彼女の夢で目が覚める。ぶりかえしてきた疼きにまた悩まされる。・・・カーテンの隙間より光が差し込んで来る時刻、心身ともに困憊して最後にもう一度ベッドに体を投げ出したのが、覚えている最後です。

親愛なる叔父さん、僕が以後七日間をどのように過ごしたか想像してくださるべきです。水曜日が来ればまた彼女と同じ部屋に居るのです。行くべきか。欠席すべきか。行ってあの目に見つめられれば支離滅裂に陥ることは請け合いです。マツバラ女史の冷やさすような目付きは別の意味で僕を困らせるでしょう。行かないとなればどうか。今度の回を欠席すれば、その次も欠席しないのは不合理です。なぜなら一週間後も何ら状況は変わらないのですから。そうになると、確実に彼女に会える授業、それはもうありません。（『喜びの島』を勉強する三回が終了すれば、次からは新しい課題曲

前日逃げ出す間際、二楽章からなるベートーベンの嬰へ長調ソナタとスクリャービン作品8より第二番目の小品の譜面を渡されましたが　それらを新しい仲間と勉強する、この事を再度述べさせて下さい。自然、曜日も時間帯も再編成されます。）そうしてみれば、行かないという選択肢はありません。僕は彼女を狂うように恋していたのです。

あるいは、僕は狂いつつあったのです。期待、恐怖、絶望、困惑、期待、恐怖、期待、絶望、困惑、が、僕の頭をごしやごしやにしました。夜が来るのを恐れました。もっと正確には、自分の部屋で一人になる事を恐れました。今となつては再び獣を檻にこめるすべはありません。精々僕にできる事は、部屋にいる時間を最小にする事です。日中彼女の面影を慕って彷徨する。博物館に入ったり、皇居の回りを歩いたり、当ても無く電車に乗ったり。夜が来れば眠らぬ夜を明かしに厭わしい部屋に帰り、鍵を掛け、彼女の幻影に怯

えながら、自分の立てる物音に普通でない注意を凝らすのです。こんな夜を七たびも迎え得るものでしょうか？

神よ証言し給え、僕は彼女を汚しはしませんでした。僕の頭の中の思いのせいで彼女に微塵の汚れも及びはしませんでした。獣の言つままにした時でさえ、彼女をしてあらぬ姿態を取らせる事は絶えてありませんでした。その時は彼女の存在を忘れました。これだけは胸を張って言えるのです。

貴方は僕の言葉を以て不信とするかも知れません。恋に狂った男が、狂わせる恋をした男が、夜な夜な自らは汚れながら、しかも彼が恋する客体を汚さない事が、どうして可能か。僕の答えは単純です：彼が恋する所の者である思慕の客体と、本能が彼をして欲せしむる所の者である性欲の客体と、上二者が一致しない場合に於いて。

全てを考え合わせれば、自ら汚す行為が性欲に原因する事は明白です。精神を安定させる、この場合一種の鎮静剤であると認めるにせよ、更にはそれが肉体的苦痛を伴うものであると認めるにせよ、それが性的行為である以上、性欲を満たす行為で無いと立証する事は難しいでしょう。しかしまた、性欲がいつもある特定の客体を持つと立証する事も同等に難しいに違いありません。人が有性生殖をする生物である事実を踏まえる時、性欲を持たない男は極めて稀だと推測されます。なぜなら、偶然何かの拍子に、まるで性欲を催さない男が生まれたとしても、子孫を残さない彼はその稀な形質を伝えませんから。逆に、性欲旺盛な人種ほど繁栄して来た筈ですから、自然淘汰の原理は、現代人が一般的に旺盛な性欲を持つものであると予測します。あけすけに云ってしまえば貴方も僕も性欲のかたまりだ、とそう決めてしまつて大丈夫でしょう。更に、直截かつ正確な用語として、“射精衝動”を提案します；既に数ページ来使っている用語です。貴方も僕も射精衝動を催します：時には強く、時にはそれほど強く無く。ある時は、そんなものを持っている事を我々は殆ど意識しません。ある時は、それは圧倒的です。そう云う

時々には、我々は思考する事すら出来ません。貴方は僕が何の事を言っているのか分かると考えます。ところで、貴方はそんな圧倒的な衝動をやり過ぎることがどのようなものだか分かりますか？

僕は分かります。僕は十五の時に分かりました。それからずっと分かり続けました：ついに獣を解き放したあの夜まで。初めの内、それは拷問です。事実、自分を肉体的に責めることで乗り越えました。クリスマス前の冬の夜、僕はあのライターを使いました。暫くの間、何本かの縫い針が僕の最もお気に入りの道具でした。大概、それらで巧く行きました。行かなくなった時、ライターの出番でした。学校の実験室で“借りてきた”のです。それは強い効果がありました。慎んでから三十日間には発狂しないばかりに襲う衝動も、ライターを携帯していればやり過ぎことも不可能では無いものです。その使用回数は九十日辺りから徐々に減り、あの衝動も意志の力だけで克服できる程度に弱まりました。ちょうど五カ月前我慢したその日、僕はライターを実験室の引出しに戻しました。第十一学年の終わりに近い五月の下旬でした。僕は引出しに収まったライターを見下ろしながら、或る、曰く言い難い“物事に対する能力”の感じを味わって、揚々と退室したものです。

思うに射精衝動は性欲の一つの現れ、言い換えるならば性欲の特別なケースです。もしそうであるならば、ここで次の事が言えます。自ら汚す行為は射精衝動による場合とそうでない場合があると。さて、尋ねさせてください。ここに射精衝動が原因で居ても立ってもいられない男がいます。彼の頭の中には必然的に特定の客体が存在するでしょうか、射精衝動が彼をして欲せしむる、ある特定の者が？僕は答えが否であると言います。ちょうど、飢えた人間が、食べたい衝動が原因で居ても立ってもいられない時、彼の頭の中に必ずしもチーズとサラミのピッツアが思い描かれているとは言えないように、食べられる物なら何であろうと口に詰め込みたいように、射精衝動の支配下にあって自ら汚す彼は、第一義的にはその捌け口を求めるので、必ずしもマリリン・モンローを思い浮かべる

のではない。この場合、彼の性欲に客体が無いと言えます。

間違えないでください、確かに彼女は僕の思慕の客体でした。僕は彼女に（滋子のことですが）恋していましたし、彼女の顔の映像と彼女の声の音はいつも僕の頭を去りませんでした。前段落に因って僕は結論付けますが、僕の性欲の客体は存在しませんでした。故に僕の思慕の客体と僕の性欲の客体とは一致しなかった。それですから僕は謂うのです：僕は彼女に狂っていた七日間、夜な夜な自らは汚しながらも、彼女をば微塵も汚すことがなかったと。

“ああ、でもかしね、”と貴方は言いましたよ、“どこかに論理の飛躍が無いかね？お前の議論は有効らしい。話を聞く限り確かにお前の言う通りだ。お前の恋する所の者である滋子と、生殖本能がお前をして欲せしむる所の者　　お前の主張によると、今話題にしている特定の場合に限って云えば、それは非存在

確かに二者は等しく無い。ところで、お前の議論を作り上げている前提の中に、一つだけ疑わしいと云えば疑わしいものを混在させなかったかな？外でもない、前々文中に引用した非存在者の前提ですよ。お前の所謂“射精衝動”の捌け口として自ら汚しつつある男が、必ずしもマリリン・モンローを思い描きながら行為を行うとは限らないとする意見、仮にそれは認めよう。では聞きましょう。彼は＞必ずくマリリンを思い浮かべないのか？時々は思い浮かべないか？

“お前の場合を話そう。お前は自ら汚す行為の最中、決して滋子の事を考えなかったと威張っている。ところが彼女の顔と声はいつもお前の頭を去らなかった。そんな事が可能かね？本当に！つまり、昼も夜も彼女の事で頭が一杯だったが、例の行為を行う時だけは彼女を頭の中から消す事に成功した、＞毎度く成功した、とこうお前はわたくしに言っているわけだ。御尤もなお話ではありませんよ！”

尤もでは無い、が、本当です。僕は＞毎度く成功しました。彼女は獣を揺り起こした原因ではありません。特別な意味です。

僕は射精衝動を意識した当初から、それを催すのが精神的圧迫下にある時だと知りました。性欲は僕にとって、苛立ちに比例するものなのです。しかも、僕の場合は射精衝動即ち是れ性欲、射精衝動以外の性欲が無いと思うのです。この意味において恐らく僕は、特異な精神生理複合体をなす人間の一人と考えます。従って、ジャンに向かって“僕はしないんだ”と言い張ったのは、ある見地に立てば、少しも嘘でなく正に本当だった。

僕が獣を檻から放った時、僕の行為はやはり自慰でなかった。いまだに痙攣的でグジャグジャでした。それは一つの苦痛を伴う過程；其れを放置しておく事は更に大きな苦痛を意味するトゲ、其のトゲを除去する過程でした。チーズとサラミのピッツアに就いて考える時間ではなかった。

貴方はそれなら尋ねるかも知れません：どのようにして滋子がこれら全ての引き金になったのか；お前自身が認めるように彼女は獣を揺り起こした原因なのだから。どんな“特別な”意味で彼女が原因だったのか。

その質問に対してはただ、マツバラ女史の音楽室にいた七分分そこら、僕は非常にうるたえていたと繰り返させて下さい。以後ずっと、狼狽えて日々を送りました。勿論、僕は真の原因を推測しているに過ぎません。僕はジグムント・フロイトの信奉者ではありませんし、自分を分析する事について確かになれません。確かに>なれる<ことは、未だ嘗て若い女性と二人きりで同じ部屋にいたことがなかった事と、それから、たまたま彼女が美しかった事です。それは僕が経験した事が無い種類の狼狽えでした。

ではもう、僕に関して、一種の無罪を、大雑把には立証出来たと考えます。“大雑把に”とは、僕は自慰に就いての論究を行っているので無いから。ただ、滋子への僕の思いの性質を明らかにしたいだけなのです。

最後まで僕を憂えさせたのは、しかし、彼女の大きな見つめる目たちでした。それらが最も追い払いにくかった：ぼくの恥ずべ

き行為の前、ほかの全ては忘却しつつあった時も。僕はそれらが行ってしまふまで必ず待ちました。

しかし後ろめたさ、からは、決して逃れられなかった。それを持ったまま、僕は『喜びの島』の二回目のレッスンへの途上にありました。ただマツバラ女史の所へ行くか行かないかの問題のみが未決定でした。僕は電車の中で滋子にばったり出会うのを恐れて遠回りをしました。わざわざ渋谷まで行って、そこから東横線に乗るのです。もちろん、これはあまり意味がなかった、と云うのも、僕は彼女がどの方向から来るのか知らないのですから。でもその時は、そうするのが完全に論理的なように思われました・・・渋谷に到着するまでは：そこで急に自分の行為の非合理性が思われたので。僕は結局マツバラ女史の所に行かない決心をしました；いずれにせよ時間に間に合うようには行くまいと。僕は山手線を一周、旅しました。それから僕は予定通り渋谷で東横線に乗り換えました。都立大学で降りました。レッスンは直ぐに終わる筈ですし、僕は彼女が駅に現れるのを待ち受けるのです。これもやはり無駄かも知れない、なぜなら彼女が都立大学駅を自由が丘駅に優先させる保証は全く無いから。（言い忘れましたけれども、マツバラ宅は都立大学駅と自由が丘駅のほぼ中間に位置しますが、後者へ行くには道を何度曲らなければならぬので、前者を優先させると徒歩で約二分の節約になるのです。）事実、僕は常に自由が丘駅の利用客でした。更に自由が丘はナントカ線と云う別の路線（天野注。東急大井町線）の乗客の駅でもある為、彼女の交通手段が電車だと仮定しても、僕が空振りに終わる可能性は、そうでない場合に三倍しました。でもやはり、その時はその事が頭に浮かびませんでした。その週は一夜も安眠を得なかったのです。彼女の目を追い払うのに忙しかった。多分僕は発狂しつつあったのです。そして彼女は来ました。駅の出口に立った途端、彼女が真っ直ぐ僕の方へ進んで来るのが見えました。僕は惑わされているので無いのです。僕は正しいのです。七日間、ただこの一事を確かめたかったです。彼女は美しかった。

たく。今はもう疑いがありませんでした。彼女の美しさは僕の想像が勝手に作り出したので、無かった。僕が彼女に持っていた印象は多少の修正が要りました、しかしながら。彼女は、信じがたく美しくかった。これを、ダブル・チェックしました：後日、狂っていなかった時に。今は、僕は逃げるのでした。問題は、既に彼女は僕に気づいてしまった。

（またもや、あの大きく開いて僕を見ている目たち。）彼女は若干唇を開いて小さな悲鳴を上げました。あるいはそう僕は思いました。間違いなくそれを聞いたと思いました。僕は彼女の方へ飛び出しました。彼女の横を過ぎざま「どうも。」と口もつた調子で云い、そのまま行進して行きました。それが、僕が彼女を見た最後でした。

僕は真つ直ぐマツバラ女史の所に行つて辞めることを伝えました。僕は狂つていました、そうして僕は愚かでした。大体この滋子なる者は誰なのか？僕は手掛かり一つ無かった。辞めてしまった今、多分得られないでしょう。ひょっとしたら彼女は結婚しているかも知れない。それはあり得るところではない。彼女は僕よりずっと成熟しているように見えました。もしかしたら誰かの婚約者かも知れない。彼女は母親であることだつて可能だったのです！しかし、マツバラ女史の所から遠ざかつて来ながらさえ、僕は彼女が未婚だと思ひ込んでいました。そうでない考えは脳裏を掠めませんでした。丁度、高校生の女の子が結婚しているかも知れないとは、僕の脳裏を掠めないように。あの目達はどういう意味だ？どこまでも可能性としてだが、彼女は僕に引かれていゝる事はあるまいか？いや、それはあり得ない。僕の為には彼女は美しすぎる。僕は女性と云うものをまるで知らない、それなのにいきなりあの女性と親しくなるそんな事は考えられない。＞僕は彼女を見ることに堪えないだろう。だから逃げているんじゃないか。何故彼女はあんな悲鳴をあげたのだ！・・・今晚は眠れるぞ。あれで終わったんだ。

この喜劇的にしてきりきり痛む事態は、僕が望んだほど直ぐ

には終わりませんでした。終わりはしました。それが始まったのは、僕が彼女を大人びた女学生と見なしたからでした。若い女の子と話す事は毎度僕を落ち着かなくさせました。でも結婚している女性なら何ら問題はありませんでした。僕の埒外にある女性なら、トロイのヘレンとも気の置けない友人のように会話した事でしよう。結婚適齢期の女性となると、目二つと鼻一つでじゅうぶん僕を驢馬に変えることが出来ました。我々の出会いの時、滋子が小さな女の赤ん坊の母親だと知ったのなら、ぼくは幸せで嬉しかったでしょう。それならば僕は彼女の美しさを称賛できた筈です。人はラファエロの品を称賛するのにそれを所有する必要はない。称賛者にして同時に所有者である者も、少数ながらゝいくはした。僕はその内の一人たるべき者で無かった。そして僕は逃げました。それは去年の十一月でした。

さて親愛なる叔父さん、オバアチャンの追悼式が行われている間、僕が本当はどんな心境だったか想像して下さい。貴方が疑ったように僕は具合が悪いのでは無かった。ある人を知っているような気がして逃げ出そうか逃げ出すまいか真面目に考えているのです。彼女はその晩のピアニストでした。彼女の名前は滋子でした。彼女がピアノに向かって歩もうと席を立て二列後ろに座っていた僕を見たとき、彼女は若干唇を開いて小さな悲鳴を上げました。僕はそれを聞いたのみならず、今度は証拠がありました。彼女の母親がそれを聞いて「どうしたの！」と彼女にささやくのが聞かれました。彼女が鍵盤の前に場所を占めたとき、僕の思いの中にあつたのはオバアチャンではありませんでした。ひとり目を瞠って見る者がありました、一人ほかに下を向く者がありました。二三音の弾き違いが聞かれました、僕は自分の罪を数えました。彼女は信じがたく美しかった。僕はやっとダブル・チェック出来ました。

あとは貴方も知っています。「天野注。二段落前の末尾にある十一月は1981年の十一月。翌月12月14日、伶門父方の祖母が亡くなった。小林牧師の実母である。18日夕刻、教会で追悼

式が執り行われた。わたくしも出席していた。宗教を嫌った伶門は、それ以前、叔父の教会を訪れた事が無かった。鎌田家の人々は、教会が川崎に移される前からの信者。伶門と滋子はこの追悼式で再会したのであるらしい。翌年伶門は教会員になり、5月30日、婚約発表。同日、叔父の手で洗礼を授けられた」

> 僕くが知らなかった事は、僕はクリスチャンで無かった；紙芝居をして公園の子供たちにイエスがどんなに素晴らしくて優しさを言って聞かせている時でさえ、です。僕がこの事実気づいたのは滋子との交際を通してでした。彼女は世界が六日間で創られたと信じていました。信じている> 振りくなどしていませんでした。僕は振りをしたと思います。彼女はルカ伝23：39-43にひどく感動を覚えるのでした。でもマルコ伝15：27-32を読んだ事が無いと云うのではありませんでした。僕たち二人が祈るとき、彼女は僕の手を握って彼女だけの言葉を話しました。彼女はそうではないと云いました。僕は使徒行伝の第二章やマルコの最終章をまだ読まないのか？彼女が話していること、は、> 彼女くが話しているのでは全然ない；それは聖霊が天の父と御子「みこ」とを賛美しているのである。そして> 彼女くが賛美している時は！目は閉じ手は半ばまで上げられ、彼女が神を讃えるその姿は！その非現実の美を数分間目撃する為なら、僕は小児のようになる用意がありました。苟も小児ノ如カラズンバ以テ滋子ヲ仰視スル無ケン、敢ヘテ小児タラザランヤ！僕は信じたかった。ついに僕は信じていると信ずる事に成功しました。

僕はずっと欲しくて仕方がなかったものを、漸く手に入れたのでした。父に六色のペンを貰って以来、ずっと欲しくて仕方がなかった、あの完全な何かを。それを手に入れた暁には、僕はその万古不易・金剛不壊の巖の上に魂の神殿をしつかと建て、雨降り、流れみなぎり、風吹いて倒れず、何人の侵入をも許さぬ心の桃源郷に憩う筈でした。滋子に初めて会った時分、其の蹄に錆を見付けた、人知と云う名の黄金の子牛を、神に祭り上げる事が出来そうも無い

と悟った僕は、自殺する手前の崖つぶちに立っていました。いったい僕は真の憩いを知り得るだろうか？僕の魂に安息の場所はあるのか？

あるのです。全ては公案の一種に過ぎなかった。

僕は滋子と共にイエスの為の愚か者になれば良い。全く、一生を愚か者で過ごす程の幸福は無い。知識が力だなどは根拠の無いざれごとだった。僕を不幸にする力だけしか持たなかった。滋子と手を握ってお祈りする幸福を知った今、知識など無価値でした。ソクラテスが幸福だったでしょうか？ニュートンが幸福だったでしょうか？僕が神様と崇めていた数学は（少なくとも、僕が信仰していた種類の数学で、今日一般に行われている数学は）神様で無い；数学を住まわせる神殿。理性は（少なくとも、人間の理性は）欠陥住宅である；この事を我々の為に初めて証拠立てて呉れた賢人は、発狂して自ら餓死したと聞きます。僕自身の事を述べれば、知識を得れば得るほど渴望も大きくなり、その渴望を満たす事が以前にも増して困難なのに焦燥し、結局、後の状態が前よりも酷いのです。僕の巖は僕の愚かさです。イエスを仰ぎ見る滋子を仰ぎ見る己の愚かさです。滋子を僕のものにする事が出来るのなら $1+1$ が 11 であろうと 111 であろうと構いません。僕の愚かさを完全にすれば良いのです。

彼女は僕にとって完全な女性でした。問題は、僕が彼女にとってそこその男であるかです。これらのページの中で間違った印象を与えたかも知れませんが；一つはつきりさせてください。僕は性的不能者ではありません。彼女との婚約は、彼女と御両親に対する不信行為ではありませんでした。九年生の時、僕は自分の精子細胞を顕微鏡の下に見て、その活発な運動に驚愕した覚えがあります。お父さんは何よりも孫を望んでおられます。僕は彼の期待に応える自信がありました。ただ、僕は滋子との精神的な結び付きを尊びました。僕も人間です。悪い思いはあります。しかし、決して自分がそう云う思いに耽る事を許しませんでした。彼女はそう云う事柄を

超越した存在でした。何時までも婚約者同士でいて、結婚の日が来ない事を、僕は秘かに願いました。可能な間、彼女の清らかさを仰いでいたかったのです。もちろん、アンドレ・ジドの妻のようにする計画は毛頭ありません。僕は同性愛者でもありません。それは飽くまでも秘かな、子供っぽい願いです。しかし、彼女を見てみると、彼女のような濁りの無い目をした女性とは、肉の結び付きなど存在しなくても夫婦でいられる気がして来ます。滋子は出来るだけ沢山子供が欲しいと云います。云い方がまるで少女のようで、ひよつとしたらコウノトリが運んで来て呉れるものと信じているのでは無いかとさえ思えます。明らかに、彼女は精神の結び付きを至上とする人です。

彼女は僕にとって完全な人でした。あまりにもそうで、彼女が女性である事を、僕は殆ど忘れていました。振り返ると、忘れて>いたくと思います。少なくとも彼女がfemale「めするい」である事を。

今年のまだ梅雨のさなか、ある晴れた日曜日の午後、教会のあとで、僕は彼女にプールで会いました。教会で別れる時に約束した通り彼女の家に行くと、お母さんが、滋子はプールにいて、僕をそこで待っている、と云いました。僕がプール端に到着した時、教会の女の子に泳ぎのレッスンをしてやっていました。彼女は真理「まり」を腕より支えて、バタ足の練習をさせていました。彼女は僕に頷いて真理を向こう端へ引いて行きました。真理の外に久美子と絵美がいました。

その朝、僕は彼女の半袖姿を初めて目にしたのでした。その同じ日、僅か数時間後、僕は彼女を水着姿で見えていました。僕の驚愕を想像してください。僕にとって、滋子は聖女だったので。そうして僕は、彼女を水着姿で見えていました。僕だけではありません。皆、彼女を見ていました。彼女は向こう端から僕が立っている端まで、泳いで来ました。彼女は仰向けになって泳ぎました。皆、その乳白色の姿を目で追っていました。近くで、若い男のグループが、

彼女のある特定の部位を「すげえな！」と称賛しました。正直に云わせてください。僕はその時まで、それらの部位をそうした関連で考えた事が無かった。一人がもう一人に、彼女に声を掛けてみると促しました。彼女はこっち端に着く少し手前で泳ぐのを止めて、水中で立ち上がり、僕に両腕を振ってほえみました。（僕は、水着を着ていませんでした；ただプール端で彼女を見ていただけです。）親愛なる叔父さん、全く正直に云います。僕は少しも得意ではありませんでした。僕は、ただの一分たりとも彼女に水着を着ていて欲しくありませんでした。嫉妬と云う単語の意味が分かりました。彼女は水から出ると、少し赤くなりながら僕の側へ来て、自分の泳法をどう思うかと尋ねました。僕も水着を買って来たらどうか、そして一緒に泳ごうと彼女は提案しました。間違いが無いようにしましょう。彼女が水泳のレッスンを授けている事実は、彼女がその目的の為に最適の装いをしている事をば意味しませんでした。彼女は競泳用では無く、他の三人の女の子と同じ型の水着を着ていました。テレビで女の子が着ているのを見る、上下に分かれた、あの種類です。彼女の濃い青の水着を着て、滋子は僕の前に立っていました。僕はベンチに腰を下ろして、見ないようにしました。気分が悪いと云いました、家に帰らなければならぬ。彼女は僕の隣に掛けて、あの深刻そうな、ラファエロの目で見つめました。

僕の魂はまた乱されていました。僕は非常に困惑していました。しかし、僕は困惑している事が恥ずかしかった。どう云う訳か、困惑している事を彼女に知られたく無かった。僕は芝居を打たなければなりません。巧くやり通す積もりでした。そうしたと思いました。その午後、僕は水着の事を口にしませんでした。その晩、僕は自ら汚しました。＞彼女くを汚しました。彼女が水着で立っている姿を頭から消す事が出来ませんでした。僕が一番大事にしている物が、何か損なわれたような気持ちでした。数学が不完全だと知った時以上に落ち込みました。僕は数学にすっかりして自決した事はありませんでした。しかし、僕はその晩以来、自決行為がやめられな

くなりました。さんざん偉そうな事を云っておきながら、結局、僕は常習的な自決者として死ぬのです。

プールの次の日の月曜日、僕は滋子の家に行きませんでした。そうしてその間、彼女はまた教会の女の子達とプールにいるかも知れないのです！その晩おそく、彼女は泣きながら大森にやって来ました。僕は電話を切っていました。（父は大阪に出張していました。ミセズ・タカノが来る日でもありませんでした。）彼女は泣いていました！彼女の涙を見て心を動かさない者は石の心を持っているに違いありません。【もんくん、どうして電話に出てくれないの？わたし、何か、悪い事をした？】僕は嘘をつきました。音楽を聴いていたから電話に鳴って欲しく無かったのだと云いました。彼女は明らかに嘘だと知っていました。信じる振りをしました。彼女は僕の胸に顔を埋めてめそめそ泣き続けました。彼女は水着の事で怒っているのかと尋ねました。僕はそんな事は無いと云いました。

【本当？もんくんがいやなら、わたし、もう、着ない。】僕はそうで無いと言いました。全然気にしていない。【本当？でも、わたし、もう、プールには行かない。】彼女は天使でした。

しかし僕はそうでは無かった。彼女の過去の夏のことで、僕は非常に疑い深かった。僕の聖女は何人の人に自身を水着姿で現したのか。テレビで見えるように、水に飛び込んだ時は、水圧でそれが取れた事があるのか。彼女の体型なら大いにあり得た。そのような場合、僕の知らない滋子を、知っている男たちがいるのです。僕はその考えに堪えられませんでした。僕の魂を押し潰す考えでした。彼女が何度あの水着を着たかを考えるだけで、僕を惨めにさせました。

滋子は次の晩も僕の家に来て来ました。僕はこの天使に嘘をつきとおす事が出来ませんでした。僕は彼女の膝を抱いて、自分の顔を隠すようにし、この二日間、僕を責め苛んでいたものが何であるかを告白しました。彼女は泣いて謝りました。もう一生水着にならないと誓いました。そして、その時から、僕は彼女の特定の部

位に並々でない興味を抱きました；それまで全然僕の注意の対象で無かったそれらに。服を着ていない状態の彼女がどんな風に見えるかしらと、絶えず想像しました。

親愛なる叔父さん、これだけの枚数を読んで下さったのなら、既に僕の精神構造を理解して貰えた事でしよう；この長い手紙の目的、半分はそれなのです。もう半分、それは直に扱います。

僕は知らなければゝならなかった！自分の目でゝ見なければならなかった。

僕の心的葛藤を想像して頂きましょう；全く、どうやって、男が婚約者に、彼が何よりも愛し尊敬する人に、目の前で服を脱いで呉れるように要請するのでしょうか。どうやって、彼は彼女に、体をscrutinize「つぶさにみ」させて呉れるように頼むのでしょうか。そして、僕にはそれが生か死かでした。僕は彼女の体をも余さずに。するまで僕は思考する事が出来なかった。

しかし彼女にそれを頼む事は出来ませんでした。一再ならず僕は頼む決心をしました。頼む前に、彼女の目に阻まれました。それはまるで彼女が僕の考えを知っていて、目で僕に哀願するかのようでした：どうかそんな頼み事をしないでと。彼女の目！あの信じがたく美しい目！僕は彼女に頼めませんでした。水中で水着が取れたかと、尋ねる事が出来ませんでした。

親愛なる叔父さん。罪の中でも最も醜惡なものを、いよいよ僕は告白すべき時が来たようです。さつきは、その告白を念頭に置いて、これらのページの目的の半分と云ったのです。間違いました。それが目的のゝ全てです。そして、僕が告白し終えたら、僕は歴史に名を留める事でしよう：婚約者に対して最も破廉恥、最も悪むべき、最も異常な罪を犯した男として。神よ我が魂を救い給え、僕は彼女の神聖さを踏みにじりました。ゝ僕は薬を使って彼女を眠らせました。ゝ彼女を水着姿で見た二十日後、土曜日のことです。二十日です、叔父さん。その二十日間の僕の状態は描写する必要がありますが

無いと考へます。出来ません、どうせ。

その土曜日の午後、僕達はこの大森の家の僕の部屋

僕が今これらの言葉をタイプしている、正にこの部屋 ここ

で軽い食事をしました。細かい粉にひいた睡眠薬を彼女のスープに入れ、サンドウィッチに塗りました。薬の効果は靨面に現れ、既に食べ終える前から、食べ物を持ったまま、ぼうつとしていました。

夜、彼女が僕のベッドの上で目覚めた時、彼女は暫く天井を見ていました。自分に何が起つたのか理解しようと努めるらしかった。彼女はその深刻そうな目でベッド脇の僕を見つめました。もしかしたら彼女は何が起つたのか理解>したくのかも知れません。彼女は僕に手を伸ばしました。僕に接吻して欲しかったのです。彼女は水を一杯頂戴と云いました。

さて、僕は告白すべき事を告白し終えました。僕が去る前に、物事をはつきりさせて下さい。滋子の純潔は微塵も損なわれていません。僕が彼女を眠らせたのは知的要求からでした、肉の欲からではありません。くどくど説明するのは止しましょう・貴方は分ると思います。ただ一つ心残りなのは、あの小さな濃い青の布切れが外れたか外れなかったのか、知らずじまいです。多分知らない方が良いでしょう。もし外れた事があるとしたら、とそう考えるだけで、僕は今にも狂い出しそうです。あの美しいもの それにしても何と美しい創造物でしたらう！結局彼女は天使ではありませんでした。彼女は人間でした。彼女は人の肉と人の毛のにおいがありました、その味がしました、その手触りでした。ああ、しかしそれは何と美しい創造物でしたらう！夢で見たものの対極をなす存在でした。正にそれは清らかさと同時に稔りの象徴 それは僕一人の所有でなければならぬのに、もし外れたのだとしたら！僕は知らない方が良いでしょう。

それと僕の信仰告白。あれは出鱈目でした。僕にあつたのはイエスでは無くて、イエスが一緒になつてくつついて来た滋子でした。黄金の子牛に祈つて与えられなかったものを、彼女が与えて呉

れました。僕はそこに神殿を築き・・・築き掛けた・それで善しとします。惜しむらくはバートランド・ラッセルの長寿に恵まれず、僅かながらの知識も得ず、他人の苦しみに対しては極めて冷淡な利己主義者として死ぬことです。しかし、彼の五分の一の時間で彼の三分の一になり得ました。悪くはありません。

貴方の弟子にして甥

レーモン・コバヤシ

第二十二回 4章『親愛なる叔父さんへ』（後書き）

編者の天野です。

滋子の原稿により忠実なPDF版はこちらから

<http://dl.getdropbox.com/u/976165/shigeko.pdf>

跋文

1982年11月26日金曜日、つまり手紙の冒頭に記された日付の翌々日、午後4時過ぎ、届いたばかりのそれを数行読んだ小林信「まこと」牧師は、受話器を取って兄通「とおる」宅の番号を回した。出る者が無い。通「伶門」の父、の勤める大学に掛けてみた。三十分位前に血相を変えて帰って行ったと云う。通宅のある大森に、牧師は急行した

家政婦が青い顔をして扉を開けた。二階、伶門の部屋に案内されて、室内を見回しながら彼女の言葉を聞いた：自分もつい今しがた戻ったところです、旦那様は病院で伶門さんに付き添っていらつしやいます、と。彼女に留守を任せて病院に向かった

甥の部屋は実にひどい有りさまである。人が血の中を這い回ったのであるか、手の跡足跡がそこらぢゅうべたべた付いて、血と汗の臭い、人の息と体臭、気化するアルコール、暖房装置の発する熱、そんな物が一つの温気なつて籠っていた。勉強机を見ると、表面が血で濡れてまだ乾き切らないところへ、蓋のとれたエタノールの瓶が転がり、どう云うわけか縫い針が七八本、其処に此処にと散乱しているのが血糊の中で鈍く光つて机上に固着しつつあった。ベッドがまたすごい。何もかも真っ赤だ。従つて、そうと見なければ見えない程にそれは鮮明を欠く。が、しかし、注意して見るならシーツの上に何か人の輪郭のような物が認められる。人間の半身が作った紋様だ。推測するのに、シーツが体に接していた箇所は血が染み込まずに白く残り、接していなかった所へ血がこぼれて赤く染まった。右半身なのか、それとも左半身なのか、それこそは判別し兼ねるけれども、腕、腋窩より、脇腹、腰、へ掛けての、間違い無

くそれは人の印影だ。ベッドにも一本、縫い針が黒糸を通したまま落ちていた

牧師が兄通氏を病院の廊下で見つけた時、甥は集中治療室で眠っていた。6時頃である。既に4時前には救急車で運ばれて来たものの、眠りに就いてまだほんの十五分足らず；何せ担ぎ込まれた直後が非常に慌ただしかったらしい。睡眠薬とエタノールを飲んだので、まず胃の洗浄をすることになった。そのあと具体的にどんな処置を施されたのか良く知らないが、直ぐには寝かせて貰えないで看護婦相手にあれやこれやと問答させられていた

命に別状はなかった。翌朝返された。返された日のうちに神奈川の大学病院へ再入院。三日後、右脚の大腿部を切断する手術を受けた。12月中旬には退院してリハビリテーションを始めたが、その僅か数日後だった。1982年12月19日、小林伶門は御殿場の療養所で縊死した。二十一才だった

わたくしは一度だけ彼を見舞ったことがある。手術後暫くして、教会の仲間と大学病院に訪ねた。年配の婦人が付き添っていた。それが大森の家政婦、高野さんだった。その日の事を正直に書くとなれば、伶門を含めて皆、不快な思いをした筈だと云うのは、彼は仕方なく面会を受け入れたが如き態度を示して、上辺を繕いもしなかった。もうこの時、再度自殺を考えていたのだろうか。後になっと思えば如何にもそれらしい陰気さだった。高野さんに聞いた所では牧師は面会謝絶を言い渡され、会いに来るのは父通以外になく、友人は一人として現れない。我々が一樣に変に感じたのはしかし、滋子が見舞いに来ない点だった。全然顔を見せないのだそうである。どう云う事か

その日、病室に居た者で、伶門の自殺未遂を知っていたのは高野さん一人だった。われわれ教会の人間は、一度目の未遂事件を、何年ものち、そう云う噂が流れる中で、知るともなく知った。それも、ただ睡眠薬を飲んだとかで、本当にはどのような事があったのか　まして現場となったあの部屋の惨状　それは知る

由も無かった（当然ながら、二度目の時は全教会員に知らされ、自分の手で命を絶った兄弟 キリストに於ける の為に追悼式が行われた）

さて第三章に述べたような次第で、滋子的心思は『己呂武反而』『親愛なる叔父さんへ』とともに、二十四年前の一件をも記事にして、この本に載せる事だった。以下、それを記して終わろう。なお、この跋文の記述は大部分、今年2006年3月12日、わたし小林牧師を川崎に訪ねた折、牧師の証言をカセット・テープに録音したものに拠る。また（8月13日現在）これは今週半ばのことになると思うが、今日ひとまずこの原稿を書き上げたら、出来たものを牧師に送って目を通して貰い、その必要のある箇所は牧師自ら訂正の筆を入れて呉れる約束になっている。最終的にそれを京都にいる滋子のもとへ転送して、随意に削除・加筆させると云う段取りである。京都より戻って来た原稿を以て跋文の決定稿としたい

自殺未遂の数時間後、病院の廊下で甥の容態を知った牧師は、甚だ奇異の感に打たれた。伶門は薬を服用したと云う。外傷は無いのである。では、あの部屋で目にしたものはどう解釈するか。発見時の伶門は、顔と云わず手と云わず衣服の裾に至るまで血まみれだった。駆けつけた救急隊員もこれには慌てた。考えられる事はひとつ；自殺を企てた男が倒れている；部屋に、彼のでない血痕が夥しく残されている。ところで、負傷者が見えない。家には家政婦（の高野治子さん）一人である。救急車を呼んだのも彼女でない。ずっと一階の控室に居て、二階で進行していた事態に気が付かなかった。サイレンを鳴らした車が門前に止まったのに驚いて出て来たくらいだ。被害者、と速断するのは控えるにしても、負傷者、は、誰かどこか。また119番に掛けてきたのは。謎は謎のまま伶門は病院へ運ばれた

運ばれる車内、早くも救急隊員の手で胃の中の物を出させる

試みがなされた。病院に到着後も、その処置は続けられた。昼食に食べた物が滞留していたので軽症ですんだ。それに今の場合、薬とエタノールの作用よりも、自殺に至った心理的な衝撃が大きな比重を占めており、昏睡しているのでは無く、卒倒しているのだった。事実、旧来の睡眠薬とは違い、服用した新種のでは、量を誤って死ぬことは通常ないらしい

出した物の中に、噛み砕かれた白い錠剤が混じっていた。救急隊員が伶門の部屋で発見した袋の薬、それに違いない。が、念の為、分析に回された。返って来たのは、聞いて思わず聞き返すような分析結果だった

嘔吐物に血液が含まれていた。それは彼の血で無かった。エタノールの刺激で胃がやられたのでも、その所為で出血したのでも無い。なぜそう言えるかと言うのに、まだ全然未消化の状態で一片の肉が出たが、他の、殆ど消化が終わって、次に腸へ向う流動物とは明らかに異質なその肉の切れ端は、なま肉で、それ滲んでいる血液と同じものが、胃に溜まっていたのだと考えざるを得ない。薄ひらたけの黒ずんだようにも見えるそれは人肉だった

通氏と牧師に知らされた上、直ちに警察に通報された。怪我をした者は相当な失血があったろう。傷口は余程大きいと見てよい。それは切り取られたので無い。刃物で割かれたのとは異なる割き方である。食い千切られたのだ。執拗に噛みつかれ、食い千切られた為に、肉片の縁に歯の跡が鮮やかに残っている。犬歯が突き通したと分かる穴が見つかった

通氏は、大学の研究室を出るとそのまま飛んで来たので、息子の部屋がどんな風か、牧師に聞かされるまで知らずにいた。服毒自殺を図ったと云う、何しろ家政婦の急報である。それに、集中治療室に入っている息子をまだ見ていない。血を浴びた姿など慮外の事だった。（妙な話だが、高野さんはそれを通氏に言わなかったらしい）ただ牧師にだけは、何が行われたのか、ほぼ分かり掛けていた。兄を病院に残して、犯行のあった家に取って返した

警察を呼んで検分させ、証拠品を持ち出させた。全て任意である。被害者も見当たらなければ被害届けも提出されないでは、厳密には事件扱いで無い。高野さんが事情聴取に応じた。やはり何も知らないことに変わりはない。その日、11時過ぎに来て昼食の準備に取り掛かり、12時頃食堂に下りて来た伶門に給仕した。彼は三十分程で食べ終わった。後片付けをすると彼女は13時少し前に私用で出掛け、15時過ぎに戻った。異状など有ろう筈も無い。16時になったら掃除、掃除の後は夕食の支度をする積もりで、そのあいだ控室で仮眠を取っていた。そこへ救急車が来た。門前で止まった様なので何事だろうと廊下へ出てみた時、なぜか玄関の扉は開け放たれ、門も開いている。救急隊員に訪問の趣旨を告げられて真実たまげた。．．．．．毒を飲んだ人はどこですか！．．．．．伶門は一人、床に倒れていた

夜、牧師は或る怪しからぬ不吉な想念に駆られて鎌田邸へ足を向けた。夫妻は遅い食事の最中だった。ちよつと近くへ参ったので御機嫌を伺いにお立ち寄りしたのだと、そんな事でごまかして立ち去ろうとする牧師を引きとめて、主人が応接室に請じ入れた。そのうち夫人が飲みものを運んで、三人で談話した。初めは急な来訪を不審がる面持ちだった主人も、例の人をそらさない好人物らしく、間もなく牧師と夫人あいてに大きな笑い声を室内いっぱいに響かせていた。夫人曰く、さっき電話が入るまで待っていたのだけれども、こんばん滋子は遅くなると云うことなので、ひさしぶりで夫婦さしむかいの夕飯になった、こうして先生が訪ねてくださるのは会話がはずんで楽しい、と。牧師は速やかに辞去した。ほとほと目も眩む思いだった。1982年11月26日、金曜日、21時乃至22時頃である

予感はある。日曜日の礼拝式を鎌田家の三人が欠席した礼拝式が済んで、明後日伶門が手術を受ける予定であることが告げられ、皆で祈りが捧げられた。しかし、どう云う手術になるのかは知らされず、病名も明かされなかった。傷害及び自殺未遂の

件が伏せられた事は、前述の通りである（ここで予め牧師の為に弁護して置きたい。牧師が甥を庇ったので無いことは言うを俟たない。犯罪の性質上、先ず被害者女性の立場を考えねばならず、その人に就いて未だ何も判明しない内に事件をおおっぴらにする事を、一旦思い留まったのだ。結局それが正しい処置であつたとは、読者も後を読めば納得されるだろう）

翌月曜日、29日の朝、牧師は鎌田氏の訪問を受けた。それは七十才になつて尚精悍な面構えの、常に見慣れた脩太郎「しゅうたろう」の顔で無かつた。一昨々日の晩にはなかつた疲労の色が濃く滲む老人の顔だつた。．．．．．娘が大きな怪我で入院した。事に依ると既に先生は御存じかも知れない。先週、伶門君の部屋で負傷したのである。家内に厳しく言われているので、入院先も、怪我に就いての詳細も、明かせない。家内は病室で娘に付きつきりだが、そんな所へ昨日、警察がやってきた。娘と家内と婦人警官二人、計四人で二時間前後の話し合いをした。最終的に一つの結論に達した：娘は伶門君の所で怪我をした；それだけだ；事件性は無い；従つて今後娘が被害届けを出さない限り、警察はこれ以上の介入を差し控える、と。娘はあくまで自ら怪我したと言い張っている。私と家内はおるか、警察だつてそんな事を信じていない。娘の意思を尊重してそう云う事にするのだ！．．．．．牧師の前も憚らずに七十翁が声をあげて泣いた

そしてまた訴え始めた。．．．．．我々夫婦がどんな思いで、どんなに大事にあの子を育ててきたか、先生は良く御承知だろう。我々が歳を取つて授かつた一人娘、それはそれは撫でるようにして育ててきた我々たったひとつの宝だ。親は馬鹿者でいつも甘い顔ばかりしているけれども、あの子は主「しゅ」の指導きで拗けた所がこれっぽちも無い、どこへ出しても恥ずかしくない娘になつてくれた；それは先生も認めて下さる筈だ。若い日の家内に似て、自分の娘ながら本当に器量の良い子だと思っている。本当に、あれくらいの娘はそう滅多に無いと思うが如何か。そう云う子を持

つて内心我々がどんなに得意だったか、子福者を見て少しも羨む気にならなかった

家内の嘆きようは見えていられない程だ。泣いてばかりいる。

そんな母親を、娘が手を取って慰めている！家内は怪我を見たと言つておる。包帯をはぐるなり、あまりの凄さにその場にくずおれて、あとは物も食べられずに泣いている。娘はあの晩、先生が見えた晩だが、12時が過ぎても戻らない。さすがに心配になってきて、何かあったのではと気を揉んでいる所へ、二度目の電話があつた。．．．

．．．．． ママには済まないけれども、急いでこれこれの医院に来て欲しい。今あたしは怪我をして応急処置を受けている。お医者様はもっと大きな病院で行き届いた治療をしなくてはいけない、少しでも早いほうがいい、とそう仰っているから、今夜中に移つて明日一番で診てもらふ積もりで、その手配もして貰っている。こんな遅くでママには悪いのだけれども、書類のこととか支払いのこととかで頼みたいから、なるべく早く来て欲しい。それにあたし保険証も持っていないし、タクシーで移るんだけれども、そのお金もない。．．．．．

と電話越しにそんな事を言っているらしい。家内は取り乱して「怪我？何の怪我？滋子ちゃん、あんたどうしたの！」と騒ぎだした。代わりに私が出たが、娘が云うには「パパ、何でもないから安心して頂戴。あたしちよつと怪我をしたんだけど、ママに直ぐ来て欲しい。パパには話しにくい事だから是非ママに来て呉れるように言つて。本当に済まないけれどもパパには絶対に来て欲しくない、これだけはお願い」力のない声でそう言うではないか。明け方、病院を移つて疲れて眠っている娘の寝巻を、家内がそつと返してみた。以来あれは泣きどおしなのだ

先生に我々の悲しみが分かるか。絶望の淵に突き落とされた老夫婦の心が分かるか。娘はそれでも明るく振る舞つて、私の前では笑っている。こんな話があるか、こんなむごい話が。私はこの気持をどこへ持つて行つたらいいのだ。あの子は人一倍信仰心が強い。沢山奉仕もしてきた。教会の皆に愛されている。それなのにな

ぜ、なぜあの子がこんな目に。いいか、我々夫婦は心より伶門君を祝福していた。娘の婚約を主に感謝した。娘を手放す淋しさは無い。遠い所へやるので無い、すぐ近所に住む家も決めてある。先生も御承知、我々は娘の結婚を待ち遠にしていたのですぞ。はやく孫を抱きたい。楽しみにしていた。分かるでしょう

そんな望みは捨てるのか。我々夫婦の血が絶える、この悲しみが分かるか。この残念さ無念さは時が経つ程に増して行くだろう。決して無くなる事は無い。だがそれはまだいい。所詮老いばれ夫婦のことだ。何よりも遣り切れないのが娘の事を考える時だ。どうかこれが夢であってくれ、本当の事で無いようにしてくれと、現実にあんな忌まわしい事が滋子の身を襲ったとは、実際に滋子に降り掛かったとは、どうしても飲み込めないでいる。嘘でも譬え話でも無く、飲み込めないでいる。何かに化かされている気がしてならない

あんな事があっていいものか、よりによってあんな事が。先生もお嬢さんをお持ちなら私が狂いそうになるのもお分かりでしょう。分かるに決まっている。私は気が違ってしまうぞ。だって先生いくら何でも女の身に起こっていい事と起こってはならない事があるでしょう。それもまだ何も知らない娘では無いか。無疵のまま神様に差し上げたい、その一心で今日まで育ててきた子だ。あんな取り返しの付かない事になって、どうしろと云うのだ。そんな事があっていい道理が無い。あんな辱めを受けて、世の中の女でこれ以上の辱めを受けたためしが無い、そんな辱めを受けた女が、娘が、私の娘が、今後どう生きてゆけと云うのか。あの男は取り憑かれている。あんな事を考えるものか。愛しておったのでは無いのか。命よりも大事に思っておったのでは無いのか。サタンだ。サタンに憑かれているのだ。むごい、あまりにむごい。滋子が可哀相ではないかなぜあの子が。どうか夢であって欲しい、これが悪夢であってくれ、頼みます先生、何とかして、滋子が可哀相だ、ああ

先生、御安心なさい。私はあの男を訴えない。さつきも言うように娘は自身で怪我したと言っておる。それに誰にも怪我を見せ

ようとしな。母親にも決して見せない。あの子は家内に見られた事を知らないのだ。大した傷で無いと言って信じさせようとしている。医者が言うには私と家内に対して嚴重に口止めたそうだ。それで我々は本当の事を知らない振りをしているような始末だ。医者も困っている、と云うのが、傷を写真に撮ることを何としても承知しない。それどころか婦人警官を前にしてさえ、初めは事実を認めようとしなかった。．．．．．自分は被害者で無い。これは事件で無い。御心配を掛けて申し訳なかったけれども、これ以上干渉しないで貰いたい。．．．．．

しかし婦人警官が注意するのに（ここで家内に席を外させた）．．．．．貴女が彼を庇う気持ちは分かるが、それでは却って彼に嫌疑の掛かる恐れがある。よく聞いて下さい、彼があの日吐いた物の中に、貴女の怪我に関係すると思われる物証の品が含まれています。もし今貴女がその関係を否定なされば、その品を別人との関係で考えなくてはなくなる。我々もそんな別人は無いと信ずるが、万一を考慮に入れて彼に事情を聴かねばなるまい。しかも彼の供述如何では、折角の御心積もりに反して、厄介な事になり兼ねない；手術を受ける彼の為にも、そしてほかならぬ貴女の為にもです。テレビや週刊誌は有ること無いこと、世間の喜びそうな事なら何でも書きます、何でも写真にします。表現の自由の、知る権利のと、知られる側の人権には何の配慮もない。我々はそれが嫌と云うほど分かっている。実は、今日こうしてお邪魔しているのも、貴女の名誉を守りたいだけなのです。その所を分かって下さい。我々はおおよその推理を組み立てています。貴女はこんな風にして傷を負った、いや、きっとそれに違いないと云う推理です。宜しいですか。貴女は、ただ肯定してください。違っているなら否定してください。そのときは、ほかの推理を試みましょう。とにかく、貴女は、口にしたくないことは言わなくて結構です。我々の推理はこうです

貴女鎌田「かまだ」滋子「しげこ」は昭和57年11月26

日の金曜日、午後13時30分頃、大森の小林「こばやし」通「とおる」氏宅を訪問しようとしていた。大きな手術を控えた婚約者小林伶門「れいもん」氏を見舞う為だった。その日、貴女は、安定しない、高いヒールの靴を穿いていた。小林宅の門を入った所で、不注意から、段を踏みはずし、転倒した。そのときに、小さな植木鉢を踏みつけた。悪いことに、毀れて、破片が、貴女の左肘に食いこんだ。貴女は、破片が刺さって、負傷した。貴女は、ベルを押し、伶門氏に、家に入れてもらった。伶門氏は、貴女の出血に驚き、応急手当を施そうと、貴女を、二階の、彼の部屋に連れて上った。ここまで合っていますね？（娘は頷いた）傷は、思ったよりも、案外深く、出血が酷くなってきた。早く消毒して止血せねばならぬが、折悪しく家政婦が外出中で、救急箱の在りかが分からない。伶門氏は、唾液の消毒作用に期待して、傷口を吸った。そのときに、貴女の肘の、薄い肉片が取れた。宜しいですか、取れたのです。でも、彼は、気が動転していたから、それを飲みくだしてしまった。貴女は血の勢いが激しいのを見て、糸と縫い針を求めた。彼はそれらを探し出し、洗面所でエタノールも見付けた。彼は、傷口を、エタノールで消毒しつつ縫ってくれた。違っている所があったらそう言って下さい。（娘はずっと黙って聞いていた）貴女は、手当を受けるあいだに失神した。ところで、伶門氏は自身の手術の事で酷く滅入っていた。加之「しかのみならず」大量の血を見た衝撃が、彼をして咄嗟の自殺に駆り立てた。彼は睡眠薬を飲みエタノールを呷「あお」った。暫くして正気に返った貴女は、床に倒れている彼を発見し、119番を回した。負傷した貴女が側にいては面倒だと考えたので、救急車が来る前にタクシーで抜け出した

如何です。今のでまちがいなければ、これは警察の出る幕ではありません。調書を作るべきことでもなく、貴女のカルテを見せていただくことですらない。我々は、このまま失礼します。主治医の先生には挨拶せずに行きますから、どうか、貴女から、宜しく仰ってください。もちろん、と云ってこれは万が一の場合ですが、今

貴女が我々に話して下さった事、そのお話に何かしら重大な記憶違いがあつたと心付いて、しかもその事で我々が警察権を行使すべき記憶違いの類でしたら、気兼ねなく、そう言つて下さい。その時は、今日聞かせてもらった事は全部忘れます：ただの世間話だつたと云うことで。警察に嘘を言つたことには少しもなりません。貴女は、何に署名したのでもないのですから。そう云う訳で万が一の場合、全部記憶違いだつたとしても問題はありません。正直のところ、我々二人は深く貴女に同情するのです。同じ女として憤懣を禁じえない。本当は正義が見たい気持ちです。けれどもその結果、貴女はより大きな災難に遭うかも知れない。まったく、二度とこんな事があつてはならない。ない事を祈るばかりです。……

いいですか先生（と鎌田氏が牧師に云つた）警察ででつちあげたこんな話を、家内も私も本当に行つてみると、滋子は思つてゐる思つてゐるのだと、我々にそう信じさせようとしている。その事について喋らせまいとしておる。となれば我々は腸を断たれる思いでも惚け笑顔を作つていなくてはなるまい。本当に大した事でなくて良かった、あんまり心配させてくれるな滋子、と、そんな言葉だけにしか掛けてやれないのだ。私は恐ろしくて娘の顔が見られない

警察にも慎重に行動するように勧められた。言うとおりで。もう何をしたつて元に戻らない。事故に遭つたと思つて諦めるより仕方がないのです！騒ぎたてて好奇の目に曝されるだけ被害が膨らむ。損害賠償を求める気ならそれも止むを得まい。私は賠償金など欲しくない。そんな事はどうだっていい。今はただ娘を守つてやるのが私の務めだ。娘の心を慰めてやる、癒してやる、その為に私はどんな事でもする積もりだ。自分を殺しもする。先生に私の気持ち分かるか。信者となつてこれほど試された事は無い。本当は、正直に云つてしまつて良ければ、私はあの男の頭を斧で叩き割つてやりたい。この手できやつたの右足を鋸引きにしてやりたい。だが私は引き下がるのだ。間違えないで欲しい；許すのでは無い。どうしてこれが許せるか。自分を殺すのだ。娘の為に死ぬのだ

先生、あなたは娘の怪我について聞いていたのでしょうか。先週、不意に來られたのも訳あつてのことだったのでしょうか。滋子が怪我をした事を知っていたのでしょうか。私はそれを前提に今の話をしている。本当は警察がした話など、絶対にしてはならないと家内に言われているのです。お願いです、包み隠さずに云つて下さい。私は娘の為に考えてやらねばならない。貴方は事実を御承知でしたか。．．．．．

牧師はありのままを云つた。彼は無口だった。尋ねられる事に対してのみ口を開いた。それも道理、自分にも責任の一半があるのだと感じている人間に、言う事があるう筈もない。．．．．．

滋子さんが怪我をなさつた事を知っている者は、兄の通と、自分と、それと伶門と、恐らくこの三人のほかには無いと思う。事が事だけに、警察に現場を見てもらったが、どんな理由でかは家政婦にも言つてない。家政婦は伶門の血だと思つてゐる。あの晩自分と兄とで相談した：まだ被害者が誰であるとも確定的でないのに、その被害者自身に計りもしないで事件を表沙汰にすべきで無い；今暫く詳しい事柄が判るまで待とう、と。．．．．．

鎌田氏は言つた。．．．．．では、今後一切そとに漏れないようにしたい。目下これが至上命令である。他は全て第二義的で構わない。伶門君が自殺を図つた事、それも怪我との関連上、伏せて貰おう。何しろ滋子の身に起こつた事が些かも知られぬよう、講じられる限りの方策を講じて欲しい。あなた方が我々家族になしうる、それがせめてもの償いと心得て頂きたい。その代わり告訴もしなければ賠償も求めない。我々は本日をして教会を脱会する。心ならずも兄弟姉妹には挨拶せずに行くが、皆への説明は貴方が適当に考えて下さるがよい。但し二人の婚約に就いてだが、これは伶門君病気の為、小林家側の申し入れで解消になつたと云う風にしよう。そう云つても私は貴方を信用しているし、何かと貴方の力に頼らなくてはならない。電話で連絡を取り合うような場合もあると思う。お兄さんと伶門君にはもう会つまい。自分でも何をするか分からない

い。

こうして、事件が秘密にされた。伶門は車椅子の人になり、同時に教会では滋子を見ないようになった。会衆は、二人の婚約が解消された事と、鎌田家が京都に移った事、その二つの事実のみを、壇上の牧師の口より告げ知らされた。しかし我々はそれを知るだけで心が痛んだ。伶門の難病と手術、婚約破棄、そして二週間後に迫っていた彼の自殺と、打ち重なる不幸に見舞われた滋子の上を、不必要に詮索する者もなく、秘密が秘密として保たれたのは、キリスト者の節度とも云うべきか

鎌田家が京都に移ったと云うのは嘘で無く本当だった。老齡に達していた脩太郎は、大徳寺の生家〓現在滋子が住む家、に引込んで、まもなくホテル経営もやめた。ただ、滋子は横浜に残った。1982年の末、我々には知られずに山手の新居で暮らし始めた。新居とは、そこで伶門と新しい生活に入る筈だった家の事である。脩太郎が娘の婚約を喜んで、山手に見つけた古い家屋に手を入れて持たせたのだった。わたくしがバイナードを探しに行つて、Yさんに余計なお世話になった、例の「新居」の事だけでも、その山手と云えば、一昨々日の木曜日、と云うのが八月十日、本書を校正してくれている文学中年の友人C君が「なほみさん、あなたが知らないなんて」と指摘してくれるのに、嘗て、あの小学校の裏には近代日本第一のノヴェリスト　と云つても、明治以降十人と出ていないノヴェリストの第一ですから、世界的に見ればどうか分かりませんがね、とC君は云う。ちなみに、彼の説く所では、その十人と出ていないノヴェリストの中に、フランス語を国語にと提唱したとか云う、神様S・N哉などは含まれない、若し無理に含めるとしたら日本のノヴェルはグローヴァル・スタンダードに照らして五流以下と云う事になる、まあ、五流を以て神様などと持て囃したんだから、この国に碌な散文芸術が無いのも当たり前かも知れない、とついそんな愚痴をこぼしたくなる日本にあつて、彼なんかは珍しくノヴェルらしい「小説」を書いた人ですよ、とC君も褒めるそのN

○・１ジャパニーズ・ノヴェリストが、嘗て「北方」小学校の裏に住んでいたそう。大震災前の、まだ山手が異国びとの丘で、そこに立ち並ぶ西洋やかたや、青い目をした婦人が乳母車を押すシーンは、丘の上が日本であるよりは寧ろヨーロッパかアメリカの気分を醸している、と思い込んでいたらしい大正の頃おい、宵闇がせまる刻限になると、乱杳歯でちんちんくりんな一人の東洋男が、ドレス・シューズに夜会服、蝶ネクタイという出で立ちで、やれダンス・ホールだコクテール・パーティーだと、西洋人の集いに顔を出して歩く姿を見かけた。齒の浮くようなハイカラ振りに身を竄っていた時代、サザメユキの稿を起こす二十年も前の事なのであったが

跋文（後書き）

編者の天野です。

滋子の原稿により忠実なPDF版はこちらから

<http://dl.getdropbox.com/u/976165/shigeko.pdf>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6566d/>

己呂武反而 美人説附き

2010年12月3日06時35分発行